

# 勇者さんのD×D

ビニール紐

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

突然勇者として魔法世界セラビニアに召喚されたオリ主が世界を救い元の世界に戻ってきてからの物語。

# 目次

第12話  
第11話  
第10話  
第9話  
第8話  
第7話  
第6話  
第5話  
第4話  
第3話  
第2話  
第1話

144 134 124 116 99 85 69 55 42 29 13 1

第25話  
第24話  
第23話  
第22話  
第21話  
第20話  
第19話  
第18話  
第17話  
第16話  
第15話  
第14話  
第13話

334 320 307 296 283 266 249 239 225 207 192 174 158

第38話 第37話 第36話 第35話 第34話 第33話 第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話

529 506 492 478 466 452 434 423 411 395 379 366 347

第43話 第42話 第41話 第40話 第39話

604 590 573 559 543

# 第1話

天地が鳴動し、空間が軋む、それは正に世の終わりのような光景だった。

世界を埋め尽くす幾千幾万の魔法陣、そこから放たれる無数の魔法が異界の魔神に殺到する。

轟音、轟音、また轟音、盛大に大地を挟りながら放たれ続ける魔法、全方位から迫る雨粒の如き数のソレは当然避けられる隙間などない、結果、その魔法の殆どは狙い違わず魔神に直撃した。

しかし、まだ幼さの残る少年は……この数の魔法を放ち続ける恐るべき魔法の行使者は未だ険しい顔で次の魔法の準備に取り掛かっていた。

少年は知っていたのだ、この程度で魔神が殺れる筈がないと、この程度では傷一つつけることが出来ない。

少年が手に持つ剣を天へと掲げる。すると魔神の真上に一際巨大な7つの魔法陣が重なるように出現した。それと同時に世界に影がさす。

太陽を遮る様に現れたのは直径数百メートルはある鉄球だった。鉄球は重力に引かれ地に落ちる、そして鉄球が魔法陣の一つを通過した瞬間、ゆっくりに見えた落下速

度が倍加する。

7つの魔法陣は架空の砲身、魔法陣を通過する度に加速する鉄球は7つ目のソレを通過した時点で音速を遥かに超えた速度となっていた。

いけるか？

少年は期待した、魔法を介しているがアレは単純物理攻撃、どうやっていけるかは不明だが、今日まで全属性全魔法を無効化してきた魔神もこれなら倒せるのでは？

……そう、期待したのだ。

気付けば何故か目の前に鉄の壁、疑問に思う間もなく多重魔法障壁全てを粉碎され全身に激痛が走った。

それに遅れて「ミルキイイスパイラルウウスティイイイクツ!!」つという雄叫びが遠くから聞こえ、少年は意識を失った。

「……夢か」

布団から飛び起きた少年――宮藤勇真（クドウ・ユウマ）が疲れたように呟いた。生

存本能でも働いたか？ 少年の周りには多数の魔法障壁が展開され自身には意味もなく再生魔法と回復魔法が掛けられている。

そんな状況を見て勇真は溜息を漏らすと全ての魔法を解除し、寝汗でビツシヨリの寝巻きを脱ぎ捨てた。

寝ぼけて魔法を使ってしまう事は魔法使いにはよくある事だ、特に頭で思い浮かべただけで魔法を行使できるタイプの高位の魔法使いなら尚更だ。

だからこそ勇真は寝る前に必ず破壊魔法系を封印している、今回はそれが功を奏し  
たらしい。

まあ、勇真の部屋には万が一に備え強固な結界魔法が張つてあるので例え寝ぼけて攻撃魔法を使ったとしても自室がメチャクチャになるだけで自宅が消滅する事も街に被害が出る事もないのだがそれでも片付けが面倒なので勇真としては良かった。

スマホで時間確認する、現在時刻は朝の9時、普通ならば慌てる時間だが、高校に通っていない勇真からすればどうという事もない。

勇真は大きく欠伸をすると、脱ぎ捨てたパジャマを持って自室を後にした。

宮藤勇真は勇者である。

この地球とは全く別の世界、魔法世界セラビニア、そこに召喚された彼は誰にも引

き抜けなかった勇者の剣を引き抜き、セラビニアの人々達の希望を一心に背負って異界からの侵略者に立ち向かった。

まあ、とは言っても力及ばず、初戦にて勇者の剣を叩き折られ敗北、リベンジしようにも所有者の魔法行使能力を数百倍に高める力を持った勇者の剣を失い戦闘力が激減、戦闘で倒す事は不可能となってしまうた。

結局彼は、戦闘で侵略者を倒す事を諦め、話し合いにより帰ってもらおうという方向で彼女？ と交渉、それが成功し世界を救った……ちよつと勇者として情けない方法である。だが、しかし、それでも彼はセラビニアを救った救世者なのである。

パジャマを洗濯機に入れ、朝食はコーンフ레이크で済ませた。時刻は10時、学生でもなく会社にも務めていない勇真は暇である。彼は食器を片付けるとシャワーを浴び寝巻きに着替え再びベットに転がった。

彼はそのままボーっとスマホを弄りながら今日は何をして時間を潰そうかなと考える。完全にダメ人間だ。

だが、本当にやる事がない……正確にはやらねばならない事がない。

それに墮落した自分を叱咤してくれる両親は帰ってきたら居なくなっていた。当面の生活に支障が出るほど生活は困窮していないし、最悪なにか問題が起こっても大抵



の事は魔法でパパツと解決できてしまう。

まるで無趣味、仕事一筋で定年を迎えてしまった男、あるいは平和な時代、金はあるが仕事がない傭兵、ああ、その背には若いのに既に哀愁の様なもの漂っていた。これでも元は世界を救った勇者なのだが。

「……はあ」

勇真は溜息を吐いた。大方面白そうなニュース記事もニヤニヤ動画も見終わった。彼は連日のスマホの見過ぎで疲れた目に回復魔法を掛けるとベットから起き上がる。時刻は午後4時、昼食をとっていないので腹が減った。

しかし、何かを作る気力がない。とは言え、コーンフレークはもう飽きた。

勇真はダラダラと私服に着替えると家を出て近所の商店街にある行きつけのファミレスへと向かった。道中

「えー、迷える子羊にお恵みを〜」

「天の父に代わって哀れな私たちにご慈悲をおおお！」

とか騒ぐ怪しい白ローブの二人組に出会ったが華麗にスルー、彼は行きつけのファミレスに入店した。

「ふうー」

食事を食べ終えた勇真はファミレスを出る、相変わらずチェーン店のくせになかなか美味しい。勇真は行きより軽くなった足取りで家路に行く。

道中、やっぱりまだ白ローブの二人組みが “ご慈悲” とかやっていた。近くの雑貨店の店員が嫌そうにそれを見ている。明らかに営業妨害になっていた。

しかし、勇真は誰か通報しないかなあ、と思いつつも自分では通報せずにやっぱりスルー、二人組みの前をさつと通り。

そして腕をガツと掴まれた。

「……何か、御用ですか」

「宮藤勇真くん、だよねッ!」

その通りである。しかし勇真は澄ました顔で

「違います」

と、否定した。馬鹿でも分かる。ここで関わると面倒な事になると。

「え!? 嘘、人違い? ……いや、絶対勇真くんだよ、間違いない!」

ああ、その通りである間違っていない。だがやっぱり勇真は澄ました顔で

「僕は高橋です」

と、ナチュラルに嘘をついた。勇真は暇人だが、進んで面倒事に頭を突っ込むほど

は暇ではない、そんな事するくらいなら高校に通った方がマシだ。

「えっ!!」でも、え? え?」

勇真の腕を掴んだ白ローブがオロオロ慌てている、よく見れば栗毛で整った顔立ちの可愛い少女だった。見覚えがある気がする、名前は忘れたが小学校低学年の時によく遊んだ……かもしれない。

さて、どうしたものか? 勇真は考える。人違いだと言っても目の前の知り合い? は離してくれない、道を行き交う人に視線で助けを求めても目を逸らされる。まあ、そうだろう、勇真だって同じ状況だったらスルーする。

ここは正攻法で行こう。

「離してもらえますか?」

勇真は少女の目を真つ直ぐ見て言った。

「……いや、でも、面影あるし、間違い? いやいや、そんな事は……うくん、アレどうだったっけ?」

無視された。あれ? それとも聞こえてない? もう力尽くで振り払うか? そう、勇真は思ったがやっぱりやめる。

この少女の握力は普通じゃない、明らかに100Kgを超えている。無理やり引き剥がすと服が破れる。

それにしても力加減をして欲しい。掴まれているのが常人なら今頃悲鳴を上げて  
いる所だろう。

本当にどうしたものか？ 勇真がどう脱出するか考えていると栗毛の少女が何か  
を決意した様に勇真の顔を見る。

そして一言。

「じゃあ、高橋君！ ごはん奢って!!」

「コイツ、凶々しな」

勇真は思わずそう言った。

「いらつしやいませ」

つい先程退店したファミレスに勇真は来ていた。10分もせず店へと舞い戻つ  
た勇真を店員が怪訝な顔で見る、だが、そこはプロ、一瞬で切り替えると笑顔で一人  
様ですか？ と聞いて来る。勇真は三人ですと答え嫌そうに後ろの白ローブ二人に視  
線を送った。

「なんで、そんな嫌そうな顔するの!?!」

答えないと分からない？ そう言いたかったがその気持ちをグツと抑え、勇真は怪

しい白ローブの二人を見て顔を引き攣らせている店員に軽く頭を下げた。

「うまい！ 日本の食事はうまいぞ！」

「うんうん！ これよ！ これが故郷の味なのよ！」

ああ、美味いだろうさ他人の金で食う飯はね。勇真は欠片も遠慮せずに次々とメニューを頼む二人を呆れた目で見た。

カレー、ラーメン、オムライス……ドリアに続きステーキセツト、最後にパフェ二種類に抹茶アイス、ざつとメニュー表を見た限り二人共、摂取カロリーが5000を超えている。

ついでに勇真が払う勘定は1万を超えている。

この程度で勇真の財布はダメージはないが、こうも遠慮なく食べられると少しばかり頭に来る。

しかし、まあ、良いだろう。こんな日もある。

勇真はさつさと帰る為に伝票を取るとレジに持って行こうとした。

するとまた、ガシツと腕を掴まれてしまう。今度は栗毛の少女じゃなく、もう一人の青髪に前髪の一房だけ緑のメッシュを入れた奇抜な髪だが顔立ちは整っている女の子にだ。

おかしいな、女の子に腕を掴まれるのってこんなに嫌な気分になるものだったっけ？ 勇真は軽く現実逃避をしてからノロノロと視線を青髪緑メツシユの少女に向けた。

「なにか？」

「すまない高橋、私はジャンボチーズハンバーグセットが食べたい」

「……お好きにどうぞ」

あれ？ 今、デザート食べてなかった？ と思わなくもない、そしてそれを言いたくもあつた。しかし、面倒くさいので言わない、今更帰るのが20分遅れようが1280円料金が追加されようがどうでも良いことだ。そう自分に言い聞かせると勇真は溜息を吐いて椅子に座った。

それから約30分。二人は更に三品、追加注文してようやく満足したのか幸せそうな顔で勇真に話し掛けた。

「ふうー、落ち着いた。腹が空き過ぎて任務を果たす前に餓死するところだったよ」

「はふうー、ご馳走様でした。ああ、主よ。心やさしき高橋君にご加護を」

二人は揃って十字を切ると、両手を組んで祈る様に目を閉じた。その姿と祈りは非常に様になっている。しかし、あいにく勇真は浄土宗、キリスト教の加護はノーサンキューなのである。だからその加護は日本に居るかもしれないキリスト教徒の高橋君

にあげて下さい。

「どういたしまして、それでは俺はこれで」

予定調和だろうか？ やはり席を立った勇真は一步進む前に腕を掴まれてしまう……しかも今度は二人同時に。

勇真は本日最高の嫌がる顔をして二人を見下ろした。

「まだ、なにか？」

「いや、これほど良くしてもらってそのまま帰らせる訳にはいかないな」

「高橋君、もし、困った事があつたら私達に言つてね、任務の合間に時間があれば出来るだけ協力するから」

「……………」

今、困つてるよ！ 変な二人組に絡まれて家に帰れなくて困つてるよツ!! そう言えば帰してくれるだろうか？ そう勇真は思った。

しかし、やはり例の如く更に面倒くさくなりそうなのでそれは言わない。  
だから別の願いを言う事にした。

「さつきからガラス越しにメチャクチャコツチを見ている外の三人をどうにかしてくだ

さい」

そうやって勇真はガラスの外の三人組を指差すのだった。まあ、内一人は幼馴染  
なのだが。



## 第2話

勇者さんD×D 2

「では少し行ってくる」

「高橋君はまだ帰らないでね」

そう言つて白ローブ二人はーゼノヴィアとイリナは殺る気満々でファミレスを出て行つた。外の三人が慌てている、悪い事をしたなど勇真は思った。

しかし、まあ、勇真は自分が一番可愛い、自己中と言うことなかれ、大抵の人間はそういう風に出てくるのだ。

「悪いなイツセー」

勇真はファミレスの外から何事か此方に文句らしき物を言っている幼馴染に軽く手を上げると会計を済ませ、素早くファミレスを後にした。

……今日は厄日か？

そう、勇真は思った。イツセー達を囮にファミレスを脱出、家に帰るついでにお菓子とジュースを買い、近道の為に森林公園を通ったら今度は黒ローブの変質者に出会った。

呪われているのか？ それ系は毎日解呪している筈なのだが？ そんな事を考えていると、黒ローブはフラフラと此方に近づいて来た。

思わず勇真が距離を取ると、黒ローブは掠れた声で助けて、と言ってから吐血、そのままドサリとぶつ倒れた。

倒れた拍子に脱げたフードから見えるのは今にも死にそうな顔の白髪少女。

俺ってそんなに日頃の行いが悪いのかなあ、と勇真は頭を抱え、直ぐに治療に取り掛かった。

「……あれ？ 生きてる」

少女ールミネアの第一声はそれだった。

彼女は自分に掛けられたタオルケットを取りは身体を確認する。衣服を全て脱がされてはいるが、乱暴された形跡や身体の痛みはない。彼女はそれから不安そうにキョロキョロ周囲を見回した。

そこはルミネアの知らない部屋で、少なくともコカビエルの隠れ家ではない。その事に彼女はホツとする。

すると部屋の外からトントントンというノックの音が聞こえてきた。ルミネアは一瞬ビクリと震えると、とっさにタオルケットを肩まで被った。

「は、はい、どうぞー！」

「失礼します」

入って来たのはルミネアと同年代に見える黒髪の少年だった。少年は疲れたように、だがどこかホツとしたように息を吐くと、片手に持っていたペットボトルを開け、コップに中身を注ぐとそれを机に置いた。

「もう、起きたのか、身体は大丈夫？」

「はい、なんともないです……もしかして貴方が治療してくれたんですか？」

ルミネアの記憶通りならば、自分は聖剣使いの因子結晶を身体に入れられ拒絶反応で死に掛けていた筈なのだ。

そう、ほぼ死んでいたと言える状況だった筈なのだ。

それが今では身体の何処にも痛みがない。

「一応、そうなるね」

ルミネアの問いを少年はあっさり肯定した。

それを聞きルミネアは驚く、エクソシスト故に自分を救うのがどれ程困難な事かルミネアには分かっていた。最低でも高位の治療魔法と治療薬を併用する必要があった筈だ。

ルミネアはそんな真似が出来る少年を少し警戒し、そして見ず知らずの自分に手間とお金が掛かる治療を施してくれた事を深く感謝した。

「ご面倒をお掛けしました、本当にありがとうございます」

「どういたしまして、ところで身体に痛みはない？ 力が入らないとか」

「あ、大丈夫です、驚くくらい体調が良いです」

「それは良かった。でも一応、危ない状況だったからしばらく安静にしてね、あ、喉が渇いたらそれ飲んで、あと君の服は洗濯中だから、本当に悪いんだけど少しの間、我慢してあと30分もしたら持つて来るから」

少年は踵を返し部屋を出て行こうとする。

「あ、あの！」

「ん、なに？」

ドアノブに手を掛けたまま少年が振り返る。反射的な行動だった。ついなんとなくルミネアは少年を引き止めてしまった。

「ルミネアと申します、本当に治療、ありがとうございます」

「気にしなくていいよ、俺は宮藤勇真、なにか困った事があったら声を掛けてね」  
少年——勇真はそれだけ言うのと今度こそ部屋を出て行った。

「……どうしよう」

勇真はリビングで一人、悩んでいた。

成り行きで死に掛けの家出少女（裏稼業関係者）を拾ってしまった。勇真は今後どのような様な行動を取れば良いのか分からない。

取り敢えずなにかヒントを探す為にスマホで家出少女、拾った、裏稼業で検索するも出てきたのは18禁SSばかり、しかも監禁陵辱物が多数……参考にならない。

これは面倒ではあるが身の上話を聞かねばなるまい。少女——ルミネアの様子からそのまま家か、住んでいた場所に帰す事は出来ない、まず高確率で悲惨な目に遭う。

勇真は面倒くさがりではあるが人の命が掛かる状況を面倒くさいでスルーする程、冷酷ではなかった。

「……さて、そろそろ30分か」

彼はイスから立ち上がると、洗濯魔法と修復魔法で新品同様に仕上げたルミネアの服

を持って、自室の扉をノックした。

返事はすぐに来た。

「は、はい、どうぞ」

どうやらまだ、あまり落ち着いていないらしい。いや、それどころか先程以上に声色に緊張感や焦りがうかがえる。

「失礼します、洗濯終わったよ、服は置いとくから着替えたら声を掛けて」

「は、はい、分かりました」

「お待たせしました、着替えました」

「分かった、じゃあ入るよ」

勇真が自室に入ると黒のローブを着たルミネアがベッドに腰掛けていた。彼女はかなり緊張した面持ちだ。

膝の上に置かれた手は固く握られ、顔は若干青ざめている。そして綺麗な翡翠色の瞳が自信なさげに揺れている。

不謹慎だが、勇真はそんな彼女を見て可愛いと思った。勇真の金でファミレスで馬鹿食いした二人とは大違いである。

「……イリナ達に見習わせたいよ」

「な、何か言いましたか？」

「いや、ごめん独り言」

勇真は机に備え付けられたイスをずらすとルミネアに向き合う形で配置し座った。それと同時にルミネアの緊張感が一気に増したような気がする。

「ああ、そんな緊張感しなくて良いからね」

勇真は出来るだけルミネアの緊張させないように落ち着いた声で言った。

「は、はいー！」

ただ、残念な事にあまり効力はないらしい、そんなルミネアの様子を見て勇真は苦笑した。

「まず、いくつか質問に答えて欲しい、どうしても答えたくないものがあつたら黙秘して構わない、じゃあ、まず一つ目、家族か保護者はいる？」

「……居ません」

「じゃあ、帰る場所は……いや、帰りたい場所ある？」

その質問にルミネアの肩がビクリと震える。

「……ありません」

「今後、生活出来るだけのお金は持つてる？」

ルミネアの震えが大きくなる。

「あ、ありません……無一文です」

「そうか、では、もしかして追われてる?」

「……………」

三つ目の質問にルミネアは黙秘する、しかし、肩を震わせ涙目で俯くその態度で答えなんて簡単に分かってしまう。

まあ、ここまで想定通りだ、助けた状況から充分に予想出来る範囲内だ。

「オーケー、そうか、そうか、よし分かった。じゃあ、次ね、ルミネアは料理は作れる」

「……………」

「あれ? これも言いたくないか……もしかして作れない?」

「……………」 い、いえ、孤児院の教会では当番制で作ってましたので、美味しく出来るかわかりませんが、作れ、ます」

「そうか、じゃあ、掃除洗濯は?」

「あ、それは、出来ます」

「よし、優秀! ところで話は変わるんだけど、君の治療にフェニックスの涙を使ったんだけど、代金を払ってくれるかな?」

「え?」



そんな事を言われても払える訳がない。フェニックスの涙は世界でも最高峰の回復薬だ、その効力は四肢の再生能力こそないが、致命傷を含めたあらゆる怪我を癒してくれる超貴重な薬だ。

その価値はひと瓶1000万では足りない。

「ん、払えない?」

「は、払えません……も、申し訳ありません」

ルミネアは涙目でオロオロしている。どうやら意地悪が過ぎたようだ。

勇真は反省する、反応が可愛かったのでつい虐めてしまった。

「ああ、更に話が変わるんだけど、俺ってかなり面倒くさがりなんだよね、もう自分で料理もしたくないし、掃除も洗濯もやりたくない。例え暇でもやりたくない、そんなダメ人間なんだよね」

「……………」

「で、今度家政婦さんを雇おうと思ってるんだけど、中々いい人が居なくてね何処かに居ないかなあゝ二十四時間住み込みで俺の世話をしてくれる様な人」

白々しく、本当に白々しく勇真はルミネアを見ながらそう言った。

しかし。

「……………」

「……………」

「……………」

「…………あれ？ 伝わってない？」

「は、はい、何がでしょうか？」

え、いや、伝わるよね普通、いや、漫画の読みすぎ？ ……ごめん真面目な場面ですべきじゃなかった。いや、でも、こういうシチュエーションで一度でいいからやつてみたかったんだよ。

と、勇真が言い訳にならない言い訳を脳内で展開していると、ルミネアが悲壮な顔をした、何かを決意した様な顔をした。

「…………お金でしたら、本当に申し訳ありません、私には払う当てがありません…………もし、不快でなければ私の身体を好きに使って下さい」

そう言って、ルミネアは震える身体でローブを脱ぎ始める。それを慌てて勇真は止めた。

「ちよちよ、ちよつと待ってね、冗談だから！ 身体とかダメだよ、お金とかも払わなくて良いから」

「え…………。ですが私には返せるモノがそれしか、ありません」

涙目でそう言うルミネアは実に可愛らしく、勇真の嗜虐心をくすぐった。

どれくらいくすぐったかと言うと、正直、もう、ちよつとくらい身体で払って貰つても良いんじゃないか？ と頭によぎるくらいくすぐった。

しかし。まあ、ここでじゃあ身体で払ってもらおうか！ などと言つたら鬼畜外道である、そう言う鬼畜系の欲求は誰にも迷惑が掛からないエロゲで発散すれば良い。

勇真はちよつと……いや、かなり勿体無いかなあと思いつつも、深呼吸してなんでも無い顔を無理やり作り話を続けた。

「……問題ない全部魔法で治したから、魔法力くらいいしか消費してないから、だから気にしないでね、よし、じゃあそれは置いておいて、取り敢えずだけドルミネアは暫くここに住んでね」

「は、はい、とてもありがたいのです……しかし、私などがいても宜しいのでしょうか？」  
「大丈夫、問題ない。家事をしてくれるだけで良いから、滞在費とか要らないし、なんならお小遣いもあげる、とにかく家にいて、言つちや悪いけど元いた場所に帰つたら殺されるよね？　そして帰らなくてもここら辺をフラフラしてたら始末される……違う？」

「……はい、おそらく」

「でしよ、じゃあ、決まりね、ルミネアは家で家政婦をして下さい、あ、暫く家の外にも出ないでね、庭は良いけど門を潜つちやいダメだよ？　敷地内に分らない様認識阻害と防御結界を張つてるから、ここに居る限り追つ手に早々発見される事はないから、良

いねー」

「は、は、は」

「宜しい、じゃあ、もう遅いからお休み、ベッドはそのまま使っていよいよ」

そう勇真は一気にまくし立てて話を打ち切り、部屋から出て行った。

「疲れたあ」

勇真は力なくテーブルに突っ伏しながら誰に言うでもなく呟いた。

他人と長時間真面目な話をするのは疲れる、それを改めて実感した。

もう、自分、真面目な話はしたくない、そう思いつつ、勇真は身を起こすと、真剣な目付きで虚空を睨む。

すると一瞬にして勇真の周りに複数の魔法陣が展開された。

「キーワード【ルミネア】」

勇真がそう言うのと、魔法陣の輝きが増す、そして魔法陣から何者かの会話が流れてきた。

勇真はセラビニアから帰って来て魔法を得た事により、地球にも超常の存在がいる事

を知った。そして軽く調べた結果、自分が住む街のあまりの人外率に危機感を覚えたのだ。

そのため彼は密かに駒王町を覆う監視結界を張っていたのだ。

この結界の効力は駒王町に知的生命体の会話の盗聴、録音能力を持ったもので、キーワードを言う事でそのキーワードに関する会話を新しい順に自動で再生する機能を持ち、また駒王市に居る人外の数と種族を特定する事が出来るのだ。

勇真として映像記録機能もつけたかったのだから、これをつけると結界の隠蔽が難しくなるのでつけられなかった。

ちなみに言うまでもなく犯罪であるが、私的に悪用するつもりは勇真にはない、まあ、今の所と但し書きがつくが。

「……………」

勇真は無言で魔法陣から流れて来る会話を聞く、ルミネアをキーワードにして再生される会話で出てくる者は主に四人、その中でも特に多いのが丁寧口調だがルミネアを実験動物と言いつける歳を取った男——バルパー。そして口調が汚らしくルミネアを売女と呼ぶ聞いてて不快になる声の若い男——フリードだった。

その二人の会話を大まかに纏めると、『実験中にルミネアが逃げた、死体が見つかっていないから生きている、用済みだが聖剣使いの因子を回収したいから捕まえろ、捕まえ

た後は殺していい』という胸糞悪内容だった。

やはり、無理にでも引き止めて良かった。

勇真は自分の選択の正しいさに安堵する、そして更に情報を集める為に、判明したバルパーとフリードをらキーワードに調べて行く、すると出るわ出るわ、危ない話が山程か交わされている。

特にヤバイのが……

バルパー達のボスは墮天使幹部コカビエル。

聖剣エクスカリパーがバルパー達の手元に複数本ある事。

駒王市民を誘拐し聖剣使いの因子を抜き取ってから殺す計画を立てている事。

駒王市を壊滅させようとしている事。

そして、コカビエルは神と魔王が滅びた為に中途半端に終わった天使、墮天使、悪魔の三つ巴の大戦、その再開の引き金に引こうとしている事だった。

「……………」

勇真は無言で魔法陣を消し、今後の行動方針について考え始めた。

ヤバイ過ぎる状況だ。

今週中、遅くとも来週までにコカビエルは動く、魔王の妹、リアス・グレモリーとソー

ナ・シトリーを殺して戦争を引き金を引く為に。

そして、もし、助っ人を呼ばずにコカビエルと戦えば高確率でリアス達は殺され、この街は壊滅する事だろう。そうなれば犠牲者の数は数千ではきかない。

風の噂でリアスとソーナは優秀と聞いているが、かつて神や魔王と戦い生き残り、千年以上の時を生きる古強者に魔王の妹とはいえ成熟していない成人前の悪魔達が勝てると思える方がおかしい。特に人間と違い人外は能力が成長しきるまで百年以上の時を必要とするのだから。

だが、ならばどうする？ 勇真が戦うか？

それもいいだろう、いや、それがいいだろう。勇者の剣がらなくとも勇真の実力は現時点のリアス、ソーナ眷属全員を束ねても及ばない程高いのだから。

しかし、コカビエルの正確な実力が分からない、分からないまま戦いを挑むのはあまりにもリスクが高い。下手に挑んで格上でした、なんて事になれば目も当てられない。まずはコカビエルの戦闘力の把握が必要だ。

「……。試してみるか」

勇真は冷蔵庫を開ける、中から取り出したのは2リットルコーラ、彼は蓋を開け、そ

れをコップに注ぐ。

そして注いだ際に開けたキャップ……正確にはドラグ・ソボールとのコラボ企画の空孫悟のフィギュアキャップを手を取った。



## 第3話

その日はバルパー・ガリレイに取って厄日としか言いようのない日だった。

コカビエルと契約を交わし、かの墮天使の協力を得て教会から三本のエクスカリバーの強奪に成功、そして数日中には長年の夢だった、7つに分かれたエクスカリバーの統合、その第一歩を踏み出す。

その直前だったのだ。  
しかし。

「おっす、オラ空孫悟！」

山吹色の変な服を来た男が突然現れ、神父狩りに出掛けようとしていたフリードを不意打ちで瞬殺、彼に渡していた三本のエクスカリバーを強奪すると見たこともない術式の魔法でそれを何処かへ転移させてしまったのだ。

で、フリードを騙し討ちした奴のセリフがこれである。

「おめえらつええんだってな、オラ、ワクワクすつぞー！」

「なら、不意打すんなよー！」

珍しく声を荒げてとバルパーは叫んだ。しかし、男はそれを無視してアジトに突入、コカビエルと戦闘に入ってしまった。

不意打ちとは言えフリードを瞬殺しただけの事はある、訳が分からない奴だが、男の実力は大したモノだった。

翼もないのに当たり前のように空を駆けるし、高威力の魔法を複数同時に操る。体術の心得もあるのか接近戦も強い、それ故、コカビエルともそこそこいい勝負をしていた。

しかし、それはコカビエルが遊んでいただけの事、しばらく戦っていると言闘に飽きたコカビエルが本気の一端を見せる、結果、ものの1分で男は光槍に串刺しにされ……

「クソソソのこことかああああー！」

と言つて木っ端微塵に爆散した。

きつといいお嫁さんになる。勇真はルミネアの働き振りを見てそう思った。

別に凄く家事が上手い訳ではない。むしろ一部は勇真よりダメだ。ただ、気遣いが出て来て働き者、何より仕事だからやっているのではなく勇真の為に頑張ろうとしているの

が伝わって来るのが良かった。

まだ、ここに来て日が浅いからという理由もある。だが、それ以上に真面目で他人に優しくなれる気質を持って生まれたからだろう、そうでなければこうも自然とグウタラ過ごすダメ人間に優しく出来るだろうか？ いや、出来ない。

そして、あんまりルミネアが一生懸命なものだからグウタラしている自分が恥しくなり少しだけ勇真は更生し始めていた。

加熱したフライパンに刻んだニンニクを入れる、少し炒めて香りが出てきたらそこに牛肉を投下、味付けは塩コショウのみのシンプルかつ王道。

肉を炒め終わったフライパンに少量油を追加し再加熱、そこに豆苗と燃やしを投下、さらに鶏ガラスープを入れて手早く炒める。

鍋に水を入れ加熱、ある程度温まったら刻んだ豆腐、油揚げ、ワカメを投下、その後オタマに味噌を入れ、菜箸でムラなく溶かしていく、最後にカツオだしで味を調整し完成。

勇真の隣でルミネアが唾然とした顔をしている。それを横目に彼は若干得意げな雰囲気ですぐ皿へと盛り付けていく。

本日の昼食はご飯に味噌汁、牛の焼肉、もやしと豆苗の炒め物、デザートにはブルーベリーと刻んだバナナにヨーグルトと少量の蜂蜜を加えた一品。品数は少なく、野菜も足りないがまあ、面倒だからいいだろう。勇真はそう妥協し、ルミネアに料理を盛った皿を渡していった。

「勇真さん、お料理出来たんですね」

「まあ、多少はね」

ルミネアの驚きの声に少し照れた様に勇真は答える、昔、セラビニアに召喚される前は家族で夕食担当は勇真だった。

1人となった現在は面倒くさがり外食かお菓子ばかりの食生活になっていたが、まだ、多少は作れるらしい。

ちなみにルミネアにはまだ料理をさせていない。

ルミネアが来て2日目の朝、つまり今日の朝、料理は何が出来るか聞いたところマッシュドポテトという名の蒸して潰したジャガイモ（味付けは塩のみ）との答えが返ってきた、そして冷蔵庫にジャガイモがなかった時の絶望した彼女の顔からそれしか出来ないのだろう。

聞けばルミネアが居たイギリスのエクソシスト機関での食事はマッシュドポテトに青汁プロテインの様なモノのみだったらしい。

それなんて地獄？

勇真はイギリスのエクスシスト機関だけは何かあっても入らないと固く誓った。

食事を終え、食器の片付けまで終わったので、勇真はリビングで空孫悟のフィギュアキャップに魔法陣を刻んでいた。

「なにをしているんですか？」

ルミネアが小首を傾げながら聞いてくる。

「ちつと魔道人形を作ろうと思ってるね」

「魔道人形、ですか？」

「そ、言うなればゴーレムと使い魔の中間みたいなモノかな……ほら、出来たよ」

そう言つてフィギュアをテーブルに置く、するとフィギュアは一人でに動き出し、演武の様な動きを始めた。

そのフィギュアとは思えぬ細やかな動きにルミネアは感嘆の息を漏らす。

「わあ、すごい可愛いですね」

「まあ、この状態ならね」

そう言つて勇真はヒョイっとフィギュアを掴むと窓を開け、それを庭へと放り投げた。

「ええ〜ッ!？」

その行動にルミネアは驚き、急いで拾いに行こうとする。がそれを勇真は止める。

「あ、拾いに行かないで見てて」

「はい……」

口では素直にそう言うのだが、拾いに行きたそうにウズウズしているルミネアに勇真は苦笑する。

そして、2人でファイギュアを眺めていると、何を思ったのかファイギュアは手で土を掘り身体を地面へと埋めてしまった。

すると地面が蠢き、ファイギュアが埋まった地点に集まり出した……そして。

「おっすー！ オラ空孫悟ー！」

地面からファイギュアと似た姿の等身大の人形、と言うか人間にしか見えないモノが現れたのだ。

その男？ の出現にルミネアはフリーズする。しかし、勇真は慣れたように近づくと、その肩に右手で触れてー

「【五属性と転移と呪い、魔法力一割を与える】じゃ、よろしく」

ーと言った。しかし、勇真の言葉に人形は。

「つええヤツと戦いてえ」

という答えになつてない答えを返す、そしてそのまま唐突にこの場から消え去つた。

「……え？」

フリーズから解けたが状況が理解出来ずルミネアが目を白黒させる。

「ええと、魔道人形は何処へ行つたのですか？」

「ちよつと敵情視察かな」

敵情視察と聞킬ルミネアの顔が一気に青ざめる。敵情視察される様な場所に心当たりがあるのだ。

「それつてまさか、私が、居た所にはですか？ ダメです、あそこには！」

「墮天使幹部コカビエルがいる？」

「ツ、はい」

「大丈夫、魔道人形にこちらを特定する様なモノは持たせていないし、倒されるか時間が来ると自然と爆散して証拠は残らない。それに強い相手と戦う為には情報と下準備が大事ですよ？」

勇真の話を聞き、更に顔色が悪くなる、ルミネア、彼女は心の底から恐怖を抱いているように自分を両腕で抱きしめた。

「た、戦う気ですかッ!? ダメです、勝てる訳ないです、あんな怪物には絶対勝てないん

ですッ!!」

「そうかもしれないね、でも、先ずは勝てるか勝てないかを調べる為にもこの様子見は必要だったんだよ。……お、これは運がいい、不意打ちが決まってあっさりゲツトだ」

そう言つて、勇真は右手を虚空に伸ばした、すると魔道人形が消えたのと同じく、唐突に3本の剣が姿を現した。

「エクスカリバーッ?!」

「そう、エクスカリバー。と言つても本物を7つに分けてその破片を核にそれなりに頑丈な魔法金属で水増しした出来損ないだけだね、しかも何の為かは知らないけどヘンテコな刀身の形をしている……まるで折つて下さいと言つてる様だと思わない?」

「そ、そんな事より逃げないとッ!」

「落ち着いて、この家に居れば見つからないし、最悪コカビエルでも追つてこれない場所に転移してしまえばいい、だから大丈夫」

「で、でも、もし見つかったら! 見つかったら……ッ!」

「問題無い、今、魔道人形がコカビエルと戦つてる、視界を共有して俺もコカビエルを見てるけど強いね、流石は墮天使幹部、あの魔道人形じゃ歯が立たない」

「ダメじゃないですか!」

「ハハ、珍しく手厳しい、でも本当に大丈夫だから、確かにコカビエルは強いよ、でも想



定の範囲内、むしろ、予想よりもかなり弱い、おそらくアレは全盛期じゃないね、以前の大戦の後遺症でも有るのかな？ 神や魔王と戦って生き残れる程の力は感じない、あの程度なら俺の方が強い」

墮天使幹部より自分の方が強い、そう、なんでもない風に、いや、どこか自嘲する様に言う勇真、ルミネアは彼を恐れる様に一歩後ずさる。

それに気づいて内心気落ちしつつも、勇真は顔には出さず静かにこう言い切った。

「コカビエルは今夜の内に片付けるよ、アレがやろうとしている事は流石に俺も見過ぐせない」

コカビエルは苛立っていた。

彼を苛立たせている当然、今日の襲撃が原因だった。

昼間いきなり襲ってきた人形に、正確には人形を操る術者にまんまとエクスカリバーを盗まれてしまい、せっかく練っていた計画を変更せざるを得なくなってしまうのだ。

本来、コカビエルは魔王の妹達を殺し、彼女達が管轄のこの地方都市をエクスカリ

バーが統合する際に生じる力を利用して滅ぼすつもりだった。

だが、エクスカリバーを盗まれた為、地方都市を滅ぼすのに自前の力を使わなければならなくなった。

別に自前の力で滅せない訳ではない、ただ、如何にコカビエルでも都市を丸ごと消し去るには少くない労力が掛かる。

そして最も問題なのは来るべき魔王や大天使との戦いの際、統合されたエクスカリバーを戦力にしようとしていた計画が破綻してしまった事だ。

今の7本に別れたエクスカリバーは弱い、だが、コカビエルは折れる前の真のエクスカリバーの力を知っていたからだ。

膨大な聖なる力を内包し、使いこなせば如何なる状況にも対処できる7つの強力な能力、その上、デュランダル程ではないが神や魔王ですら破壊困難な頑強さと斬れ味、アレこそ万能にして最高の聖剣なのだ。

今のコカビエルは大戦時程の力はない、内包する光力がかつての半分程、総合的な戦闘力は全盛期の四割に届かない程、弱体化していた。

これは30年ほど前、今世紀最強の聖剣使いと謳われたヴァスコ・ストラーダとの戦いで負った怪我による後遺症と、平和な時代が続き腕が衰えたことに起因する。

だからこそ、コカビエルはバルパーと協力関係を結び、聖剣使いの因子を得て、エク

スカリバーで自身の戦力増強を図ろうとしたのだ。

しかし、その目論見が潰れ、コカビエルは焦る。

「クソツ、今回の計画は見送るか？……いや、ダメだ」

コカビエルとて考えなしに戦争を起こそうとしていた訳ではない、今戦えば墮天使が勝つと確信しての事だった。

現在、グリゴリには総督アザゼル、副総督シエムハザを始め大戦前から存在した殆どの幹部が残っている。

そして食客に史上最強の白龍皇、更にもう一人、成熟した神滅具の使い手、幾瀬鳶雄がいる、後者はともかく前者は戦鬪狂、戦争となれば喜んで力を振るう事だろう。

そう、今しかないのだ。ここ数十年で悪魔陣営は悪魔の駒イービル・ピースにより急速に戦力を回復させている、このまま手をこまねいては悪魔陣営の一人勝ちになってしまうのだ。

今しかないのだ。だからこそ自身の傷が治るのを待たずに計画を実行に移した。戦争に消極的なアザゼルとシエムハザを出し抜き引き返せない段階まで事を運ぼうと思っただのだ。

だからこそ、今しか……。

そんな事を考えながらココビエルは深い眠りに堕ちていった。

「さようなら、ココビエル」

千里眼で眠りにつくココビエルを見ながら。

胸と首を真つ赤に染め永遠の眠りにつくココビエルを見ながら勇真は静かに呟いた。敵情視察、そう評して勇真が送り出した魔道人形は何もココビエルの実力を計る為だけに創られた訳ではない、ココビエルを安全に暗殺する布石というもう一つの役割の為に創られたモノでもあった。

魔道人形には壊されて初めて発動する呪いが込められていたのだ。まあ、呪いと言ってもそこまで大したモノではない、正面切った戦闘中ではあまり意味のないものである。

呪いの効力は魔道人形を壊した者に目印をつける事、そして対象が気を抜いている時、密かに眠りに誘い、眠りについた時、意識が浮上するのを遅らせる。その3つだけだ。

後はただ、目印を元に千里眼と透視能力で機会を伺い、ココビエルが眠りについた時、静かに近くに転移して不治の呪いをたつぷりと込めた短剣で急所を抉り、転移で逃げる

だけ。

戦闘時、光力を纏い防御力が上がった状態なら難しくとも安眠中、力を抜いた身体に短剣を突き立てるなど造作もないことだ。

ゲームや試合ではないのだ、わざわざ敵が強い時に戦いを挑む必要はない、例えば小細工抜きで勝てそうな相手だろうと戦闘ではなにか起こる分からない、特に十中八九勝てるなどという勝率9割 “程度” の状況で命懸けの戦いを挑むなど正気の沙汰ではない。

実戦ならば、自分の命が掛かっているなら、ましてや街の多くの住民の命が掛かっているならば、ありとあらゆる手を使い、敵を罠に嵌め確実に始末するのが大切なのだ。

勇真は千里眼を解除すると大きな欠伸をした。

時刻は朝の3時。良い子も悪い子も寝るべき時間である。ゆえに勇真はシャワーを浴びて寝た。

こうして、コカビエルの計画はあっさり、彼の命と共に崩れ去ったのだった。

## 第4話

勇者さんのD×D4

「それで酷いだよ、勇真君たら『僕は高橋です』なんて嘘ついて私を騙したのよ！ イツセーくんもそう思うでしょう！」

「うん、そうだね」

イツセーはもう10回は聞いたイリナの愚痴に棒読みで答えた。おかげで俺もイリナに殺されかけたしねと内心で付け足して。

ファミレス前で勇真にイリナ達を押し付けられて一週間が経過していた。

まあ、押し付けられたと言つても元々、イツセーは彼女達にエクスカリバーの回収、破壊の協力を打診する為に探していたので結果オーライ、それに対してイツセーが勇真に思うところはない。

だが、中学以来久しぶりの再会したにも関わらず手を挙げるだけで声も掛けずに消えるほな如何なものか？

その事で勇真に怒りを覚えたイツセーだが、今は気にしていられない。今はエクスカ

リバー搜索に集中すべきなのだ。

「で、今日はどうする？」

本日四品目のセットメニューを平らげながらゼノヴィアが言った。

相変わらずの食べっぷりである。

金の事など全く考えていない、悪魔の金だから別にいい、といったある種開き直った考えがゼノヴィアとイリナにはあるのかもしれない。

「相変わらず、凄い食べっぷりだなあ」

財布の中を覗きながら震える声で匙さじが言った。

そう、このファミレスでゼノヴィア、イリナは金を払わない。何故なら無一文だから、故に仕方なくイリナとゼノヴィアの為にイツセー、匙は毎日ファミレスを奢っているのだ（小猫は別、女の子の後輩に出させるなんて男じゃない）

ちなみに菓子パン等では力が出ないらしい。迷惑な話である。

「……兵藤、金大丈夫か？」

匙がボソリとイツセーに耳打ちする。匙の顔が心なしか青いのも無理からぬ事だ。

イリナとゼノヴィアは毎日一食で過ごしている、そしてファミレスのメニューが気に入ったのか、イツセー、匙に奢られる際、滅茶苦茶食べる、もう、フードファイターか？　と言ったくらい食べる。既に、この一週間でイツセーと匙が奢った食事代は5万を

超える、既にバイトもしてない、特に家が裕福でもない学生には少々厳しい額になってる。

「大丈夫だ。毎年のお年玉を将来ハーレムを作る為に貯めていた俺に隙はない！」

キリツ、という効果音がつきそうな顔でイツセーは言った。それを聞き、匙は安心と呆れを混ぜた溜息を吐き出す。

「はあ……そうか、良かった。悪いがもう、俺は今日で限界だ、後はお前のしようもない貯金が頼りだ」

「しようもなくねえよ！ 将来を考え、コツコツと、そうコツコツと貯めてきハーレム貯金なんだぞ！」

「イツセー先輩、五月蠅いです」

立ち上がり、どんな気持ちでこの貯金に手をつけたか！ と力説しようとしたイツセーを小猫が冷静に鳩尾に拳を叩き込む事で黙らせた。

小猫は腹を押さえて悶絶するイツセーを尻目に更に口を開いた。

「それにしても、コカビエルに動きがないのが気になります」

「確かに妙だ、コカビエルはともかくフリード・セルゼンを見かけないのはおかしい、伝え聞く奴の性格なら毎日神父狩りをしていてもおかしくないはずだ、なのにこうも出くわさないのはどういう事だ？」



ゼノヴィアは何かを考えるように顔を俯かせる。

「たまたま、見つけれないとかか？ 地方都市っても駒王市は結構広いし」

「それはないと思う」

匙の言葉をイリナが否定した。

「この街に入ってるエクソシストは私達だけじゃないの、他にも数十人、密かに街を探索してるわ」

「そ、そんなにエクソシスト来てるのか!?!」

うわああ、怖ええ！ と匙が呻く。悪魔からしたら自分の街を夜な夜な数十人の殺人鬼が徘徊してるに等しい状況だ、そりゃ怖い。

「安心して、私とゼノヴィア以外はエクソシストと言っても補助専門、戦闘力は低いわで、もしフリードが神父狩りを続けていたら仲間にもっと犠牲が出てはるはずよ」

「そうか……って、数十人も居たら俺たちが協力してるのが教会にバレてるんじゃない?」

「ああ、だから本来、君達と私達が居るのはかなり不味いんだ、神父の格好をさせて居るのも上に余計な報告をされない為のカモフラージュという為でもある、まあ、これでも私達は聖剣使いだ。悪魔と協力しているのがバレても、任務が終わり次第関係を断てば上もとやかく言うまい」

「……どう関係を絶つ気ですかねえ」

やけに鋭い視線のゼノヴィアに寒気を感じつつ、悶絶から復活したイツセーは本題へと話を戻した。

「で、今日はどうするこの辺は大体探し終わったよな？ 少し遠出するか？」

「でも、祐斗先輩がフリードと遭遇したのはこの辺です」

「確かに、神父狩りをしてないにしてもアジトはこの辺にあつて魔法なんかで隠されてるかもしれないよな」

「そうねえ……ん？」

どうすかなあ、と悩んでいたその時、イリナの携帯に電話がかかって来た。

「あ、ごめん、丁度言つてた仲間のエクソシストから連絡が来たわ、ちよつと外すわね」  
続けててね、そう言つて、イリナは席を立つ。

「おう……でも、どうすつかなあ、そろそろ木場がかなりヤバイ、学校は来てないし、部屋に顔を出してもしない。今もきつと一人でエクスカリバーを探し回つてるぞ」

「しかたないだろ、あんなキツイ過去があつたら」

「……祐斗先輩が心配です。おそらくここ数日まともに寝ていません」

「だよなあ、昨日会つたらクマとか出来てたし、でもあの様子だと無理するとか言つても絶対に聞かないぞ」

ああでもない、こうでもないといふ3人が話し合っていると、何かしらの連絡を受けたの

か、携帯を凝視し、しばらく静観していたゼノヴィアが聖剣搜索とは関係ない事で口を開いた。

「……アーシア・アルジェントの時も思ったが君達は仲間思いなのだな」

「いきなり、なんだよ」

一週間前、部室でゼノヴィアがアーシアを貶したことを思い出したのか、イツセーの口調が若干荒くなる。

「正直、全ての悪魔はもつと自分本位で仲間の事など考えない欲望に忠実な輩だと思っていた、いや、君は性欲に忠実だがね」

「一言余計だ！……エロに忠実なのは否定しないし出来ないけど」

「ふつ、だが、君達はそうではない、転生悪魔だからかも知れないが、私としては他の悪魔よりはずっと好ましかったよ」

そう言つてゼノヴィアもイリナ同様席を立った。

「何処に行くんだ？」

「帰還命令が出た、本国に帰る」

「はあ!？」

イツセーと匙が驚愕の声を上げる、小猫も口を半開きにして啞然としている。

「どういう事だ？ 説明してくれッ！」

「コカビエル達のアジトが判明した、ここからそう遠くない場所に魔術的な方法で隠されていたらしい……。そして、そこでコカビエルは何者かに殺されていた。アジトにはフリードもバルパーも居らず、そしてエクスカリバーも残されていなかったとの事だ」  
「……どうなってんだよ」

「知らん、ただ、コカビエルという目印を失いエクスカリバーの所在が完全に分からなくなつた以上、任務は失敗だ。それ以上の事は今は分からない」

「そんな、じゃあ、木場はどうするんだ!？」

「木場祐斗には兵藤一誠、君の口から伝えてくれ、コカビエル達が持つエクスカリバーが無くなつた以上、彼の剣の矛先が私とイリナに向かいかねない」

短い間とはいえ共に協力した仲だ、斬り捨てるのはいささか心苦しい、そう言つてゼノヴィアは踵を返し出口へと足を進めた。

「ではな兵藤一誠、悪魔と協力、なかなか出来ない体験だったよ」

最後にそれだけ言うとな彼女は完全にファミレスを出て行ったのだ。

実に平和である。

コカビエルを暗殺してから二週間が経過していた。勇真は家でのんびりと、家事を手伝う以外はゲームをしたり漫画を読んだり、趣味の魔法の研究をしながらいつも通り自堕落な生活を送っていた。

コカビエルを暗殺した当初、ルミネアに経緯を説明し、もう自由に外を歩き回っても大丈夫だと伝えたところ、酷く怯えた目で見られた。

しかし、その視線も5日も経てば薄れ、一週間後には、怯えてしまい申し訳ありませんと、律儀に勇真に謝ってきた。

そもそも、ルミネアに取ってコカビエルとは恐怖の象徴であった。

かつて教会のエクソシストだったルミネアは墮天使討伐の任務でたまたま居合わせたコカビエルに敗北、そして半殺しにされ恐怖のあまり命乞いをした事が墮天使側に寝返ってしまう結果となったそうだ。

そして、その時の事が原因でコカビエルだけではなく自分より強い力を持つ者を必要以上に恐れる様になってしまったらしい。

だから、コカビエルを殺した勇真を恐れてしまった様だ。

無理もない話である。詳しくルミネアは説明しなかったが、フリードとバルパー、そしてコカビエルの会話を魔法で録音、盗み聴聞していた勇真は彼女の事情を説明された以上に知っていた。

彼女は命乞いの際に “なんでもしたし、なんでもさせられた” 強者に蹂躪される恐怖を体の芯まで味合わされたのだ、心が壊れてないだけマシである。

よって当然、勇真はルミネアの謝罪を受け入れたし、謝る必要もないと言いつつた。

で、前記の通り今は平和なのだが、一つだけ問題が発生していた。

——それも重要な問題が。

「……寿命、か」

そう、ルミネアの寿命である。初日にルミネアを治療した時点には分かっていた事だが彼女の寿命は長くない。

捨て子で身寄りのなかった彼女はエクソシスト養成機関で戦闘力が伸びる様に非人道的な人体改造を施されている。

それにより、潜在能力の解放、怪我の治癒力上昇、病気や毒等に対する強い耐性などを得て劇的に戦闘力がアップしているのだ。

しかし、当然の事、殆どの上手い話には裏がある。戦闘力上昇の代償に髪が白髪となり、寿命の約半分が削られ、怪我をすれば常人の数倍の速さで治る代わりにまた寿命が大幅に減る。

そしてコカビエルの元で酷い待遇を受け、更に最近はバルパーの無理な実験により更に大幅に寿命が減少、おそらくルミネアが生きていられるのはあと数年、それは勇真の魔法でも覆せない事だった。

勇真の回復、再生魔法の実力は高い、単純な外傷に対してなら殆ど万能と言っても良し、時間を掛ければ手足の欠損すら直すことが可能だ。

しかし、だからと言って既に無い寿命を延ばす術を彼は持っていなかった。

今のルミネアを救うにはそれこそ、記憶と魂を取り出し保管して身体丸ごと取り替えるか、あるいは伝説上に存在する寿命を延ばす効果があるアイテムを使用するか、はたまた悪魔の駒イービル・ピースなどで人間より高位で寿命が長い種族に転生してしまうくらいしか方法がなかった。

はつきり言つて前二つは絶望的である。

一つ目は生命に関する権能を持った神の力が必要なレベル、勇真の寿命があと数百年あったとして、死ぬ迄魔法研究に没頭してようやく届くかな？ といった奇跡の業である、当然間に合わないし却下。

二つ目は世界各地に似た様なアイテムの話が残っているが実在するものは驚く程少なく、本物を探しているのは数十年は掛かるだろう。

更に確実に存在しているモノは闘神クラスの实力者が守っている、流石に勇真も闘神

レベルが相手では小細工を幾ら使っても勝ち目がない。いや、手段を選ばなければ勝てずともモノをゲットする方法がないではないがゲットした後には神話体系まるまる一つを敵に回しかねないので却下。

ならば残るは三つ目だけだ、これも難易度が高い、だが、これは前二つよりはかなりマシだ、駒王市には二人の上級悪魔が存在している、言うまでもなくリアス・グレモリーとソーナ・シトリーだ。彼女達と交渉し、ルミネアを眷属に加えてもらう、これが最も簡単に寿命の問題を解決する方法だ。

とは言え、眷属悪魔は狭き門だ。なりたい者は人外を含めて山のように居る、倍率は相当高い。

しかも例え眷属にしてくれたとしても問題はあつた。これをすると当然ルミネアは眷属悪魔になつてしまふ、種族が変わるのは抵抗があるだろうし、主の命令を聞かなければならなくなる、また、リアスとソーナは人間から見てかなり当たりの主であるが、万が一、眷属トレードなどされればルミネアがコカピエルの様な主のモノになりかねない。そして逃げ出せば指名手配され最終的に殺される。

もう一つ、いや、二つ悪魔の駒なら選択肢がないではない。適当な上級悪魔、例えばソーナから悪魔の駒を強奪し、王の情報を魔法で書き換え、擬似的に勇真を王に据えて勇真が悪魔の駒を使う、不可能ではないし、主が勇真なので勇真がトチ狂わなければ問



題ない。

もう一つは勇真が誰か、例えばリアスの眷属となり全力で出世を目指し、ルミネアの寿命が尽きる前に上級悪魔となり悪魔の駒を政府から貰いルミネアに使う。これがおそらく一番安全ではあるが一万年という長命種族における出世のスピードは人間の社会のそれとは比べものにならない程遅い。

下級悪魔からたつた数年で上級悪魔になるとか、勇真がどんなに優秀でも無茶である、飛び級に飛び級を重ねた三歳児が大学を卒業、そのまま起業し成功するくらい無茶で現実味がないものである。

まあ、運悪く悪魔社全体に被害が及ぶような大事件が複数起り、その解決で目覚ましい活躍をしたとかでもすれば分からないが。

ならばどうする？

「やっぱり、悪魔の駒を奪うか？ 上手く行けばバレないし、最悪指名手配されても協力すれば逃げられなくはない……いや、それどころかルミネアを悪魔にしたら一緒にセラピニアに逃げれば問題ない？ いやいや、あそこ文化水準低過ぎだし、今頃、脅威ミルトンが去ってまた種族間戦争でもしてるだろうし、行くのは止めよう」

勇真はローリスク、ハイリターンな方法がないものかとあれこれ候補を考えて行くが

結局、まともそうなのはルミネア自身が良い上級悪魔の眷属になる事だった。

まあ、なんにしても、勇真だけでは決められない。結局選択するのはルミネアで、勇真に出来ることは手助けだけなのだから。

「ああ、この頃、悩んでばっかだ。あれ、俺つてもつとグウタラキャラだったよね？ 何も考えずにボーとしていたのに、どうしてこうなった？」

どう考えても後先考えずにルミネアを拾ったからである、とは言え勇真は後悔していない。彼はのんびり一人でゲームでもしながらゴロゴロしているのが何よりも好きだが、誰かと居るのも悪くない。

ルミネアは家族が居なくなつた勇真にとつてもう新しい家族なのだから。

## 第5話

勇者さんのD×D5

もしもの話だ。病気が何かで家族が余命数年となってしまうたら、それを本人に伝える方が良いのだろうか？

この選択は人によるだろう、家族の性格にもよるだろう。

だが、なんにしても大きな選択だ。場合によっては生きる気力を失ってしまうかもしれない。あるいは家族から罵倒される可能性もある。

で、そんなネガティブな事ばかり考えていた勇真はルミネアに寿命の件を切り出せなくなってしまうのだ……ヘタレである。

「……はあ」

「勇真さん、どうかしましたか？」

溜息を吐いた勇真を心配そうに、そして私、何かマズイことをしてしまいましたか？

と気落ちした様にルミネアが聞いてきた。

「ああ、大丈夫、ちよつと考え事をね」

「心配な事でもあるんですか？　でしたら私に言つて下さい、私なんかじゃ、力になれないかもしれないですが出来る事なら何でもします！」

「うん、ありがとう、でも本当に大したことじゃないから」

「そう、ですか」

「……………」

「……………」

会話が続かない。場に気不味い沈黙が流れる、二人とも自分から会話を進めるタイプでないので一度切れると中々会話が再開しない。故に勇真家は偶にこうなる。

で、こういう時、率先して、頑張つて場を和ませようとするのは勇真ではなくルミネアの方だった。

「と、ところで前から聞きたかったのですが、勇真さんは若いのに凄い魔法使いですよ、一体誰に魔法を習ったんですか？」

「…………魔法、魔法かあ、実はコレ習った訳じゃないんだ？」

「え、まさか、独学ですか!？」

「いや、独学というか、聖剣を引き抜いたら勝手に知識と能力が頭に入った」

「え、聖剣をですか？……なるほど、エクスカリバーを回収してたのはそれですか、でも魔法行使能力を与える聖剣って珍しいですね」

「ああ、それはそうだね……ルミネアは冥界とかとは別に異世界が有るって言われたら信じる？」

「勇真さんが有ると言うなら」

そう断言しキラキラとした目でルミネアは勇真を見上げた。

勇真はルミネアの背に揺れる尻尾を幻視した。少し……いや、かなりこの頃のルミネアは勇真を信じ切っていた、もう、勇真がする事は殆ど全部正しいか思っているくらい信じ切っていた。

嬉しい事だが、それを勇真はマズイと思う。

その気持ちは分からなくもない。長い間続いた辛い境遇から救い上げてくれた相手を信じたくなるのは分かる、だが、異世界なんて荒唐無稽の話を一発で信じるのは如何なものか？

いつかこの子、詐欺に合うんじゃないかなろうか？

「ルミネア、少しは俺を疑おうね」

「え、じゃあ、嘘なんですか？」

「……いや、まあ、本当だけど」

心なしか、ルミネアの目の輝きが増した気がする。

「……まあ、いいや。で、話を戻すと魔法は異世界で聖剣を抜いたら習得してた。というか俺、いきなり異世界に召喚されたんだよね勇者として」

「そうなんですか!？」

凄いです! 流石勇真さん、とルミネアは尊敬の眼差しを勇真に送った。

「ええーこれも信じるの? ルミネア、俺も嘘つくからね、人間は誰でも嘘つくからね、信じる者は救われるとか嘘だからね。掬われるのは足だからね」

「え、じゃあ嘘なんですか」

「……いや、まあ、本ただけど」

ルミネアの目の輝きが増した……展開がループしている。

「もう、いいや、それで世界救ってくれてって勇者として召喚された訳だけど、それまで全くこれっぽっちも俺は戦闘とかした事なかったんだよ、そんな奴を勇者として呼んで役に立つと思う?」

「何の役にも立ちません」

流石は元エクソシスト、戦闘関連はシビアで、勇真さんだから大丈夫です! とか思わないらしい。勇真は少し安心した。

「そう役立たずな訳だよ、ならなんで俺なんか召喚したかという、条件指定して召喚し

「たら来たのが俺だったらいい、その条件が勇者の剣を扱える事」

「そうだったんですか、でも、その割には勇真さんって剣を使うイメージないですね」

「日常生活に剣とか不要だからね、技量も大したことは無いよ、それは分かるかもしれないけど」

「はい、失礼ですが素人ではない程度のレベルに見えます」

「うん、その通り。魔法で身体能力強化をすれば別だけど、魔法無しの状態じゃルミネアにも絶対勝てないだろうね、ただ召喚されて初めて知ったけど俺は神器持でね」

「そう言うって勇真は左手を持ち上げる、同時に彼の手首に光が集まり黄金のルーン文字のようなモノが刻まれた腕輪が出現した。」

「【無窮の担い手】って言うらしい。効果は身体能力上昇とあらゆる武器の使い手に成れる事、発動中は勝手に武器の使い方が頭に浮かぶし、技量も上がる」

「あらゆる武器……とは、つまり聖剣、魔剣、神話や伝説の武器でもですか？」  
珍しく信じられないといった表情でルミネアは言った。

「そう、まあ、まだ神剣とか神槍は試してないけど異世界の聖剣は使えたり、この世界でも魔帝剣グラムとかは使えた」

「え？ グラムって魔剣最強と言われる、あのグラムですか!? じゃあ、勇真さんはグラムの使い手なんですか!? ……いや、でもアレって教会のエクソシストに使い手が居た

「は？ ですけど？」

「教会の人だったの？ 背中から腕生やす、確か白髪でジークとか名乗ってた奴なんだけど、もしかして知り合い？」

「……はい、一応、同じ戦士養成機関出身の先輩です」

「ああ……ちよつと悪い事したかな？ 1年くらい前に傷心旅行にヨーロッパに行つただけど、なんか、いきなり『一緒に英雄にならないかい？』とか言つて来てね、胡散臭くて断つたらいきなり襲い掛かつて来たんだよ。やたら強かつたけどなんとか勝つてね、あ、殺してはいないよ、だけど危ないから二度と俺を襲えないように呪いを掛けた、ついでに賠償も兼ねて魔剣は没収したんだよ」

「じゃあ、今のグラムは勇真さんが使い手なんですか？」

「いや、グラムは売った」

「え、なんでですか!?!……せつかく最強の魔剣の使い手に成れたのに勿体無くないじゃないですか」

「いや、確かに思ったよ、凄いい性能だったし。でも、やっぱり要らない。アレ持ち主の寿命を吸うんだよ？ ジークから他にも何本か貰ったけど魔剣は全部デフォルトでライフレイン効果が着いててね、使うだけで寿命が減るとか最悪、だからコレクターに売った。まあ、おかげで一生のんびり暮らせるくらいお金が出来ただけど」



俺は聖剣の方が好きだし、それに魔法だけで充分、そもそも俺、必要に迫られなきや戦う気ないし、ルミネアは違う？　そう付け足して勇真は笑った。

「……そうですね、分かつてはいるんです。でも、私は弱いから力が減るって事が凄く怖い、今は違うのに、戦う必要なんてないのに」

そう、俯きながらルミネアは答える、トラウマで自分より強い者全般を怖がる彼女に取って力を手放すという事は恐い者を増やす事に他ならない。

だから、今は戦う必要がなくても、誰かに襲われる心配がなくても自分の力は減らしたくない。そんな思いが勇真には感じられた。

「まだ、エクソシストを止めて二カ月も経ってないからね、仕方ないよ。俺もルミネアの状況だったら切り札の為に絶対取つとくし、まあ、今はのんびり暮らそう、危なくなつたら……まあ、守るから」

そう、最後だけ小声で若干恥ずかしそうに勇真は言った。それを聞き俯いていたルミネアは顔を上げると、嬉しそうに微笑んだ。

「……はい、よろしくお願ひします」

近年、戦うヒロインが数多く存在するが、やっぱりヒロインは守る者だな、と勇真は思った。

「会談ですか？」

イリナ、ゼノヴィアが駒王市から去ってから一週間が過ぎた。リアス眷属一同の説得もありようやく木場が学校に復帰、部活にもすっかり顔を出すようになった。

その為、リアスは眷属一同を集め、政府から、正確には兄の魔王サーゼクスから伝えられた重要な情報を眷属に伝えたのだ。

「そう、今回のことで墮天使の総督アザゼルから提案されたらしいわ、なんでも話したい事があるみたい、その時にコカビエルのエクスカリバー強奪について謝罪するかもなんて言われているけど、あのアザゼルが謝るかしら」

紅髪を揺らし、忌々しそうにリアスは言った。

「墮天使ですもの、信用できませんわ」

リアスの疑問に朱乃も珍しくどこか吐き捨てるように答える。

「でも、結局、エクスカリバーはどうなったんでしょう」

落ち着いたとはいえ、やはり気になるのか木場が真っ先にエクスカリバーの所在を確認する。

「さあ、真相は墮天使側もまだ掴めていないらしいわ、でも、注意してね、墮天使幹部が

この街で殺されたのは事実、もしかしたら私達が知らないだけで相当な実力者がこの街に潜伏しているかも知れないわ」

「そう言えば墮天使幹部ってどのくらい強いんですか？ 俺、イマイチ想像つかなくて」

「イツセーくん、墮天使幹部は最上級悪魔と同等レベル、戦闘力は低く見積もってもライザー氏の十倍以上と考えるのが妥当だよ」

「焼き鳥野郎の十倍ッ!? そんなのがご近所にいるかも知れないのかよ!」

「でも、何の為なんでしょう」

「エクスカリバーがなくなっていたらしいし、聖剣が欲しかったとかか?」

「考えられなくはないけど、もし、コカビエルを倒したのが僕みたいな剣士だったら既に愛剣を持っている筈だし、部長や朱乃さんみたいな魔法、魔力メインの使い手ならそもそもエクスカリバーは要らない、使い手がいない状態で教会の保管庫から奪うなら分かるけど、墮天使幹部と戦うリスクを犯してまで欲しがるとは思えない、僕としては復讐か何かでコカビエルを殺したかっただけで、エクスカリバーはあったからついでに奪ったとかだと思う」

木場が嫌そうに言う。何が理由にせよ復讐の邪魔された形になるのだから当然である。

「なんにしても用心が必要よ、出来るだけ私達はみんなで行動すべきだわ……で、それに

ついで考えがあるのだけど」

そう前置きして、リアスは本題である眷属全員でイツセーの家に下宿するという話を切り出すのだった。

ゴシゴシと勇真は目を擦った。

「わあ、大きなお家、日本にもこんなお家があるんですね」

「……そうだね」

ルミネアが驚いたような声を上げる、しかし、それ以上に勇真は驚いていた。

お小遣いをあげているのにそれに一向に手をつけないルミネアに業を煮やした勇真は彼女を連れ出し、近所の服屋に向かった。

服すら勇真が緊急に買った物（定員に生暖かい目で彼女さんにですか？　と言われ死にたくなった）しか着ていないのだ。

別に勇真だって服を多く持っているわけではない、しかし、室内用のダボダボしたジャージ2着と外出用の、全身コーデイネートの見本として置いていた微妙にサイズが大きい物が1セットのみだ、流石にこれは勿体無い。

との事で、勇真はルミネアの好みと店員のアドバイスの本、数万円分の服をプレゼントしたのだ。

カモにされた気がするが、ルミネアもとても喜んでいたので良しとする。

で、問題はここから、帰り道、スーパーに寄ろうとした際にイツセーの家の前を通った勇真が見たものは周りの一軒家の三倍……いや、奥行きも考えて五倍に増築？　されたイツセーの家だったのだ。

それはまさに豪邸、日照権とか大丈夫か？　と疑いたくなる程の他と隔絶した大豪邸だった。

勇真は再び目元を擦ってから表札を見るがやつぱり『兵藤』と書かれている、見間違いではないらしい。

「ルミネア、ここがこの街を仕切る悪魔の住居だから、注意してね。まあ、もう知ってるかも知れないけど」

「え？　あ、上手く隠蔽されてますが、確かに悪魔の気配が僅かに」

ルミネアが若干顔色を悪くし、勇真の側による。

「ああ、大丈夫だよ。まだ正午過ぎだからね、この時間は悪魔達は学校に行ってる、だから鉢合わせることは無いよ。それに俺にもルミネアにもかなり強い認識阻害の魔法を使ってるから」

「そうだったんですか？ すいません……私、全然気が付きませんでした」

「術者以外は気づけない魔法だからね、ルミネアに気づかれたらそれは失敗だよ、でも注意してね、高位の悪魔や魔法使いには違和感を抱かれる恐れがあるから、この家の近くを通るのは9時〜15時の間だけか、俺と一緒にの方が良い」

そう、勇真が注意を促していると、突然、その悪魔の住居の玄関が開いた。驚いてルミネアが勇真の背後に隠れる。

「あら？ もしかして勇真君？」

出てきたのはイツセーの母だった。

「あ、お久しぶりです。おばさん」

「そうねえ、一年ぶりくらいかしら？ 元気にしてた」

「はい、おかげさまで」

「そう、良かったわ。後ろの子は……あらやだ、もしかして彼女さん？」

そう言っつてイツセーの母は微笑ましそうに勇真とルミネアを見た。勇真は自分の赤くなるのを自覚した。

「……まあ、そんな感じですよ。ところでリフォームされたんですね」

見え透いた話題転換である。

「そうなのよ！ つい先日、リアスさんのお父さん建築関係のお仕事をされていてね、夕

「ダでリフォームしてくださいのよ！……あ、リアスさんっていうのはウチに下宿している留学生のすっごい美人の女の子ね、なんとその子、イツセーに気があるみたいなのよ！」

「おお、それはおめでとうございます」

「そうなのよ、おめでたいのよ、それでウチには最初留学生のアーシアちゃんも……」

イツセー母の話は長くなった。もう一人の留学生アーシアの話に続き、新たに下宿してきた、姫島朱乃、塔城小猫、木場祐斗の話、更にはイツセーの近況報告まで語ってきた。

ついには立ち話もなんだかからと家に招待されたのだが、それは予定があるのでと断り（意味深な笑顔をされた）買い物もせずに帰宅。

その後、暫くの間、ずっとルミネアが顔を赤くしてチラチラと勇真を見上げるのが印象的などある日常の事だった。





## 第6話

勇者さんD×D6

「明日から旅行に行こうか、ルミネアはどこか行きたい所はある？」

季節は夏になるうかという今日、ルミネアの前で幾つもの魔法陣を操る勇真が急にそんな事を言い出した。

「旅行ですか？ すみません。私、旅行は初めてで、任務で遠出する事は良くあったんですが……でも、勇真さんが行きたい場所なら私も行ってみたいです」

きつと素晴らしい所です。そう、笑顔で言うルミネア。信頼という名のハードル上げに勇真の顔が引き攣った。

「あ………じゃあ、京都辺りに行こうかな」

「あ、知ってます。南禅寺とか天龍寺がある地方ですよね？」

「……うん、そうそう、確かそこら辺、まあ、この街を暫くの間離れられれば何処でも良いんだけどね」

正直、京都の寺の名前なんて金閣寺と銀閣寺、あとは清水寺くらいしか覚えてない、な

ので勇真は適当に濁し話を続けた。

「なにかあったんですか?」

「うん、実は天使、墮天使、悪魔のトップ会談が行われるらしい、最初は冥界の中立地帯で行われるはずが、どうも墮天使側から打診があつたらしくてね、結果、この街であと一週間足らずで行われるとか」

「三大勢力のトップ会談ですか!? ……それって大戦停戦から初めてのことなんじゃない?」

「俺はそういう知識があんまりないからはずきり言えないけど多分、そうなんじゃないかな? 少なくとも頻繁に行われるようなものでもないでしょ。で、問題はそんな悪魔、天使、墮天使のトップに来られると色々と面倒くさい。流石にトップとなると隠蔽仕切れないし部分も出てくるし、鉢合わせてイチャモンつけられたら嫌だからね」

まあ、イチャモンもなにも墮天使幹部を殺害しエクスカリバーを拝借したのは事実なのだが、しかし、あれはコカピエルが悪い、別に三大勢力が戦争をするのは一向に構わないが関係ない者を巻き込むのがいけないのだ。

よって元凶のコカピエルには退場してもらい、使い手も決まっただけなのに天界で保管せず、あつさり敵勢力盗まれる様なずさんな管理体制の聖剣を3本貰うくらい別によからう、と勇真は思っていた。

「と、言うことで、急で悪いけど明日の朝には出かけるから準備してね」  
「はい！ 分かりました」

元氣よく言うルミネアに笑顔を返すと、勇真は密かにスマホを取り出し『京都観光』で検索した。

旅行未経験の外人さんより京都の知識がないのはマズイですから。

京都まではおおよそ5時間の旅だった。

既に墮天使のトップが密かに駒王市に入っている事を感じた勇真は街に掛けていた盗聴術式と自宅の結界を解除、あえて魔法を使わずに文明の利器で京都へ行くことにした。

タクシーを呼び駒王駅に、そこから電車を乗り継ぎ東京駅へ、そこで駅弁を買い新幹線で京都へと向かった。新幹線初乗りのルミネアが窓から見える景色や普段食べない弁当を食べて、はしゃいでいた。

まあ、はしゃいでいたと言っても周りに迷惑がかからない程度で、具体的にはちよつと声が高くなり口調が若干早くなるくらいである。しかし、普段殆どはしゃがないで珍

しく印象的に残った。

しかし、最も勇真の印象的に残ったのは隣に座る若いスーツ姿の社会人で終始ルミネアを微笑ましそうな目で見ては勇真を射殺しそうな目で見ていた事だ。途中から『リアジユウシネフノウニナレフラレテシマエ』という呪文を唱え始めたのでレジストしておいた。なかなか強力な呪詛だった。

で、列車の移動は順調だったのだが問題が全くなかったかと言えばそうでもない、リアジユウシネの呪いを掛けられたのは言うに及ばず、急だった為、新幹線の予約を取らずに行くことにしたから自由席を探すのが大変だった事、あとは時間潰しに二人でトランプをしたのだがあまり盛り上がらなかった事だ。

正確にはルミネアは楽しんでいたので、勇真はあまりトランプを楽しめなかった。隣のサラリーマンのせいもあるが、やはりトランプはそれなりの人数でやった方が楽しい。

なので勇真は真剣に次の手を考えるルミネアを鑑賞しながら楽しんでいた。

毎日見ているのだが、ルミネアはやはり美少女である。やや小柄で若干の幼さを残した顔立ちには可愛らしく庇護欲をそそられる。翡翠色の瞳は宝石の様でコンプレックだと言う長い白髪ともマッチしていた。

美人は三日で飽きる、ブスは三日で慣れる。という言葉があるが、考えた人はよほどのブス専か、目の肥えた貴人だったのだろう。

少なくとも三日では飽きない、と勇真は思った。

京都に着いた二人は予約していた宿に荷物を置き、軽く休憩してから観光に向かった。

「清水寺は法相宗系の寺院で、広隆寺、鞍馬寺とともに、平安京遷都以前からの歴史をもつ、京都では数少ない寺院の1つなんだ。また、石山寺、長谷寺などと並び、日本でも有数の観音霊場で金閣寺、嵐山などと並ぶ京都市内でも有数の観光地で、季節を問わず多くの参詣者が訪れる。あと、修学旅行で多くの学生が訪れるね、古都京都の文化遺産として世界遺産に登録されているし（wikipedia参照）」

「すごい……勇真さん詳しいんですね！」

「ま、まあ、日本人だからね、これくらい当然だよ」

ルミネアのキラキラした尊敬の眼差しを勇真は冷や汗混じりに謙遜した。

昨日京都の名所の説明を一夜漬けで覚えようとした勇真だったが、最初の一時間で、寺の由来なんいちいち覚えきれるかッ！ と匙を投げた。

結果、それぞれの観光名所を wikipedia で検索、そしてその内容を若干要約改変した文章を自身以外読めない様に認識障害を掛けた上、魔法使用感知対策を取って空中に投影して読み上げるといふ無駄に洗練された無駄のない無駄な魔法を使い勇真はルミネアに見栄を張ったのだ。

この魔法に加え自身の強大な魔法力を一般人並みのソレに見せる魔法、不意打ち対策の対物、対魔法、対光力障壁を魔法使用感知対策を取った上で自身とルミネアに常時七重展開しているのだから呆れてしまう。

勇真とルミネアは、清水寺↓地主神社↓二年坂（一念坂・二寧坂・産寧坂）のコースで京都を観光して回った。

魔法使いだから分かるのだが、京都は凄まじい魔都である。勇真は京都の所々に施された呪術に（あとは Wikipedia 朗読がバレないかと）冷や汗を流した1日だった。

京都全域に施された認識障害により街で普通に妖怪が店員をしている土産屋があったり、喋る傘（妖怪）や下位魔剣並みの強度がある木刀（対魔術式付き）が売られていたりとなかなか個性的であった。

そして、地主神社の『恋占いの石』はガチで、目を瞑って境内の2つの守護石を石か

ら石に辿り着けば想い人には軽いチャーム効果を本人には催淫効果がある呪術が掛けられる事が判明した。

『ちよつとやって来ていいですか?』と顔を赤くして言つて行つた、ルミネアから呪術が送られてきたので間違いない。

当たり前だが勇真はレジストしないでおいた。

ちなみに一念坂・二寧坂・産寧坂の転ぶと2年以内に死んだり、3年寿命が延びるといふ話はデマだった。本当だったらルミネアを20回くらい転ばせようと考えていただけに勇真としては残念だった。

「ああ、楽しかったですね」

「そうだね、本当にそう思うよ」

感慨深い、素晴らしいお寺でした。と京都の街を歩きながら呟くルミネアに勇真も同意した。

時間を気にせずのんびりと観光するのは思った以上に楽しかった。

正直、最初は、寺なんか見て何が楽しいのか? と思つていただけに良い意味で勇真

は期待を裏切られたと言える。

もつとも、勇真は、一人で来たからでなく、楽しそうに笑うルミネアに釣られた結果だとも思っていた。

もし、一人で来ていても当時の技術の粋を集めた美しい寺院と京都の街並みに感動したかもしれない、しかし、きつと楽しさより寂しさの方が強く感じたと思う。

ヨーロッパに行った時が正にそれだった。マチュピチュやサクラダファミアは神秘的だったり荘厳だったりで感動はしたが、また、一人で行きたいとは思わなかった。

しかし、ルミネアとなら再び訪れても良いと思う。

「……なんだ、そういう事か」

「はい？ 勇真さん、何か言いましたか？」

「いや、なんでもないよ」

何てことはない、勇真は京都観光が楽しかったのではなく、ルミネアと出かけるのが楽しかっただけなのだ。

それに気づき、勇真は一人静かに苦笑した。



1日目の観光を終え、宿に戻った二人は取り敢えず自慢だという広々とした露天風呂（非混浴）に浸かってから部屋でまったりと過ごしていた。

部屋は和式でかなりの広さがあり、見晴らしも良く清水寺から程近い。夕食はまだだがこれは期待出来る。

これで一泊二食付き5500円なのだからお得である。

出る部屋、格安宿、京都で、検索して良かったと勇真は思った。

まあ、想定した通り夕食前にちよつとした悪霊が出現したが、ホラー映画は不得意でもリアルホラーは得意な勇真が理由も聞かずに二秒で成仏させたから安心である。

「明日はどうしましょうか?」

夕食を食べ終え、布団に潜りながらルミネアが言った。布団こそ違うが、同じ部屋で近くに寝ている為かその頬は微妙に赤い。

「そ、そうだね、ルミネアは何処か行きたい場所はある?」

勇真はそんなルミネアの姿に不意を突かれ、ドギマギしながらなんとか答えた。

「私は、天龍寺と金閣寺に行ってみたいです」

そう遠慮勝ちにルミネアは言った。

「そっか、でも銀閣寺はいいの?」

「あ、はい……銀閣寺は、その、銀箔が張っていないので」

「はは、よくご存知で」

「勇真さんは行きたい所はありますか？」

「……そうだね、八坂神社に行ってみたいかな」

瞬時に Wikipedia を空中に投影しながら勇真はそう答えた。今日一日で何度 Wikipedia に頼った事か。

「そうですか……あ、そう言えば京都にはどれくらい滞在するんですか？ 時間に余裕

がなければ天龍寺は行かなくてもいいです」

「そういう遠慮は要らないから、滞在予定は一週間、時間的に大体の観光地は回りきれず、もし気に入ったなら延長してもいい」

「……でも、お金が掛かりませんか？」

「大丈夫、言ったでしょ、魔剣を売って一生暮らせるくらいのお金があるって、正直、一人じゃ使い切れないから丁度良いくらいだよ」

もつと浪費して良いんだよ、お小遣いにも全然手をつけないし、そう勇真が言うと、ルミネアは布団を目元まで引き上げた。

「でも、私は勇真さん返せるモノがありません、お金を返そうにもエクソシストの教育しか受けていない私では働く事も出来ません」

「掃除、洗濯、炊事と充分返してくれてるよ、料理の腕なんて見違えるほど上達したしね、あと、ルミネアは自分を下卑し過ぎ」

勇真は布団から手を伸ばし、少し躊躇したあとルミネアの頭を優しく撫でた。

「本当、君はもつとワガママになりなさい……そうだね、学校に行ってみたら良いんじゃないかな？」

「学校、ですか？」

「そう、学校に通つて、友達を作つて、同年代の『普通』を体験したらいい。俺を見れば分かるだろうけど、ルミネアくらいの年代の子供はもつともつと我儘だよ、でも、それはそれだけ自分を出せているって事、ルミネアは自分を押さえすぎ」

「私は、勇真さんが我儘には見えないのですが？　いつもと優しくして、自分の事よりも私の事を気に掛けてくれますし」

「はは、それは気のせい、俺は滅茶苦茶我儘だよ。お金があるから働かないで悠々自適に暮らしてるし、家の事も殆ど全てルミネアに任せてるダメ人間だよ、正直ね、普通に卒業で働いてる人からすれば俺みたいな奴がいたら張り倒したくなるくらい我儘でムカつく生活を送つてるように見えるよ」

「……やっぱりそうは見えませんか」

「ルミネアは優しいからね」

「……………」

「……………」

「それでどう、学校に行ってみない？ 高校に通ってない俺が言うのもなんだけど、学校はそれなりに楽しいよ。授業は面倒なのが多いけど、友達と過ごす日常つてのは悪くない、きつとルミネアならいっぱい友達が出来るだろうしね」

「……………」

勇真の問いに、ルミネアは無言で思案する。

そして、彼女は悲しそうな、諦めたような顔で答えを返した。

「……………行ってみたいです。でも、私は、長く生きられないんです」

「……………」

「ずっと、言えませんでした。自分でも認めるのが怖くて、こんな事言ったら勇真さんに捨てられるんじゃないかと怖くて」

「捨てたりしないよ、逆に俺がルミネア捨てられる可能性はあるけど」

「そんなのはありません。だって勇真さんは私が出会った人の中で一番優しくて頼り甲斐があつてカッコイイ人なんですから」

「……………俺が一番とは、ルミネアは本当に運もいい出会いもなかったんだね」

「そんな事はありません！ 勇真さんおかげで私は今生きています。勇真さんがあの時、救ってくれたから生きています！ こんなに楽しい日々を生きています！ 勇真さんと出会えた事は私の何よりの幸運です！」

珍しく、本当に珍しくルミネアは叫ぶように自分の気持ちを吐露すると、勇真の胸に顔を埋めた。

「でも怖い、今が幸せだから、この生活がもう少しで終わってしまふなんて嫌です、嫌なんです！ どうして、なんで私はあと少ししか生きれないんですか!？」

「……………」

「私は悪い子です、死にたくないから、仲間を殺した墮天使に命乞いするような悪い子です！ でも、それがそんなに悪い事なんですか!？ 自分の身体を好き勝手に弄られて、死にたくなるくらい恥ずかしい事をさせられて……………それでもようやく幸せな日々が送れる様になったのに……………好きな人が出来たのに」

「……………」

「でも、あと数年も生きられないなんて！ ああ、主よ！ なぜ私をこんなに苦しめるのですか！ 私は貴方の為に戦った！ 確かに最後は教えに反しました。でも戦ったんです、苦しい訓練に耐えて、それでも命懸けで戦ったんです！ なのに！ どうして!？」

ルミネアの慟哭が悲しく響く、それは普段控えめな、自分を押さえつけるルミネア

の心からの叫びだった。

それを聞き勇真は後悔する、彼はルミネア自身が残りの寿命の少なさを知らないと思っていた、いや、たとえ知っていても表面上は気にしていない風だったので勇真は解策を考えてから話そうと判断していた。

言われなければ分からない、そう言ってしまったえば終わりだが、こんな気持ちを押さえつけて生活させていなんてと、ただ強く彼は後悔した。

「ルミネア、質問いい？」

勇真は出来るだけ優しくルミネアを抱きしめると、落ち着かせる様に静かな声で言う。

「……はい」

「落ち着いて聞いてね。君を救う方法がいくつもある。ひとつは不老不死、あるいは不老長寿の薬を作る、あるいは手に入れる、孫悟空の伝説に登場する『蟠桃』とか、インド神話の『アムリタ』とかだね」

「……………」

「もう一つは、人間じゃなくなってしまうけど、悪魔の駒で眷属悪魔になる事だね、悪魔の下僕になるのが嫌なら、俺が主になる。俺なら上級悪魔から駒を奪って魔法で擬似的に主人となって使用する事が出来るから」

「最後の一つが、長命種とのキメラになる事だ。これはあまりオススメできない。下手をすると君の意識が消えてしまう恐れがある」

「……………」  
「すぐに答えを出さなくてもいい。一生に関わる事だからゆっくり考えて答えを出して」

「……………勇真、さんは」

ルミネアが勇真の胸から顔を上げ、不安そうに、縋るように、潤んだ瞳で彼を見つめた。

「ん？」

「勇真さんは、私が人外になっても一緒に居てくれますか？ 捨てたりしないですか？」

「しないしない。言ったでしょ、俺が捨てられない限り一緒に居るから」

「本当ですか？」

「嘘じゃないから」

「私より可愛くて優しい子が勇真さんに好きです！ って告白してもですか？」

「ありえないから」

「…………じゃあ、私を、お嫁さんにしてくれますか？」

「ルミネアが俺で良いなら、あ、でも結婚可能な年齢になったらね」

「やった！ 勇真さんて何歳ですか？」

「17歳」

「私も15歳だからあと1年……あと1年くらいなら生きれるかな？」

「……え？ 不老長寿の薬か、悪魔になれば寿命を気にしなくて良いと思うけど？」

勇真の問いに、ただでさえ赤かった頬を更に赤く染め、ルミネアは恥ずかしにこう、そうに呟いた。

「いえ、結婚は人間の内にしたかったので……あと、子供も」

「……………」

せつかくの京都観光だが、2日目の観光は中止となった。

なんで中止となったかは……言うまでもあるまい。



## 第7話

勇真7

勇真は思った。周囲の視線が痛い。

理由は当然、隣のルミネアが原因だった。

「どうかしましか勇真さん？」

上機嫌に、幸せそうに、勇真の腕に自分の腕を絡めてルミネアは勇真を見上げた。その姿は恐ろしく可愛いのだが、それが周囲の視線を引き寄せる。

「いや、なんでもないよ」

「ふふ、そうですか」

正直、勇真は恥ずかしくてしかたないので、出来れば、とても残念ではあるが街を歩く際はもう少し、そう、せめて手を繋ぐくらいにして欲しい、と思っているのだが、ルミネアがあまりに幸せそうなので言うに言えない。

そして、その状況を放置していればいつの間にか、勇真は嫉妬の視線の嵐に晒されていた。

その視線は既に常軌を逸したレベルとなっており、勇真の7重展開した対魔術防壁を素通りし、彼にザクザクと刺さっては精神ダメージを与え続けている。

このままでは呪殺されかねない……誰か助けて！

そんな風な事を勇真が考えていると、空気を讀んだのか、悲しげな目で、残念そうに、名残惜しそうに、ルミネアは勇真の腕を解放した。

そして一言。

「……あの、やつぱり、嫌ですよね」

「いや、なにが？」

勇真は離れたルミネアの手を自ら握る、それに、ルミネアは、あつと小さな驚きの声を上げ……すぐに嬉しそうに笑うと勇真の腕を抱きしめた。

呪の視線が3割り増しになったが、知ったことかと勇真はルミネアを伴って京の街を歩き回った。

昨日 “ゴニヨゴニヨ” した結果、勇真とルミネアの仲は急速に深まった。特に今

までは自分を押しさえあまり勇真に甘えていなかったルミネアが完全な甘えん坊と化していた。

勇真の言うことはちゃんと聞く、しかし、隙あらば、まるで幼子が絶対の信頼を置く父親にくつつ付く様に、いつでもどこでも、勇真に腕を絡めたり、抱きついたり、したがるのだ。

まあ、離れてと一言言えばゴネることなく離れる（悲しげに）

今はダメと言えば素直に聞く（寂しげに）

やめてと言えば従う（涙目で）

可愛すぎるでしょ。by 勇真

そんな訳で、あまり目立ちたくない街中でもつい、勇真はそれらの行動を許してしまっていた訳である。

それが、いけなかった。

勇真の視界に黒い霧が映り込む、ヤバイと判断し、咄嗟にルミネアを抱きしめ転移魔法をしようとするが時既に遅く、勇真とルミネアは現実世界とは位相の違う結界内へと飲み込まれてしまった。

「やあ、久しぶりだね」

背後からの声に、勇真は答えずルミネアを抱いて魔法で数十メートルの高さまで飛翔、同時に展開されるのは多種多様の防御魔法陣、常時展開されていたソレとは明らかに違う、戦略核の直撃すら余裕で防ぐ超高密度多重防壁である。

これに加え、魔法で無理のない限界まで身体能力を上げる。

更には探索魔法で周囲を確認、ここが外界と隔離された約半径2kmの人工フィールドとの確認まで行う、そこまでしてようやく勇真は声の方に身体を向けた。

魔法で強化された視界に映るのは見覚えがある白髪の男、更に二メートルはある大男に、黒髪黒メガネの魔術師の様な男……そして、聖なる槍を担ぎ、学生服の上に漢服を着た男だった。

「……どちら様ですか？」

勇真はルミネアだけにさらなる防御魔法を掛けると、魔法で声を大きくして眼下の四人の男に問いかけた。

「はじめまして、俺は曹操、と名乗っているものだ」

四人を代表してか、同じく魔法で声を大きくして、槍持の男——曹操が勇真を見上げ笑顔で言った。曹操はただ槍を担いでいただけなのにまるで隙がない、勇真は警戒心を高めた。

「それで、三国志の曹操さんが俺たちに何か用ですか？」

「いや、なに勧誘だよ、たまたま用があつて京都に来たのだが、ウチのジークフリートが君を見つけてね、是非勧誘したいと言つてきたのさ」

勇真は視線を白髪の男——ジークフリートに向ける。

「やあ、改めて言うけど久しぶりだね、僕のことを覚えているかい？」

「魔剣使いのジークフリート」

「正解、嬉しいね、覚えててくれたとは、嬉しいついでに君の名前を覚えてくれるかい？」

「高橋です」

下手に本名を教えて呪われては堪らない。勇真はナチュラルに嘘の名前を言った。

「そうか、よろしく宮藤勇真」

「……………」

知ってるなら聞くなよ、そう思い、勇真はジークフリートを睨みつけた。

「で、勧誘とはどういう事ですか？ 宗教はお断りですよ」

「去年、言っただろ？ 一緒に英雄になろうって、今日はそのリベンジ、ついでに僕の魔剣達を返してくれると助かるんだけど」

「じゃあ、去年と同じ事を言いますね、俺は英雄になんか興味が無い、他を渡ってくれ、あと魔剣は売ったから返せません」

「……………え？ 冗談かい？」

「そう聞こえますか？」

「……………」

「へっ！ 売られてやんの、まあ、お前が負けんのがわりいんだよ」

呆然しているジークフリートを大男が鼻で笑った。

「……………うるさいよヘラクレス」

「お、やるか？」

勇真を置いてジークフリートとヘラクレスが険悪な雰囲気醸し出す。

「二人とも落ち着け、敵前だぞ」

それを魔術師の男が仲裁した。

「ハッ、ゲオルクは心配性だったの、相手は2人……いや、1人はお荷物みたいだから実質1人だろ、敵になるにしろ俺たちが負けるわけねえだろ」

「いや、この結界に取り込んでからの彼の反応は素晴らしいものがある、あまり油断はしないで行こう、ゲオルク、彼の魔法使いとしての力量はどの程度か分かるか？」

「見たことない術式だが、今、分かっているだけでも相当だぞ、飛翔術、魔術防壁、探索魔法、身体能力強化、魔法隠蔽術式、そしてそれらの発動スピード、どれを取っても凄まじい、特に魔術防壁と身体能力強化は完全にこちらを凌駕している、あと会話に混ぜて呪詛を飛ばしているな、弱いモノだが聞き続けると身体が麻痺していく効果が有るよ。うだ、こちらでレジストしているが、一応気をつけろ」

ゲオルクの言葉にマジかよ！ と自身の身体をペタペタ触るヘラクレス。

そんな状況の中、勇真は苦虫を噛み潰したような顔をした。

こちらの魔法が殆ど全て見抜かれている、特にさり気なく会話に混ぜた呪詛に気付かれレジストされたのがヤバイ、この時点で得意分野の違いはあるだろうが、敵の魔法使いの力量が魔法力を除いて勇真に近いのは確定だったからだ。

その上、このフィールド内で何度か転移魔法を試したが発動しない、いや、正確にはフィールド外に出る転移が使えない状況だった。

つまり退路がない。

「勇真さん」

その声に勇真は抱きしめているルミネアの顔を見る、彼女は不安そうにずっと勇真を見つめていた。

それを見て、仕方がないと勇真は腹をくくった。

「分かりました、仲間になりましたよ」

「分かった、歓迎するよ。取り敢えず君と彼女に爆弾付きの首輪をつけるから魔法障壁を全て解除して降りて来てくれ」

「……おかしいですね、あなた方は仲間になんか危険物をつけるのですか?」

「顔に『暫くしたら裏切ります』と書いてあるからね」

「あれ、俺そんな酷い顔してます? カッコイイってよく言われるんですが(ルミネアに)」

「ハハハ、悪くない顔立ちだよ、まあ、顔に書いてあるうんぬんは冗談、君は一度ジークフリートの勧誘を断ってるからね、ついでに洗脳魔法も効かなそうだから物理的に縛っておきたいだけさ」

「なるほど……はあ、分かりましたよ、あ、所で皆さんは戸籍って持ってます?」



「ん？ 当然持っているが」

「ああ、本当ですか？ うわー面倒くさいなあ」

そう言つて勇真は頭を搔くと、下ろす動作に連動させ何気ない仕草で右手を曹操達に向けた。

「本当、事後処理が面倒くさいなあ」

凄まじい衝撃がフィールド全体を揺らした。

不意打ち気味に勇真が放った重力魔法が曹操達を拘束する。

とはいえ相手は曲がりなりにも英雄を目指すもの達、そう簡単には行かない、いち早く反応したゲオルクが全員が押し潰される前に、魔法と黒い霧で重力波を無効化する。

「ぐう」

だが、魔法の威力にゲオルクは呻く、どうやら技量は近くとも魔法力は隔絶しているらしい。

ならば押し込む、勇真は更なる魔法力を重力魔法に込めようとした、次の瞬間、拘束していた四人の内、ゲオルクを除いた三人が消える。

「ッ！ 転移か！」

瞬時に探索魔法で三人を探す、それと同時に勇真とルミネアを囲み様に曹操、ジークフリート、ヘラクレスが黒い霧を纏って現れ、それぞれ槍を、剣をそして拳を勇真とルミネアに叩き込もうとして来た。

これに対し、勇真も瞬時にルミネアを連れて転移、三人の頭上を取ると、ルミネアを重力魔法で浮かべて両手をフリーに、両掌から怒涛の魔術爆撃を繰り出した。

逃げ場のない広範囲に渡り、毒と治癒阻害の呪詛を込めた多種多様の属性魔法が雨あられと降り注ぐ、一撃もらうだけでも曹操達には致命的だ、いかに人間離れしている人間は人間、毒には弱い。

しかし、この魔法も防がれてしまう。黒い霧が曹操達を覆ったかと思えば、勇真の攻撃を完全にシャットアウト、一撃たりとも当てる事は叶わなかった。

「本当に面倒くさいなあ もう！」

生半可な攻撃では魔法と霧の防御を抜けないと悟った勇真は右掌に炎熱球を作り出すとそこに猛烈な勢いで魔法力を込め始めた。

「ヤバイ！ それを撃たせるなッ！」

ゲオルクが顔を青くして叫ぶ、彼には分かったのだろう、炎熱球に込められた魔法力の強さが、そしてその一撃の常軌を逸した破壊力が。

しかし、分かったところで攻撃を阻止できるかは別、曹操、ヘラクレス、ジークフリートが時間差をつけてゲオルクの転移魔法で勇真を追う、だが、勇真自身も転移で逃げるのだ、魔法完成まで逃げるのは難しくない。

そして何度目かの転移中に魔法は完成、勇真はデタラメに転移し、狙いを乱すと、初めて敵から逃げるのではなく、近づく為に転移を発動した。

転移先は勿論、ゲオルクだ。

理由は今の所、最も面倒なのが彼だから、そしておそらくこのフィールドを作り維持しているのも……故に勇真がゲオルクを狙うのは当然の事である。

だが、その動きと狙いは当然、故に読まれる。

ゲオルクは勇真が至近に転移した瞬間、黒い霧『絶』神滅具『デイメンション・ロスト霧』で盾を作り出しながら転移で回避。先の勇真で分かるように転移合戦は逃げる方が有利、故にこの攻撃は空を切る。

そして、そんな事は当然、勇真も分かっていた。

次の瞬間、空を切った　『炎熱球』　が転移する、場所は勇真の背後、隙について攻撃しようとしたジークフリートとヘラクレスの間である。

「ッ!?!」

「ヤベエッ!?!」

焦った所でもう遅い、ゲオルクが転移で二人を救おうとするが、それを勇真は妨害、魔法力を込めに込めた炎熱球が炸裂した。

鼓膜を破る轟音と共にフィールド内に閃光が瞬いた。

朱炎龍すら焼き殺す、焼滅必至の大魔法、一切合切を焼き尽くし空間すらも歪ませる、絶大威力の大炎撃、そのあまりの熱量に地面は残らず融解した。

そして、この一撃でフィールド内の温度は何処もかしこも2000℃を超える灼熱地獄と化していた。

こんな空間で生きていられる人間は存在しない。

魔法なしで、生きていられる人間など存在しない。

勇真は自身の一撃を魔法障壁で無傷で耐えると、障壁内を魔法で作り出した酸素で満たした。

勇真は視線を右に移す、そこには浮遊する四人、恐ろしい事に、この一撃で四人は全員生きていた。

とは言え、ジークフリートとヘラクレスは絶霧で防ぎきれず転移での回収も遅れた様で大火傷、残り二人は無傷だが、魔法を使えないらしい曹操はゲオルクが作った防御结界から一步も出れず、肝心のゲオルクは結界維持が限界らしい。

つまり、これで。

「終わりだな」

勇真が両手を振るう、すると融解した地面が意志を持ったかのように動き出し、巨大なマグマの津波となって曹操達を防御フィールドごと飲み込んだ。

曹操達を飲み込んだマグマは不自然に宙に浮くと数十メートルの球体となって浮遊し続けている。

それは曹操達を逃さない為のマグマの牢獄だった。

「ルミネア、もうすぐ終わるから、あと少し頑張つてね」

勇真は隣に浮遊するルミネアに優しく話し掛けた。

「……はい、大丈夫です」

そうは言うがルミネアの顔色は今にも死にそうなほど悪い。

勇真はルミネアに自身に掛ける以上の防御魔法を掛けている、故に彼女がこのフィー

ルドにより影響を受けるはずがない。

しかし、だからと言ってこんな灼熱地獄の様な風景は人間には受け入れ難いのだ、それはまた、この地獄を作り出した本人にも言える事。

故に、さっさと終わらせる。

勇真が右手をマグマの牢獄に向かい突き出した。右手に集まるのは天地を焦がす裁きの雷光、先の大炎撃をも上回る、勇真が使う二番目に高い威力の大魔法だった。

「……今日は疲れたから観光は中止だね」

勇真はため息混じりにそう呟くと、右手の雷光の解放した。

## 第8話

決まった、確実に絶対に。

勇真が放った雷撃は雷神のソレに劣るとは言え、直撃すれば魔王だろうと蒸発し、相手でも手傷を負わず、そんな超絶威力の大魔法だった。

故に弱つちい人間が耐えるなんて到底不可能な威力だった。

にも関わらず……。

『ー汝よ、意志を語りて、輝きと化せ』トワルース・イデア 『覇 輝』

完全に無効化させられた、それもアツサリと、マグマの牢獄に届く前に。

「はあ!？」

勇真が驚愕の声を上げる。しかし、そんな勇真を御構いなしに状況は更に進む。

雷光の次に無効化されたのはマグマの牢獄だった。

牢獄は一瞬で冷え固まると、真ん中からヒビ割れ粉碎、中から膨大な聖なる光を放つ

槍を掲げ、曹操が飛び出してきた。

曹操は灼熱地獄などないように障壁も張らずに生身で飛翔、勇真に向かう。

いや、灼熱地獄がないわけではない、ただ、曹操が無効化しているのだ。

曹操が飛び出て数秒としない内に、灼熱地獄は正常な空間へと、人が生身で生存可能な空間へと戻されてしまう。

そんな有り得ない状況に呆然となりそうな勇真、だが。そんな状態になれば致命的だ。彼は必死に冷静さを保つと、強力な魔法を次々と放った。

しかし、その魔法を曹操は光の穂先を巨大化させ、たった一振りでも無効化してしまう。いや、それどころか、僅かに掠った魔法障壁が音もなく砕け散る……それも触れてない部分を含めて全て。

「そんなのアリかよッ！」

全ての魔法障壁を砕かれ丸裸同然となった勇真はルミネアと共に冷え固まった地面に転移、神器『無窮の担い手』を発現させ、圧縮空間倉庫から一本の聖剣を取り出す。

刃渡40cmほどのソレは3本のエクスカリバーから取り出した真のエクスカリバーの破片、それを錬金術にて一つとした、強度のみなら真のエクスカリバーに匹敵する聖短剣だった。

勇真は神器の能力で聖短剣の適切な斬りつけ方、内包された聖なるオーラの引き出し



方、そして刀身に宿る『天閃』『透明』『夢幻』の使用方法を理解すると、ルミネアを後ろに下がらせ、こちらに突っ込んでくる曹操を迎え撃った。

次の瞬間、聖槍と聖剣が火花を散らし嘯みあつた。

連続して起こる剣戟の音がフィールド全土に響き、大気が震え、地が揺れる。

音速を遙かに超過した神速の斬り合いは、勇真が押していた。

魔法で限界まで引き上げた身体能力を神器の力で二重に強化する。当然、その身体能力は圧倒的。

今の勇真は大型トラックを小石のように投げ飛ばし、至近距離から放たれたマシンガンをあくび混じりに回避する。

そしてそんな身体能力に『天閃』を加え更なる加速を実現する。

それは正に人類最速、今の勇真は速度だけならば神話の英雄だろうと上回り、神にすら土をつける。

だが、それなのに勇真は押し切れない。否、押され始めていたッ！

「もう少し接近戦の訓練をした方がいいな」

斬り合いの最中、曹操がそう言った。

彼は大量の汗を流し流しながらも自身の何倍もの速度で動く勇真の攻撃を完全に凌

ぎ、あまつさえ勇真に忠告までして来る。

「……………」

それに答える余裕は勇真にない。

三重の身体強化は圧倒的な力を勇真に与えているが、長時間維持できるモノではない、今の勇真は限界を遥かに超えて酷使される肉体に回復魔法をかけ続けて騙し騙しなんとか動いている状態だ。

言うなれば決死の特攻、残された時間は既に少ない。

どんどんとタイムリミットに近づく中、勇真は必死に打開策を考えていた。

『魔法攻撃は可能か?』

ダメだ、どういう理屈か知らないが遠距離攻撃魔法全般が無効化させられる。

『曹操に対して人質は有効か?』

ダメだ、有効か分からない上、逆にルミネアを人質に取られる。

『曹操を無視して結界維持者の霧使いを殺す』

ダメだ、瞬殺出来るか分からない上、ルミネアを人質に取られる。

『ルミネアを捨てて霧使いを殺し、この場を逃げる』

可能……だが、してたまるかッ！

「う、おおおおおッ!!」

ヤケになった勇真は絶叫を上げて特攻する。

と見せかけ、『透明』『夢幻』を同時使用、自身は透明となり、12の幻影で注意を逸らした瞬間、ここまで温存していた空間転移で曹操の死角へと移動、そして『天閃』を全開とし最速最短距離で聖短剣を胸の中心に突き放つ。

――鮮血が舞った。

「……………」

勇真の攻撃は確かに通った。

「今のは、惜しかった」

ただし、狙いを外され、曹操の片腕を肩口から切り離すに留まったが。

曹操は英雄的な直感で、勇真が特攻などしないと思切ると、勇真同様ここまで温存していた禁手状態の『黄昏の聖槍』トゥルー・ロンギヌスの能力の一つ『馬宝』アツサラタナで自身を転移、直撃を避けたのだ。

「……………」

そして、勇真の攻撃を受けながらもカウンターで彼の鳩尾に聖槍の石突きを深々の食い込ませた。

それが、最後の一刺しとなる。

そう、勇真は酷使した肉体に攻撃を叩き込まれ、ついに限界を迎えてしまったのだ。意識を失う直前、明滅する彼の目に映ったのは泣きながら此方に駆け寄るルミネアの姿だった。

擦れた鎖の音で勇真は目を覚ました。

「……………」

寝起きでも意識を失う前の事は鮮明に覚えている、敗北したのだ、曹操に。

「……………」

勇真は慌てず騒がず、自身の状況を確認する。

「部屋は普通、一般家庭？ 手足は鎖で拘束、しかし、強度は並で壊す事は容易い。だけれどルミネアが近くにいない……人質か？ あと魔法力、身体機能ともに十全、魔法行使能力も問題ない……問題は」

勇真は右手を自分の首元に持っていく、そこに有るのは漆黒の首輪、勇真は戦闘前に曹操が言っていた事を思い出した。

「(宣言通りの首輪か)」

勇真は内心で独り言ちると、苦笑いを浮かべ、首輪の機能を調べ出した。

「(居場所感知に、緊縛効果……うわあ、本当に爆弾付きだよ、しかもご丁寧に障壁突破構造とか、マジで殺しに来てるよ)」

解除出来なくはない。おそらく絶霧で出来たコレはとんでもなく高度で頑丈な首輪だが、時間を掛ければ解除は可能だ。

しかし、ルミネアが人質に取られている、そして、ルミネアにも同じ首輪がさされていたとしたら……。

「(同時進行で解除は無理だな、多分、そういう場合、どちらか一つが外れたらもう片方も爆発するのがスタンダードだし)」

まずは情報収集だ。幸い、ジークフリート、ヘラクレス……そして曹操に掛けた呪いがまだ機能している。

勇真は音もなく振動魔法で手足の鎖を粉々にすると、一度大きく伸びをして部屋か出て行った。

その顔に悪そうな笑みを張り付けて。

「おはようございます、いい朝ですね」

自身が掛けた呪いを辿り、勇真はアツサリと曹操達が居る部屋を見つめる。そのまま彼はノックもしないで扉を開け、イイ笑顔で挨拶、ズカズカと中に入って行った。

「おはよう、宮藤勇真」

勇真に挨拶を返したのは曹操だ、彼は椅子にリラックスした様子で座っている。

ただし、その左腕は肩口から無く、傷口には包帯と呪いの進行を抑える呪符が多数張り付けられているが。

「さて、俺と一緒にいた女の子、ルミネアは何処ですか？」

「ハハハ、挨拶の次がそれか、もう少し余裕を持ったらどうだい？」

「これは失礼、しかし、そういうそちらの方々はあまり余裕がないようですが？」

そう言つて勇真が視線を向けるのは包帯と呪符で全身を覆い、今も複数の少女達から治癒の光を受けているヘラクレスとジークフリートだった。

「ふぎ、けるなよ……クソ野郎ッ！」

「本当に、やって、くれたね」

勇真の言葉にヘラクレスとジークフリートは毒づくが、心なしかその声に力がない、さもありません今も勇真が掛けた……正確には炎熱球に付与されていた毒と治癒不全の呪いが彼等を蝕んでいるのだ。

むしろ、まだ死んでいないどころか、意識があり口が聞ける事が奇跡である。

「いや〜さすが英雄候補、あれを受けて蒸発しないどころか死んですらいらないなんて本当に頑丈です、威力だけじゃなく呪いもタツプリ込めたのですが」

勇真はニコニコと、態と敬語を使って嫌味を言う。

「ツ、ゲオルク、この呪い、本当に解けねえのかよッ」

「無茶を言うな、術式は解析出来たが込められた魔法力が桁外れでな、解呪どころか進行を遅らせるのが精一杯だ」

「じゃあ、曹操ッ！ このクソ野郎をぶっ殺してくれッ！」

怒鳴り散らすヘラクレスに曹操は肩を竦めた。

「おいおい、落ち着けヘラクレス、彼はこれから仲間となる同士だぞ？」

その言葉にヘラクレスとジークフリートが驚愕の目で曹操を睨んだ。

「はあ!? 冗談だろッ！」

「僕が推薦しといてなんだけど、危険過ぎないかい？」

まあ、ジークフリートが推薦したのは仲間になるか敵対して勇真を倒せば自分の魔剣達が帰ってくると思っていたからなのだが。

「曹操の言う通りだ、二人とも落ち着け、それにお前達に掛けられた呪いは術者を害すと効力が増すタイプだ、下手に彼を殺せば、いや、それどころか、彼が少し呪いに力を加えるだけヘラクレス、ジークフリート……お前達二人は確実に死ぬぞ」

「……………」

「……………」

ヘラクレスとジークフリートがふざけた呪い掛けやがつてと、言いたげな視線を勇真に送る。

「おおー！ 仲間と認めてくれたんですか、じゃあ、この首輪外して下さい、あとルミネアも無事に返して下さい」

しかし、勇真はそんな二人の視線を無視して、誠実さの欠片もない雰囲気ですルミネアと首輪の解放を要求していた。

「そうだな、良いよ、ただし、俺たちに掛けた呪いを解呪してからね」

「もちろん解呪しますよ、でもまずはルミネアに合わせて下さい」

「いいだろう、ゲオルク」



「了解」

曹操の言葉にゲオルクが答えると、次の瞬間には黒い霧を纏ってルミネアが部屋に出現した。

「勇真さんッ!」

転移させられたルミネアは勇真を見つけると涙目で駆け寄り抱きついて来た。

「良かったッ! 無事だったんですね!」

「……ああ、俺は大丈夫、ルミネアも無事で本当に良かった」

勇真はルミネアを抱き締め返しながら探索魔法を発動、やはり、勇真と同じ構造の首輪がされているが、それ以外には外傷も洗脳魔法を掛けられた形跡もない。

嬉しくはあるが若干それを訝しむ勇真だった。

「(洗脳魔法くらい掛けられてると思ったけど……まあ、無事に越したことはないか)」

「私、私、勇真さんが死んじやったかと思って、悲しくて、心細くてッ」

「ああ、よしよし、俺は大丈夫、この通りピンピンしてるから」

勇真は心底愛おしそうにルミネアを抱き締めながら優しく頭を撫でる。

「ケツ、ラブコメなんかしてんじやねえよ」

勇真が指をパチンと鳴らす、するとヘラクレスに掛かった呪いが少し強まって……。

「ぐおおおッ!」

少しばかり、ヘラクレスの呪いの進行を進めさせた。

「ラブコメの途中で口挟んでんじゃねえよ」

勇真はルミネア向けの目とは全く違う、養豚場の豚を見る目でヘラクレスを見つめた。

「さて、大事なお姫様は返した訳だか、この呪いを解いてくれるかな」

「ああ、分かった」

そう言つて勇真はルミネアを左腕で守る様に抱き締めながらジークフリートに近づく、彼を治療していた少女達が勇真を睨んだ。

随分と大事にされているなど勇真は内心で苦笑してからジークフリートに手をかざす。

すると、勇真の掌から暖かな治癒の光が走り、室内を照らしだした。

それから僅か数秒し、光が収まるとそこには呪いは勿論、全身に及んでいた火傷と体内の臓器破損まで根ぎり治つた無傷のジークフリートが。

治癒を担当していた少女達が驚愕と恐怖が入り混じつた瞳で勇真を見る。

同じく治癒魔法が使えるから分かつたのだろう、そのあまりのデタラメさが。

「ルミネアに危害を加えなかつたサービスだ。俺が与えた呪い、火傷は勿論、幾つかの古傷つぽいのも治しといた」

ジークフリートは立ち上がると、軽く手足を動かす。

「……驚いたな、本当に古傷も治ってる、これはもう、聖母の微笑もフェニックスの涙も要らないレベルだ」

「やはり彼の魔法は興味深い、未知の魔法を見ると探求意欲が湧くな」

ゲオルクが勇真の魔法を見て目を輝かせる。どうやら彼は術式バカらしい。

そして勇真は、次は俺の番だな、とか思つてそうなヘラクレスを無視してルミネアと共に元のドアの直ぐ前まで戻る。

「さて、この通り呪いは解呪した」

「解呪してねえよッ！」

ヘラクレスが叫んだ。

「あれ？ ああ、ごめんごめん。じゃあ、次はこのルミネアに着けられた首輪を解除してもらいましょうか？」

嫌らしい、悪役染みた笑顔を浮かべ勇真は曹操に要求した。

「良いだろう、だが、今度はこちらが先だ。ヘラクレスを治してやってくれ」

「……分かりました」

勇真はその場で指を鳴らす。ヘラクレスの呪いが解呪された。

「はい、解呪しましたよ」

「怪我也治せよッ!？」

「ええ、もう、俺、魔法力の使い過ぎて倒れそうなんですけど?」

そう言つて勇真は態とらしく頭を押さえフラフラする。

「勇真さん、大丈夫ですか!？」

「うん、大丈夫」

心配そうなルミネアに勇真は笑顔で答えた。

「コイツ、うぜええええッ!!」

ヘラクレスが叫び、直ぐに全身火傷の痛みで跨つた、治癒を担当している少女達が嫌そうにヘラクレスに治療魔法を再開する。

「(あ、ジークフリートと態度が違う……イケメンは得ですね)」

世界の心理と、彼女がいる優越感から勇真はヘラクレスに憐れみの視線を投げ掛けた。

「ゲオルク、ヘラクレスの呪いは解呪されているか?」

「ああ、確かに解呪を確認した」

「そうか……では、*彼*の首輪を解除してくれ」

「了解」

すると、勇真に着けられた首輪が元から煙だった様に消え去った。

しかし、勇真が要求したのは自分のではない。

「……俺はルミネアの首輪を解除して下さいと言ったはずですが？」

「勇真、取引しないか？」

「取引なら今してますが？」

「もつと、別の取引さ、勇真、改めて言うが俺たちの仲間になれ、君程の力の持ち主が仲間になってくれれば俺も心強い」

「ルミネアの首輪を外してくれば良いですよ」

「それは出来ない、まだ君とは信頼関係が築けていないからね、彼女を解放したら君は俺たちの前からアツサリ消えてしまうだろう？」

「……まあ、バレバレだから白状しますが、そうですね。でも、だからと言って俺は貴方達が何をしようとか邪魔はしないつもりですよ、まあ、人間を大量虐殺するとかだったら自分に被害が及ばないレベルで妨害しますが」

「それもなんとなく分かる。君は面倒くさがりに見えるからな」

「その通り、俺は静かに暮らしたい」

「彼女と共にかい？」

「そうです」

「そうか」

「でも、彼女はもうすぐ死ぬだろう？」

「……………」

「ゲオルクに調べさせた。怪我や病気ではない、既に寿命があと数年しかない、どうやらデータラメな魔法能力を持つ君も寿命を延ばす術は持っていないなかつたようだね」

「だったら、どうだと言うんですか？」

殺気を滲ませる勇真に曹操は笑いかけると懐から一個の「果実」を取り出した。

それを見て勇真は目を剥く、それは彼が喉から手が出る程欲しいモノだったからだ。

「さて、これが何か分かるかな？」

曹操は大きな魚を釣った釣り人のような満面の笑みで勇真に語りかける。

「……………仙桃・『蟠桃』ぱんととうバカな、天帝の宝物庫に保管されるレベル宝桃……………なんでそんな物が

ある？」

「ちよつとばかり、天帝にコネがあつてね、出来が悪いのを一個貰つたのさ」

「……………」

「さて、ゲオルク、例の物を」

「了解、はあ、流石にこのレベルのモノはもう作れんぞ」

そう言つて、ゲオルクが取り出したのは黒い首輪だ。先程、勇真がしていたのと同じモノ、違うのはその完成度が桁外れな事だけ。

「勇真、俺の呪いを解呪し、これを着けて仲間になるなら蟠桃は君にあげよう……どうだ  
い？ 仲間になる気になつたかな？」

「……………」

勇真は無言で歯を噛み締めた。

勝ち誇る曹操の笑みに、答えなど言われずとも分かつているだろう？ と返し、首輪を受け取る。

ここに契約はなつた。

かつて、異世界で勇者と謳われた少年が、英雄達の卵の仲間になる事を決めた瞬間  
だった。

## 第9話

「……何をしてるんだ勇真？ ルミネア？」

「俺の名前はランスロットだ、長いならランスと呼べ」

「私はルミネアじゃなくてエレインですよ！ 曹操さん」

「……………」

それは勇真が曹操の仲間になって（買収されて）3日目の事だった。

入って早々、英雄派の幹部となった勇真は、志半ばで倒れた同士達（無理な任務と実験で亡くなりました）が残した（死ぬ前に摘出された）神器、その保管庫から一つの神器を貰って来たのだ。

それは『名剣創造』何てことない有り触れた神器で名前の通り、なんの能力も無いだの硬い剣を創る事ができる『魔剣創造』や『聖剣創造』の下位互換の神器である。

そして、それを応用すれば盾や鎧も作成可能だった。

で、現在、勇真は神器で創り、魔法で強化に強化を重ねた、フルフェイスの黒鉄の騎士甲冑を男女用で合計2体創り出していたのだ。



「……勇真、それは裏切る宣言かな？　でもそれにしたって、なんでランスロット卿なんだ？　無双を誇った完璧な騎士の名を語るには、君は技量不足だと思っただが？」

「勇真と呼ぶな、私はランスロットだ。何故ランスロットかと言うと鎧が黒いからだ」「黒いからですよ曹操さん」

「……そうか、まあ、いい。では何故フルフェイスの鎧を着ている？　身体能力まかせの接近戦も強いのは強いが、君は魔法使いタイプだろ？　防御ならあの異常に硬い魔法障壁で事足りる、違うか？」

「違う、全然足りない。硬い障壁の下に硬い鎧を着ないと不安だ。というか魔法障壁はつい数日前、お前にあっさり砕かれただろ？　……と勇真は嘆いていた。いや、私はランスロットなのだがね」

「……あれはちよつとズル（霸輝）しただけさ、普通だったら俺でも相当手こずるよ……というか、君達いつもと口調も声のトーンも違うくないか？」

「声質は変声魔法で変えている、口調はランスロットだから強気にならねば」「……そうか、でもなんでそこまで？」

「いや、近い将来ここ（英雄派）を出て社会復帰するにあたり元テロリストとか凄い邪魔な肩書きだろ？　俺は一般人だからそういう肩書き要らないんだ……と、勇真は言っ

いる」

それを聞き、曹操が警戒する。

「本当に裏切る気か？」

「冗談だこれは趣味だ……と勇真は言っている」

「そうか」

曹操はランスロットの言い分をアツサリ信じた。流石は現代で英雄なんて危篤なモノを目指す人、変なところで常人とセンスが違う。

「で、今日はこのランスロットに何用で来た？」

「用があるのは勇真に难道だけど」

「残念だが勇真は永遠に留守だ、代わりにこのランスロットが承ろう」

「…… はあ、まあいい。明日、駒王学園で天使、堕天使、悪魔による会談が行われる、そこに禍の団の別派閥、『旧魔王派』が襲撃を掛ける」

「昨日の説明では『真魔王派』じゃなかったか？……と勇真は言っている」

「おっと、正式名称はそれだったな、しかし、旧魔王派の方が言いやすくてね、それに彼等が本当に真の魔王と成れるかはかなり疑問だ」

それを聞き、ランスロットはこう言った。

「うわー、ザ・五十歩百歩だ。俺も英雄派が真の英雄になれるかと思えないんですけど？  
……と勇真は言っている」

ランスロットの態度に曹操は顔を引きつらせるが、なんとか無視して話を続ける。

「その主な襲撃者はカテレア・レヴィアタン、クルゼレイ・アスモデウス、そしてその二人を狙う者がいる……エキドナだ」

「エキドナ？ あのギリシャ神話の？……と勇真は言っている」

「いや、違う、禍の団の最大派閥『魔獣派』のリーダー「魔獣幼帝レオナルド」の神滅具、  
アナイアレクション・メーカ『魔獣創造』その独立亜種禁手、魔獣女王エキドナだ、彼女は旧魔王派の主力を捕食し、力を上げようとしている、君は、ヘラクレスとジークフリートと共にそれを阻止してほしい……そして、こっそり旧魔王の主力を始末しての死体か、最悪でも大きめの肉片を持ち帰ってくれ実験で使う」

「魔獣女王エキドナだってね、大変そうだね　〃ランスロットくん〃　と　〃エレインちゃん〃　は」

「そうですね、　〃勇真さん〃」

とある南の島でパラソルを広げ、勇真とルミネアはのんびりと砂浜で寛いでいた。

「それにしても駒王市は呪われてるのかな？　大丈夫かなあ、今回の件で滅びないと良いんだけど……出来るだけランスロットくんには頑張つて貰うけど話を聞く限りヤバイよね」

「そうですね……商店街の皆さんが心配です」

皆さんには良くしていただいたのですが、とルミネアが若干暗い顔を浮かべる。

「うん、俺も流石に心配だね、魔法で無理やり避難させた方が良いかもね、ランスロットくんにそう指示を出しておくよ」

「はい、すみません、私、何もできなくて、先日も人質になってしまい、勇真さんにご迷惑を」

「ハハ、また言ってるの？　気にしなくて良いって、それに曹操達は死ぬ程面倒くさかったけど、お陰で楽にルミネアの寿命の問題を解決出来た、今では感謝しているくらいだよ」

「いえ、でも、勇真さんは酷いお怪我をしまいました」

「大丈夫だって、アレは99%自己責任、無理な身体強化で負った怪我だからルミネアは気にしなくていい」

「でも」

「はいはい、この話はお終い！ もっと楽しい話をしよう」

「はい……あ、楽しい話じゃないんですが」

「ん、なに？」

「あの、私と勇真さんに着けられた首輪はどうしてあんな簡単に外せたんですか？ 確か、あのゲオルクさんが、『例え、勇真でも君の首輪を外すのに3時間、自身に掛かっている方を外すのには丸一日かかる』って言っていたんですが」

「ああ、アレね、確かにゲオルクの読みは正確だね、その通り、魔法だけで解除しようと思っただけならそれくらい掛かった、でもさ、首輪の能力に指定条件を破ると爆発する機能がついてたんだよ、これは知ってる？」

「あ、はい、聞きました」

「これがね、突破口。要するにあの首輪は爆弾だった訳だ。で、前に言ったよね俺の神器の能力」

「……あつ！ 武器を操る能力ですか？」

「そういう事、俺の神器は武器ならなんでも使い手になれる、使い方が分かる。後は楽

勝、首輪を外して俺が貰ったばかりのもう一つの神器で鎧を二個創ります、そしたらそれを「魔道人形」変えてそいつに首輪を装着、魔道人形を身代わりに転移で逃げた訳だ、首輪が有るから大丈夫とタカを括ったね、妨害されずにあっさり転移で逃げれたよ」「なるほど、そうだったんですか」

ルミネアが関心した様に勇真を見る、その視線がこそばゆく、彼は視線をルミネアから逸らした。

「まあ、魔道人形のランスロットくんには契約で俺の九割五分の魔法力と転移を除いた殆ど全ての得意な属性を与えてるからね、契約を破棄するかランスロットくんが壊れるまでは、俺はちよつと強い上級悪魔くらいの力しか使えないんだけど、正直、今襲われるとかなりやバイ」

「それだけ強ければ大丈夫ですよ！ それにここなら誰も襲って来ません」

「そうだね、遠隔操作機能も切ったし、これで完全に此方の居場所は分からない筈だ、あとは最後に命令した通りにランスロットくんが動いてくれるのを願うだけだよ」

はあ、疲れた。そう呟いて勇真は静かに目を閉じるのだった。



## 第10話

予想通りで予定通りに三すくみのトップ会談は和平反対の勢力に襲われた。

まあ、当然であろう、千年単位で争っていた者が急に手を取り合おうとすればこうなる、そう、過激な行動を起こしてでも止めたい者達はいくらでも出て来る。

何故なら手を取り合おうとする種族が天使、墮天使、悪魔とことごとく長命種族なのだから。当事者であり戦争で敵対者に家族を殺された者、友を殺された者、恋人を殺された者、全てを失った者、それが山のように生き残っているのだから。

何故、仇と手を取り合わねばならない？ そう思つて当然なのだから。

そして、そんな者達を利用し、従え、力を得た旧魔王派は今日、三すくみのトップ達を抹殺し、冥界をその手に収めようとしていたのだ。

「お兄さま、私が責任を持ってギヤスパーを助け出しますわー！」

リアスはその美しい紅髪を揺らし、兄である魔王サーゼクスに志願した。



現在、駒王学園を中心に時間が止まった空間が展開されている、それはギヤスパークが敵の手に落ちたからであった。

これはギヤスパーク彼の神器『フォービトウン・パロール・ピュー停止世界の邪眼』を襲撃者が強制的に禁手させる事によつて作られたモノ、つまりは眷属を敵に利用されたりアスの落ち度である。

それゆえ彼女が責任を持つてギヤスパークを助けると言っているのだ。

まあ、情が厚い彼女の事だ、実際の所、そんな事は関係なく大事な眷属を助けたいだけかも知れない。

それはイツセーも同じだった。彼は大事な後輩を助ける為、大事な主を守る為、リアス同様救出作戦に志願する。

そして二人は魔王サーゼクスの力を借り、部室にあるリアスの戦車の駒とキヤスリングする事で、直接、ギヤスパークの元に取り込もうとしたのだ。

まあ、それは失敗するのだが。

「あ、あの、何をしていますか?」

ダンボールが……否、ダンボールに隠れたギヤスパークが恐る恐る問い掛けた。

「調べている」

ギヤスパーに問い掛けられたのは二メートルを超える大男だった。彼は宣言通り、ごそこそと、旧校舎の部室の机を調べていた。

それは今から数分前の事だった、ギヤスパーと小猫がいきなり現れたローブ姿の魔女たちに拘束されてしまい、ギヤスパーが神器を強制的に禁手状態にさせられてから少しした時、ふらつと「ヘラクレスと名乗る大男」が現れると何をしたのか、魔女達までギヤスパーの能力に晒され停止してしまったのだ。

彼は拘束されていたギヤスパーを解放し、それからは一心不乱に何かを探している様だった。

ちなみに、小猫もギヤスパーの能力でパンツ丸出しの逆さ吊りで停止させられていたりするが劣情を抱いたりしない大男は余裕を持ってスルーした。

「だ、だから、何をしているんですか?」

「調べている」

「そこはリアス部長の机なんですが!?!」

「俺はヘラクレスだ、問題ない」

「他人の家に忍び込んでモノを盗んでいいのはゲームの中の勇者だけですよお!」

「俺は勇者だ、問題ない」

「ああ、ダメだあ、会話が通じないよお、この人怖いよお、小猫ちゃん僕はどうしたら!」  
ギヤスパーはダンボールから上半身を出し、必死に小猫を揺すって起こそうとする……まあ、揺すって治る時間停止なんて聞いた事がないが。

そんな事をギヤスパーがしている内に、大男は一つの、宝石箱の様なモノを見つけ出した。

彼が箱を持つと電流が流れた。盗難防止機能だろう。しかし、それも大男が箱にデコピンしただけでなくなってしまう。

そして、大男は宝石箱の蓋を開いた。

「あつた」

「ああッ! それは部長の未使用の悪魔の駒ッ!」

「ラン……ヘラクレスは悪魔の駒(騎士と戦車)を手に入れた」

そう言つて大男は無造作に空間に穴を開けるとにポイと悪魔の駒を放り込んだ。戦車の駒が恨めしそうな光を放つたが、もちろん無視、そんな恨めしそうな光も空間が閉じれば見えなくなった。

そして大男は無言で部屋を出て行くこうとする。

「ああ! ダメですう、行かせません! 返してくださいッ! それは部長の大切なモノなんですッ!!」

それを、勇気を出してダンボールから完全に飛び出したギヤスパーが両手を広げて通せんぼする。

つい数日前まで、いや、今ですら半対人恐怖で引き籠もり彼からすればそれほとんどもなく勇気が要る偉業だった、きつと、眷属の誰かが見ていれば心の底から褒め讃えたであろう行動だった。

しかし、そんな彼の勇気も虚しく、大男が指を鳴らすと金縛りにあつた様にギヤスパーは動けなくなつてしまった。

で、大男はギヤスパーの横を悠々と通り、部屋から出る直前、振り返ると……。「悪魔その駒れを捨てるなんてとんでもない」

と、言つて無駄にカツコ良く親指を立て、ギヤスパーの健闘を讃え姿を消した。「捨てるんじゃないやなくて返して下さいいいいッ!!」

ギヤスパーの悲しい叫びが旧校舎に木霊した。

これが、後々までリアス眷属を苦しめる悲しい敗北の1ページである。

「勇真、どこに行つていたんだい?」

「避難誘導だ。それと私は勇真ではない、へ……ランスロットだ」

「またかい？」

「ケツ、遅えんだよ」

「遅れてごめん、だけど、俺を気にせず先に行つてやられてくれても良かったのに……と勇真はきつと言う」

「うぜえ……で、どうするよ、曹操は旧魔王派どもの死体を持つて来いつてたが、まず何奴から殺る？」

「他人に意見を聞く前に、まず自分で考えて意見を言つたらどうだ……と勇真はきつと自分を棚上げにして言う」

「コイツ、マジうぜえッ！ てか、なんだよその口調！ ふざけてんのか!？」

「ふざけていない、ランスロットにふざける機能はついていない。だがきつと勇真ならば……はあ、これだから自称ヘラクレスは、と溜息を吐く可能性がある」

「やつぱり、ふざけてるじゃねえか!？ あと自称じゃねえよッ！ 自称はお前だろッ！」  
「ランスロットは自称ではない。私の本名、生まれた時に与えられた真の名前だ」

「まさか、勇真はランスロット卿の魂を引き継いでいるのかい？」

「魂を引き継ぐ？ 自称ヘラクレスじゃないんだから妄想も大概にしなよ、と勇真は思うが、面倒くさい事になりそうだから口にしな、とランスロットは思う」

「口に出してるじゃねえかッ！」

「勇真は口に出していない、私はランスロット」

「うぜえええええッ！ コイツぶっ殺してええッ!!」

「落ち着け、自称ヘラクレス」

「テメエも乗ってんじゃねえよ!?!」

「いや、実は前から僕も魂を引き継ぐの意味が分からなくて……自称ヘラクレスはヘラクレスの血を引いてないんだろう？ 前世の記憶もないって言ってたし、なんでヘラクレスを名乗ってるんだい？」

「記憶と血を継いでないだけだ！ 俺はヘラの栄光と呼ばれたヘラクレスの黄金の魂を引き継いでるんだよッ！」

「黄金の魂（笑）」

「黄金の魂（笑）」

「コイツら殺してエエエエッ!!」

「さて、茶番はもう充分だろうから、本題に入ろうか」

そう言つて、ランスロットが両掌を胸の前でパンと叩く、すると、唐突にヘラクレスとジークフリートが地面に倒れ意識を失つた。

「君達は学ばないね、まるで何度言われても夏休みの宿題をやつて来ない小学生の様だよ、以前ゲオルクが忠告した、会話を呪詛を混ぜる技術を忘れてたの？ それとも首輪で敵対出来ないと思つてた？ でも、例え首輪が機能していたとしても、今は旧魔王

派の結界の中、ゲオルクもこちらの行動が分からないんだよ？ 仲間になつたばかりの新入りをもう少し警戒してもいいんじゃないかな？……と、私は、そして多分勇真も思う」

そう言つてランスロットは倒れたヘラクレスの背中に触ると、英雄派で知つた儀式で手早く神器を取り出し、その身に取り込む。そして用無しとなつた彼の心臓を魔法で強化し、治癒不能の呪詛を込めた黒鉄の剣突き刺さし、アツサリ絶命させた。

次にランスロットは倒れたジークフリートの背中に手を乗せヘラクレス同様神器を取り出す。しかし、今度はその身に取り込む事はせずに、ポイントと地面に投げ捨てた。捨てた神器は明滅していたが、数秒もすれば空気に溶けるようにこの場から消え去つた。

「ジークフリート、君はどうも魔術方面を軽視して警戒を怠る悪い癖がある。けれど、そ

の剣の技量は素晴らしい、そう、技術だけなら君は私の “中の人” に相応しい」

すると、ガシヤンという音を立ててランスロットの全面が大きく開く、それはまるで怪物が大口を開けている様で、人間に本能的な恐怖を呼び覚ます。

まあ、そんな事はどうでもいいと、ランスロットは捕食する様にジークフリートに覆いかぶさった。

そして、十数秒後。

「さて、名前を変えなければ、ランスロット+ジークフリート……ランスリート？ ジークロット？ うむ、何か語呂が悪いな、着てるのはジークフリートだからジークフリートで良いか」

そこには微妙に型と大きさが違う、新たな黒騎士が一人。

彼はマイペースに独り言を呟くと、空間圧縮倉庫から “魔帝剣グラム” を取り出した。

「男はやっぱり一刀流、二刀流も三刀流も六刀流も邪道、剣は最強の一本さえあれば事足りる」

それを聞いて、魔帝剣グラムが嬉しそうな波動を周囲に走らせる。



そして、ラン……ジークフリートはグラムを調子を確かめる様に数回振るうと、自然な動作でいつの間にか作られていた黒鉄の鞆にグラムを仕舞った。

「ふむ、いい感じだ身体に馴染む、いや、鎧に馴染むなあ、あ、あ、あ……初めまして、僕は英雄シグルドの末裔、ジーク。知り合いは『ジークフリート』と、呼ぶけど、ま、好きに呼んでくれかまわないよ」

そう、独り言の様に、誰かに、あるいは世界に自己紹介をすると、ジークフリートはのんびり、激戦区へと足を運ぶのだった。

## 第11話

和平会議への旧魔王派襲撃事件は佳境へと入っていた。

ついに、その主犯格、カテレア・レヴィアタンとクルゼレイ・アスモデウス、シャルバ・ベルゼブブ、そして彼 旧魔王派と三すくみトップを捕食しようとエキドナが現れ、それぞれセラフォル、サーゼクス、ミカエル、アザゼルと戦闘になっていたのだ。

そして、その一方で。

「ぐはあ!？」

「これが俺のライバルか？ ハハハハ！ 困んな、弱いよ弱過ぎる!」

二天龍、墮天使を裏切った白龍皇ヴァーリと赤龍帝イツセーの激突も起こっていた。そして、その激突は戦いとは呼べない一方的な蹂躪劇となってしまうている。

アザゼルに与えられた腕輪を使いイツセーは一時的に禁手へと至り、ブリストッド・ギア・スケイルメイル『赤龍帝の鎧』を纏って戦っていた。

しかし、相手のヴァーリは禁手を使っていない、いや、それどころか神器を全く発動させずにイツセーを圧倒していたのだ。

「どうした、本当にその程度なのか？ 兵藤一誠、君の評価を改めよう、以前俺はキミを不完全な鎧込みで世界で千々五百の間と言ったがこれでは一万も怪しいところだ、はあ、俺のライバルなんだからもう少しは強いと思ったのだが」

「く、うるせえ、俺はライバルなんて興味ないっての！」

「そうか、だが、俺にはあつたんだよ、まあ、もうまるで興味がなくなつてしまつたが」  
そう言つてヴァーリはイツセーの右ストレートのスウエーバックで躲すとイツセーの脇腹に痛烈な回し蹴りを叩き込んだ。

「がはっ」

魔力がたつぷり乗つた強力な蹴りに鎧の一部が碎け散る。蹴りの勢いでイツセーは吐血しながら地面へと叩きつけられた。

「イツセー!？」

そんなイツセーにリアスが悲鳴を上げて駆け寄る、それをつまらなそうに一瞥するとヴァーリは右手を倒れたイツセーとそれを抱き締めるリアスへと向けた。

「さて、この程度の実力、才能ではいくら待つても強くはなれないだろう、という事で、俺は次の赤龍帝に期待するよ」

ヴァーリの右手にとんでもなく強大な魔力が収束する。その魔力はイツセーの全魔力を万倍しても到底太刀打ち出来ないほど強大だ。そして、この場でそれに対処出来る

味方は全員戦闘中……ようするに詰みである。

「さよなら兵藤一誠、来世ではもつと強く生まれるといい」

リアスが目を閉じ、イツセーが無意味と理解しつつもリアスの盾になろうと前に出る。

そしてヴァーリの右手から強大な魔力砲が放たれ、その魔力砲は唐突に横合いから来た更なる威力の攻撃に消し飛ばされた。

「危ないところだったね」

そうやって現れたのは白髪に黒い騎士甲冑を纏った優男だった。

「あ、あんたが助けてくれたのか？」

「そうだけど気にしなくていいよ、当然の事だからね、あと僕はジーク、知り合いは『ジークフリート』とか『魔帝ジーク』と呼んでいるけど、ま、好きに呼んでくれてかまわないよ」

そう、優男ージークフリートは多くの女性を魅了しそうな爽やかな笑みでイツセーとリアスに笑いかけた。

「ハハハハ、乱入者か？ いいね強い魔の波動を感じる、キミと戦うのは面白そうだ！」  
イツセーへのトドメを邪魔されたにも関わらずヴァーリの口調は楽しげだ。おそら

く新たな強敵の予感に子供の様にワクワクしているのだろう。

「僕はキミが引いてくれるなら戦う気はないよ」

「残念だったな、俺は引くつもりはない」

ヴァーリの言葉にジークフリートが肩を竦める。そのジークフリートの姿には全くと言って良いほど緊張感が感じられなかった。

まるで自分が負ける筈がないと思っっているような、あるいは自分の命などどうでも良いと思っっているそんな態度であった。

『ヴァーリ、奴の右手の剣には気をつける、あれは魔帝剣グラム、最強の魔剣にして最悪の龍殺しの一つだ、まともに喰らえば一太刀だけで死にかねんぞ』

そこで神器に封じられた白き龍アルピオンがヴァーリに忠告を入れる。

「なりほどッ、アレが有名な魔帝剣か、直接見るのは初めてだ」

ヴァーリは嬉しそうに笑うと背中に白龍皇の翼を展開させた。とても致命的な武器が敵の手にあると聞いた者の反応ではない、まるで新しいオモチャを貰った子供の様な反応である。

「魔帝剣グラムが相手なら不足はないだろう、見た感じ使い手も一流だしねー」  
バランス・ブレイク  
 禁手化

『V a n i s h i n g D r a g o n B a l a n c e B r e a k e r !! ? !! ? !!』

？」

閃光が辺りを照らし、次の瞬間にはヴァーリは白銀鎧に包まれていた。それを見たイツセーは血の気が引く感覚を覚えた。

先程自分が遊ばれていた時ですら強大極まりないオーラを纏っていたヴァーリだが、鎧を纏った彼はその比ではない。明らかに桁が一つ、あるいは二つ違う強さを持っている、そう素人に近いイツセーにも分かった。

にも関わらず。

「ほう、これは凄い」

ジークフリートは鎧を纏ったヴァーリを見て平然とそんな感想を口にした。

その顔に焦りは無い、剣を構えてすらいない。自然体でありながらまるで隙が見出せない佇まい、否応にも分かってしまう、その実力があのヴァーリにすら匹敵しているのだと。

そしてイツセーが分かった事をヴァーリが分からない筈がない。彼は兜の奥で獰猛な笑みを浮かべると一瞬にしてジークフリートに接近した。

光と見紛う超速、その速度にイツセーもリアスもヴァーリの影すら追うことが出来なかった。

だが、ジークフリートはその動きを普通に捉え反応する。

ジークフリートは半身を引くとヴァーリの突撃からの右ストレートをグラムの斬り上げで迎撃する。

右腕を斬り落とさんと迫るグラムにヴァーリは尋常じゃない反射神経で対応、右ストレートを途中で止める、そしてグラムが空を切った瞬間再び放たれるストレート、それをジークフリートはグラムを持たない左手で難なく驚掴みにして止めてしまった。

ジークフリートに握られた手首の鎧が僅かに歪む、人間とは到底思えない常軌を逸した腕力と握力、そして発動させた筈の半減の能力が弾かれた。それに驚愕しヴァーリは一瞬動きを止めてしまう。

そこに、ジークフリートの斬り下ろしが襲い掛かった。片手を握られて逃げられないヴァーリは咄嗟に左手からの至近距離で魔力砲を放つ。

溜めなしのノータイムながら先程以上の威力の攻撃、ヴァーリとジークフリートの間で凄まじい爆発が巻き起こる。

爆発によって二人の距離が離れた。

「クッ」

この行動でなんとか致命の一撃を貰わずに凌いだヴァーリ、しかし、彼の鎧は掠った魔帝剣で大きく破損、身体に刃が触れてもいないのにそのオーラだけで強大な魔力で守られたヴァーリに確かなダメージを与えていた。

だが、この攻防がヴァーリの闘争心に火をつける。

「フツ、面白いッ！」

ヴァーリは兜の奥で獰猛に笑うと一瞬にして鎧を再構成、新品同様のソレに戻すと超速で飛翔し更に距離を取る。

集中心が増し正真正銘本気となったヴァーリは今だ、もうもうと煙が立ち込める爆心地を睨みつけた。

あの一撃で敵が死んだ、などとヴァーリは欠片も思っていない。そしてヴァーリの予想は正しかった。

煙の中からのんびりとジークフリートが姿を現わす、その姿にダメージは確認できない、鎧の破損すらない完全な無傷。それを見てヴァーリは更に口の端を吊り上げた。

「危ないな、至近距離で魔力砲とか自分も巻き込むよ？　もう少し回避に余裕を持ったらどうだい？」

そう軽く冗談を飛ばすとジークフリートは虚空からフルフェイスの兜を取り出し自分に装着する。

「ああでもしなければ俺は今頃真つ二つだっただろう？」

「僕としては余裕を持って真つ二つにされてくれれば嬉しかったんだけどね」

『ヴァーリ、あまり奴と会話するな、奴が口を開くたびに何かしらの呪いが飛んできて



いる効力は不明だが、良いものではないのは確かだ』

「ツ!? 意外とキミはセコいんだな」

「失礼だな、戦術と言ってくれないかい？ むしろこんなのを喰らう方が間抜けなのさ」  
つまりキミは間抜けだ。そう言つてジークフリートはヴァーリを嘲笑つた。

「言つてくれるツ!」

その挑発にヴァーリの顔が引き攣つた。ヴァーリは挑発をよくするが、された事は殆どない、当たり前だ、誰が白龍皇、それも歴代最高の彼に挑発などするだろうか？

だが、それはつまり挑発に慣れていないと言うこと、その時、ヴァーリは集中力が低下し、若干冷静さを欠いていた。

「まあ、敵が間抜けなのは僕としては助かるんだけどね」

そう言つてジークフリートは一步踏み出し……石に躓いて倒れこんだ。

「は?」

強敵の突然の転倒に、ヴァーリは一瞬、呆然となる。

そんな状態になつたヴァーリに……。

『避けるヴァーリイイツ!! 後ろだツ!!』

危機感を孕んだアルビオンの叫びが飛んだ。

相棒の忠告に無意識で動いたヴァーリ、それが彼の命を救った。

背後から放たれた剣閃にヴァーリの右手が宙を舞う。

ヴァーリは右手の付け根から焼き鏝を押しつけられたような激痛を感じた。

「ーッツツ?!」

「外したか、良い相棒だね」

呪詛をたつぷりと込めてジークフリートはヴァーリに笑いかけた。

『マズイツ！ ヴァーリ、距離を取って体制を立て直せ！』

「させないよ」

超速で距離を取ろうとするヴァーリ、それにジークフリートは超速の飛翔術で追い縋りトドメを刺す為、剣を振るう。

しかし、飛翔速度は若干ヴァーリの方が速い、ジークフリートの剣閃は空を斬りトドメとはならなかった。

「残念」

ジークフリートは大して惜しくもなさそうに眩くとヴァーリを追うのを諦める。代わりに斬り落とされ地面に転がったヴァーリの腕を千切りの様に切り刻み、腕の再生を不可能とした。

「貴様ツ!!」

「はは、そう怒るなよ、大事なら早めに取りに来れば良かったら？」

「クツ『我、目覚めるは、覇の理にー』」

『待て、ヴァーリッ！　いくらお前でもその怪我と精神状態で『覇龍』を使うのは危険だッ!』

そんな二人のやり取りを隙と見たジークフリートは眼前に三つの魔法陣を作り出し、そこを通過する軌道で右手に持った黒鉄の剣を全力でヴァーリに投げつけた。

超速で投擲された剣は魔法陣を通過すると更なる加速を得て音速の数十倍という高位の人外でも知覚困難な超々高速に達する。

そのまま黒い魔弾と化した剣がヴァーリの胸の中心に直撃、彼の上半身を木っ端微塵に吹き飛ばした。

## 第12話

少しもつたいなかった、とジークフリートはヴァーリの下半身に残った白銀の鎧が消えるのを見て思った。

神滅具『白龍皇の光翼』

言わずと知れた最強格の一つに数えられる神器だ。

最大攻防力という点に置いては『赤龍帝の籠手』劣る（宿主のスペックが互角の場合）も決まれば敵の能力を半減させ、その半減した力を許容量が許す限り自分に上乘せ可能という反則的な能力を持った超兵器である。

一度でも決まれば大抵の相手はその時点で詰む、そんな必殺に等しい能力はジークフリートをして脅威と言う他なかったのだ。

そう、だから勝負を急いだ。

一応半減能力は障壁で無効化可能だった。しかし、100%無効化出来る訳ではない。

おそらく確率的に十回に一度は喰らう、そんな危険な技だったのだ。

しかし、惜しい、もし宿主のスペックがもつと低ければ、間違いなく捕縛し奪っていた。だが、残念な事にこの宿主が滅法強く、下手を打てばあっさり滅ぼされかねない程の強敵だった。

あの短い攻防の間だけで、いくつかのスペックでジークフリートはヴァーリに負けていたのが分かったのだ、むしろ確実に勝っていたのは魔法力だけである。

これには感情が薄いジークフリートも驚いた。

そこそこ良い運動神経の勇真とは違う、ジークフリートは素の時点で人間離れした身体能力を持つ生粋の剣士だ。その彼の身体能力を魔法で限界まで強化したにも関わらず僅かとはいえヴァーリに劣っていたのだ。

こんな強敵を生かして捕縛など出来ようはずがない、故に、彼は全力で相手の隙を作り、油断を誘い、速攻で勝負を決めた。

その判断を間違いとは思わない、しかし、やっぱり……。

「やっぱり、惜しかったな」

そう、ジークフリートは呟く、すると地面に転がっていたグラムが恨めしそうな波動を放った。

グラムはヴァーリがフェイクの鎧を本物のジークフリートだと錯覚する様にあえてそちらに持たせていたのだ。

で、ヴァーリの隙を作る為に傀儡の鎧を盛大に転ばせた結果、グラムも地面を転がり土まみれとなってしまった訳である。

グラムの波動からジークフリートにはグラムがその点について文句を言っているように感じた。

「ごめんごめん」

ジークフリートは素直に謝るとその機嫌を直す為、未だ不機嫌な波動を放つグラムを魔法で徹底的に磨いていくのだった。

さて、後片付けをしよう、手入れを終えグラムを仕舞ったジークフリートがそう思った時、月をバックに一人の青年がヴァーリ（の残骸）のすぐ側に降り立った。

「ヴァーリ、迎えにきたぜい」

その青年は三国志の武将が着るような鎧を纏い片手に赤い長棍を持っている。

ヴァーリの仲間、つまりテロリストらしいが、まあ、とにかくご苦労な事だと、ジークフリートは思った。

「……おかしいな、確かにここからヴァーリの気配がしてたはずなんだが、おーいヴァーリ、何処だよお！　おーい！……あれ？　マジでいねえ!?　あくおい、あんた何か知らねえか？」

「……………」

ジークフリートは無言で青年の少し後ろに転がる二本の足を指差した。

「……………あくまさかとは思うけど、これ、ヴァーリの？」

ジークフリートは無言で頷く。

「……………え、マジでえ!?　いやいやいや、お前、ヴァーリつて一応あれでも史上最強の白龍皇だったんだけどお！　何、あんたがやったの!?!」

それに対しジークフリートは少し離れた、斜め後方にいるイツセーを指差した。

それを見て青年は目の色を変える、ボロボロの鎧を纏い、美女に支えられるイツセーの姿はたった今、激戦を制しましたという雰囲気がありありと漂っていたのだ。

少なくとも無傷のジークフリートよりは戦ったのがイツセーだと言った方が説得力がある。

いや、まあ、実際戦ったんだけど。

「……………なるほどね、今代の赤龍帝は超優秀だった訳か、まさかヴァーリが死ぬとはなあ

……………はあ、しゃあない、勝者の赤龍帝に挨拶したら帰るか」

そう言つて自身に背を向けイツセーへと歩いていく青年。

なに考えてるんだコイツ、ジークフリートそう思った。

彼は限界まで隠蔽術式を用い、また加速用の魔法陣を形成すると、新たに作り出した黒鉄の剣を静かにかつ全力で青年の背に投げつけた。

そして音速の数十倍の魔弾が青年の背に直撃、名も知らぬ青年の上半身はヴァーリ同様に消し飛んだ。

「……はあ、戦場で何してるんだか」

強そうなのにあっさり死んだ青年にジークフリートは溜息を吐くと彼は惨殺現場を近距離で見せられ、顔を引き攣らせているイツセーとリアスにゆっくりと歩み寄るのだった。

「つまり、君は禍の団の英雄派に所属していたのだね」

「はい、そうなります」



それぞれの戦いが終わり、会談も結果的に和平で纏まると、直ぐに襲撃時に現れたジークフリートの事情聴取に移ることになった。

ジークフリートは去年、曹操達に襲われ無理矢理従わされていたと、供述、信用を得る為に、自身が知りうる限りの情報を嘘も交えてサーゼクス達、三勢力のトップに報告した。

「英雄派を仕切る男は曹操と言います、彼は神滅具『黄昏の聖槍』トゥルー・ロンギヌス所持者で既に禁手化に至っている極めて強力な使い手です」

「英雄派の構成員は、はぐれエクソシスト数百人とはぐれ魔法使い数十人、更に誘拐して洗脳した一般家庭の神器所持者数百人、そしてその幹部にはゲオルク、ヘラクレス、そして無理矢理従わされていた僕の三人が居ました」

「ゲオルクは極めて高位の魔法使いです、僕が使っている魔法も元々は彼が作り出したオリジナル魔法です、その上、彼は神滅具『絶霧』ディメンション・ロストの使い手であり、彼も曹操同様に禁手化に至っている強敵です」

「ヘラクレスは名前負けした、ただの大男です。多少、魔法が使えますが、曹操、ゲオルクに比べれば大したことない小物です。でも、一応攻撃力と防御力はそこそこあるので注意して下さい」

「ゲオルクは悪魔の駒を集めています、彼はそれを複数用いて強大なキメラを多数作る

うと目論んでいるようです、悪魔の駒の回収は主にヘラクレスがやっています、なのであまり数は集まっていないようです」

「曹操は名目上は『人間のままだどこまでやれるか試してみたくなった、英雄になる為に禍の団に入った』と言っていますが、彼の本当の目的は全くの別です。まあ、英雄になる為にテロリストになったとか言われても説得力が全くありませんが、一応はそれが名目上の目的です」

「曹操の真の目的は人外全ての根絶、彼は無限の龍神の力を使いこの世全ての人外を排除するつもりです、そして今、ゲオルクと共に無限の龍神から力を奪い取る為、ハーデスと契約を交わし最強の龍殺しサマエルを解き放とうとしています、当たり前ですがハーデスはこの曹操の真の目的を知らないようです」

「……なるほど、曹操とはかなり危険な男なんだね」

「はい、その高い戦闘力もさることながら平気で人質を取ったり、その人質で人体実験を行ったり、結んだ約束を自分の都合で破る卑劣な男です、奴のせいで一体どれだけの罪のない人間が殺されたか……しかも、奴はそれだけの事をしているのにまるで罪悪感を抱いていないのです！ 『殺した人数？ 千から先は覚えてないなあ』という言葉を僕

は今でも忘れられませんッ!!」

ジークフリートはいかに曹操が卑劣かを熱心に語った、もう、名誉棄損で曹操が訴えるレベルで語った。

ジークフリートが語る曹操のあまりの悪逆非道な行動の数々に話を聞いていた大半の者達が顔を歪め曹操許すまじたいった雰囲気になっている。

これを曹操が見ていたら涙目である。しかも、微妙に嘘とは言い切れない事を多数混ぜるのが嫌らしい。

まあ、もちろん少数だがジークフリートを胡散臭い目で見てる者もいる。

墮天使総督アザゼルもその一人だった。

アザゼルは不機嫌そうにジークフリートを睨みつけると、彼を問い詰め始めた。

「嘘くせえな、お前、あのヴァーリに無傷で勝ったんだろ? 無理矢理従わされていたと言ったが、去年の襲撃の時点で返り討ちに出来なかったのか?」

ヴァーリと口にした際、アザゼルは僅かに悲しげな表情をした、裏切られたとはいえ、ヴァーリはアザゼルの養子の様なものだ。

自業自得とはいええ下半身だけとなった息子を見れば殺した相手に怒りを感じるのは自然な事である。

それが分かっている為かジークフリートはアザゼルの態度をとくに咎めはしなかった。まあ、それ以前にアザゼルの『嘘くせえな』が大当たりなので何も言わない可能性もあるのだが。

「無理でした。襲撃は曹操とゲオルクの二人行われました。僕も禁手化した上位神滅具の使い手二人を同時に相手するのは不可能です。……いや、今なら辛うじて可能かもしれませんが、去年の僕はそこまでの力を持っていなかったのです」

これは嘘ではない、純然たる事実である。

そしてその事に疑問を持っていたミカエルが静観を止め、ジークフリートに質問した。

「確かに、戦士ジークは教会のエクソシストの中でもトップクラスの實力者でした、しかし、申し訳ありませんが、貴方が無傷で白龍皇を倒したと聞いた時、私は信じられませんでした、あの白龍皇はそれだけ強かった、私を知る貴方では確実に勝てないと断言してもいいほどに……一体どうやってそれ程の力を」

「ゲオルクの実験です、彼は潜在能力を限界以上に引き出す研究もしていました、彼は『オーフィスの蛇』を触媒としそれに成功します。まあ、最もこの施術をされた者は著しく寿命を消耗してしまい一年も生きられなくなってしまうのですが」

「ーッ!? それでは貴方はー!」

「はい、持って半年、早ければ1ヶ月の命です」

それを聞き、ミカエルが痛ましげな顔をした。

「ミカエル様、そんな顔をしないでください。大丈夫です。僕も短命で終わるのは嫌なので、申し訳ないのですが悪魔になろうと思ってます。それに元々、魔剣使いという事で教会からは異端視されてましたからね」

これも事実である。『魔剣創造』が異端の神器とされているのに伝説の魔剣が異端視されない筈がない、むしろ、今までジークフリートが異端の烙印を押されなかった事の方が異常なのだ。

それだけジークフリートの実力は高かった。ただ、やはり待遇は非常に悪かったと言わざるを得ない。

ジークフリートが禍の団に入った原因もそれである。自分より遥かに劣るゼノヴィアやイリナを聖剣使いだというだけで優遇する教会が許せなかったのだ。

「……そうですか、仕方がないでしょう。それに私には止める権利がありません。私は貴方の、いえ、魔剣等を操るエクソシスト達の境遇を知りながらも放置していた。言い訳ですが、神が亡くなり稼働が危うくなったシステムを維持するには聖なるモノを優遇するしかなかったのです」

「いえ、本当にお気になさらず、きつと例え教会の待遇が良かったとしてもいずれはこう

なっていたと思います、何せ伝説の魔剣に選ばれてしまいましたからね」

「そうか、ジークフリート君は悪魔になりたいのか、優秀な悪魔が増えるのは喜ばしい。特に君はリアスとイツセーくんを助けてくれたからね、主人候補が見つかっていないなら協力するよ」

「助かります、魔王サーゼクスにそう言っていただけると心強い、ミカエル様もお気遣い感謝いたします」

そう言つてジークフリートはサーゼクスとミカエルに微笑んだ。

「おい、良い雰囲気のところ悪いが、まだ俺の質問は終わつてねえぞ」

そんな当たり前の事で口を挟んだアザゼルだが、こいつ意外と空気読めないな、と三人に冷めた目で見つめられてしまうのだった。

「おのれ、セラフォルツ、おのれ、サーゼクスッ」

全身所々から血を流した褐色肌の美女——カテレアが地の底から沸き立つような強い怨讐を秘めた声を零した。

此度の三大勢力トップへの襲撃はカテレア達の敗北、つまり旧魔王派の敗北で幕を閉じた。

この戦いでカテレアが失ったモノはあまりに多い。

家臣は殆どが死に、同士にして実質旧魔王派リーダーのシャルバ・ベルゼブも死に、そして、恋人だったクルゼレイ・アスモデウスまでもが死んでしまった。

カテレアが生き残ったのはクルゼレイが、サーゼクスに殺される寸座に彼女に逃げろと言ったから、そして、セラフォルがカテレアに負い目があったからトドメをさせなかった故である。

つまり、彼女は情けをかけられ、一人だけおめおめと生き残ってしまったのだ。

「クルゼレイ……私は一体どうしたら」

カテレアは悲しげに、途方に暮れた様な眩きを漏らした。

既に旧魔王派は瓦解している、復讐しようにもカテレア一人では魔王の一人にすら勝

てはしない。

そして、共に理想を語り合ったクルゼレイももう居ない。

「クルゼレイ、なんで、あの時私に逃げろなんて言ったのですか？ セラフオルー、なぜ私を逃したのですか？……こんな惨めに生き残るなら、クルゼレイ、私は貴方と一緒に死にたかった」

「本当？　じゃあオバさん、私のご飯になってよ！」

「え？」

それは一瞬のことだった。背後からの声に振り返ったカテレアが見たのは巨大な顎、そう、それがカテレアが見た最後の光景だった。

恋人から遅れる事、約半日、カテレア・レヴィアタンは恋人が待つ世界へと旅立っていった。

こうして幹部全員と実質リーダーを失った旧魔王派は完全に瓦解したのだった。





## 第13話

魔法は偉大である。

勇真は今更になつてそんな事を思い知つた。

何と言つても資材現地調達の人島で二階建てのログハウスをたったの30分で作れてしまうのだから。

「ああ〜気持ちいい」

勇真は床に転がりながらそう呟いた。

三十度を超える気温の中、魔法で常温より温度を下げたフローリングの肌触りは最高で、その僅かに感じる “びんやり” は束縛効果でもあるのか？ 勇真を掴んで離そうとしなかつた。

「勇真さん、あんまり床に転がっていると風邪を引いてしまいますよ」

ダメですよ〜とルミネアが座り込み優しく勇真の肩を揺らす。

「ああ、ごめんルミネア、でもあと30分だけ、30分だけだから」

「もう、勇真さんは30分前もそう言つてましたよ」

「そうだっけ？ ごめんごめん」

そう反省の色なく勇真は転がりながらスマホを弄る。

当たり前だが日本から遙か離れた無人島まで電波は来ていない。しかし、そんな問題も魔法の一発で解決してしまうのが勇真クオリティである。

「もう、勇真さんたら」

そんな勇真の態度にルミネアが頬を膨らませる。だが、その仕草からはまるで怒りが感じられない。むしろ勇真への親愛の情が滲み出ているくらいだ。

「あ、そうだルミネアは住みたい街とかある？」

「住みたい街、ですか？」

「そう、いくらなんでもずっと無人島では暮らせない、それに駒王市もこれからどんどん住み辛くなりそうだから早めに引越しの候補地を決めようと思ってね」

「そう言いながら勇真は圧縮空間に手を突っ込み冷えたコーラとポテトチップを取り出し食べ始めた。」

……お前、ずっと無人島でも大丈夫だろう？

そう誰かしらに思われた気がしないでもない勇真であった。

勇真とルミネアが無人島にバカンスに来て既に5日の時間が経過していた。

まあ、バカンスと言っても2日目の朝にログハウスを作成した勇真は自宅に居るのと殆ど変わらない行動スタイル、つまりはグウタラ生活を送っているのだが。

あ、もちろんグウタラ生活を送っているのは勇真だけである。

「はあ、はあ……ふう、只今、戻りました」

薄手のスポーツウェアを着たルミネアがタオルで汗を拭きながら家に戻って来た。

「おかえり、また走ってたの?」

「いえ、今は素振りをしていました」

曹操達から逃げてからルミネアはトレニングに励んでいた。走り込みに素振り、筋トレに遠泳、無理し過ぎない範囲ではあるがかなりキツイメニューである。

以前からルミネアは健康維持程度の運動は毎日欠かさず行っていたが、今現在のメニューは健康維持などというレベルではなく、明らかに身体能力向上を目指したソレであった。

「( )最近、頑張ってるね、どうしたの?」

「……強くなりたいんです」

そう、ルミネアは眩く、小さいながらもその声には強い意志が感じられた。

「強く？　なんでまた」

「この間、私は何も出来ませんでしたから」

「この間って曹操達の？　いや、あのレベル相手に何も出来ないのは別に仕方がないんじゃないかな」

「……はい、分かつてはいます。私なんかいくら努力してもあの人達には絶対勝てないって、でも、せめて勇真さんの足を引っ張りたくない」

そう、自虐的に言うルミネア。だが、勇真として難しくとも不可能ではないと思った。おそらく曹操、ゲオルクは厳しいだろう。しかし、ジークフリート、ヘラクレスは努力次第でなんとかならないレベルでもない。

3日だけとは言え英雄派にいた勇真は二人の戦闘力がある程度正しく理解している。確かに二人の戦闘力は大したものだ、特にジークフリートの剣技など正に達人という言葉が相応しく単純な接近戦での力量は同等の武器さえあれば曹操相手にもそこまで劣りはしない。

だが、どうにもこの二人は油断が過ぎる。ヘラクレスは自分の防御力を過信しているのか、あまり攻撃を避けようとしない。だから凶悪な毒でも使えばあっさり勝ててしまうだろう。

ジークフリートは得意分野の接近戦では油断しないのだが、専門外の魔法分野の知識が乏しく警戒も薄い、故に簡単に呪いを受けてしまう。

まあ、それでも難しいことは事実である。

そもそもルミネアに戦って欲しくない勇真は可哀想だと思いつつもルミネアのネガティブな発言をフォローするつもりはなかった。

「……うーん、やっぱり気にしなくて良いんじゃないかな？　もう、俺は曹操達と接触する予定はないし、ランスロットくんが上手くやってくれれば、英雄派は近い内に三大勢力と他の勢力から優先的に狙われて壊滅するだろうから」

「でも、また、似たような状況で私が足手まといになるかもしれないね」

「……まあ、残念ながらないとは言いい切れないね」

普通にあり得る嫌な可能性に勇真は少しだけ顔を顰めた。確かに、その通りだ。故にルミネアが強くなるのは良い事なのだろう。それは勇真にも分かる。

だが、ルミネアは性格的に戦いが嫌いな女の子なのだ。傷つくのも怖いのも苦手ですぐまで戦って来たのは孤児でそう育てられたから仕方なくという面が強い。

だから、せつかく無理に戦わなくていい環境になったのにルミネアが戦う状況というのを作りたくなかった。

力があると否応にも戦わざるを得ない状況になってしまいう事があるのだ。

強い者は弱いから戦えませんかと言いつつ出来ないのでから。

そんな事を考えている勇真にルミネアは声を落として話を続けた。

「私は卑怯で臆病です。いざとなったら私を置いて逃げて、なんてきつと言えません。多分、死ぬのが怖くて助けてと勇真さんに縋ってしまおう」

「それは本当に仕方がないよ、誰だって自分の命は惜しい」

「でも、勇真さんは私を見捨てないでくれました！あの時、曹操達と戦ってる時、私を見捨てれば逃げられたんじゃないやありませんか!？」

とても幸せそうに、そして、同時に咎人が懺悔する様にルミネアが告げた。

「……………まあ、そうだね、多分、可能だったよ」

勇真はルミネアの言葉を認めた。絶対にとは言い切れないが、少なくとも可能性があったのもまた事実である。

落ち込むルミネアを慰める為にあえて否定しようかと考えたが、ルミネアは勇真が逃げたと確信しているらしく勇真が否定したところで彼女の罪悪感を減らす効果は見込めないのでやめた。

「私にはきつと無理です。もし、勇真さんと同じ状況だったらきつと勇真さんを見捨てて一人で逃げてました……………そして、あの時、きつと勇真さんは私を置いて逃げるんだろうなどと思って怯えてたんです、それが恥ずかしくてッ」

そう言うルミネアの声色には強い悔恨の情が混じっていた。

「だからトレーニングを？」

「はい、誰かに、勇真さんに縋りたくなる弱い心は直せないかもしれませんが、なら出来るだけ縋らないで済むように様に強くなりたいです！」

それは強い決意を秘めた瞳だった。

ルミネアは俺が守るよ、とか言っておいて守れなかった勇真に止める事など出来ないほどに。

「……………はあ」

長い長い沈黙の後、勇真は溜息を溢す、そして彼は何かを決意したような表情をする  
と静かにルミネアを見つめ口を開いた。

「……………それじゃあ仕方ない、俺も手伝うよ」

「あ、い、いえ、お手を煩わせるのは、悪いです」

手伝いを遠慮するルミネアに勇真は首を振ると言葉が続けた。

「いや、手伝うよ、そんなに真剣なら手伝わない訳にはいかない、それに俺が手伝った方が多分よりルミネアは強くなる、中途半端な実力が一番危ないんだ。だから強くなると決めたなら突き抜けて強くなるべきだ」

「つ、突き抜けてですか？」



「そうだよ……まあ、俺としてはね、男女差別になると思うけど、女の子には出来るだけ戦って欲しくないんだ。だから前回曹操から逃げられなかったのはルミネアが悪いんじゃないかって俺が自分の能力に胡座をかいていたのが悪い、そう思ってた、いや、今も思っている」

「勇真さんは悪くありません！ それにあれだけ強かったら胡座もかくと思います」

「でも、それで前回失敗した。で、ルミネアに自分が強くならなきゃとか思わせてる、もう、この時点で俺的にはアウト」

そう言つて勇真は立ち上がり大きく伸びをした。

「だからルミネアの訓練の手伝いだけじゃなく、俺も強くなろうと思う、なに、勉強とか仕事は嫌いだけど身体を動かすのは好きだった。だから身体を鍛えるのは嫌いじゃない、こんなグウタラじゃ説得力がないかもしれないけどね」

「確かに、あんまり……説得力が」

ちよつと申し訳なさそうに言うルミネアに勇真は苦笑した。

「はは、普通そう思うよね、だからまあ、飽きないように取り敢えず遊び感覚から少しづつ鍛えていくよ」

勇真はそう答え、圧縮空間から用途の分からない魔導道具の様なモノを取り出した。

ルミネアの訓練を手伝うと言ってから直ぐに勇真はやらなければならないことがあると一人で黙々と何かを作り始めた。

その間、ルミネアは勇真に訓練をしても良いけど絶対に体調だけは崩さないでとお願いされた為、彼女は素直にキツイ訓練メニューは控えていた。

そして3日後、今日から訓練の手伝いをすると勇真は言い、何故か寝室にルミネアを呼び出した。

「さて、待たせたね、でももう少しだけ待ってね、手伝うと言ったけど、まずルミネアには魔法を使える様になつてもらいたいから」

「魔法ですか?」

「そう、魔法があればかなり便利だよ、戦闘の幅も広がるし相手の隙や油断を作るのも簡単に出来る。なにより強化魔法があれば簡単に筋力、速度、耐力、そして知覚速度を高めることが出来るからね、普通に身体を鍛えるだけよりずっと効率が良い」

「でも、私って魔法力があるのでしょうか?」

「あるよ」

ルミネアの疑問に勇真は即答した。

「元々ルミネアはそれなりの魔法力を持っていた。そして今は以前と比べて格段に強い魔法力をルミネアは持っている、何せ今のルミネアは半分、仙人みたいなものだからね」  
「仙人って、中国のあの仙人ですか!？」

「そう、出来が悪いモノとは言え、ルミネアは蟠桃を食べた。不老長寿を約束する仙桃、三千年に一度しか実らないという宝桃、それがルミネアに与えたモノは多いよ、数百年を超える寿命に強い魔法力、身体能力も以前より上がって、成長速度も遥かに増したんじゃないかな？」

「そう言っつて勇真は以前のルミネアとの比較図の様なモノを魔法で虚空に投影して見せた。」

「あ、はい、確かに、まだ数日しか鍛えてないのに訓練の効果が直ぐに出ました」

「うん、それは強くなるにはいい事だ。で、多分、ルミネアが得た魔法力を使うなら仙術が最も適しているんだろう。でも、生憎俺は仙術が使えないから教えられない。だから代わりに俺が使っている魔法知識を全部あげるよ」

「そう言っつて勇真は圧縮空間から一本の剣を取り出した。」

それは刃渡は60cmほどで癖のない真っ直ぐな両刃の美しい剣だった。その刀身には幾つかの魔術文字と魔術文様が刻まれ、剣全体から強い聖なる波動が漏れ出ている。

「あれはっ!」

「見ての通り剣だね、そして杖でもある。聖短剣を作る際に出た水増しに使われていた魔法金属、それを錬金術で剣にしたんだ。長年エクスカリバーの破片のオーラを吸っていたからかな？　いつの間にかこの金属にも聖なる属性が着いていたらしい……」

「そこまで言って勇真はしばし口を噤む、そして若干言い辛そうに説明を続けた。

「これは鏢の部分に蟠桃の種を入れてある、だからルミネアとの相性は良い、はずだ……でここからが問題なんだけど、これにはある種の洗脳魔法が掛かっている」

「……………」

「もちろん、洗脳って言っても意思や身体を自由に操れる様になる類じゃない、ただ俺が設定した魔法知識をルミネアの記憶に刻みつける効果がある、これの柄を握るだけでルミネアは俺の魔法知識の殆どを得る事が可能だ、いや、でも一応洗脳魔」

「勇真が何か長々と言いつつ、訳をしようとした所でルミネアはヒョイっと軽い覚悟でその剣の柄を握った。

「それと同時に大量の魔法知識が一気にルミネアに流れ込む。

「ちよっ!?!」

「ツツ!?!…………う、うう、凄い頭痛が、します」

「ルミネア!　もう、話聞いてた!?!　洗脳魔法だよ!　洗脳魔法!　俺に悪意が有った

らどうする気だったの!」

「だ、だって」

あまりの知識量にルミネアはクラクラしながらも揺れる視線でなんと勇真を捉える。

「勇真さん、変な、ところで遠慮して、ます。私を、洗脳、したいなら最初からしてるはず、です」

「……それは、そうだけど。気が変わってルミネアを玩具にしたいと思わないとも限らないんだよ？」

「それでも、勇真さんなら、私を大事にしてくれませよね？」

頭痛で辛いだろうにルミネアはとても穏やかに勇真に笑いかけた。

「……………はあ、そうだね、分かったよ、もう何も言わない。あ、やつぱり一つだけ……俺以外の洗脳魔法には絶対に注意するんだよ」

「はい、もちろん、です」

勇真さん以外に洗脳なんてされたくありませんから、そう小さく零してルミネアは倒れ込む様に勇真に抱きついた。

「………よろしい、じゃあ、今から催眠魔法で眠らせるからね、丸一日眠れば知識も定着して頭痛も無くなるはずだから」

「はい、じゃあ、大分早いですけど、おやすみなさい、勇真さん」

「はい、おやすみ、しっかり休んでね」

そうやって勇真はルミネアを優しくベットに寝かせると軽い催眠魔法で眠らせたのだった。

「うひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ、ビックリ、ビックリ、まじビックリ♪」

吸血鬼の総本山、ツエペシユ本城で一人の悪魔が楽しげな笑い声を上げた。

長い銀髪の外見年齢が、中年から老年に差し掛かった男は銀を基調とした鎧とローブが混じったような衣装——『魔王の衣』に身を包みながら外見に似合わぬ軽い口調で笑い続けた。

その男の名はリゼヴィム・リヴァン・ルシファー、全悪魔の中でたった三人だけの『超越者』と呼ばれる者の一人である。

「聖杯で邪龍ちゃんの魂を集めてなら、まさかまさかの事態発生！　ウチのきやわいい孫が家出から戻って来ました！　はい、ユーグリット拍手く！」

「おめでとうございませす、リヴァン様」

「……………」

リヴァンの言葉に答えたのはこれまた銀髪の青年ユーグリットだ。彼はパチパチと拍手をすると、淡々とした声でリヴァンに話し掛けた。

「リヴァン様、今、私になにか御命令はありますか？」

「ん？ ないよー」

「分かりました。それでは、私は吸血鬼の案件に取りかかりたいのですが宜しいでしょうか？」

「オーケオーケ、吸血鬼はメンドイからユーグリットくんに任せるわ、その間に僕ちゃんは家族水入らずでお話ししてるから♪」

「は、仰せのままに」

リヴァンに許可を貰ったユーグリットは一礼すると静かにリヴァンの部屋を後にした。

「さて、ヴァーリちゃん、何からしようか、おままごと？ 人形遊び？ うひやひやひや

！」

リヴァンの言葉に銀の首輪をさせられたヴァーリが、死んだはずのヴァーリが憎しみに満ちた目で祖父であるリヴァンを睨みつけた。

「……………」

「もう、ねえねえ、ヴァーリちゃん、おじいちゃん無視されるの悲しいなあ、せつかく生

き返らせてあげたのに……あ、そうだあ、じゃあ、人形遊びをしようか？　ちよつと『おじいちゃん大好き』って言ってみてよ」

「……オジイチャンダイスキッ！」

ヴァーリは射殺す様な憤怒に満ちた表情でリヴァンに吐き捨てた。

「わーい！　おじいちゃん孫に好きって言ってもらえたの初めて♪　うれぴーなく、さて次はなんて言ってもらおっかなうひゃひゃひゃ！　じゃあ次は『助けてくれてありがとう』ね♪」

「タスケテクレテアリガトウツツ！」

「うひゃひゃひゃひゃ、マジウケる！」

そう言って、リヴァンはヴァーリの肩を叩こうとしたのだが、何かを思い出したかのようにその行動を取りやめた。

「おおっと、いけね、危うく壊しちゃう所だったよ、孫は大事にしないとね、じゃあ、仕方ないもう少し人形遊びで我慢するかあ♪」

「……………」

リヴァンの一人遊びは続く、彼が満足するその時まで。





## 第14話

勇真14

辛くとも認めなければならぬ現実がある。

それは考えられる可能性だった、それは予想して然るべき当然の事だった。  
「……………」、これでルミネアの」

そう、ただ目を背けていただけの事、最初から分かっていた事だったのだ。

「十二連勝だね…………ぐすん」

ルミネアが勇真より強いなんて事は。

「ゆ、勇真さん」

勇真がいじけて砂浜に転がってしまい、ルミネアがオロオロしている。

しかし、そんなルミネアを構う余裕は今の勇真に残されていなかった。

「ああ、本当、俺ってダメな奴だなあ、ガチで戦って超手加減してもらった女の子にボロ負けとかマジ引くわあ、え、お前って本当に男？ 筋力よわ、マジもやし、能力使えない一方〇行よりもやし、いや、むしろもやしとか言ったらもやしに失礼なレベルで貧弱、ああ、この人これで自分は運動神経が良い方とか言ってたんだよ、笑っちゃうよね」とか思われてるんだろなあ……はあ、死にたい」

「お、思ってませんから！ 落ち着いて下さい勇真さん！」

もう、勇真は色々とダメダメだった。

それは勇真がルミネアに魔法知識と聖剣を与えた次の日の訓練の事である。

まず勇真はルミネアに魔法有りの戦闘を実際体験してもらう為に軽く模擬戦を行うとしたのだ。

そう、”軽く”

### 模擬戦一戦目

「まず、ルミネアは俺があげた魔法知識に慣れるところから始めよう、大丈夫、加減はす

るから全力で掛かって来て」

結果・敗北

模擬戦二戦目

「凄い！ ルミネアは魔法のセンスあるよ、じゃあ、今度は俺も結構本気で行くから覚悟してね！」

結果・敗北

模擬戦三戦目

「天才だ、マジ天才だ！ よし、俺も本気で行く！ だから今回は勝たせてもらうよ」

結果・敗北

模擬戦四戦目

「はは、は、つ、強いなあ、ルミネアは。ちよつと俺、油断しちゃったよ、じゃあ、今度こそ真正正銘の本気で行くからッ！」

結果・敗北

模擬戦五戦目

「……じゃあ。今度は俺、神器も使うね、覚悟してね」

結果・敗北

模擬戦六戦目

「……………聖剣も使うね」

結果・敗北

模擬戦七戦目

「……………今回ルミネアは会話に呪詛を込めるの禁止ね」

結果・敗北

模擬戦八戦目

「……………追加で、空間転移禁止ね」

結果・敗北

模擬戦九戦目

「……………さ、更に追加、雷と炎属性は禁止ね」

結果・敗北

模擬戦十戦目

「……………つか、七属性禁止」

結果・敗北

模擬戦十一戦目

「……………つか、いか、物体、浮遊と障、壁もダメ」

結果・敗北

## 模擬戦十二戦目

「……………オレゼンリヨク、ルミネア、シンタイキョウカイガイキンシ、オーケー？」

結果・敗北

「……………はは、ゴメン、ルミネア、俺はもう、ダメだ」

ダメ人間ここに極まれり。

軽く二回程模擬戦するつもりが、勝てないので熱くなり、更に数回負けた続け、最後には恋人の女の子に超手加減してもらった上で自分は全力全開で倒しに行つての敗北、カッコ悪いなんてレベルではない。

それどころか、この男、このザマで昨日『女の子には出来るだけ戦つて欲しくないんだ』とか『中途半端な実力が一番危ないんだ』とかほざいていたのである。

まったく嘲笑モノの愚か者だ。

「……………俺は弱いね、はは、分かりきつてた事じゃないか、俺が強かったのは聖剣から力をもたらったからだし、小細工が出来る魔法がなきや俺なんてミジンコ程度の実力さ、勇者時代もあつさりミルたんに負けちゃうし、聖剣折られるし、あ、そう言えばミルたんどうしてるかなあ、魔法少女にしてあげるからセラビニアから帰つてつて騙してから会つ

てないなあ、ちよつと探して会いに行こうかなあ、逝こうかなあ」

「落ち着いて勇真さん！ た、たまたまですよ！ と言うより今、勇真さんはランスロツトくんに魔法力95%と殆どの属性魔法と呪詛系列と高位魔法障壁と身体能力強化まで契約で渡してるから本来の百分の一以下の実力しか出せないじゃないですか！」

ルミネアがいじける勇真を必死でフォローする。

「……………うん、それ言い訳にしようと思った。でもさ、ルミネアに身体能力強化以外禁止させてコツチは神器と聖剣と空間転移使つて敗北つて……………もう、死んだ方がいいかなあ？」

「死なないで下さい!？」

「……………はは、大丈夫、冗談だから、死んだりは、しないから」

そう言つて、勇真ゆつくりと砂浜から身を起こした。

「はあ……………それにしても今の俺の戦闘力がここまで低いとは思わなかった。ジークフリートとかを魔術知識が乏しい上、魔法に対する警戒も薄い、つて思つてたけど、俺も全く人の事を言えなかつたよ。俺は接近戦の技量が皆無な上、それに対する危機感が欠如していた……………数倍以上の速度差が有つたのに曹操に接近戦で負けるわけだよ」

今回の勇真が如何に魔法に頼りきつていたか分かる結果だった。

模擬戦の敗因は主に自分がピンチの時、契約で使えない魔法を癖で使用しようとしてし

まうことでそれが発動せず、動揺で隙が生まれ敗北というパターンが多かった。

そう、例えば攻撃が当たりそうだから魔法障壁で防ぐ↓今、強い魔法障壁はランスロットくんにあげてますよ？ の様な行動をつい取ってしまうのだ。

そして、この行動を取るの癖だけではなく、知覚速度の倍化が出来ないからという要因も関係する。

勇真は戦闘の際に身体能力強化に合わせ、知覚速度も倍化している、その速度は通常時の数百倍以上。これにより勇真は余裕と冷静さを失わずに戦う事が出来ていたのだ。

だが、これを無くすと途端に勇真から冷静さが消えてしまう。そして、目まぐるしく変わる戦況に対処出来なくなってしまうのだ。

「まず、勇真さんに足りないのは判断力です、私との模擬戦で勇真さんは何度も判断ミスをしています、先ずはここから治しましょう！」

「はい、分かりましたルミネア先生」

「ーッ!?……よろしい、勇真くん、勇真くんが強くなるまで先生が勇真くんを守ります  
！」

「すいません、それだけは勘弁してください。リアルファイトで女の子に守ってもら



とか精神的に死んでしまいますッ！」

こうして、勇真はルミネアの訓練をつけるつつ自分の訓練をするつもりが、ルミネアに指導してもらい彼女には魔法のアドバイスをするという状況に変わってしまったのでした。

高めに高めた集中力を持って魔剣を創造する。イメージするのは常に最強の魔剣、聖剣を、聖剣エクスカリバーを打ち砕く最硬の魔剣だ。

そうして創られた魔剣を片手に木場はジークフリートに踏み込んだ。

「はあああッ！」

木場は強い踏み込みで加速、一気に間合いを詰めると裂帛の気合いと共に手加減など一切無い、殺す気の横薙ぎをジークフリートに放った。

しかし……。

「まあ、悪くはない踏み込みだね」

木場の横薙ぎの十倍以上の速度で振るわれた黒鉄の剣が彼の魔剣を木っ端微塵に打

ち砕いた。

「ただ剣の出来は悪い」

「ーッ!?」

そして次の瞬間、魔剣を砕かれ隙が出来た木場の腹筋にジークフリートの前蹴りが叩き込まれる。

あまりの激痛に腹が爆発したと木場は錯覚した。

木場はくの字に折れ曲がりながら大地と平行に数十メートル吹っ飛び、地面に接触、そこから更に数十メートルゴロゴロと地面を転がり、ようやくその動きを止めた。

「ガッフ、ガ……はあ、ああ、はあッ！」

甚大なダメージに木場の身体が悲鳴をあげる、それでも彼は血反吐を吐きながら立ち上がる。

しかし……。

「起き上がりが遅い」

何時の間にか至近距離に居たジークフリートのアッパーが木場を天高く舞い上がらせた。

そして彼は20秒を超える長い長い滞空時間を経てから地面にべちやりと墜落した。

「き、木場さんツツ!？」

アーシアが悲鳴をあげて木場に駆け寄ろうとする。だが、ジークフリートの作った結界に阻まれ近付けない。

「アーシアさん、まだ回復は早いよ」

結界の前で涙目のアーシアに無情の言葉が突き刺さった。

「そ、そんなツ！」

非常に珍しくアーシアが非難の目でジークフリートを見た。だが、そんなの御構い無しに、いや、それどころか彼はアーシアに一瞥すらせず、ただ静かに地面で痙攣する木場を観察していた。

「木場くん、キミの鍛え方は少々極端過ぎる」

倒れて痙攣する木場の周りをゆっくりと歩きながらジークフリートが木場に語り掛けた。

「『当たらなければどうということはない』……確かに、それは真理だ。どんな攻撃も当たりさえしなければ問題は起きない。その認識は正しよ」

ジークフリートは木場の周囲をクルクル回る。

「しかし、そんな事が本当に可能なのかな？　僕はこう思っている。どんなに高位の悪魔だろうと、そう、それこそ何処ぞ神話の主神だろうと全ての攻撃を回避出来る者なん

て存在しないと」

ジークフリートは木場の周囲をクルクル回る。

「例えば、音」なんてどうだろうか？ 戦闘中の会話に、音に呪いが乗っていたらどうやって回避する？ 聴覚を遮断するかい？」

「例えば、姿」なんてどうだろうか？ 僕を見るだけで掛かる呪いがあつたとしたら、どうやって回避する？ 目を瞑って戦うかい？」

「例えば、今、僕が張っている 結界」なんてどうだろうか？ この結界の範囲を一気に狭めて圧殺するでしょう、360°から迫る壁をどうやって回避する？ 結界をすり抜けるかい？」

生徒に語りかける教師の様に、ジークフリートはゆっくりと木場の頭に浸透する様に自説を語る。

しかし、倒れた者の周囲をクルクル回りながら語りかけるのその姿は、何処となく洗脳儀式的の様で、この光景を見る者に強い不安を抱かせた。

「軽く上げただけで君がまず回避出来ない攻撃が三種も出たね？ この攻撃は果たしてこのまま速度鍛えていけば回避出来るモノかな？ 良く考えてみると良い。……さてと、長くなったね、そろそろ休憩は終わり、続きをしようか？」

そう言ってジークフリートはほんの少しだけ木場に回復魔法を掛ける。そしてバックスステップで20メートル程距離を取った。

「さあ、再開だ、向かって来るといい、でも、もしあと10秒経っても来なかったら……僕から攻めるよ？」

そう言ってジークフリートは冷徹な瞳で起き上がろうとする木場に発破をかけるのだった。

悪夢はサーゼクスの何気ない発言から始まった。

「実は近々プロ入り前の優秀な若手悪魔を集めてレーティングゲームが行われる事になったんだ、そこでジークフリートくん、ウチのリアスとソーナさんを鍛えてもらえるかな？」

主候補が見つかり、やる事がなく暇だったジークフリートにサーゼクスが言ったのがこれである。

そう、これがリアス、ソーナ眷属の悪夢の始まりだったのだ。

後にサーゼクスは言う、言い訳の様に言う。ほんの軽い気持ちだったと、強力な魔導騎士を暇にさせておくのはもったいないと思ったと。



次の瞬間、ジークフリートの手前に “アーシア” が現れた。  
「ツ、あぶねえツ!？」

イツセーは今まさに叩き込もうとしたパンチを辛うじて止める。  
その間にジークフリートはバックステップで距離を取った。

「イツセーさん?」

目の前で止まった赤い拳を見て、 “アーシア” はキョトンとした顔をした後、嬉しそうにイツセーに抱きついた。

「良い反応ですよ、イツセーさん、でも、ここでの正解はそれではないんです」

次の瞬間、 “アーシア” が大爆発を引き起こした。

「そう、一つの事に集中し過ぎると幻術と本物の区別がつかなくなる、キミが冷静だったから少し距離を取って本物のアーシアさんが居た場所を確認したと思うよ」

「ーッ、イツセーくんツ!? クッ、おのれ!」

爆心地で倒れ込むイツセーを見て木場がキレた。彼は一直線にジークフリートに踏み込むーッ振りをしてフェイント、巧みなステップで彼の背後に回るとその首を切り落とすとした。

そして、再び大爆発が巻き起こる。

「フレイントを入れたのは評価しよう。でも木場くん、キミも冷静ではない。今、爆裂魔法球を幻術でアーシアさんに見せたばかりじゃないか、なんで僕は本物だと思ったんだい？」

そう言つて、少し離れた場所で気配を消し透明になつていたジークフリートが姿を現した。

「さてと、残つたのは女性と、男の娘か……攻撃するのはちよつと気が引けるね」

そう言いつつ、ジークフリートは100を超える魔法陣を自身の背後に展開する。

「と、止まれッツ!!」

展開された大量魔法陣に焦つたギヤスパークがジークフリートに『停止世界の邪眼』を発動、そして次の瞬間、ギヤスパークが停止した。

「ギヤスパークくん、もう対象を絞つて神器を使えるようになったんだね、素晴らしい成長だよ。でもね、そういう呪いに近い神器つて呪詛返しに弱いんだ。君は魔法のセンスがあるけど時間停止に対する備えがないね、自分の神器が返される類の能力ならちゃんと備えないとダメだよ。まあ、今は聞こえないだろうから後にするか」

そうして、ジークフリートは集まって隙を伺うリアス、朱乃、小猫、アーシアに視線を投げかけた。



「うん、下手に分散しないのは良い事だ。隙を伺うのも正しい。でも、攻撃を躊躇するのはいただけない。僕は今、視線をギヤスパークンに向けていただろう？ それは明確な隙だったはずだ、例え作られた隙だとしても、隙は隙、通常時より攻撃が当たり易いのは確かなんだよ？ だから、今は朱乃さん、貴女が最速の雷を撃つべきだったと僕は思うよ」

それが “ラスト” チャンスだった。そうジークフリートは付け加えた。

「……………」

ジークフリートの言葉に朱乃は無言、いや、朱乃だけでなく、リアスもアーシアも小猫も無言。

反論が浮かばないのではない、物理的に出来ないのだ。

「あと、もう一つ、何度もやったからあえて説明はしなかったけど、君達は短時間で勝負を決めるしかなかったんだよ？ 知ってたよね、僕が会話に呪詛を混ぜる事が出来るって」

ジークフリートはゆっくりと固まって動けないリアス達に歩み寄る。

「それだけではなく、ギヤスパークンのソレには遥かに及ばないけど邪眼も一応使えるんだよ？ 僕の呪いは君達レベルじゃレジストするのは難しい。だから僕の話聞くたびに僕に見られる度に君達の勝機は薄くなっていったんだ、だから時間稼ぎが目的

じゃなかったら玉碎覚悟で特攻すべきだった」

そしてジークフリートは良く　“音”　が聞こえる様にリアス達の近くで指を鳴らす。

それと同時に四人が地面に倒れ込む。

「これでリアス組、第三回目の模擬戦を終了とする」

ジークフリートはそう呟くと視線をリアス達から結界の外のソーナ達に移した。

視線を投げられたソーナ眷属がビクリと身体を震わせる。

「さて、よく休めましたかソーナさん？　リアスさん達を片付けたらソーナ組の三回目を始めますよ？」

そう言つてジークフリートは爽やかな笑みを浮かべた。

「……………はい」

そして、笑顔のジークフリートに答えるソーナの顔は死刑前の罪人よりも青かった。

隙がない、油断がない、躊躇がない、遊びがない。ジークフリートはいつそ笑いが出るほど合理的に冷徹にリアス眷属とソーナ眷属を鍛え抜いた。

その苛烈さは地獄の炎をも上回る、途中、あまりの苛烈さに保護者乱入（レヴィアたん襲来）もあったがそれすらあつさり片付け、ジークフリートはリアス、ソーナを鍛え

抜いた。

その結果。

まあ、つまり、言うまでもない事だが、リアス眷属とソーナ眷属は大幅レベルアップを果たしたのだった。

## 第15話

「はあ、やってくれたな、宮藤勇真」

とある孤島に重なる様に作られた異界、現英雄派本拠地の会議室で、曹操が溜息と共に恨み言を呟いた。

「……ゲオルク、各支部への襲撃で戦力はどの程度減った？」

「エクソシストが九割、魔法使いが八割、そして神器使いが七割捕縛ないし死亡した。ジークフリート、ヘラクレスの行方不明も考えて総合的に……戦力は八割減と言ったところか」

「そうか、ハーデスとの交渉は？」

「難航している、どうやらどこぞの筋から英雄派の目的がオーフィスを使った全人外の排除という内容で各勢力に伝わったらしくてな、それを信じたハーデスはサマエルの貸し出しを拒んで来た……オーフィスの力を奪う計画は頓挫したとっていいだろう」

「……そうか、それで勇真の行方は？」

「不明だ」

そこまで聞くと顔を憤怒に染め、右手を振り上げた曹操は怒りに任せ机の一部を叩き

壊した。

「ーッ！ ……すまない、五月蠅くしたな」

「いや、気にしないでくれ、こんな事態だ物に当たりたくもなる」

「はあ……ありがとう、少し落ち着いた。しかし、戦力で動くのは無理か、暫くは戦力補充に努めよう、ゲオルクはエクソシストの勧誘を頼む、天使が悪魔と組んだことで不満を持つ者が大量に居るはずだ、特に人外に恨みを持つ者は現状を許せないだろう」

「了解した。曹操はどうするのだ？」

「新幹部予定の者達を鍛えておく」

「ああ、あの複数の神器を持たせた者達か？」

「ああ、それとバルパー・ガリレイをだ」

恐怖のジークフリート教室は本日10日目を迎えていた。

「うおおおおおッ！」

「はあああああッ！」

雄叫びを上げながらイツセーと木場がジークフリートに接近戦を挑む。

そのコンビネーションは正に阿吽の呼吸、二人は高速で目まぐるしく立ち位置を変えながらも一度も接触する事無く、それぞれの隙を埋める様にジークフリートを攻め立てる。

その連携攻撃にジークフリートの頬が楽しげに歪んだ。

「いいよ、実にいい。そうだ、一人で戦うな、せつかくの集団戦だというのにキミたちと来たらなぜか一对一ばかり仕掛けてくる、訓練初日から僕はそれがとても不満だったんだ」

そう話しつつ、ジークフリートは剣も使わず体捌きだけで二人の連撃を躲し続ける。

「クッー」

「このッー」

攻撃が当たらない事に焦り始める木場とイツセー。この間にもジークフリートの口撃（呪詛）が二人の身体を少しずつ蝕んでいく。

「うん、本当にいい。中々のコンビネーションだ。だが、まだ僕に攻撃を当てるほどじゃないね、キミたちは少しアイコンタクトをし過ぎている、それはもつと短時間かつ、さり気なくしないと、僕にまで次の動きが読めちゃうよ？」

そう言っただけでジークフリートは予め木場来ると分かっていた場所に足を出す、それに

引つ掛かり、木場が宙を舞う。しかし、彼は巧みに空中で体制を立て直すとうまい具合に着地、直ぐに視線をジークフリートの方に向ける。

しかし、木場の視線に移ったのは困惑顔のイツセーのみ、ジークフリートは何時の間に姿を消していた。

「ーッ！一体何処に!？」

「僕はここだ」

そう、〃困惑顔のイツセー〃　　が言つて木場に拳を叩き込んだ。

「ぐ、があッ!？」

「木場あぁッ!？」

それと同時に、もう一人のイツセーが叫びながら姿を現わした。

「何度も言つてるけどキミは……キミ達リアス眷属は仲間を信用し過ぎだ、いや、正確には仲間の姿を信用し過ぎだ。キミ達は眼に映るものが自分と同じ眷属だと直ぐに警戒心を解いてしまう」

そう、〃困惑顔のイツセー〃　　は言いながら、顎に拳を喰らいフラつく木場に追撃の回し蹴りを叩き込んだ。

「か、はぁッ」

その一撃で木場は地面と平行に吹き飛ぶ。そして、それに視線を向けたイツセーの腹に黒鉄の剣が突き刺さった。

「ーッ!? ガッ!」

「だからこんな気配も誤魔化していない幻術に引つ掛かる。なぜ、消えたのが僕で残ってるのがイツセーくんだと判断した? イツセーくんを消して僕がイツセーくんに変身したとは考えなかつたのかい? あとイツセーくん、仲間を心配するのは素晴らしいがそれで隙を作つてたら世話ないよ?」

そう、笑い、ジークフリートは腹に刺さった剣に視線を向けたイツセーの死角を通り移動、その首筋に強力な蹴りを叩き込み意識を奪った。

「さて、残るは塔城さん、キミだけだ」

「……………」

「残念だが、キミがリアス眷属で一番成長していない、そして一番中途半端な戦力だ……いや、オブラートに包むのはよそう、はつきり言って、キミが一番使えない」

「ーうるさいッ!」

挑発ではなく事実だ。そう思わせる雰囲気でするジークフリートに小猫がキレた。

しかし、ジークフリートはどこ吹く風、小猫渾身の右ストレートを指一本で止めると、



当たり前の事を言うような、世間話をする様な口調で話し出した。

「キミはなぜ、最初のコンビネーションに参加しなかった？ 二人が作った僕の隙を突くため？ そうじゃないよね、ただレベルが高くてついて行けなかったただけだよね？」

「……………ッ」

「あの二人はリアス眷属の中でも特に成長している、今の禁手なしの状態ですらね。キミが着いていけないのは仕方ない。でもね、それよりも、僕はなぜこの接近戦メインのメンツにキミが含まれているの？ と思ったんだよ」

「……………私は『戦車<sup>ル</sup>』です。接近戦をして当然じゃないですか」

「そんなモノは後天的に与えられたモノに過ぎないよ。僕は魔法も『そこそこ』使えるからキミの才能が何に片寄っているか分かっているつもりだ。その上で断言しよう、キミがこのまま与えられた特性のみに縋って行けば必ず、リアス眷属の足手纏いとなる」

「……ッ、言いたい、放題ですね」

事実だからね、そう言ってジークフリートは肩を竦めた。

「決断するなら早い方が良い、リアス眷属は勤勉な『秀才』タイプが多い、あまり遅くなると取り返しがつかなくなるよ？」

「……………秀才、タイプですか。天才は居ないんですか？」

「そんなの見れば分かるだろう？ この10日間で確かな成長はあれど僕にこうもあしらわれるキミたちに天才は含まれて居ないよ」

そんな無茶を言うジークフリートに小猫はあからさまに顔を顰めた。

「貴方を基準にしないで下さい、みんな貴方のような怪物てんさいではないんです」

「何を言ってるんだい？ 僕は秀才タイプだよ？ 少なくとも ジークフリート”

はそうだった。まあ、秀才の中ではトップクラスの才能だったけどね」

「……………貴方で秀才とか、天才はどんなバケモノですか」

「……………バケモノか、その通りだね。天才って言うのはね、秀才が努力を重ねてようやく到る領域にほんの短期間で辿り着き、そこから成長を止めない者の事を言うんだ」

「本当の天才ってのは冗談抜きで理不尽で、凡人と秀才のやる気を根刮ぎ奪う嫌な奴なんだ。特に秀才くらいになるとて天才との才能の差が臙げながらに分かつちやうから危ないね。だからもし、本物の天才と出会ってしまったら一緒に訓練は絶対しない方がいいよ？ 天才の理論は秀才には理解不能でその成長速度は本当に理不尽としか言いようがないからね」

「僕はそんな天才を一人知ってるよ、グウタラなやる気のない天才をね」

そう、ジークフリートは若干の焦りを滲ませて憎々しげに呟いた。

高速で、連続で、剣閃が交差し火花を散らす。

二振りの剣がぶつかる澄んだ金属音はあたかも楽器が奏でた様に美しく、規則正しい交わりは、まるで何かの曲の様にさえ聞こえて来る。

そして、奏者の片割れであるルミネアは現状を見て、ありえない！　と思っていた。何故なら、この現状が示す事は自身の全力が勇真にあつまり受け止めてられているという事に他ならないのだから。

「ーハッー」

素早く、連続でルミネアが剣を振るう、しかし、まるで当たらない、当たる気さええない。

フェイントを織り交ぜた十二の剣閃、勇真はそのどれがフェイントでどれが本命か最初から分かっていたように最小限の動きで躲してしまふ。

「ーッ」

そんな現状にルミネアは内心慄いた。

なぜなら、素人同然だった彼が訓練を始めてまだ10日も経っていないのだ。

邪魔になると魔法を封印し、剣の訓練に明け暮れる様になった勇真はたったの7日でルミネアの技量と並んだ。8日目からは完全に彼女を上回る。

そして今では最初とは真逆、ルミネアこそが素人に毛が生えた実力だったので？と思わせてしまう程に隔絶した力の差が生まれていたのだ。

「はああああッ!」

気合一閃、ルミネアは起死回生の願いを乗せて限界超えの身体強化魔法を一瞬だけ発動、今の勇真の倍する速度で斬撃を繰り出した。

それは今のルミネア最速の袈裟斬りにして音速突破の破断の刃、愛剣たる『エクスカリバー・シールド仙種の聖剣』の斬れ味を持つてすれば巨石をも両断する剣撃だった。

ーにも関わらず、勇真はその袈裟斬りに反応、受け止めるどころか余裕を持って受け流してしまったのだ。

「ーッ!?!」

その動きは正に達人、才ある者が長年剣に人生を注いでようやく可能な領域の絶技だった。

また、上手くなってるッ!?

ルミネアは心の内で愕然とした。

自分も強くなってるはずだ、確かに成長しているはずなのだ、なのに、この感覚はなに？ ルミネアは酷く困惑する。

そう、勇真の成長速度は本当に、圧倒的だった。

まるで自分が急速に弱くなっている。そうルミネアに錯覚させてしまうほどに。

「ふう、ようやくだよ」

疲れたような、ホツとしたような声で勇真は呟いた。

勇真とルミネアの勝負はあっさりとは決着した。

「これで、なんとかルミネアを守るとか言えそうだよ。まあ、まだルミネアに身体強化以外の魔法を使われたら勝てないんだけどね」

勝者は勇真、袈裟斬りを受け流し、身体が泳いだルミネアの首筋に刃を突きつけての勝利だった。

「……………勇真さん、もしかして今日まで手加減してました？」

そうルミネアが珍しく、拗ねたように勇真に聞いた。

「いや、全然。するにしてもあんな情けない姿は見せたくないよ」

「じゃあなんでそんなに一気に剣が上手くなるんですか？」

ルミネアは不満顔だ。彼女は別に勇真が自分より強くなるのが嫌なのではない、勇真に何かを教えるという状況を彼女は楽しんでいたから、もう少しだけ先生役をやっていたかったのだ。

「なのにとったの一週間で指導は不要となりその後は自分が指導される立場となってしまうた、これは拗ねても仕方ないだろう。」

そんな中々見れないルミネアの姿に勇真は苦笑した。

「それは神器の能力のおかげだね、今までは魔法の武器とかの特殊能力の発動方法ばかりを神器で引き出して使ってたんだけど、この頃は能力じゃなくてただの剣として使うとして正しい動きはどうすれば良いかを引き出した。あとはその引き出したモノを自分に合ったようにアレンジして身体に覚えさせる……その繰り返しだね」

「……確かに通常より成長が早くはなりそうですが、ここまで劇的に成長するものですか？」

「現に今なってるじゃん」

「それは、そうなんですけど納得がいきません、私はこれでも年単位で剣の訓練を行っているのですが？」

「うくん、そう言われても」

勇真は困った顔でルミネアを見る。

「絶対、何かを理由がありますよね」

「理由って言われてもねえ、本当に特別な事はないよ」

「……分かりました、じゃあそれとは別で勇真さんて私の動きを先読みしてませんか？」

「してるけど、どうかしたの？」

「……………なんで、出来るんですか？」

「雰囲気？」

「からかってます？」

「いや、全然、むしろなんでルミネアはしないの？ 俺の雰囲気を見ればいつ剣を振ると

か分かるでしょ？」

そんな無茶苦茶な事をあたかも自明の理を語るように勇真はルミネアに問い掛けた。

「……そんなの出来ませんよ、ねえ、勇真さん、本当の本当になにか強くなった理由ってないんですか？」

「そんな、何度も聞かれたってないものはないよ……あ、強いて言えば」

「言えば？」

「勇者だからかな、あと、お世辞だと思っただけだね、異世界に勇者として召喚された時、

あつちの神様に最強の剣士に成り得る才が有るつて言われたくらいかな？ はは、案外冗談じゃなかったりしてね」

「……………」

いや、絶対ソレ、冗談じゃないですよね!? 世界の危機にそんな冗談言いませんよね!? とルミネアは思った。

そこでふと、ルミネアはある事に思い至った。

そう言えば、勇真はあらゆる武器の使い手となれる神器を持っていたから召喚されたと言っていたが、コレは事実なのだろうか？

そもそも、この世界の神器の能力が異世界の武器に、それもその異世界の神すら使用不能だった聖剣に適応可能なのだろうか？ 案外、〃そんなものなくても〃 勇真は扱えたのではないだろうか？

つまり、勇真は……

「……天才というものなのでしょうか？」

「ん、なんか言った？」

「いえ、なんでも、それよりももう一本やりましょう！」

「はは、案外ルミネアも負けず嫌いだね」



戦いはやっぱり勇真の勝利で終わった。

「リゼヴィム様、ご報告が」

「お、ユーグリットくん、んちゃ！ どうしたのヴァーリキくんが死んじやった？」

「いえ、彼は問題ありません、ただ、彼と模擬戦を行ったグレンデルとラードウンが暫く行動不能です」

「あらそう、ざあんねん♪ でも邪龍ちゃんも、情けないねえ、二対一ならヴァーリキくんくらいボコつてくれないと」

「それは仕方がありません、今の彼は以前と比べてさえ圧倒的に強いのですから」

「うくん、最強厨のきやわいい孫の為に孫のおじいちゃん、頑張っちゃったからねえ、聖杯で弱点補強と性能強化とかしなくて良かったかなあ？ あ、頑張ったのはヴァレリーちゃんか、うひやひやひやひやひやひやひやひやひや！」

「それで報告なのですが、吸血鬼の邪龍化術式のセットは滞りなく終了致しました、何時でも 〴〵 出来ませぬ」

「おお！ 流石はユーグリットくん、仕事がはやいねえ、おっさん嬉しいよ♪ じゃあ、



## 第16話

な、なんて声を掛けましょう？　そう、レイヴェルは緊張しながらイツセーを遠くから眺めていた。

此度、サーゼクからの打診により最初の眷属を持つことになった彼女は駒王学園を訪れていたのだ。

そして、軽い手続きの後、旧校舎のオカルト研究部の部室を目指している、そんな時、前方にイツセーを見掛けたので声を掛けようと思ったのだ。

しかし、最初になんと挨拶すれば良い？

年上だから敬語？　下級悪魔だからタメ口？　いやいや、慕っている年上の男性にタメ口なんて有り得ない！

レイヴェルは意を決して、イツセーに近付くと勇気と共に声を掛けた。

「お」

「ーッ!？」

それは尋常じゃない反応だった、レイヴエルの声に即座に振り返ったイツセーは肩を叩こうか迷い宙を彷徨っていた彼女の手を攻撃と判断、即座にしゃがみこみ腕を躲すとレイヴエルの腕で出来た彼女の死角を利用し、背後を取ったのだ。

あんまりの事態に「お」に続くはずだった　　“久しぶりですわね、赤龍帝”　　を飲み込むハメとなったレイヴエルだった。

イツセーは赤龍帝の籠手を発現させ、鋭い瞳でレイヴエルの胸を中心に全身をくまなく観察、数秒してからようやく警戒を解いた。

「……………ふう、幻術じゃないな？　ええと、確か、焼き鳥野郎の妹か？」  
「レイヴエル・フェニックスです！　それよりなんですか今の反応は!?」

私なにかしました!?　声掛けちゃいけない感じでした!?　バケモノと相対したようなイツセーの反応にレイヴエルは涙目で困惑した。

「あ、ああ、悪かったな、この頃な背後から声を掛けられるとついこんな反応をしちまう癖がついちまったんだ……………特に放課後は、な」

「どんな癖ですか!?!」

その言葉に、好きでついた癖じゃねえよ！　とイツセー答える。

「で、どうしたんだ、こんな所で」

「え、そ、それはですね」

急に冷静になったイツセーに言葉を詰まらせるレイヴェル。

恋心を抱いてからしばらく会っていないかったせいかな？ イツセーの顔つきが最後に見た時よりも精悍に見えるのだ、特にその目は以前よりキリツとしており、身体は一回り大きくなるも、以前より締まった様に感じる。

「それは？」

「け、眷属を見に来たんですわ」

「眷属？ そうか、上級悪魔だもんな、眷属くらいいるか、でも、ここに來たって事は駒王学園関係者か？ 今更だけどここの学校は悪魔が多いなあ……ところで、その眷属って女の子？」

「なんでそんな事を聞くのですか？ ……いえ、その顔を見れば分かります。しかし、赤龍帝には残念でしょうが男性ですわ」

「なんだ、野郎か」

イツセーはそう心底残念そうに呟いた。それにレイヴェルがムツとする。

「なんだとはなんですか、私の眷属は素晴らしいですわよ？ 赤龍帝なんて五秒でノックアウトしてくれませう！」

「へえ、凄いな、でも俺もこの頃かなり強くなってるぞ？ 以前の俺と思うなよ」

そう言って軽く構えるイツセーには、なるほど確かに隙がない。

レイヴェルはそんなイツセーの姿にドキっとした。

「お、面白いですわね、では赤龍帝！ 私の眷属と戦ってみたらいかがかしら？」

「マジで!? 良いよ！ すぐ戦おう、今日戦おう！ そっちが良いなら毎日戦おう!!」

「な、なんでそんな積極的なんですか!？」

「いや、ただ戦いたくなっただけだから！ 理由なんて他にないよ？ 俺はただ、レイ

ヴェルの眷属と戦いたいだけだから！」

「はっはっは、嬉しいこと言ってくれるねイツセーくん」

その声にイツセーは凍りついた。

「あ、ジークフリート、こんにちは、昨日振りですわね」

「ええ、我が主、主はイツセーくんとお話し中でしたか、邪魔をしましてしまい申し訳ありません」

「いえ、別に良いですわ、ちょうど貴方を紹介しようと思ったところですよ、赤龍帝、こちらが私の最初の眷属にして女王、ジークフリートですわ！」

「昨日からレイヴェル・フェニックスの眷属悪魔となったジークフリートです、今後とも



イツセーの譲渡により通常の何倍もの速度で木場が駆ける、向かう先は当然ジークフリートだ。

木場はジークフリートによって作り出された幻術を即座に見破ると右手に持った魔剣を本物に投擲、同時に新たなより強力な魔剣をその手に作り出した。

『魔剣創造』『禁手化』……『黒呪の死剣』死を呼ぶ呪いの刃、その身で受け止めるといい」

刀身から柄まで全てが黒いその魔剣は木場の禁手『黒呪の死剣』である。

つい最近至ったその禁手は伝説の魔剣に近い強度と斬れ味を誇り、傷つけた対象に治癒阻害と毒の呪いを掛ける、そして毒が相手に回れば回るほど木場の傷と体力が回復するというエゲツない能力を持つ剣だ。

その外見も相まって誰に影響されたのかよく分かる剣である。

「死ぬのに受けるのはごめんだね」

投擲された魔剣を軽々と躲し、ジークフリートは木場を迎え撃った。

次の瞬間、二人の間で剣撃の嵐が巻き起こる。

金属がぶつかり合う音が途切れる事なく響き渡り、剣撃の余波で地面に幾筋モノ傷が刻まれる。

双方共に超音速、二人の剣速はあまりに疾い、それゆえにその剣は並みの者では影す





イツセーの呼び掛けにギヤスパーが『停止世界の邪眼』を発動、讓渡で力を得たギヤスパーは呪詛返しを受け自身を停止させながらもジークフリートの足だけは止める事に成功した。

「はあああああッ!!」

そこに木場の猛攻が襲い掛かる。

さしものジークフリートでも、文字通り足が止まった状態で動きが倍化した木場の剣を受けきるのは難しい。

故にスタイルを剣主体から魔法メインにシフトする、絶大な魔法力がジークフリートから迸り、彼の周囲に常時張られた高密度多重障壁が力を増す。そして障壁は捌き切れず直撃コースだった木場の剣の悉くを遮断した。

木場はこの障壁を自分では破れないと判断、魔法攻撃を警戒し即座にジークフリートから距離を取る。

そして、この行動はイツセー達への合図でもある。

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost!!?』



セーは高めた力の全てを譲渡する。

すると、籠手から生える聖なる刃に凄まじいオーラが集中した。  
そして……。

「部長ッ！ 朱乃さんッ！」

「ええ、行くわよイツセーッ！ 朱乃ッ！」

強大な滅びを纏うリアスが……。

「はい、部長！」

眩く輝く雷光を纏った朱乃が……。

聖なるオーラを迸らせるイツセーが……。

「「はあああああッッ!!!!」」

「「同時にジークフリートに牙を剥いた。」

三人同時の最大倍化攻撃、未熟な彼等ではあるが、その同時攻撃にはかなりの威力がある。それこそ下位の最上級悪魔なら何も出来ずに滅殺されてしまう程の高威力がある。

それ故にその攻撃を脅威と感じたジークフリートは腰から愛剣を引き抜いた。

「……………グラム」

最初から最高潮、鞘から抜いた瞬間、強大無比の魔の波動を放つグラム、ジークフリートはソレを即座に上段に構え、今まさに自身の障壁と接触しそうな同時攻撃に向い振り下ろした。

瞬間、大河の如き強大な光の奔流が天へと昇る。

光の大河は一瞬にしてリアス達の同時攻撃を飲み込むと訓練フィールドに穴を開け、空の彼方へと消えていった。

魔剣の中でも頂点に位置するグラム、その一撃をジークフリートの魔法で限界まで補助、強化すればそれこそ戦神にさえ通じる一撃と化す。

要するにこの結果は驚くことでもなんでもないのだ。

とは言え、こんな超威力の攻撃を撃たれたりリアス達からすればたまったものではない。

「こ、殺す気かツツ!？」

イツセーがリアス、朱乃を脇に抱え、ジークフリートに猛抗議する。

そんなイツセーにジークフリートは何か悪い事した？ といった感じに首を傾げる。

「ちゃんと当たり 〴〵にくい〴〵 場所に撃つたよ？ まあ、一週間くらい前の君なら掠るくらいしたかも知れないけど、今なら余裕で避けれる速度とコースだったでしょ？」

まあ、掠ったら死んでただろうけど。とジークフリートは内心で付け足した。

「余裕全然なかったから！ 超ギリギリだったから！」

「それはキミが二人を助けてから回避したからでしょ？ 二人を見捨ててたら余裕で回避出来たよね？」

「余裕で避けれるって見捨てる事、前提かよ!？」

「いや、あんまりイツセーくんに頑張られるとリアスさんと朱乃さんの回避スキルが上がらないから困るんだ。というかよく助けられたね？ 二人を助けてたら回避出来ないくらいの速度で撃つたつもりだったんだけど、キミ歴代最弱の赤龍帝とか言われてるけど潜在的には案外中堅くらいはあるんじゃないかなあ」

そんな事を呑気に言うジークフリート、彼は微笑を浮かべたまま、膝を曲げ頭を下げる。

そのジークフリートの頭上を死剣が通り過ぎた。

「木場くん、お話中に斬りかかるのは……なかなかいいよ、躊躇なく首筋を狙ったのもいい。以前のキミなら出来なかった行動だと思う」

「模擬戦終了は告げられてないからね、これで死んだらキミが間抜けだったというだけの事だよ」

爽やかだが、どこか黒い笑みで木場が言った。

「はは、いいねえ、そうだ、戦闘中に隙を見せる方が悪い、でもね、一応今日の訓練は我が主に僕の力を見てもらうという目的も含まれていてね？ あんまりいつも通り過ぎると引かれるかなあとか考えてたんだよ？」

「キミ……自分の戦い方がエグいつて知ってたの？」

「そりゃ知ってるよ？ 当たり前だろ、まあ、だから今日はあまり小細工せずに圧倒させてもらおうよ」

そう、言ってもジークフリートはグラムのオーラを完全に抑え込むと、ただの袈裟斬りを放った。

そして、その一撃であっさり死剣は砕かれ、木場は死なない程度かつ戦えはしないダメージを負ってしまった。

「がっ!?!」

木場が驚いた様な顔をする。何故ならイツセーの譲渡は生きていたのだ。さつき木

場が言った20秒も持たないというのはフェイクで、本当はもう少しだけ強化が持続する。

つまり、強化された状態にも関わらず木場は一刀の下に斬り伏せられてしまったのだ。

「ん、何か驚くような事をしたかい？　もしかしてさっきの斬り合いが僕の全力だと思っただ？　はは、それだったら考えが甘過ぎるよ」

教師役が簡単に全力を出すわけじゃないでしょ？　そう言っただけでジークフリートはグラムを天に掲げた。

「でも、今日はサービスだ。少しだけ、死なない程度に本気を出そう、いや、本当に死なないでね？　事後処理が面倒くさいから」

ジークフリートは先のグラムで壊れかけたフィールドを簡易修復、それと同時に数千の魔法陣が天に出現した。

リアス眷属一同は青い顔で、ちよ、やめろ！　と言ったニュアンスの言葉を繰り返す。だが、まあ、そんな抗議くらいでジークフリートがやめる筈もなく……。

「さあ、受けるといい！　【全魔法陣術式解放】」



そして、数千の魔法陣から数万の魔法が降り注いだ。

「どうでしょうか私の戦闘力は」

「非の付け所がございません」

レイヴェルがカクカクと青い顔で頷いた。

強過ぎる。

それが、レイヴェルのジークフリートへの感想だった。サーゼクスに彼を紹介された時、かなり強い、将来有望と言われたが、*“かなり”* が魔王基準でかなり強いとは思わなかったのだ。

というか、つい数日前、魔王レイヴィアさんが何者かに敗北するという、本当か疑わしい記事がゴシップ誌に載っていたが、これは目の前の男のせいなんでは？ とレイヴェルは思った。

だってレイヴィアさんに勝ったのは魔法剣士って書いてあったし！

今更になってレイヴェルは悟った。

「サーゼクス様が私に彼の眷属化を打診したのは女王の変異の駒を私が持っていたか

「らからですわねッ!」

間違いない、これを眷属悪魔にするには兵士8個では足りない、女王1個でも、戦車2個でも足りない。それこそ戦車の変異の駒+普通の戦車の駒か女王の変異の駒でもなければ不可能だ。

「え〜……一つ聞たいのですが?」

「何ですか我が主」

「あ、レイヴェルでお願いいたします主と呼ばれるのは恐れ多いです。もちろん敬語も不要ですわ」

レイヴェルがタメ口を許したのは親しみからではなく、明らかに自分の十倍以上強いジークフリートに萎縮してしまったからだ。

「分かりました。いえ、分かっただよレイヴェル、それで聞きたいこととは?」

「ジークフリートは元異教の邪神でしたっけ?」

「嫌だなあ、人間に決まってるじゃないか」

「俺の知ってる人間とちげえ」

「約束通り一対一の模擬戦で満身創痍となったイツセーが倒れ伏しながら呻く様に呟いた。

「イツセーくん、それはキミが人間を知らな過ぎるだけだよ。僕レベルの人間も居ない

ことはないんだよ？ 世界に十数人くらいは居るかな？ あ、ちなみに、禍の団の英雄派に最低二人はいるから戦う時は気をつけてね」

「……俺、英雄派が攻めてきたら部長達を連れて逃げるわ」  
割と本気でイツセーはそれを決意した。

それはいつも通りの昼下がりであった。

街の公園の一角で一人の男が鞆から弁当を取り出した。

「~~~~♪」

男はご機嫌な様子で布に包まれた弁当——そう、愛妻弁当の蓋を開く。

男の予想通り、弁当は男が望んだオカズが綺麗に並べられ、ご飯には若干歪んだ  
“LOVE” の文字がノリで書かれていた。

国際結婚で日本人の妻は良くこのノリ文字を好んで弁当に作る。

「はい」

男は思わず笑みを浮かべると妻に習い、目を閉じ、両手を合わせる。そして日本の食事前の挨拶……。

「いただきます」

を言うとパクリと一口で “食べられた”

グジャ、ガギジャと強い水気と硬い何かが噛み砕かれる音が聞こえる。

男のすぐ近くのベンチに座っていた女性が目を見開きフリーズする。

そして、その女性が我に返った時、つぶらな瞳の黒い龍と目が合い、公園に大きく  
“短い” 悲鳴が響き渡った。

## 第17話

連日のニュースはそれ持ちきりだった。

それとは『ニューヨーク壊滅』『ドラゴン・パニック』『悪夢の昼下がり』『大魔王襲来』と呼ばれる大事件の報道である。

その内容は荒唐無稽かつ恐るべきもので、多くの者が架空の生物と信じて疑わなかったドラゴン……それが数十万匹、昼下がりのニューヨークに突如現れて街を破壊し尽くしたというものだ。

ドラゴン達はたったの一時間で影も形もなく消え去ったのだが、ニューヨークは完全に壊滅、死者、行方不明者は現在調査中だが最低でも100万人を超えるとされる未曾有の大災害である。

そしてドラゴンが消え去ったの後、空に巨大な三人の銀髪の男が映し出され、その中心の老年に差し掛かった男が人を馬鹿にした口調と内容の話をしたのだ。

要約すると……。

「おじちゃんは大魔王リゼヴィム♪」

退屈で代わり映えしない平和に飽き飽きしてい

るみんなの為に、楽しい娯楽を用意したよ！ 一週間ごとにランダムで適当に選んだ国をドラゴンで襲わせまーす、みんなの頑張つてドラゴンを倒してね！ やったね、リアルモンハンだよ！ みんなの健闘を祈る！ うひやひやひやひやひやひや」

と、いったものだ。

これに各国首相陣は大パニックとなった。彼らはの多くは人外の実在を知っている。故に、そのニューヨークに現れた数十万匹のドラゴンが持つある程度の戦力を理解していたのだ。

……その絶望的な戦力を。

「まさか、こうも早くまた俺らが直接顔を合わせるとはな」

アザゼルが苦笑を浮かべそう言った。

「仕方ありません、此度の件は通信でやり取りするには余りにも大きな問題ですから」  
アザゼルの言葉に沈痛な面持ちでミカエルが答える。

「……すまないな、同盟早々『悪魔』が迷惑を掛けた」

サーゼクスが悪魔を代表して、ミカエル、アザゼルに謝罪する。確かに今回の件は完全に悪魔側の者がしでかした事、故にその責任は悪魔の手綱を握りきれなかったサーゼクスにあったのだ。

「本当だぜ、会議の時も旧魔王の末裔共に邪魔されたが、悪魔は本当に大丈夫なのかサーゼクス？」

「アザゼル、貴方も人の事は言えないでしょう、白龍皇の件は忘れていませんよ」

「へいへい、分かっているって、ちよつとした冗談だ……今回の件、俺らの方で幾つか情報がある、まずそれを話したい」

アザゼルは顔を引き締めると、堕天使側が把握している情報について語り出した。

「今回の件、首謀者はリゼヴィム・リヴァン・ルシファーだ。まあ、これは分かっていると  
思うが奴の協力者に……ヴァーリが居る」

「映像は私も見ました。しかし、彼は戦士ジークフリートによって倒された筈」

その問いにアザゼルは苦々しい顔で吐き捨てるように答えた。

『セフィロト・グラール幽世の聖杯』だ、それが奴らの手にある」

「……あの、厄介な神滅具か」

「そうだ、どんな怪我も病気を完全に治し、種族の弱点すら克服させ、基本能力を大きく

引き上げることが出来……そして、場合によっちゃ死者蘇生すら可能とする神滅具、最悪の相手に最悪の神滅具が渡っちまった訳だ」

ハッ、参ったぜ、とアザゼルはお手上げのポーズを取る。

「だが、なぜ幽世の聖杯がリゼヴィムの手に有ると分かった？」

「吸血鬼だよ、俺んところに少数保護を求めて来てな、代表はエルメンヒルデそいつから聞いた情報だよ……で、分かったのが、リゼヴィムが連れている大半のドラゴンが吸血鬼を聖杯で改造した邪龍モドキらしい、元となった吸血鬼によつて個体差が激しいが最弱の個体でも並みの中級悪魔レベルの力を持っている」

「……それでは吸血鬼は」

「滅んだ。少なくとも生き残りは全体の0.1%に満たないだろう、後は殺されたか邪龍モドキになつたらしい、保護したエルメンヒルデを除いて、主要な吸血鬼はみんな死んだ。向こうで生きていると思われするのは幽世の聖杯の所持者のハーフヴァンパイアのヴァレリー・ツェペシユただ一人らしい、まあ、これも微妙なところなんだがな」

「……そうか」

衝撃の事実場に重い沈黙が訪れる。

「……………」

「……………」



「……………」

その沈黙を破ったのはミカエルだった。

「……………次は天界側で分かった事をお話しします。今回の悲しい出来事で1000万人を超える死者が出た訳ですがーこの亡くなった方々の魂が全く天界に来ておりません」

「おいおい、事件が起こったのはニューヨークだろ？ お前らそんなに信仰が廃れてんのかよ…………とか、冗談言えたら良かったんだが、間違いなく幽世の聖杯の仕業だな」

「100万人の魂、一体何に使うつもりか分からないが、途轍もなエネルギーだぞ」

「ハッ、悪魔がわざわざ契約なんてもんしてまで得たいもんだからな、しかし、そんな量、聖杯に注いで何にする気なんだ？」

「……………未だ不明です。しかし、良くない事に使われるのは確かでしょう」

「まあ、簡単に目的が分かりや苦労はねえ、か。でサーゼクス、お前んとも何か情報はあつたか？」

「……………先ずは契約関係で一つ、悪魔と人間の契約数が激減した」

「そりやそうだ、テレビで全世界に宣戦布告した奴が大魔王を名乗ったんだ、誰が悪魔と契約したがる？」

「逆に今回の件で神を信仰する方は増えました」

「ハッ、良かったなミカエル」

「こんなの喜べる訳ないでしょう」

「まあな、で他には？」

アザゼルの問いにサーゼクスは懐から一枚の手紙を取り出した。

「……………リゼヴィムから冥界政府に予告状が届けられた、二週間後、魔王領でテロを起すとの事だ」

「……………大変な事になりましたね」

「……………そうだね」

島でニュースを見ていた勇真とルミネアが深刻な表情で話していた。

「悪魔の総意って感じじゃないけど、まさか、こんな大つぴらに悪魔が人間を虐殺するなんて思ってたなかった、これはまだしばらくこの島で様子を見た方がいいかもね」

「……………そう、ですね」

勇真の言葉にルミネアは答えるも、それは何処か歯切れが悪かった。

「どうしたの、ルミネア？」

「いえ、ただ、私も人の為に戦った方が良いのかなと思ってしまいました」  
戦える力が有るのに我が身可愛さで戦わない、それに彼女は強い罪悪感を抱いているのだ。

「……………下手に首を突っ込まない方がいい、きつと、悪魔か天使か墮天使か、あるいは他の神話体系勢力が対処するはずだから」

勇真は若干の罪悪感を感じながらもはつきりルミネアの意見を却下する。

まず敵の居場所が分からないし、次に何処を襲うかも不明、天使などの組織に協力者として加わる事は可能かも知れないが、使い潰される恐れがある。

勇真は人外をあまり信用していなかった。

「人外が起こした事だ、人外に対処させよう」

「……………はい」

ルミネアはやや躊躇いながらも勇真の言葉に従った。

「しかし、今の俺の力じゃ少し不安だね」

「そうでしょうか？」

勇真の言葉にルミネアは疑問を浮かべる、今のルミネアの戦闘力は並みの上級悪魔を凌駕する。

そして、今の勇真の力はそんなルミネアをも上回るのだ。

「不安だよ、確かに俺は強くなった。でも、万全の時と比べて攻撃力も防御力も圧倒的に低いし、何より出来ることが少なすぎる、単一能力特化で引き出しが少ない奴つてのは強くて対処されやすいんだ」

「なら勇真さんが出来ない事は私がやります。勇真さんにいただいた知識と力を無駄にはしたくありません！」

「はは、ありがとう。でもね、俺自身が出来ないと不安なんだ。あとね、力なんて無駄になつた方がいいんだよ、魔法は戦いに使うんじゃないやなくて日常生活のちよつとした時に使うくらいが丁度いいんだ、寝っ転がったまま、手の届かないところにあるリモコンを手繰り寄せるとかね。それともう一つ、ルミネアは戦闘訓練のせいから少し好戦的になつてるよ」

言われて気付いたのかルミネアに驚愕が張り付く。

「ーッ!? ……すみません、確かに気づかない内に戦闘方面に考えが偏っていました。あんなに戦うのが怖かったはずなのにッ!?」

「人間、そんなものだよ。自信がつけば強気になるし、力があれば試してみたくなる。でも、それに流されると大変な事になる事が多いから注意が必要だ」

そうルミネアと話ながら勇真は空中に契約文書を投影する。

今のルミネアにはそれが何か分かった。それは勇真がランスロットと結んでいる契

約を司る魔法文書だった。

「……とは言え自信が無さ過ぎるのも困りものだ。取り敢えず多少は自身を取り戻す為に一カ月の予定だったランスロットくんの契約を解除しようかな？ エレインちゃん……とつくに壊されちゃたか。まあ、良い。ある程度時間はあったから細工は充分してくれたでしょ」

そう言つて、勇真は魔法文書を消し去つた。

「バイバイ、ランスロットくん」

それと同時に勇真の身体が輝く、契約によつてランスロットに与えていたモノが勇真に戻つて来たのだ。

「……さようならランスロットくん」

ルミネアが静かに目を閉じる。

「……………」

「……………」

「……………あれ?」

しかし、勇真は疑問の声を上げた。

「どうしたんですか?」

「いや、ちよつと待ってね」

勇真はおもむろに左手を伸ばすと海に向かって雷撃魔法を放つ。

そして、雷撃は何事もなく海に着弾、大きな水柱を立てた。

「……………」

それを見て勇真無言、彼は右手を構えると今度は炎熱魔法を放った。

それも当然のように海に着弾、大量の海水を蒸発させ、あたり一帯の視界を水蒸気で奪った。

だが、勇真顔は不可解な現象を見たように強張る。

「……………おかしい」

勇真は小さく呟いた。

「え？ 何がですか、使えなかった魔法も戻ってますよね」

「……………うん、契約で使えなかった魔法は使用可能になった」

「じゃあ、何がおかしいんですか？」

「……………魔法力が帰ってきてない」

その声には強い焦燥が込められていた。

調子を確かめるように剣を振るう。

使えるか確かめるように魔法を使う。

そしてホツとしたようにジークフリートは息を吐き出すと。彼は静かに目を閉じて

“敵” の姿を思い浮かべた。

「どうしたのですかジークフリート？」

そんないつもと違う彼の様子にレイヴェルは心配そうに声を掛ける。

「……………いや、なんでもないよ」

「本当ですか？ さっきから貴方はおかしいですわ、急に固まったと思ったらいきなり剣を振るうし、魔法まで使うのですから」

「はは、悪かったね、ちよつと、どうしても今、身体の調子を確かめたくなくてね」

「……………本当に大丈夫ですか？」

「ああ、心配ないよ、ただ少しだけいつもより身体と魔法のキレが悪いかな？ でも許容範囲内だ」

「それは全然大丈夫じゃないではありませんわ！」

そう言ってレイヴェルは病院に行きましようとしてジークフリートの手を引く。そんな

レイヴェルを見て彼は良い主人に恵まれたとレイヴェルと彼女に巡り会わせてくれたサーゼクスに感謝した。

「レイヴェル、一つお願いがあるんだけど、3日ほど、どうしても休暇が欲しい」

「……リゼヴィムの件で忙しい時期ですが、良いですわよ。ただし、病院に行つてからです！」

「それじゃあ、ダメなんだ」

「なんで、ですの？」

「どうしても今じゃないといけない、これ以上 “奴” に時間を与える訳にはいかな  
いんだ、そう、本当はもっと早く、昨日にでも行くべきだったんだけど」

そんな事を言うジークフリートにレイヴェルは困惑した。

「貴方は何を言ってますの？」

「こつちの話さ、で、ダメかい？ もし許してくれたらその後10年は休み無しでいい  
だけど？」

「……それは危険な事ですの？」

「危険だよ」

即答するジークフリートにレイヴェルは顔を引き攣らせた。ジークフリートが危険  
と断言する事、一体彼は何をしようとしているのか？



「ひ、否定しませんのね、しかし、ならば体調は万全にしてからの方が良いですわ」  
「……ああ、その通りだ。ところでレイヴエル、君、今眠くない？」

「こんなの真昼間に眠いわけないでわありませんの」

「そうかな、僕は眠いし……君は、寝てるじゃないか」

そう、ジークフリートが言うどレイヴエルは急激な眠気に襲われ意識を失った。

ジークフリートは倒れ込むレイヴエルを優しく抱きとめると、旧校舍近くの木の幹に自分の上着を掛けて座らせた。

「さて、行くか」

そう、ジークフリートは呟くとフェニックスの転移魔法陣を作り出した。

「はじめよう、僕の命運を掛けた戦いを」

そう言ってジークフリートは空間転移する。

行き先はとある南の島だった。



## 第18話

ジークフリートは今日この日まで第一撃をどうしようか考え続けてきた。

一日中考えて来た。

案は初日で100を超え、数日で300に達した。

だが、結局の所、最も有効と思われるのは二つに絞られる。

一つは、友好的に近づき油断した所を斬り殺す。

もう一つは不意打ちで超高威力、広範囲攻撃を遠距離から叩き込む。

そして、ジークフリートが選んだのは後者だった。

島の上空に転移したジークフリートは即座に島を転移妨害つきの結界で覆う。

そして、彼は逡巡など欠片もせず、その結界目掛けて完全開放したグラムを全力で振り下ろすのだった。

それは危機感を覚え、勇真が身体能力強化をしたすぐの後の事だった。

「うわあ、本当何やってくれてんのランスロットくんは」

知覚速度の倍化によりスローモーションとなった視界の中、勇真は天から墮ちる黄金の奔流を眺めそう眩いた。

転移妨害の結界に超広範囲、超威力攻撃、ランスロットは問答無用でこちらを殺すつもりようだ。

映画とか漫画じゃないんだから人形が造物主に逆らうなよ、そう思いつつ彼は急いで逃げ出す準備をする。

それから0.1秒後、魔帝剣の一撃が島を跡形もなく消しとばした。

「……………」

ジークフリートは鋭い目でグラムに着弾点を睨んでいる。

島は跡形もなく消し飛んだ、島跡地には大量の海水が流れ込んでいる。不自然な魔法反応はない。

普通に考えたら死んだ、ということなのだが。

しかし……。

「……避けたか」

ジークフリートは頭上から襲い掛かった聖短剣をグラムで受け止める。

噛み合う聖なる刃と魔の刃が互いを拒絶し、バチバチと電撃状の聖魔のオーラが周囲に飛び散った。

そして、一秒未満の鏖迫り合いの後、勇真は飛翔術でジークフリートから少し距離を取って剣を構える。

その構えはジークフリートから見ても隙がない見事な構えだった。

これだからコイツは面倒くさい、天才なんだから努力なんかしてんじやねえ、いつも通りグウタラしてろよ、と内心で毒づき、ジークフリートはグラムを正眼に構えた。

「おはようランスロットくん、モーニングコールありがとう。しかし、モーニングコールにしては時間が遅い上、少しばかり殺意を込めすぎだと思ふのだが、なんのつもりかな？」

冗談めかして、勇真がジークフリートに問い掛ける、その言葉にはたつぷりと呪詛が乗っていた。

その呪詛でごく僅かだがジークフリートの感覚が鈍くなる。

そういうえば、言葉には呪詛を込めて話す事は良くするが、逆に呪詛が込められた言葉を投げ掛けられた事はないな、とジークフリートは苦笑した。

「いやいや、万年寝坊助の主人の目を覚ますにはこれくらいインパクトが必要かなと思いましてね、あと僕の名前はジークフリート、その所はお忘れなく」

勇真の問いに、こちらもたつぷりと呪詛を込めて返すジークフリート。しかし、勇真は特に呪詛の影響を受けた様子はない。

それにやはりか、とジークフリートは内心で勝率が更に下がった事に溜息を吐く。

「はは、面白いことを言う。俺は君にランスロットという名前をあげた。ジークフリートの身体を乗っ取ったからってそれを捨てるなんてとんでもないと思わないのかい？  
しかも、俺はジークフリートを殺せと言ったが身体を乗っ取れと言った覚えはないが

「？」

勇真は口では笑いながらも目が全く笑っていないあからさまな作り笑いをしながらジークフリートを遠回りに咎めた。

「ふふ、主人が命じたのはジークフリートの殺害ではなく無力化でしたよ？　今、ジークフリートは、いや、元ジークフリートは無力化されています。その為、命令に反しているとは思いませんか？」

それに対し、ジークフリートは主人と言いつつ全く敬った態度を見せずに、お前の命令が悪いんだよ、と解釈出来る言葉を返し、隠していない忍笑いで勇真を挑発する。

「そうか、分かった。俺の命令の仕方が悪かったようだな、頭の残念な君では理解出来なかったか。では、それはいい。だがいくつか聞かせてもらおう、俺の命令は全てちゃんと果たしたか？」

「ちゃんと、と言われてしまうと微妙ですね、少しばかり　『僕の解釈』　で命令を実行しましたので」

「人形が自分の解釈で動いた？　はっはっは、これは傑作だ！　君はとんだ欠陥品だね、つまり、悪魔になったのもランズロットくんの解釈ってこと？」

その言葉には、黙って命じられた事だけしてろ、そんな意思を込められていた。それにジークフリートは肩を竦めた。

「ええ、その通りです。主人は僕に悪魔になるなどは命じなかった。あと僕はジークフリートですよ、数秒前の会話もお忘れですか？」

若年性アルツハイマー？ そう首を傾げて挑発するジークフリートに勇真は青筋を浮かべそうだったが、戦闘中に怒るのは単なる隙を作る行為だと、自分に言い含め、不敵な笑みを保つ。

「その言葉はそっくりそのままお返ししよう……いや、そこまでランスロットという名が気に入らないなら他の名前をあげようじゃないか、そうだなあ、ガラクタくんなんてどうかかな？」

「ハッ、主人のセンスを疑いますよ、中学生ですか？」

「いやいや、いい名前だと思うよ？ まあ、ガラクタくんの言う通り俺って中卒だからね、これ以上いい名前なんて思い浮かばないなあ、あ、ガラクタくんがどうしても気に入らないならスクラップくんなんてどうかかな？」

「はは、どうぞご自由にどうぞすぐと呼ばれなくなる名です」

「そうだよねー、すぐに本当のスクラップになっちゃうもんね……まあ、冗談はここまでで、どうして、そしてどうやって俺を裏切った？」

「どうして……本気で言ってますか？ 主人は自分の存在理由が〃とあるダメ人間〃のアリバイ作りと邪魔者排除で、それが終わったら即人生終了だったとしたら、受け



入れますか？」

え、本気で分からなかったの？ そんなニュアンスを込めてジークフリートが言う。

それに対し、勇真は。

「いや、もちろん無理。でも君は人形じゃん」

と応える、自分勝手過ぎる言い分にジークフリートはイラツとした。

「酷い事言いますね、高度な知性を持たされた人形は人間と大差ありませんよ？　そも

そも、僕の人格の半分は主人の性格をトレースして出来たモノなんですが？」

「俺は君ほど性格悪くないよ？　何かの間違いじゃないかなあ？」

「いやいや、僕の性格の悪さなんて主人の数分の一にも満たないですよ……まあ、今の性格はだいぶジークフリートに影響を受けているんだけどね」

そう、ジークフリートはあからさまな慇懃無礼な言葉遣いを止めると、乗っ取った

ジークフリート　「ぼい」　口調で言った。

「はは、じゃあジークフリートの性格が悪かったんだな。もう、せつかくいい子に作ってあげたのに、そんな　「バッチイ物」　取り込むからいけないんだよ、拾い食いはダメって親に習わなかったの？」

「悪かったね、あいにく　「親の」　常識が欠けていたのか習わなかったんだよ」

「それは親の顔が見てみたい。まあ、子供をエクソシストにする様な親だ、どうせ口で

もない奴だろうけどね」

「はは、違くない、子供を使い捨ての道具にする卑劣な奴だからね、あ、鏡を貸そうか？」  
「いや、結構だ。それでどうやって裏切った？　そもそも君は俺を裏切れる様に作ってないんだが？」

「ふふ、あの時、主人は曹操に敗北したショックで若干冷静さを欠いていた、その為、全装置の作り込みがいつもより甘かったんだよ。ああ、本当この点は曹操に感謝しなければならぬね」

「……………マジで？」

「マジだよ。単なる主人のミスだ」

「マジか、時間を戻してこのポンコツどうにかしてえ……………いや、ルミネアと仲良くなれたし戻れたとしても戻らないか」

もう一度なれるか分からないし、あと曹操死ぬ、と勇真はナチュラルな惚気と曹操への恨み言を言う。

「……………バカップルかい？」

ジークフリートが呆れたような馬鹿にしたような雰囲気で告げるが勇真は気にせず肩を竦めた。

「はは、言われたことないなあ、ここ最近ルミネア以外と会ってなかったし、それに……………」

別に時間を戻さなくても目の前のスクラップくんをさっさと廃棄処分すれば良いだけの事だからね」

「フツ、出来ると思ってるのかい?」

「余裕余裕、スクラップくんこそ、人形如きが造物主に勝てるか思っちゃってるの?」

「それこそ余裕だね、漫画やゲーム、映画で良くあるだろ? たいていこういう場合は造物主が負けるんだよ」

「はは、人形の癖に生意気、あとそういうのはね……主人公になってから言っただけでね脇役くん」

「じゃあ、今から僕が主人公だ……さて」

「主人、小細工の準備は整ったかい?」

「さてね、そつちはルミネアの探索は終わったか?」

その言葉を最後に、二人は時間稼ぎの無駄話を終了する。

そもそも、本来会話など不要だったのだ、勇真にとって反逆した人形の言葉など何一

つ信用するに値しない。

どんな理由があろうともジークフリートは勇真を殺そうとした。ならば勇真が取る対応は廃棄処分ただ一択、そして、ジークフリートの目的も勇真の殺害ただ一つ。

故に、これから起こる戦闘に避けられない必然だった。

南国の空に強大な雷が迸った。

## 第19話

これもダメか。

ジークフリートは最速で放った高位雷撃魔法があっさり無効化され落胆した。転移妨害結界、言霊呪詛、その二つの時点でおおよそ見当はついていた。

……自分の魔法は勇真に殆ど通用しないと。

そもそも、悪魔になったとはいえ自分は勇真に作られたモノだ、そして自分が使う魔法は全て勇真の魔法力によって形成されたモノである。

故に自分が放った魔法の支配権を奪われ勇真に攻撃が到達する前にただの魔法力に戻されてしまうのだ。

だが、問題はない。

やりようならいくらでもある。

ジークフリートは雷撃を無視しながら高速で迫る勇真に複数の黒鉄のナイフを投げ

つけた。

魔法で軌道を修正し、それぞれ別々の速度、タイミングで黒鉄のナイフは勇真に迫る、これはむしろ完全な同時攻撃より対処が難しい。

だが、勇真は自身の前方に加速用の魔法陣を作り出すとそこに自ら突入、身体を捻り、正面から来る二本を躲すと側面、後方から来るナイフを引き離し、超高速でジークフリートに接近、剣の間合いまで距離を詰めた。

一瞬にして接近されたジークフリートだが彼は冷静だった。

勇真同様知覚速度を倍化しているジークフリートの目は超高速の勇真の飛翔も、幼子が投げた小石の様な速度に映る。

ジークフリートは突撃の勢いそのまま刺突を放った勇真を躲すとその首目掛けてグラムを一閃する。

グラムは吸い込まれる様に勇真の首に迫る。

そして、グラムは空を斬った。

瞬間高速転移魔法！ ジークフリートが使えぬ数少ない有用な魔法だ。

「……………」

勇真が転移したのはジークフリートの右後方、つまり、今、ジークフリートが体制的にも視覚的にも最も対応し辛い場所。

ジークフリートは呻く。

それを合図に勇真の猛攻が始まった。

刺突から始まる高速連撃、ジークフリートは無理な体制を強いられながらこの聖剣乱舞に対処する。

防御魔法は意味をなさない。そんなものは勇真に接近された時点でレジストされた。

ジークフリートはレジストされつつある身体強化と飛翔魔法を必死に維持しながらこの不利な体制を立て直そうとする。

しかし、勇真はいちいち体制を乱す様な軌道で連撃を放って来る、こちらの  
意  
を読んだいやらしい剣捌き、その動きにジークフリートは確信を持った。

このままでは敗北すると。

だが、ジークフリートは当然そんな結末認めない。

彼は左手に黒鉄のナイフを作り出すとほぼ後ろを向いたまま、手首のスナップだけでそれを投擲する。

その至近距離からの投擲を勇真は当たり前の様に避ける。

だが、時間は稼げた……0.02秒に満たない僅かな時間だが、確かに稼げた。

ジークフリートは極限の集中力で刹那の間に黒鉄の盾を背後に形成、それを勇真に斬り裂かせる。

それにより生まれた更なる隙にジークフリートは一気に体制を立て直すと勇真を転移阻害の結界に閉じ込めた。

直径5メートル程の結界は勇真の魔法力で作られたモノではない、ジークフリートの魔法力で形成されたモノだ。

故に、先程までの裏技的な無効化は出来ない。

勇真が結界脱出に必要な予想秒数は約3秒、それはこの高速戦闘に置いてあくびが出る程の長時間だった。

ジークフリートはニヤリと嗤うと一瞬で勇真が魔法をレジスト出来ない距離まで飛翔、そこからクルリと振り向き黒鉄のナイフを形成、形成、形成、形成、形成、形成、形成、形成。

僅か2秒で千の黒鉄のナイフと数千の加速魔法陣を形成、結界に囚われている勇真



に全方位から魔弾の雨を掃射した。

当たれば必殺、逃げ場は皆無。

その最速の包囲殲滅攻撃に対し、勇真は心を落ち着けて対処する。

「フウ……ッ！」

神器を完全稼働、身体強化を最大に、そして『天閃』を全力発動、この三重強化により勇真は一瞬だけ神話の英雄を上回る運動速度を得ると、初めに到達した魔弾に聖短剣の剣先で “チヨコン” と触れる。

それだけで魔弾はあらぬ方向へと飛んでいく、いや、それだけではない、後続の魔弾を巻き込み、包囲網に小さな穴を開けた。

その小さな穴に臆せず勇真は飛び込んだ。

魔弾同士の衝突で砕けたナイフが多数の傷を勇真に刻む、だが、勇真は破片を出来るだけ体捌きで躲し、受けた破片は身体強化と障壁魔法、そして回復魔法で耐える。

そして、勇真はなんとか僅かな時間を稼ぎ転移する。

転移先は言わずもがな、大技で隙を晒したジークフリートの背後だ。

「ーッ!?!」

背後に転移した勇真にジークフリートは即座に反応する。

だが、僅かに遅い、極々短時間の事だがこの瞬間だけは勇真の方が疾い！

勇真の袈裟斬りがジークフリートの背中に大きな傷をつける。

それは致命傷ではない。重症だがまだどうにかなる負傷だ。

そう……勇真が回復魔法を阻害しなければ。

そこで、勇真二刀目、超速の斬り上げと、振り向きざまに放たれたジークフリートの横薙ぎが激突する。

それを皮切りに勇真とジークフリートの間で剣戟の嵐が巻き起こる。

聖短剣と魔帝剣が噛み合う度に衝撃で大気が揺れ、聖魔のオーラが迸る。

この斬り合い、押しているのはジークフリートだ。

聖魔の刃が噛み合うのは常に勇真の身体のおぼ、そう、勇真はジークフリートの剣撃を魔法障壁まで持ち出し辛うじて凌いでいる状況なのだ。

何故なら瞬間最大身体強化は既に切れている、三重強化から二重強化に、そして先程無理をした反動で勇真の速度は大幅に落ちている。

今の勇真の運動速度はジークフリートの半分、いや、ジークフリートの身体強化を邪

魔しているにも関わらず三分の一程しかない速度だ。

だが……。

「……………クツ」

呻くのは常にジークフリートだ。

確かにこの剣戟はジークフリートが押ししている、それは間違いない。

しかし、押し切れない、倍以上の速度差があるにも関わらず！

それは勇真の剣技がジークフリートを上回っているという事、更に彼が魔法障壁に加え防御主体で剣を振るっているからだ。

この現状にジークフリートは焦る、何故なら彼には時間がないからだ。

勇真はこの剣戟の中でも自身に回復魔法を掛け先の負傷を回復しつつある。

だが、ジークフリートは勇真に魔法を阻害され回復魔法どころか身体強化と飛翔術の維持で精一杯、ジークフリートの魔法力で回復魔法を掛けるもそれは治癒阻害の呪いに邪魔されてしまう。

つまり、このまま勇真に近くに居られるとジークフリートは傷を治せない。そして彼は今も絶えず血を流し続けていた。

「……ッ、いい加減に離れろッ！」

「フツ、男に言うのは気が気が引けるけど、君が //死ぬまで離れない！」

黒い笑みに呪詛まで込めて勇真は口撃を放つ。

その容赦ない姿こんな状況なのに思わずジークフリートは笑ってしまふ。

ああ、流石によく似てると。

ジークフリートはここでちよつとした賭けに出る。彼はこの剣戟の最中、グラムのオーラを解放する。

それは当然大きな隙となる、そこに勇真の剣が襲い掛かった。

それをジークフリートはグラムを持たない左手に黒鉄の小盾を作り受け止める。当然、強化魔法を使えない現状、聖短剣の前では黒鉄の盾など紙切れの盾に等しい。

だが、紙切れも馬鹿に出来ない。紙だろう厚みがあれば多少は動きを阻害する。ジークフリートはその速度が落ちた聖短剣を左手で鷲掴みにした。

それによりジークフリートの左手は爆弾を握り締めた様に爆散する。

だが、これでいい、斬撃は止めた！

ジークフリートは解放出来るだけのオーラを解放すると至近距離からグラムの大斬撃を勇真に放った。

大ピンチ！ この攻撃を勇真はギリギリの所で転移魔法で回避する。

これによって勇真の魔法妨害が一瞬切れた。

その瞬間、ジークフリートは最大速度の飛翔術で勇真から距離を取ると、転移を警戒してメチャクチャな軌道で飛び回り、海面に高速で突っ込んだ。

ミサイルが着弾した様な巨大な水飛沫が立ち昇る。

そして、ジークフリートは海中で身を潜めながら解呪魔法で治癒障害を消しさり全力で回復魔法を自分に掛けた。

それからおよそ2分、ジークフリートは勇真から逃げ切ると、左手まで再生させた完全な姿で勇真の魔法妨害が及ばないギリギリの距離で彼と相対した。

ジークフリートが逃げている間、勇真も回復に努めたのだろう、彼の姿も完全な無傷、これで勝負は振り出しに戻った。

「ー様に、〃傍目からは〃 見える。」

だが、状況は圧倒的にジークフリートが有利だった。

「本当に強かったよ、流星は僕の創造主……でも、僕の、勝ちかな？」

「……………」

ジークフリートの勝利宣言に勇真は無言、彼の顔には戦闘開始から初めて焦りが浮かんでいた。

ここまでの魔法力の消費は勇真が1とするとジークフリートは3〜4だ。この数字だけ見れば圧倒的に勇真が有利なように見える。

だが、残りの魔法力量で見るとジークフリートは残り85%、そして勇真は残り10%と圧倒的に勇真が不利なのだ。

それはそうだ、ジークフリートの総魔法力量は勇真の20倍。多少のロスがあろうと先に魔法力が尽きる事はないのだ。

「さて、ここからはチマチマ削らせて貰うよ、あ、逃げたかったら逃げててもいいよ、もちろん隠れてもいい、結果は見えてるからね」

「……ハッ、人形が言ってくれるね」

勇真はそうジークフリートを嘲笑うが、その声に力はない。

それに対し、ジークフリートは口端を釣り上げる。

「いや〜ごめんね、造物主くん、映画の主人公みたいになっちゃって」

この会話の間も、ジークフリートは油断なく多数の黒鉄のナイフと加速魔法陣を

作り出し、勇真を削る準備をする。

もう、ジークフリートは勇真に接近させるつもりはない、そして、逃げさせる気もない。この場で殺す、確実に消す、それだけを考えジークフリートは冷徹に勇真を削る手順を考え始めた。

そんなジークフリートの姿に勇真は溜息を吐くと諦めたように両手を上げた。

「……はあ、降参、助けて下さい」

「却下です。というか降伏する気ないでしょ？ 呪詛飛ばさないでよね」

勇真の降伏を蹴り飛ばし、ジークフリートは両手をあげる彼には複数の魔弾を極音速で放った。

それを勇真は体捌きで躲す、そこに更なる魔弾をジークフリートは放つ、数十、数百と放つ、勇真が避け辛い速度で、転移を使わざるを得ない量で。

これを何度も何度も繰り返し、ジークフリートは勇真を削り切るつもりなのだ。

そんなやり取りが数分続く。

「はッ、はあ、は、はあーッ!？」

勇真は息も絶え、辛うじてジークフリートの魔弾を躲し続ける、しかし、その動き

は当初と比べかなり落ちている。

おそらく、あと1分、長くとも2分以内に勇真は完全に魔法力を使い果たす。

それが分かっているながらジークフリートは手を休めない、万に一つも逆転されない様に、逃がさない様に、確実に勇真を殺せる様に。

そんな時だった。

いきなり勇真の身体が輝いた。

「ツーン!」

そして、勇真の魔法力が回復する。

「これ、は、契約魔法ツ!」

魔導人形などに使われるそれは術者の魔法力や属性を人形か、パスが繋がった相手に貸し与える魔法である。

この魔法が使えるのはこの世界でただ三人、勇真とジークフリート、そしてルミネアだけだ。

これにより一気に勇真の魔法力が全開近くまで回復する。

だが、だからと言って、それが良い事とは限らない。



状況は依然として勇真が不利だ。いや、違う、更に不利になった。

「ふふ、弱点見つけ」  
ルミネア

ジークフリートは酷薄な笑みを浮かべ反転、勇真への攻撃を止めると一気に魔力反応があつた場所に飛翔術で向かう。

「ーッ!? 待てッ!」

「ハッ、そう言われて待った奴がいたかい?」

ジークフリートは一気に加速、勇真を引き離し、契約魔法が発動したと思われる地点へと急いだ。

勇真は飛翔術と瞬間転移魔法で追いかけるも瞬間転移は長距離を飛べないので飛翔術の速度差でどうしても追いつけない。

それでも勇真は諦めずにジークフリートに食らいつく。

全ては、彼を倒す為に。

見えた、僕の方が速い! ジークフリートとはとある無人島の岩場にルミネアが居るのを発見する。

彼女は勇真の勝利を祈っているのか目を瞑り、手を組んでいる。

それは正に隙だらけだった。

ジークフリートは振り返り、勇真との距離を確認、自分の勝ちを確信した。

この距離差ならルミネアを人質に取る事は充分可能だ。

なんのつもりか知らないが、勇真はルミネアを命をに変えても守るといふ魔術契約を結んでいる。つまり、彼女さえ人質に取ってしまえば勝ち確定。

そして、ジークフリートは超速の飛翔術で彼女の背後に回り込むと、その首にグラムを添えた。

「僕の勝ちだ、勇真おとなし」

それはズブリという音だった。

何が起こったか、理解出来ない。

ジークフリートは呆然と自分の胸に刺さる聖短剣を……「ルミネアごと」自分  
に刺さる聖短剣を見下ろした。

そんな、混乱するジークフリートを無視して、勇真は聖短剣を「捻る」これに  
より一気に傷口は広がり、更に治癒阻害と猛毒の呪詛がジークフリートの体内に送り込  
まれた。

そう、これは完全に致命傷だった。

「バ、かな、君は魔術契約でルミネアを傷付けられない、はずッ……どうしてッ!？」

「え、そんな魔術契約、結んだ覚えはないよ?」

先程までの焦燥が嘘のような顔で——いや、嘘の焦燥の顔を脱ぎ捨て、勇真はジークフリートを嘲笑った。

「魔術契約についての会話を君と俺の間でしたかな? いや、してないよね、だって俺がそう錯覚する様に君に呪詛を掛けただけだから。最初の方に自分で言ってたじゃないか。『小細工の準備は整ったかい?』ってね」

今だから言うけど、あの時点で準備万端だったんだ。と会心の笑みで勇真は言う。

「だと、しても、愛した女だろッ!!」

「あく……愛とか正直まだ分からないんだけど、確かに俺はルミネアが好きだよ、自分の命と同じかその次くらいには大事だ、でもね、俺はルミネアが好きだけで彼女の人形まで好きになったつもりはないよ」

「人形、まさかッ!？」

その言葉と同時に “ルミネア” がドロリと溶けると、ジークフリートにへばりつき彼の身体を拘束する。

「ルミネアが自分の魔法力のほぼ全てを込めて作った魔導人形だ、外見、魔法力の性質、保有量、その全てが本物とほぼ同じ、君がルミネア本人と錯覚するのも無理ないよ、増してや俺の呪詛で魔法感知能力が低下していれば尚更ね」

「あ、この子名前はグイネヴィアちゃんね、彼女を介して契約魔法でルミネアから魔法力を貰ったんだ。あと、思い返してみなよ、なんで俺は君が逃げ回ってる時に後々不利になると分かっているながら逃げ出さなかったかを？」

確実に君をここで始末する為だよ？ そう、言いたくてたまらなかつた事を言えたようなスツキリとした顔で勇真はジークフリートの疑問に答えた。

「まさか、最初からツッ！」

「ご名答、ルミネアの位置が分かれば、俺が命に代えても守るなんて魔術契約を結んでいと錯覚していれば、必ず君は彼女を人質にする、そう、確信していたよ、だって俺が君の立場ならそうするし」

勇真の笑顔が会心のモノから冷酷な笑みへと変わる、それはあたかもラスボスの様な笑みで、少なくとも勇者が浮かべる様なものではなかった。

「クツソ、勇真アアアツ!!」

「はは、人形風情が気安く呼ばないでくれるかな?」

ジークフリートが血を吐きながら勇真に手を伸ばそうとする。だが、その努力も弱った身体と魔導人形の呪詛拘束の前には無意味だった。

勇真は聖短剣を引き抜くと、胸を突き刺さした時に奪い返した魔法力を左手に集中、動けないジークフリートの顔面に向ける。

「ありがとう、君のおかげで魔導人形の危険性がよく分かった、次からは絶対暴走しない様に多少スペックが落ちるとしても高度な知性なんて持たせない様に作るよ」

このグイネヴィアちゃんみたいだね。勇真はそう言つて勇真は左手に灼熱の火炎球を作る……そして。

「さよならランスロットくん」

火球が放たれランスロットの顔面に直撃、彼が一瞬で炭化、蒸発するとほぼ同時に島全体を揺るがす大爆発が巻き起こった。

## 第20話

「はあ……疲れたあ」

勇真は深い深い溜息を吐いた。

自分で作った人形に殺されかけるといふ馬鹿みたいな、それでいてとんでもない危機からなんとか脱した彼はゴロンと岩肌に転がった。

そんなことをすれば普通メチャクチャ痛いし怪我をする、だが強大な魔法障壁を有する勇真からすれば岩肌に寝っころがるのも、布団に寝転ぶのも大差ない。

余程疲れたのだろう、彼はボーと空を眺めながら独り言を呟いた。

「もう、今日は動かない、ルミネア連れて家帰って寝っころがって二ちゃんでも………ああゝツ?! 家もスマホもパソコンも島ごと消されちゃったじゃんツ!ーオノレ、ランスロットオオツ!!」

ああ、データ移行出来ねえ、ソフ○バンク行くの面倒クセエ、と勇真は呻いた。

今日一番のダメエージである。回復魔法で治せないのが困りものだ。

「……………はあ、もういいや、ルミネア拾って実家に戻ろう」

そう言つて勇真は寝っころがりながら指をパチンと鳴らす、その音を媒介として探索魔法を発動、探索網は周囲一帯を音速で駆け巡り三十秒後にはルミネアの現在地を補足した。

しかし……………。

「……………あれ？ この反応ってイッセー？ と、リアス眷属ッ!？」

勇真はまた面倒事が起こった気がして頭を抱えた。

……………どうしよう。

ルミネアはとても困っていた。

勇真に言われて魔導人形を囷に他の無人島に隠れていた彼女なのだが、ジークフリートを追ってきたという悪魔達に捕まってしまったのだ。

いや、特に拘束などされている訳ではないので、捕まったというよりは保護されたというのが正しいか。

「(こういう言い方はおかしけど、良い悪魔さん達だなあ)」

ルミネアはそう思った。

何故なら、咄嗟に元エクソシストだと名乗ってしまったルミネアに危害を加えないのだ、三大勢力が和平を結んだとは言え、未だエクソシストに反感を持つ悪魔は多い。

普通、こんな無人島に一人でいるあからさまに怪し元エクソシストが居たら取り敢えず殺る、最低でも無力化するのが悪魔というものだ。逆にこの島に居たのが悪魔で発見したのがエクソシストだとしても同じ状況になるだろう。

にも関わらず、彼らはルミネアに危害を加える事はなかった。なので間違いない、彼らはお人好しで優しい悪魔なのだろう。

ルミネアはちよつとだけ悪魔にも良い人が居るんだなあとホッコリした。

「まったく、ジークフリートはどこいったんだよ」

そう、イツセーと名乗った悪魔が独り言を言う。

「彼の事だ、心配はないと思うけどね」

イツセーの独り言を木場と名乗った悪魔が拾う、彼を見ると何故かゴールドジークと  
いうか単語がルミネアの頭に浮かんだ。

「お外怖いですうう、帰りましょうよお、イツセー先輩ッ！ 祐斗先輩ッ！」

そう怯えるのは茶色い紙袋を頭から被った小柄な人物だった。



ジャージ姿で正確な性別は分からないが小柄な体躯と高い声からおそらく少女と思われる。

「ギヤスパー、まだここに来て30分も経ってないぞ、ジークフリートの扱きを思い出せ、こんなの全然怖くなくなるぞッ！」

そうやってイツセーは身震いした。

「嫌ですう、そんなの思い出したくないですう、そもそも、あの人がどうこうなるはずないじゃないですか！ もう、帰りましょうよお〜」

「はは、念の為だよ、ギヤスパークン」

こんな感じの緊張感のない会話を繰り返す、三人だが、その姿に隙は殆どない。

今も、ルミネアが変な行動を取らないか、さりげなく見張っている。

囲まれている現状、魔法力を使った瞬間袋叩きに合う、そうルミネアは感じ取り下手な動きを取れないでいた。

「（この悪魔さん達、優しいけど油断がない。お人好しだけど高レベル、うう、逃げれない……でも、それよりも、勇真さんは大丈夫かな、きつと、勝ってくれたよね？）」

彼等が探しているジークフリートという人物がもし、ランスロットの偽名なら悪いが

きつともう、この世にもう居ない。

それを申し訳なく思いつつも、ルミネアはそれよりも勇真の無事を祈った。

その時だった。何者かの探索魔法が使われた。

「（これは、勇真さんの探索魔法！）」

ルミネアは勇真の無事に安堵し、ホツと息を吐き出した。勇真は別れる前に言っていたのだ。勝ったら風系統の探索魔法を使うと。

この探索魔法にルミネアを除いていち早く反応したのはギヤスパードだった。

「……………」の探索魔法、そしてこの魔法力の波長はジークフリートさんですよ！ やつぱり無事じゃないですかあ！ さあ、帰りましょうイツセー先輩！祐斗先輩！」

「なんだ、やつぱり無事だったか、心配して損した」

そう言つてイツセーがホツとしたように呟いた。

しかし、ルミネアはこの会話を焦ってしまふ。

「（あ、そ、そうです！ この悪魔さん達が探しているジークフリートというのがランスロットくんなら勇真さんの魔法力と波長は同一のはず！ こ、これつて不味くないですかッ!!」

指紋と同じように魔法力の波長は一人一人で違うもの、故意に無理矢理同じにするのは難しい上、完璧に同じにするのはほぼ不可能なのだ。

にも関わらず、ジークフリートと全く同じ波長の勇真がひよっこり顔を出したりしたら……絶対に面倒な事になる。

うわあ、面倒くさい、と言う勇真の姿がはつきりとルミネアの頭に投影された。

「……この感じだと戦闘をしている様子はないね、おそらく彼は僕たちの存在に気付いたはずだよ、ならここでしばらく待って彼が合流したら一緒に帰ろうー彼女も連れてね」

そう口にして木場はルミネアを見つめた、その目には強い警戒心が浮かんでいる。

彼には分かるのだ、ルミネアの力量が並みのエクソシストを大きく逸脱しているということがある。

そして、疑っているのだ、ジークフリートの行動にルミネアが関係していると。当然だ、じやなきやこんな無人島で実力者が何をしているというのだ。

その時、新たに通信魔法が四人の耳に届いた。

『イツセーッ！ 祐斗ッ！ ギャスパーツ！』

通信は若い女性の声である。そして、その女性の声色は明らかに焦っていた。

「あ、部長？　ちようど今『今すぐそこから逃げなさいッ！』……はい？」  
イツセーの声を遮って通信の女性ローリアスは鬼気迫る様子でイツセー達に離脱を命じた。

「ど、どうしたんですか？　そんな焦って」

『いいから逃げてッ！　そこにジークフリートは居ないわッ！　早くッッ!!』

「え、でも、今ジークフリートの魔法が」

『ローが返って来た』

「あ、探索魔法だけ掛けて帰っちゃったんですか、あいつ」

『違うのッ！　帰って来たのは、レイヴェルの召喚魔法で帰って来たは、彼女の悪魔の駒だけなのッ！　つまり、死んだのよジークフリートはッ！　殺されたのッ！　その近くに居る何者かにッ!!』

瞬間、イツセー、木場、ギヤスパーはルミネアの近くから飛び退くと、彼女を囲む様な陣形を組む。

そして、即座にイツセーと木場は禁<sup>バランス・ブレイク</sup>手化、イツセーは龍帝の鎧を纏い、木場は死剣を握り締める。

ギヤスパーはルミネアに停止世界の邪眼を向けながら転移魔方陣を作り出した。更

にギヤスパーは左手を複数の蝙蝠に変身させると全方位を警戒するように見張らせる。

「あく、本当に悪いんだけど、そのまま、動かないで一緒に転移してもらえるかな？　この近くにメチャクチャ危ないヤツが居るみたいなんだ……もしかしたら君かも知れないけど」

そう、遠慮勝ちにイツセーがルミネアに告げる。

「……イツセーくん、彼女は眷属じゃない、だからこの魔方陣では一緒に転移出来ないよ」

「ッ!?　さすがにそれは酷いだろッ!　……ギヤスパーなんとかならないか?」

「ま、魔方陣の様式を若干変更すれば大丈夫ですう、で、でも、いいんですか?」

ルミネアをチラチラ見ながギヤスパーが言う。

明らかにギヤスパーはルミネアに怯えていた。

「大丈夫だ、もしこの子がジークフリートを倒した奴なら俺たちはとつくに殺られていくはずだ、それに例えこの子がジークフリートを倒した奴だとしても俺たちが生きてるんだから敵対の意思ないんだろう?　それなら事情を聞きたい」

「……確かに、そうかも知れないね」

「わ、分かりました………様式を変更、問題なく彼女も一緒に跳ます!」

「ど、どうしましょう?」

このまま連れ去られると色々と、そう色々と不味い。自分は良いかもしれないが、勇真が色々と面倒な事になる。

そう、ルミネアは思うも逃げ出す方法が思い浮かばない。

瞬間転移で逃げる? ……無理だ、いきなりの襲撃を警戒しているのだろう、ギヤ

スパーがこの一帯に自身以外の転移魔法阻害の結界を張っている。

飛翔術で逃げる? ……無理だ、これも同じく襲撃に備えた球体状の防御結界からは簡単に出られそうにない。

結界を切り裂いて逃げる? ……結界を壊している間に袋叩きに合います。

三人を無力化して逃げる? ……一対一なら可能かも知れないがそれ以上の人数は不可能。

諦めて一緒に転移し嘘の事情を話す? ……そんなに口が上手くありません。

「ど、どうすればツ?」

そう、ルミネアが焦っていると……。

『話を合わせるか、ちょっと黙っててね』

という、ルミネアだけに聞こえる通信がギヤスパアの結界を抜いて彼女の耳に届いた。

次の瞬間、ギヤスパアの結界が風の切断魔法で両断された。

「ここに居たか、探したぞ」

そう言って、*「黒い霧」*を纏ったローブ姿の男が四人の前に現れた。

その男の登場に、リアス眷属三人は凄まじい重圧感じた。まるで、本気のジークフリートを目の前にした様なプレッシャー、間違いないコイツが……。

「……お前がジークフリートを殺したのか？」

イツセーがそう、問いかける。静だがその声には抑えきれない怒りが滲んでいた。

「ふむ、その通りだ……仕方なくね」

イツセーの言葉に男は軽く答える。

「テメエッ！……仕方なくねというのは？」

男に激昂しそうになったイツセーだが、ジークフリートに何度も言われた『戦闘中に怒るのは単なる隙だ』という言葉を思い出し、努めて冷静さを保とうとした。

そもそも相手はジークフリートを倒した奴だ、自分の遥か格上だ、冷静さを無くしたら一瞬で殺られるッ！

ジークフリートの訓練を経て、イツセーは確実に成長していた。

「ああ、私は彼に、ジークフリートに英雄派に戻って来てもらいたかったのだよ、彼は優秀だったからね、それで、密かに彼に通信を入れた」

「ッ！　そうか、だからジークフリートは一人で、いきなり消えたんだね」

木場が得心がいった様な顔をした。

「その通り、場所を指定し、一人で来るように告げた。そして彼は一人で来た……残念ながら私と戦うためにね」

心底残念そうな顔をして男は溜息を吐いた。

「な、なんでお前からジークフリートさんの魔法力の波長を感じるんだ！」

「ジークフリートの魔法力の波長？………ああ、これが、それはな、元々この魔法力が私のものだからなのだよ」

やけに長い沈黙の後、男は思い出したようにそう告げた。

「……それはいったいどういう事だい？」



「簡単な事だ。私は研究で忙しくてな、出来るだけ前線には出たくなかったのだよ。だから密かに私の魔法力を彼に貸した。私の分も働いてもらおう為にね、それで、彼には実験の結果その魔法力を得たと嘘を言っておいたのだよ」

彼は働きの者だったからね、と男は付け加えた。

「じゃ、じゃあ、ジークフリートさんが負けたのはツ!?!」

「ふふ、気が付いたか、そう、交渉が決裂した為、戦闘開始となった、だから開始と同時に私が魔法力を返してもらったのだよ。そして、動揺で隙が出来た彼を極大魔法で始末した。実に呆気なかったよ」

そう、邪悪な笑みを浮かべ男は告げる。

「……下種が」

木場が吐き捨てるように呟く。

「戦術と言ってもらいたいね、ジークフリートとて私の行為をそう認識しているはずだ……さて、まあ、話はここまでにしよう、彼女を渡してもらおうか?」

「「ツ!?!」」

「「……」」

男の言葉に三人はルミネアへの警戒心を高める。そしてルミネアは無言で防御魔方阵を形成した。

「何を驚く？ まさか私と彼女が無関係だと思つていた訳ではあるまい？ 彼女はね、私の大切な実験体なのだよ」

「実験、体？」

「モルモットと言ひ換えても良いがね……ああ、彼女を渡せば君達は見逃そう、悪くない取引だと思わないか？」

そう言つて男はプレッシャーを強める。

そのプレッシャーは今までイツセー達が敵対した中で最も強く、そして重い。

間違いなく過去最悪の敵。

これにたつた三人で立ち向かうのは完全に無謀な行為だった。

しかし……。

「……………断るッ！」

少し、躊躇しながらもイツセーはルミネアの受け渡しを拒否した。

イツセーの意見に、実験体と聞き自身と境遇を重ねた木場も賛同した。彼は鋭い視線で警戒しながら死剣を男に向ける。

その間、ギヤスパーは再び転移魔方陣を作り出す。彼も決意を固めたのか、僕も男なんだ、と小さく呟き男を睨む。

「……………はあ、交渉決裂か、ジークフリートに言われなかったか？　勝機がないのに立ち向かうのは単なる自殺だと」

男はやれやれと首を振ると、黒い霧を残して一瞬で消える。

高速瞬間転移！　男は一瞬にしてルミネアの背後に移動すると彼女の防御魔法を打ち砕き、彼女を拘束、そして、ルミネアの方を振り向いた三人は猛烈な暴風を叩きつけられ吹き飛ばされてしまった。

「ハハハハ、彼女は返してもらおう、君達はここ死……いや、君達如き殺すまでもないか？　私は実験で忙しいのでねこころらでお暇させていただけよう」

「ま、待てッ！」

転移で消えようとすると男に、鎧で最もダメージが少なかったイツセーが、即座に接近、凄まじい拳打を浴びせ掛ける。

しかし、その拳打を男は動きもせず高密度魔法障壁で完全にシャットアウト。

「弱々しい拳だ、もつと腰を込めて打ってはどうか？　まあ、下手に魔法障壁を抜くと彼女が危ないのだからね」

その言葉に更なる攻撃を躊躇したイツセー、そこに男の凄まじい雷魔法が襲い掛かった。

「ガガガガゴガッ!？」

閃電するイツセーを男は指を指して笑う。

「ハッハッハッハッ! 変な声出すなよ! 笑ってしまっただろう? まあ、健闘賞だ私の名前を教えてやろう。私はゲオルク、英雄派のゲオルクだ! 私と再戦を望むなら英雄派を追うといい、まあ、私は魔法研究以外のことで記憶を割かない主義だからな、もしかしたら次会うときは忘れているかもしれないが、その所は許してくれたまえ」

そして、痺れるイツセーを嘲笑い男ーゲオルクはルミネアと共に何処かへ転移してしまった。

次の瞬間、無人島にイツセーの慟哭が響き渡ったのだった。

「……………悪い事したかな?」

連続転移で追跡を出来なくしてから幻術を解いた勇真が珍しく本気で悪い事したかも、といった顔をした。

「はい、間違いないです」

勇真の言葉にルミネアも同意、彼女の中でもあの勇真の行為は完全に悪い事だった。

「いや、ね、一応、手加減したよ？ 出来る限り傷つけないようにしたし」

「私が捕まってしまったのが悪いのですが、あれはやり過ぎだと思えます。言ってる事もやってる事も完全に悪党でしたよ？」

私、勇真さんにとってはモルモットなんですか？ と、ルミネアがジト目で勇真を見る。

「い、いや、下手に良い奴だとおかしいし、仲間って言ったらルミネアを人質に取られるかもしれないなかったし、それにゲオルクってあんな感じの奴だった……よね？ 確か」

「……勇真さんが演じるゲオルクさんの方が百倍悪役でしたよ？ 完全に悪の幹部でした」

「え、でも、ゲオルクってテロリストで悪の幹部だし……良いんじゃないかな？」  
「………まあ、そう、ですね」

ルミネアは同意するが、歯切れが悪い。どうにも納得仕切れていないようだ。  
勇真はルミネアに謝りながら今度イツセーに会ったら飯を奢ろうと決意した。

……明らかに飯の奢りで帳消しになるレベルの事ではないのだが。

## 第21話

——千葉県房総半島のとあるホテル

「うん、美味しい」

「はい、生でお魚を食べるのはちよつと抵抗がありましたが、慣れるととても美味しいんですね！」

勇真とルミネアは新鮮な刺身に舌鼓を打ちながら今後について相談し合っていた。

「さて、今後について話そうか先ずはイツセー達について、ルミネアは彼らに顔を見られた」

「……はい」

ルミネアが申し訳なさそうに肯定する。

「あ、気にしなくていいよ、それでルミネアは自分の名前を名乗った？」

のんびりと甘エビの殻を向きながら勇真はルミネアに問い掛けた。

「あ、いえ、昔同僚だったマリアというエクソシストの名前をお借りしました。でも、元エクソシストとは名乗ってしまいました」

「よし、問題ない。じゃあ、彼等については大丈夫だね」

殻を剥き終えた甘エビを口に運び、美味そうに咀嚼しながら勇真は言う。

「え、で、でも顔を見られてしまいましたよ?」

「それは大丈夫、彼等には会話しながら呪詛を掛けたから」

「呪詛って事は……認識操作か記憶操作ですか?」

「うん、そうだよ。俺がルミネアの背後に転移した瞬間、彼等は驚いて俺とルミネアを見たよね? その直前、転移して直ぐに俺はルミネアに幻術を掛けた、そこからルミネアは金髪碧眼の女の子になっていた訳だ。で、その時に見た君の姿を “ルミネア” と認識する様に仕向けたんだ、あ、違うかマリアだったね」

そんな、まるで風呂掃除したから湯船入れといたよ。みたいな軽い感覚で言う勇真。

もはや彼は勇者というより詐欺師かマジシャンだ。

「け、結構高レベルの悪魔さん達に見えたんですが、そんなに簡単に呪詛に掛かるものなんでしょうか?」

「身体の自由を奪うとか、気絶させるとかはあの短時間で警戒された複数相手には難しいね、でもこの程度の認識操作なら警戒されてても問題ないよ」

今度、ルミネアも試してみるといい、そう、真鯛の刺身をパクつきながら勇真は笑う。

「そもそも記憶つてのは結構適当な所があるんだ。ルミネアも有るんじゃないかな、車



に乗ってる時に『あ、この道通ったことがある』と思っても実際は全く通ったことがない道だった、みたいな経験が」

その言葉にルミネアも思い当たる節があった。

「あつ！ はい、似たような事なら、前行った教会の近くの家の屋根の色を白だと思っていたら黄色だったという思い違いをした事があります」

「そう、それと同じだ、俺がしたのはちよつとだけその間違いをし易いように操作しただけだけ」

はい、これでルミネア関連は大丈夫。そう言つて勇真はマグロの赤身に醤油をつける。

「あ、じゃあ、魔法力の波長はどうしますか？」

「ああそれね……………ほい、どう、波長変わった？」

「え？ か、変わってます、え？ こんな簡単に波長つて変えられるんですかッ!」

勇真は海鮮丼を食べながら、あつさりと、なんでもない事の様に魔法力の波長を変える。

「他人は知らない、でも俺は出来る、で、ゲオルクの波長については残念ながらどうしようもないね、あの三人の認識を狂わせても他にもランスロットーいや、ジークフリーー

トの波長を覚えている人が居るはずだし、下手に操作するとかえって不自然になっちゃうからね」

「そう、ですね。三人だけ認識がズレてたら明らかに不自然ですもんね」

「まあ、そこはゲオルク（本物）の外道っぷりに期待だね」

あるいは、イツセー達がゲオルクに会う前に俺がゲオルクを消すか、とルミネアに聞こえないくらい小さな声で勇真は付け足した。

まあ、多分、勇真は面倒くさがってしないのだろうが。

死剣と赤腕がぶつかり火花を散らす。

「はあああああッ！」

「ーハッ！ セイツ！」

音速を超える攻防、押しているのはイツセーだった。

当然だ、今のイツセーはリアス眷属最強、赤き龍帝の鎧を纏った彼はパワー、スピー

ド、共にリアス眷属の中で “断トツで” 一番なのだ。

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost!!?』

イツセーは最大倍化で下級悪魔の赤子並の魔力を瞬間的に並の上級悪魔以上まで引き上げる。

「ドライグウツ！ 制御を頼む『身体強化』だッ！」

『任せろ、相棒ッ！』

そしてその魔力で持つて自身に身体強化を施すのだ。

この身体強化はイツセーがジークフリートから教えられモノに出来た数少ない魔法の一つ、発動、維持に使われるのが魔法力ではなく魔力の為、完全に同一の魔法ではないが、ジークフリートが残した遺産だった。

龍帝の鎧により馬鹿みたいに上昇していたイツセーのパワー、スピードがこれによりまた更に数段上昇する。

それは最大倍化から持つて30秒の強化に過ぎない、だが、この短時間だけならイツセーは本気のジークフリートの身体能力に迫る、いや、パワーだけなら完全に彼を上回っているのだ。

「オーグウツ！」

その常軌を逸した身体能力を前に木場は一気に防戦一方となってしまう。

仕方あるまい、速度差は3倍以上、パワーに至っては10000倍以上の差なのだむしろ防戦でも戦えているのが奇跡だ。

しかし、その奇跡も長くは続かない。

イツセーは地面を思いつきり蹴り上げ、超音速の大量の土塊を木場に浴びせ掛けると、その攻撃を対処しきれず吹き飛んだ木場に追いつき、彼の顔面にその剛腕を寸止めした。

「俺の勝ちだな」

「はあ、また僕の負けか」

イツセーの勝利宣言を木場は溜息まじりに首を振ると素直に負けを認めた。

「……………この頃、イツセーくんに全然勝てないな」

少し落ち込んだ様に木場が漏らした。彼の言う通りここ数日、彼はイツセーに負け続けている……………いや、彼だけではない一人を除いて眷属全員がイツセーとの模擬戦で敗北

し続けているのだ。

「そうだけど、身体強化なしなら普通に負ける時もあるだろ?」

「それってつまり、全力じゃないイツセーくんには勝てないって事でしょ?」

悔しそうに木場は言う。さすがに模擬戦での連敗は彼もショックを受けるのだろう。

「そんなこと言ったら木場だって今、全力じゃなかっただろ? まだジークフリートに教えてもらった魔法を使ってないんだから」

「はあ、使う前に負けちゃったんだよ、僕が教えてもらった魔法は使い所が難しいし、寸止めとか出来ないから模擬戦だと使い辛いんだ。あと、防御魔法と身体強化は僕もしてたよ」

「じゃなきゃ最後の散弾に当たった時に死んでたよ。そう言っただけで肩を竦める木場に急いで駆け寄って治療を施すアーシア。」

そんな彼らの様子を見ながら小猫は完全に置いていかれたと、焦っていた。

『キミが一番使えない』

ジークフリートは小猫をそう評した。

彼女にとって本当に悔しく、悲しい事だがそれは事実だった。

アイデンティティーだったパワーと防御力はポジション丸被りのイツセーの完全下位互換。スピードもイツセー、祐斗より遥かに遅く、朱乃の様に中距離、長距離射程の高威力攻撃を使える訳でもない。

また、ギヤスパーの様に他人を補助する魔法も、もちろん時間停止能力も持たず、アシアの様に他者を癒せる訳でもない。

そう、小猫にしか出来ないというポジションが無いのだ。全てが誰かの下位互換、その上、器用貧乏とすら言えないほど得意分野が偏っている。

とは言え、決して小猫が弱いわけではないのだ、ただ、彼女仲間には小猫以上が多数いるそれだけの事なのだ。

「……………」

小猫は無言で強く歯を噛み締める。

「どうしたの？ 小猫ちゃん」

小猫の様子が気になったのか、ギヤスパーが心配そうに話し掛けてきた。

「……………ギャーくん」

「何か心配ごと？ ぼ、僕で良ければ相談に乗るよ」

「……………」

ギヤスパーのこの言葉に、ギヤークン変わったな、と思うと同時に小猫は彼を強く嫉妬した。

イツセーがリアス眷属最強ならギヤスパーは眷属最高の悪魔だった。

どうも彼はジークフリートの魔法が合っていたのか、攻撃、防御、補助と彼から多くの魔法を学ぶ事になる。

それに吸血鬼の特異能力を組み合わせると眷属の殆どが手に負えない存在と化してしまうのだ。

数百匹のコウモリに変身して全方位から攻撃魔法と時間停止を行い、遠距離の複数の仲間にも補助魔法を掛け、その上コウモリの『きゅ、きゅ、きゅ』という可愛い鳴き声は全てが強い行動阻害を敵に与える呪詛という最悪具合。

余程の力量差がなければ、広範囲攻撃を持たない者に勝機はない。

そう、もはや小猫の手の届かない高みにギヤスパーは居るのだ。

そして、彼は対人恐怖症をある程度克服してすらいる。特にそれが顕著になったのは

ジークフリート搜索から帰ってきてからだ。

ギヤスパーが帰ってきたその時、小猫は見たのだ。何か強い決意を秘めた彼の目を。

「私とは大違い」

小猫は暴走してしまうのでは？ という恐怖から仙術を封印して使うことが出来ない自分の不甲斐なさに涙を流した。

「え？ え、えええッ！ ちょ、こ、小猫ちゃん!? ど、どうしたの!? どこか痛い!?」いきなり泣き出した小猫にギヤスパーはあたふたする。

そして小猫は元引き籠もりにこうも心配される自分が更に情けなくなり、声を噛み殺し泣き続けた。

地図が描かれた的がクルクルと回転する。

その的目掛け、珍しく真剣な表情をしたりゼヴィムがダーツを投擲した。

投擲されたダーツはしっかりと的に刺さる。それにヨシ！ とりゼヴィムはガッツ



ポーズを取った。

「ユーグリット♪ どこ刺さったあ？」

「少々お待ちを……………千葉県ですね」

「え〜マジで？ おじさん東京狙ったんだけど？」

ニユーヨークの時は狙い通りだったのに、そう、不満顔でリゼヴィムは言う。

「では襲撃場所は東京という事でよろしいでしょうか？」

そう、問うユーグリット。

「いやいや、分かっているなあユーグリットは、おじさん全世界にランダムに国を襲うつていたじゃん？ 約束は守らないと♪ だから地域もコレでランダムに選ぶんですよ

！ ダ○ツの旅ならぬダーツの襲撃、良いんじゃない？ うひやひやひやひやひや

ひや、あ、ヴァーリキヤン、次の襲撃は千葉県ね、じゅんぴよろぴく〜」

「チツ……………出掛けてくる」

リゼヴィムに言葉を投げ掛けられたヴァーリは舌打ちして、部屋を出て行った。

「もう、ヴァーリキヤン反抗期？ うひやひやひやひやひや！ かわういね♪」

「……………よろしいのですか？ 彼の態度はいささか目に余るのですが」

「いい、いい、問題ないから♪ だって突っ張っても結局おじいちゃんのお願ひには逆らえないわけだし、少しくらい好きにさせてあげないとね、あんまり反抗されるのも面

☆倒♪ また、ストレス解消に邪龍と戦わせるのも聖杯の無駄遣いになっちゃうからねえ♪」

そう、リゼヴィムは孫好きの祖父の様に朗らかに笑った。

あくまで “様に” だが。

ヴァーリはムシヤクシヤしていた。

憎い祖父にアゴで使われる現状、それが彼に与えるストレスはどんな屈辱を受けるよりも強く彼を攻め立てた。

もう、今、ヴァーリはとにかく誰でもいいから戦いたかった。

そんな時、彼は思ったのだ。

そうだ、駒王学園に行こう、と。

何故ならそこには強敵が居る、自分を殺し、こんな最低な環境に叩き堕とした憎い敵が居る。

頭に来る事だが、ヴァーリはリゼヴィムによってかなり強化された。余程相性が良かったのか死んでからしばらく『白龍皇の光翼』はヴァーリの魂にくっついていた。

その為、復活したヴァーリは依然として白龍皇である、それも復活前より遥かに強大となった間違いなく史上最強、未来においても魔王以上の存在が白龍皇の光翼を奪うとかでもしない限りまず超えられる事がない程、圧倒的最強の白龍皇だった。

ヴァーリは確信している、今ならジークフリートに勝てると。

これは驕りでも油断でもない、純然たる事実だ。今の彼は油断さえしなければ万全のジークフリート相手に無傷で勝つ事も不可能ではない、それ程に力を上げていたのだ。

そして、彼は駒王市に向かう、だが、肝心のジークフリートはもう居ない。

もしかしたら、駒王市は終わりかもしれない。

## 第22話

妙だな、とヴァーリは思った。

時刻は深夜、駒王市に訪れたヴァーリだが、ジークフリートの魔法力反応を見つけれないでいた。

「……あれだけ強大な魔法力の持ち主だ、例え魔法力を封印していても俺なら見つけれれると思ったのだが」

今のヴァーリは魔法感知系の感覚も聖杯で強化されている、例え相手が隠れていても見つけられる、その自信がヴァーリにはあった。

しかし、見つけれない。

これはつまり……。

「ジークフリートは駒王市に居ないのか？」

ヴァーリは落胆した。

そういえばジークフリートと戦ったのは駒王学園だが、別に彼が駒王市に住んでいるとは限らない、それに思い当たりヴァーリは頭を押さえた。

「こんな簡単な事に気が付かないとは、苛立って冷静ではなかったか……まあ、いい、ならば知ってそんな奴にジークフリートの居場所を聞けばいいか」

そう言つてヴァーリは気を取り直すと、魔の気配が集中する場所——兵藤家に向かうのだった。

「今更かも知れないけど、悪魔つてハードな生活だな、俺、悪魔になつてからの数ヶ月で1000回くらい命の危機を体験してるんだけど？」

「ハハ、イツセーくん、それはジークフリートの模擬戦も命の危機に含まれていないかい？」

「おお、落ち着き過ぎですよおおおツ!! イツセー先輩ツ! 祐斗先輩ツ! 分かつてますよねこの異常な魔力にいつ!」

そう、ギヤスパーはいつも通りの感じで会話する二人に突っ込みを入れた。

深夜に現れた異常に巨大な魔力、それに飛び起きたリアス眷属は家の外へ出て、様子を伺っていたのだ。

で、その魔力の持ち主は、まるで意図を隠す事なくその強大な魔力を放出しながら

イツセー家へと向かっていた。

リアス達は即座にこの襲撃者と思われる者の力量を悟り、自分達だけでは対処困難と魔王と墮天使総督に応援を要請したのだ。

「ギヤスパー、焦っても仕方ないだろ？　むしろお前は落ち着け、怖いのは分かる、それは俺も同じだ、でも落ち着かないと力を発揮出来ないぞ？」

「ーッ?!」

ギヤスパーは見た、そう彼にアドバイスするイツセー、その顔に若干の恐怖心が浮かんでいるのを。

当たり前だイツセーはこの魔力に思い当たりがある。

かつて神器も使わずに自分を圧倒したあのヴァーリのモノだ、しかも、以前より二回は力を増している。

そう、イツセーにも直ぐに分かる程、魔力の波動は強大になっていた。

それでも、イツセーは冷静さを保とうとしているのだ。

そんなイツセーの姿を見てギヤスパーも勇気付けられ決意を固めた。

「……はい、そうですね、すみません、突然の事で焦りました、もう大丈夫です！」

「よし！ それでこそ男だッ！」

「偉いよギャスパークン……それで部長、副部長、サーゼクス様とアザゼル総督の増援到着予定は？」

木場はギャスパークを褒めると視線をリアス、朱乃に重要な質問を投げかけた。

「……お兄さまの、魔王様の軍勢到着予定は役一時間後よ」

「……アザゼル総督は40分ほどで到着するそうです」

木場の質問に若干顔を青くしてリアス、朱乃が答える。

その軍勢到着予定は絶望的だった。

「ハハ、参りましたねこれは」

「そうだな、本当に参った……と言う事で、あと一時間くらい待ってくれね？ーヴァーリ」

「却下だな」

そう言って、宙に浮かぶ銀髪の少年ーヴァーリはイツセーの意見を却下した。

マジかよ、それがヴァーリを見たイツセーの感想だ。

イツセーは少しだけ期待していたのだ、ヴァーリから以前より遥かに強い魔力を感じるのには彼が全カラーつまり『白龍皇の光翼』の禁手化状態『白龍皇の鎧』を纏っているが故に放つモノであると。

しかし、蓋を開ければヴァーリは神器未使用状態、つまり、ここから更に大幅パワーアップ出来る訳だ。

笑えねえよッ！ イツセーは内心で厳しい現実には唾を吐いた。

「で、お前は何しに来たんだ？ もう、ライバルの俺には興味がないんだろう？」

「そうだな、兵藤一誠には興味が無い、ただ聞きたい事があったから聞きに来たんだ……ジークフリートはどこだ？」

そう、強い戦闘意欲を滾らせてヴァーリは言う。

それにイツセー達は内心で呻いた。

「……それを聞いてどうするんだよ？」

「決まってるだろ？ リベンジさ」

「はは、相変わらざるの戦闘狂、また負けちまうぞ？」

「今度は負けないさ……とは言い切れないか。しかし、今回は最初から油断も慢心もし



ないで戦うつもりだ。そうすれば多分、今の俺なら勝てる」

嘘や冗談ではない、ヴァーリは本当に油断も慢心もしない気だとイツセーは感じ取った。

そして、多分勝てるという彼の言葉も強がりではないと。

「……じゃあ、もしジークフリートの居場所を言えば俺たちに危害は加えないか？」

「せつかく来たんだ、ウォーミングアップついでに戦うつもりだが？」

「いや、そこは『雑魚に興味はない』とか言えよッ！」

「悪いな、俺は力が拮抗した勝負が好きだが、気分が悪い時は蹂躪戦もしたくなるんだ」  
「お前、最低だなッ!？」

「ハハハハ、悪かったな、だかもつと悪いのは弱いキミ達だ……さて、お喋りはそろそろ終わりにしようか？ やったな、この長話で俺相手に3分近くも時間を稼げたぞ、嬉しいだろ？」

「ああ、涙が出るほど嬉しいぜ！ ……部長ッ！ 朱乃さんッ！」

そのイツセーの言葉にリアスと朱乃が両手をヴァーリに向ける。

次の瞬間、ヴァーリの足元に魔法陣が現れる。

そして、閃光が辺りを照らし出し……ヴァーリが消え去った。

「転移、成功ですか？」

「ええ、問題なく戦闘フィールドに送ったわ」

この前の会議襲撃やニューヨーク壊滅の事件を受けて周囲に被害を出さないようにテロ対策用に悪魔陣営はレーディングゲームの技術を応用した強制転移付き特殊戦闘フィールドを空間の狭間に作っていたのだ。

「白龍皇がフィールドを破壊して出てくる予想時間は？」

リアスの言葉に朱乃が高速で魔法陣を操りヴァーリの脱出時間を予測する。

「……………魔王級単独がーセラフォルーさまがフィールド破壊で脱出するのに四時間かかる戦闘フィールドです。もちろん、魔法が得意な者なら転移でもっと早く逃げ出す事は可能です。セラフォルーさまも転移の場合は30分で脱出してしまいました、禁手化状態の白龍皇の予測最大魔力値はセラフォルーさまの約3倍、魔法が得意な場合、最悪10分で脱出されてしまいますわ」

朱乃の説明にリアスが頷く。

「分かったわ、では、私達は8分後にフィールドに突入、そこで白龍皇を応援が来るまで足止めするわ、絶対に駒王市に出してはダメよ？ あのレベルの存在なら一瞬で街が壊滅する。今回は命懸けよ、でも、絶対誰も死んではダメよッ！」

「『『『はい、部長ッ！』』』』」

「それと、小猫」

「はい」

「貴女はここに残って」

「え？」

リアスは静かに、だが有無を言わさぬ口調でそう言った。

「貴女は応援が来たら迅速に転移出来るように、転移座標とフィールド内に入る為の空間封印の解除コードを教えてね、通信で教えると他の、そうリゼヴィム達に傍受される恐れがあるわ」

「……サーゼクスさまとアザゼル総督は無条件で突入出来るはずですよ」

「そうね、でも、他の応援は無条件では入れないわ、解除コードは毎回ランダムで変わる、その解除コードを知ってるのはこの場にいた私達だけ、それは分かるわね？」

「……はい、でもそれなら使い魔を残せば」

なおも小猫は食い下がる、その声色は絶るようで、彼女の目には小さく涙が溜まっていた。

それでもリアスは……。

「小猫、主として命じるわ、残りなさい」

小猫に残るよう命じた。

「……今回は相手が悪過ぎるの、多分敵の軽い攻撃ですら当たればイツセー以外は重症、あるいは致命傷になるわ、だから接近戦はイツセーと祐斗に完全に任せる、そして、私と朱乃、ギヤスパーが遠距離から二人の補助と攻撃を行う、アーシアは殆ど休みなく『聖母の微笑』を使い続けてもらうわ」

「それなら、私は一緒に入ってアーシア先輩を守ります！」

それはもはや懇願だった。

小猫はポロポロと涙を流しリアスに連れて行って下さいと願ひ出る。

それを見て、リアスは辛い表情となる。

だが、それでも彼女は首を縦には振らなかつた。

「ダメよ、アーシアは私と朱乃、ギヤスパーが魔法障壁で守るわ……この障壁は硬い分、あまり大きく作れないの」

「……ッ、私は、お役に立てません、か？」

「そんな事はないわ！ 残るのも大事な役目なの、だからお願い、分かって小猫」

その言葉に、小猫は俯く。

「……………はい、分か、り、ました」

それは嗚咽交じりの震える声だった。

8分が経過し、リアス達はフィールド内に消えていった。

それを悔しさと悲しさと、自分の情けなさで齒を噛み締めながら小猫は見送った。彼女の目は以前とし涙で濡れている。

そんな小猫に……………。

「あ、ら、ら、白音は置いていかれたの？」

——声を掛ける者がいた。

それは懐かしい声だった。

## 第23話

「遅かったな」

万全の体制を整えてバトルフィールドに転移してきたイツセー達を余裕の態度でヴァーリは出迎えた。

「てつきりいきなり襲い掛かって来るかと思っただけ、脱出しなくて良いのか？」

龍帝の鎧を纏ったイツセーが何処かホツとした様な声で言い。

「冗談だろ？ する必要がない、街に被害を出さない為に、キミ達はここに来るしかないのだから……まあ、もしあと五分待っても来なかつたら、脱出しようと考えてはいたがな」

龍皇の鎧を纏わぬヴァーリが軽い口調でそれに返す。

そんなヴァーリの様子を見て……

「……今しかないッ！」

そうリアス達全員が思った。







イツセーの瞬間最大倍化讓渡5連続、そして自身に最大倍化、僅か3秒でなされた高速讓渡と最大倍化により、短時間だがイツセー、木場、アーシアが上級悪魔の上位、そしてリアス、朱乃、ギヤスパーが最上級悪魔に片足を突っ込むレベルの魔力を得る。

それを見てもヴァーリーは『……ほう』と、軽く感心するだけで神器を使う様子を見せない。完璧にイツセー達を舐めている。やはり、つけ込むなら今しかない。

自身は全ての力を引き出し、相手には全力を出させない。

それが格上と戦う際の鉄則だ。

敵が油断している内に、遊んでいる内に、慢心している内に――殺す。

そもそも今のリアス達が魔王以上の実力者相手に数十分も時間を稼ぐなんてほぼ不可能、それよりも、本気を出さない内に殺す方がまだ勝率が高い。

もちろんこれは高リスクの博打だ。失敗すれば相手を怒らせ、格上が即座に本気になってしまう場合もある、つまりベストは殺害、最低でも重症を負わせなければリアス達の死はほぼ確実となる。

だが幸い、敵は『変身』という手順を踏まねば全力を出せない特殊な相手だ。いかに即座に変身出来るとは言え、それでも普通の相手よりも本気を出すのに時間が掛かる。故に通常より時間に余裕がある。

だからこそその決断だった。

「お、いきなりか？　なんだ意外と好戦的じゃないか」

そう笑うヴァーリに答えずにイツセー、木場が飛び出した。

「うおおおおおッ！」

「はあああああッ！」

気合の叫びと共にイツセーと木場は絶妙なコンビネーションの連続攻撃をヴァーリに見舞う。

だが、ヴァーリは余裕と若干の失望が入り混じった表情でそのコンビネーションを軽々と捌いてしまう。

「なんだ、この程度か？　纏うオーラからもう少しはやると期待したのだが」

「悪かったな！　お前と違ってこちとら凡人なんだよ！」

「悪いね、白龍皇、これが僕らの精一杯さッ！」

二人の言葉に更にヴァーリの顔に失望の色が滲み出る。

「……………つまらないな」

期待して損した。そんな表情でヴァーリは軽くイツセー、木場を攻撃する。

——そう、この程度の相手には充分だろうと思われる攻撃をする。

それをイツセーと木場はあっさり回避した。

「むッ!？」

回避から一気に木場とイツセーが加速する。

そう、全てはフェイクだったのだ。気合の叫びも、ヴァーリとの会話も、これが自分達の全力だと、ヴァーリに “錯覚” させる為に行われたブラフなのだ。

「はああああッ!!」

今度こそ本当の気合を込めて木場が死剣を振るう、攻撃を回避され身体が泳いだヴァーリはその斬撃をまともに受けてしまった。

「ぐ、このッー」

遙か格下の相手の斬撃で胸に一文字の傷をつけられたヴァーリ、その怒りで彼は意識を木場に向ける……向けすぎる。

その背に無言でイツセーが剛腕を振るった。

その剛腕がヴァーリにヒット、それと同時にパイルバンカーの様に籠手から射出されたアスカロンがヴァーリの腹を貫いた。

「ぐふおあッ!？」

腹を貫かれたヴァーリが吐血、それに構わずイツセーは刀身を捻り傷口を広げるとアスカロンにパワーを譲渡、聖なる波動を傷口からヴァーリに叩き込もうとする。

「舐めるなッ!!」

だが、流石にそのまでは許さずヴァーリは自身を中心に全方位魔力砲撃でイツセー、木場を弾き飛ばした。

「ブラフとはやってくれるッ!」

ヴァーリは怒りに満ちた表情で自ら吹き飛ばしイツセー木場を睨みつける。

次の瞬間、彼の動きが『停止』した。

ギヤスパアの停止世界の邪眼だ。

最大倍化譲渡により力を大幅に増したギヤスパアはヴァーリの意識が完全に自分から逸れた瞬間、全力で神器を発動、彼を停止させる事に成功した。

しかし、停止は0.1秒も持たない。

それを分かっていた為、停止と同時にリアス、朱乃が最大威力の滅びの魔力と雷光をヴァーリに放った。

ヴァーリが停止から戻つ瞬間、目の前には凶悪な攻撃があった。

普通は直撃する。だが、彼は普通ではない!

ヴァーリは混乱しながらもその攻撃を瞬時に作り出した強大な魔力障壁でなんとか防ぎきった。

そこに、アーシアが放った。 “赤い” 魔力が急接近、その魔力はヴァーリの魔力障壁を素通りし、彼の身体に吸い込まれる様に浸透、そして……

——甚大なダメージをヴァーリに刻んだ。

「がああああッ?!」

予想外の激痛にヴァーリは驚愕の叫びを上げる。

【<sup>リバース</sup>反転】 堕天使が研究段階の性質を反転させる能力である。闇を光に、聖のオーラ魔のオーラに、そして回復魔力は攻撃魔力に。

ある意味で反則的な能力だが、これは未だに研究段階の危険なモノ、ジークフリートが自身の魔法技術を堕天使側に提供した際の対価で教えられた禁じ手、彼がアーシアに残した危険な遺産。

この能力の代償は攻撃魔力の使用不可。

アーシアはこの反転回復魔力以外の攻撃魔力を一生使う事が出来ない。とんでもなく高い代償を払って得た能力である。

だが、それでもお釣りが来る。アシアのこの攻撃は防御不可で回復魔法等が効く相手には、当たればほぼ確実にダメージを与えられるという最悪の攻撃である。

その攻撃力は回復力に比例する。

つまり、重症を完全に治せるくらいの回復力を込めれば、相手に確実に重症を負わせる事が出来るのだ。

全身くまなく酷いダメージを負ったヴァーリ、その彼に再びギヤスパアの『停止』が突き刺さる。

ダメージゆえか、停止時間は先程よりも長い、その時間を生かして眷属最速のイツセーが超音速で接近。

「うおおおおッ!!」

停止しているヴァーリの頭上からアスカロンを一閃、彼を頭から真つ二つに両断した。

「……俺、何か悪い事したっけ？」

そう、勇真は疲れたように呟いた。

「……いつぱいしている様な気がします」

勇真の呟きにルミネアが答えた。

「酷いなあ、俺は結構善良に生きてきたつもりなんだけど」

「……勇真さんの善良は定義が広過ぎると思います」

「はは、まあ、俺は自分に優しくをモットーに生きてるからね、ちよつとばかり自分に甘くなるのは仕方ないんだよ」

でも、自分に甘い奴なんて世界にいくらでもいるでしょ？ そう勇真は笑う。

「……そうですね、私も自分に甘いですし」

「そうそう、人間、自分と大切な人を第一に考えては生きてれば良いんだよ、他人にはちよつぴり親切にするくらいでね……と、言うことで」

勇真は足元に魔方陣を形成する。

——長距離転移魔方陣だ。

「逃げようか」

「……はい」



突如千葉県の空に現れた数十万匹の邪龍、それに勇真は準備していた極大魔法七種を叩き込むと怒り狂う邪龍達を無視して、ルミネアと共に逃げ出したのだった。

「…………… スツゲエエ、嫌な事思い出した」

イツセーが勘弁してくれ、と言った風に呟いた。

それはリアス眷属一同の思いを代弁した言葉だった。

「いや、驚いた。正直舐めていた。悪かったなキミ達を侮って、まさか神器無しとはいえ強化された俺を倒せる程の実力を着けているとは夢にも思わなかったんだ。もう一度謝ろう、侮ってすまなかった」

そう “無傷” のヴァーリがイツセー達に告げた。

その口調は何処が敬意を表する様に聞こえたが、そんな事を気にする余裕はイツセー達になかった。

「ああ〜いつの間にお前、フェニックスに転職したんだ？」

「数日前にちよつとな、まあ、これはフェニックスではなく『聖杯』の力なのだが」  
 そう言うヴァーリは左手には金色に輝く小さな杯が握られていた。

『幽世の聖杯』まさか、これを使う羽目になるとはな……はあ、俺も学ばないものだ。まさかまた油断で、しかもキミ達の様な格下に 〃殺される〃 とはーバランス・ブレイク禁手化」

その力ある言葉にヴァーリの身体が閃光に包まれる、そして一秒後には強大な白銀の鎧を纏った恐るべき龍皇が一人。

「もう、油断はしない。キミ達の知恵と勇気と力は俺が本気を出すに値する」

そう言うヴァーリの放つオーラはイツセー達の何百倍も強い。

「[[[[[[[.....]]]]]]」

「さあ、再開といこうじゃないかッ！」

絶望がイツセー達を支配した。



## 第24話

最初のターゲットはイツセーだった。

ヴァーリは龍帝の鎧を纏い、身体強化を発動中のイツセーですら反応仕切れない超々高速で接近、左籠手に強大な魔力を収束させると鋭い魔力刃とし、それをイツセーの首目掛け一閃、その一撃でイツセーの頭は胴体から離脱した。

次の獲物は木場だった。

ヴァーリはイツセーが殺られて怒りの表情となった彼が一步目を踏み出す前に接近、その顔を右手で掴むと一瞬で握り潰した。

その次は犠牲者はギヤスパードだった。

コウモリになって難を逃れようとしたギヤスパードにヴァーリは消え掛けの木場の死剣を投げつけた。死剣は音速の30倍、一秒速10Km以上でギヤスパードに直撃、その上半身を木っ端微塵に打ち砕いた。

そして、最後の生贄はリアス、朱乃、アーシアだった。

左手に作られた魔力刃、そこに更なる魔力込めて巨大化させたヴァーリはそれを一閃、長さ数十メートルとなった刃は狙い違わずリアス、朱乃、アーシアを真つ二つ両断した。

この間、僅か2秒、そんな超短時間の惨劇であつた。

「はっ!?!」

途切れていたイツセーの意識が覚醒する。

「ゆ、夢?」

とんでもない悪夢を見た、そんな気がしたイツセーが思わずそう呟く。

「夢ではないぞ」

そのイツセーの呟きに何時の間にか、すぐ横に居たヴァーリが答えた。

「なッ!?!」

それに驚いたイツセーは横つ飛びでヴァーリから距離を取ると即座に禁手化、龍帝の鎧をその身に纏った。

「ヴァーリッ！」

イツセーは油断なく構えを取ると、静かに佇む白龍皇を睨みつける。

「戦闘再開か？ 俺はそれでも良いが今は止めた方がいい、まだ、身体が馴染んでない筈だからな」

「なんの、は」

なんの話だ？ そうイツセーが、聞こうとした瞬間、彼の全身から一気に力が抜け、地に膝を着けてしまう。

「な、んだよ……これ？」

力がまるで入らない、口も上手く開けない、そんな身体に戸惑いながらも、イツセーはヴァーリから視線を逸らさず彼に問い掛けた。

「強化して生き返ったばかりだからな、魂が肉体に馴染んでないんだ」

イツセーの問いにヴァーリはなんでもない風に答える。

「きょうか、いき、かえった？」

「そうだ、キミは一度死んだ、それを覚えてるか？」

「……………」

ヴァーリの言葉に、イツセーは悪夢の内容を思い出す。

瞬間移動の如き速さで接近したヴァーリが霞む速度で腕を一閃、首に感じた激痛と、グルグルと回る視界。

そして、その視界に映った仲間たちの最後。

まさか、アレが全て……

「そう、事実だ」

ヴァーリはイツセーの思考を読んだように彼の疑問に答えを述べた。

「キミたちは一度死んだ。俺が殺した……そして魂が身体離れる前に生き返ったんだよ、この聖杯の力でね」

そう言つてヴァーリは右手に持った小さな黄金の杯を掲げた。

「……………なんの、ために？」

自分をそして仲間を殺された怒りと、自分で殺して自分で生き返らせるという意味が分からない行動にヴァーリになんの為にそんな事をしたのか？ とイツセーは説明を要求した。

「フツ、キミたちは一度、曲がりなりにも俺を殺した。本来なら俺は死亡し、この戦いはキミたちの勝利で終わつた筈だった。だが、俺は聖杯の力で蘇り結果は……知つての通

りだ」

「なに、が、いいたい？」

「いや、さすがに死んでから生き返って逆転勝利つてのはちよつとズルいと思つてね」

そう言いヴァーリは肩を竦めた。

「だから今回、俺は引こうと思う。この戦いはドロ―だ」

「なら、なんでおれたちを、ころしたッ！」

「なに、殺られたら殺り返すのは常識だろう？　　なんたつて俺にはキミたちを生き返ら

せる手段があつたんだしね」

やられっぱなしはプライドが許さない。そう、ヴァーリは理不尽な事を言う。

「おまえ、マジでさいあく、だな」

「ハハ、酷い事を言う、せっかく聖杯で強化してやったのに……まあ、いいか、それではな兵藤一誠、興味が無いという言葉は取り消す。また、俺とキミは戦う事になるだろう、それまで力を上げておけ」

それだけ告げるとヴァーリはジークフリートの居場所を聞きもせず、イツセーたちが気絶している間に準備していた転移魔法でバトルフィールドから消え去つた。

「……勝手な、奴」

イツセーは少しはマシに動くようになった口で疲れた眩きを漏らした。



「ツ！ そうだ、みんなは!？」

イツセーはヴァーリばかりを見ていて確認出来なかった周囲を見渡す。

そして、イツセーの視界に倒れる仲間たちが映る、それを見て、イツセーは悔しきで歯を噛み締めた。

イツセーは鎧を解除すると一番近かった木場の手首を取り、脈があるか確認する。

「……良かった、生きてるツ！」

どうやらヴァーリが嘘を言ったわけではなかったようだ。意識はないが木場は確かに生きている。それにイツセーはホツとすると、直ぐに次の仲間たちの元へ。

「……部長」

「……朱乃さん」

「……アーシア」

イツセーは三人の胸を揉み、心音が確かにあるか確認すると三人をできるだけ凹凸が少ない平らな地面に移動させた。

そして、イツセーは最後に、作りは良いが歴史を感じさせる古めかしいストライプの服を纏った黒髪の少年の元へ近づき、彼の脈を取る、彼も問題なく生きている。

「ふう、良かったみんな無事か」

イツセーは安心したのか、額に浮かんだ冷や汗を手で拭うと……

「…………… って、誰だよコレええええエツ!!!」

ーと、バトルフィールド全体に響き渡る大声でツツコミを入れるのだった。

「もう、誰だよ、こんな酷い事をする奴は」

そんな自分の行為を全力で棚上げしてリゼヴィムが呟いた。

彼の目の前には半径数kmに渡る巨大なクレーター、その中心部には湖程の規模の燃え盛る灼熱の溶岩、クレーターの周囲は見渡す限り更地となり、おおよそ人口物は何一つ確認出来ない状況となっていた。

「凄まじい威力の魔法でした。直撃すれば危なかったですね」

そう、リゼヴィムの隣に佇むユーグリットが呟いた。

「ユーグリットくん、量産邪龍はどれくらい死んだ？」

「……三割ほどかと」

「うわー、結構死んだねえ、まあ、この威力の攻撃で7割も生き残ったと考えればマシな方かな？」

まっ、いつか♪ とりゼヴィムは呟く。

「しかし、この威力、恐らくは魔王級の力量の持ち主だと思われませんが、いかがいたしますか？」

ユーグリットの質問にリゼヴィムは顎に手を当てて考える振りをする、答えなどつくに出てくるからだ。

「殺そっか、めんどくさそうな相手だし実行はヴァーリくん頼もつかな♪ はあ、

せつかくの襲撃なのにさあ人間達はみーんな転移で逃がされちゃうし、やんなっちゃう

よ……あの、黒いのって『絶霧』？」

「はい、超々広範囲同時転移、こんな真似が出来るのはあの神滅具を置いて他にはないかと」

確か、英雄派に『絶霧』の所持者の魔法使いが居たはずです。そう、ユーグリットは付け足した。

「魔王級の魔法を使える神滅具所持者か、今代の神滅具所持者はヤバイのが多いねえ、絶



「そうか、すまない無理をさせたな」

「いや、大した事ではない、流石にこの大量虐殺は防がねばならないからな」

そう、かなり消耗した顔でゲオルクは言った。

ニューヨーク襲撃で使われた転移魔法を解析、そして、マーカーを付けることでこの転移魔法が使われた地域の生物を対象に瞬間超々広範囲転移を『絶霧』で施すという神業的な転移術、それを多数の魔法使いの補助があつたとはいえほぼ個人でやってのけたのだ、消耗して当たり前だ。

「そうだな、ゲオルクはしばらく休んでくれ……それでバルパー、転移者の方の方はどうだ？」

「千葉県及び、その周辺の生物の完全転移を確認した……もう少しどうにかならなかったのかね？　人はともかく犬猫、昆虫、果てには一部の邪龍まで一緒に転移されてたぞ」

邪龍の処理が大変だった、そうバルパーと呼ばれた金髪の青年が苦情を述べた。

「この規模で人だけ選別して転移など不可能だったんだよ。で、作業は順調か？」

「まあまあだ、だが、数が数だから完全には2、3日の時間が掛かる、まあ、望むなら現時点で分かっている神器所持者数を教えようか？　ついでに抜き出して出来た聖剣使いの因子結晶の数も」

バルパーはマッドサイエンティストがしそうな邪悪な顔で曹操に笑い掛ける。

その笑みに曹操は引いた。

「……因子結晶については構わない、それはお前にやる契約だからな」

「クッククック、そうか、分かったなら神器所持者についてだな、発現、非発現を問わず、現在分かっている神器所持者は256人、おおよそ5000人に一人の割合で神器を持つているな」

「……調べ終わって使えないと判断した者、因子を抜き出した者は？」

「言われた通り、追跡防止の為に世界中の都市にランダム転移させてある、しかし、こんな面倒な事をせずとも次元の狭間にでも捨てる方がよっぽど足がつかないし楽なはずだ」

何故しない？ そう、バルパーは曹操に疑問を投げ掛けた。

「……俺たちは英雄を目指す者だ、無意味な殺しはしない」

「それが分からのだよ、お前が目指す英雄とはなんだ？ 誘拐洗脳して無謀な戦いを他勢力に挑ませるのは許容できて、なぜ次元の狭間に無能共を捨てる事が許容出来ない？」

「……………」

バルパーの問いに曹操は答える事が出来なかった。

「ふむ、それが嫌なら転移させる前に全員洗脳しお前を英雄と認識するようにすればよ

かろう？　そうすれば簡単に英雄となれる、一般人を洗脳するなんて、そこらの雑草を引き抜くより容易いからな、それにこの人間共の命を救った事は事実なのだから多少の洗脳くらいはかまうまい？」

「……………そんなものは英雄ではない」

曹操は絞り出した様な声で言った。

そんな曹操の様子にバルパーは皮肉げな笑みを浮かべ肩を竦めた。

「クツク、まあいい、私は別にお前の英雄像や英雄願望などにさほどの興味はないからな、興味があるのは最強の聖剣を創る事、そして　“私が”　最高の聖剣使いとなる事だ」

「喜べ曹操、英雄派の戦力不足は直ぐに解消されるぞ、私と千の聖剣使いの力によってな」

「ようこそ白音、歓迎するよ」

そう言ったのはまだ年端もいかない少年だった。

おそらく年齢は10歳前後、彼は荘厳な玉座に腰を掛けながら隣に寝そべる巨大な獅子の頭を優しく撫でていた。

巨大な獅子は世界的に見ても最高位に近いレベルの魔獣――ネメアの獅子だ。

「私は白音ではなく、小猫です」

「白音は君が両親から与えられた大切な名前だろう？ 簡単に改名するのは良くないと

思うよ？ 僕も親に捨てられたがこの『レオナルド』という名は捨ててはいないし」

緊張しながら言った小猫の言葉をレオナルドは優しく嗜める。

「……………」

そんなレオナルドの嗜めに小猫は無言。

それでもレオナルドは余裕の態度を崩さず微笑むと、おもむろに王座から立ち上がり小猫に向かって歩き出した。

「……………ッ！」

なんて、プレッシャーッ、小猫はレオナルドの歩みを見て顔を青ざめさせた。

なんの変哲も無い、ただ小さな少年が自分に歩いてくる、その光景が小猫には何百メートルもある巨大な魔獣が自分を踏み潰そうとしているように映った。

「ほう、仙術は封印していると聞いたが、勘がいいんだね」

そんな意味深な事を少年は言う、小猫にはそれが何に對して言われた言葉か分からな



かった。

それ以前に考える余裕がなかった。

小猫は重力が何十倍にも増加したような重い重圧をただただ耐えるしかなかったのだ。

「まあ、良いだろう、君が望むなら君を小猫と呼ぼう、さて、改めてようこそ『魔獣派』へ、僕はレオナルド、この魔獣派の王をしている者だ。これからは君の王でもある覚えしておいてくれ」

そう言ってレオナルドはプレッシャーで片膝をつく小猫の頭を優しく撫でるのだった。

## 第25話

「これ、やめて下さい」

そう言つて小猫は『KONEKO』という黄金のネームプレートがついた赤い首輪をレオナルドに突き返した。

「うん？ 何が気に入らないんだい？ 中々良いデザインだと思っただけど？」

ちゃんと飼い主の名前と住所、電話番号も書いてあるよ？ そう付け加えレオナルドは首をかしげる。

「……首輪が嫌なんです」

「飼い猫には首輪をするものでしょ？」

「……私は猫じゃありません」

「自分で “小貓” と名乗ったじゃないか、それに猫も猫又もネメアの獅子も大して変わりないよ」

ほら、ネメアの獅子のリオンくんだつて、ちゃんと首輪してるでしょ？

そう言つてレオナルドはリオンくんの顎の下を擦る、雷鳴の様な大音量の

口 “ がりオンくんの口から響いてきた。

ゴロゴ

「……黒歌姉さまはしていませんでした」

「ああ、彼女もしてるよ、ただ仙術で見えなくしているだけだね。彼女は素晴らしい術者だから未熟な君が気づけないのも仕方ない」

「……嘘、ですよね？」

小猫が引き攣った顔でレオナルドに問う。

「いや、本当だよ」

小猫の言葉をレオナルドは笑顔で否定した。

「……………」

あの我が儘な姉に首輪をつけさせるとは、小猫は無言で戦慄した。

「うーん、何を驚いているのか手に取るように分かるけど黒歌は我が儘でもなんでもない、素直な良い子だよ？」

「……私は姉さまが素直だった事を知りません」

「そうかな？　かなり分かりやすい子だと思っただけど？　そうじゃなければバトルジャンキーの白龍皇が居たあんな危険地帯からすぐに離れた筈だ。君を魔獣派に誘うことなくね」

「……姉さまが欲しかったのは私ではなく私の仙術です」

「はは、それは自分を過大評価し過ぎだよ。僕も君が良いセンスを持つてるとは思うよ」

？ でもね、正直、君くらいの才能なら探せばそれなりに見つかるんだ」

それくらい、自分でも分かっているんじゃないかな？ そう、レオナルドは諭す様  
言った。

「……………」

「黒歌はね、主を殺し、はぐれとなつた自分の側に居るよりも、それなりに優しい悪魔の  
元リアスに居た方が安全で幸せになれる。そう思い泣く泣く君を置いて行つたんだよ」

「……………なんでそんな事が言えるんですか？ 貴方は黒歌姉さまじゃないのに」

そんな話は信じられないし、そもそも黒歌が他人に話す筈がない。そう小猫は思つて  
いた。

「それは僕が黒歌の心を覗いたからだね」

「……………」

「あ、【嘘だ】つて思ったね【信じられない】に【本当に？】と…………【チョコバナナ】こ  
れは僕が本当に心を読んでるかの確認の為だね」

レオナルドが言つた事はたつた今、リアルタイムで小猫が思つていた事だつた。

「ま……………さか、本当に」

「そうだよ、僕は他人の心が読める。まあ、四六時中読んでたら疲れるし、会話する必要  
もなくなつちゃうからね、読むのは必要な時に最小限にしているよ」

会話は大切なコミュニケーションだからね。と告げるレオナルド。

彼に何度目か分からない戦慄と恐怖を小猫は抱いた。

「ああ、怖がらなくていいよ、僕は君を傷つけるつもりはない、むしろ守るよ、君は僕のペットで家族だから」

「そう、だから早くみんなの元へ帰りたいなんて思うのはやめな、もう既にそのみんなは僕達、魔獣派を指す言葉なんだから」

そう言つてレオナルドは優しく微笑むのだった。

「私の所為だわッ、私が小猫に残れなんて言つたからッ！」

リアスが悲壮な顔で強く叫んだ。

「部長の所為じゃありません、あの時誰も貴女を止めなかつた。それにあの判断は間違いでなかつたと思います」

リアスの言葉をいち早く否定し、彼女を慰めたのは木場だった。彼は責任は自分達全員にあると言いリアスの心理的負担を減らす様に動く。

「そうですわ、あの時、誰かが残る必要がありました。そして、最も適任だったのが小猫ちゃんだった。リアス、貴女の判断に間違いはなかったわ」

次に木場のフォローの言葉を補足する様に朱乃が言葉を続け、彼女の肩に優しく触れる。

「祐斗ツ、朱乃ツ」

リアスは震える声で二人の名を呼び、静かに涙を流した。

そんな彼女に……

「いや、あなたが自分で言うように、リアス、小猫の誘拐はあなたに責任があるんじゃないかな?」

「……そう、黒髪の美少年が責任の所在を追求した。」

「バロールツ!」

「フツ、祐斗。僕はギヤスパーだと言っててるじゃないか」

「そう少年は言うが、彼とギヤスパーの容姿は大きく異なっている。」

「ギヤスパーの髪が金髪に対しバロールと呼ばれた少年は黒、身長も少年の方がギヤス

パーより頭一つ分は高いし、女装もしていない。

何より纏うオーラの質が違い過ぎた。その魔力の高さに対して何処か弱々しく感じられたギヤスパアのそれに対し、少年のオーラはただ暗く深く、そして圧倒的に力強い。だが、確かに少年の容姿はギヤスパアに通ずる所が多々あった。顔立ちもそうだが、そのルビーの様に赤い瞳、そして神器『停止世界の邪眼』もギヤスパアと同じモノ。

ただし、彼の神器は既に禁手化に至っているが。

「……ギヤスパアくん、イツセーくんはどうしました？」

「赤龍帝なら僕との戦闘訓練で負った怪我をアースシアに治してもらってるよ」

かなりハードにやったからね、もう一時間は意識が戻らないと思うよ。

そうギヤスパアは言った。

「……その割には君は無傷に見えるんだけど？」

「無傷だからね」

そうなんでもない風にギヤスパアは話すが、それは容易な事ではない。今のイツセーは並の上級悪魔なら瞬殺出来る程力を高めている。

それに無傷で勝利する、それは相性を抜きに考えても上級悪魔レベルの者が出来る事ではない。

少なくとも最上級……あるいは魔王級かもしれない。

「さて、責任の話に戻ろうか、リアス、あなたは昔から小猫が仙術を恐れていた事、現在は自身の脆弱さを悩んでいた事を知っていたな？」

「……そうよ」

「そして、今も昔も小猫の悩みを知らながら放って置いた」

「そんなつもりはッ！」

「ない、そう言い切れるかな？」

「……私は小猫に自分で乗り越えて欲しかった」

「それがいけなかった。あなたは年単位で小猫の主だった筈だ、少しずつでもいいあなたに小猫に仙術を使わせるべきだった、そうすれば小猫を置いて行くななんて事にはならなかっただろう」

小猫が言ったように代わりに使い魔を置いて行けば良かったからね、とギヤスパーは言う。

「小猫は仙術にトラウマを持っていたわッ！」

「その通りだ。しかし、そのトラウマを克服させる努力を怠った。あなたは優しく小猫に接して彼女の心の傷を癒したが、小猫のトラウマの元である仙術に対する知識をつけようとしなかった」



「……………」

その言葉は事実ゆえ、リアスは言い返す事が出来なかった。

「小猫の姉は力に酔い、主を殺して逃げ出したと言われているが、それは真実なのかな？

逆に真実だとすれば別に仙術に限らず力をつければそれに酔うといことではないかな？」

「……………」

「あなたの罪はその眷属に対する甘さだ、優しさと甘さは別物だよ？」

「……………そうね、あなたの言う通りだね」

「よし、それで良い。自分の間違いを正確に理解しなければ人も悪魔も神も成長なんて出来ないからね、そしてもう一つアドバイスをしよう」

そう言ううとギヤスパーは大きく息を吸い込んだ。

「いい加減立ち直れ、ウザったいッ！ もう小猫が攫われて2日だぞッ！ 搜索を専門家に任せるのは仕方ない事だが、いつまでクヨクヨしているつもりだッ！ それでも僕の主人か!？」

リアスの耳がキーンとなる程の音量でギヤスパーは彼女を叱咤する。それにリアスは目をまん丸にした。

「……今までのギヤスパーとは完全に別人ね」

「それは仕方ない事だよ、ギヤスパーとバロールは同一人物にしてある意味二重人格の様な状態だった。それを何処かのバカが一つに融合しまつたんだあなたの知るギヤスパーと性格が異なるのは仕方がないよ……さて、僕も小猫の搜索にあたるかな、あなたはここ2日寝てないんだからちゃんと寝るんだよ、寝れないならその二人に付き添って貰えばいい」

そう言つてギヤスパーは停止している木場と朱乃を指差した。

「……妙に静かだと思つたらツ！ ギヤスパー、制御出来るのに味方に神器を使うのは止めなさいッ！」

「了解、まあ、あなたと静かに話したかつたからね、二人はあなた同様甘い。いちいちフォローされるのは面倒だね、だから止めさせてもらつたんだよ」

じゃ、そういうことで。そう言つてギヤスパーはリアスの部屋を後にした。

それから数秒後、随分と遅くなつたフォローが木場と朱乃の口から飛び出したのだつた。

『続いてのニュースです、千葉県に突如として現れた多数のドラゴンと超巨大クレターは大魔王……』

「はあ、どうすつかなあ」

手頃な無人島を見つけ、再びそこに家を建てた勇真は一人浜辺でラジオを聴きながら今後の事を悩んでいた。

何についてかなと言うまでもない。

リゼヴィムについてだ。

千葉県で見た大量のドラゴン、その大半は大したことない龍だったが、その内の数匹は明らかにヤバイ雰囲気とオーラを纏っている強敵だった。

これに勝つには骨が折れる、中には手に負えないんじゃないか？ というレベルのも混じっていたくらいである。

だからこそ、勇真はこっそり超威力の攻撃を準備して連発した上で転移で逃げたのだ。

まあこの攻撃はドラゴン出現の直前に起こった超々大規模強制転移により千葉県がほぼ無人となったからこそ出来た暴挙なのだが。

そこだけは英雄派に感謝しても良いと勇真は思った、おかげでリゼヴィムの戦力を幾

分か削れたのだから。

「ほつときたいなあ……でも、これほつとくと人類滅びるんじゃないかなあ？」

勇真は嫌そうに呟いた。

勇真が直接見たリゼヴィム達の戦力は常軌を逸していた。もう、冗談抜きであつさり人類は根絶やしにされてしまふんじゃない？ と勇真が危惧する程度には異常だった。

とは言え、生き残るだけなら容易いと勇真は思う、今いるこの島に全力で認識阻害を掛けてのんびりと食べる分の野菜を作り、海から魚を取ってルミネアと一緒に生活すれば大丈夫だと思う。

だが、勇真はそんな娯楽の少ない生活を続けられる気がしなかつたな。

「テレビもネットも漫画もライトノベルも美味しい外食もカラオケも……カラオケは行かないか、とにかく何も出来なくなるんだよなあ、それは嫌だな」

面倒くさいッ！ そう言つて勇真は浜辺を転がる……やはりコイツはダメ人間だ。

「俺が戦うしかないのかなあ？ でもなあ、頑張つて戦うぞ〜！……なんて俺のキャラじゃないし、もう、自分は一切苦勞せず相手を一方的に排除する方法がないものか」

そんな外道とか悪役が考えそうな事を呟きながら元勇者はりゼヴィム対策を考える。

英雄派は大量虐殺を防いだ、ならば少なくともリゼヴィムと協力関係にはないのだから、しかし、完全に敵対するかは分からないし、戦力がどの程度残つてるか不明の上万

全ても厳しいと思う。

悪魔陣営は人間の魂が欲しいはずだからリゼヴィム阻止に動くかもしれないが、リゼヴィム自身も悪魔だし、別に悪魔に人間の魂が必ず必要という話でもないから少々怪しい。

堕天使は喜んで戦争を仕掛けるかもしれないが、幹部が思いの外弱かったのであまり期待が持てない。

天使はむしろある程度人類の文明を破壊させてから介入して信仰心を集めようとする様な気がする、そして神を欠いた天使達にあのリゼヴィム達を止められるかは不明。

他の神話体系がりゼヴィムをどうにかしてくれるかもしれないがギリシヤ神話とかはむしろリゼヴィムより下衆が多数いそう逆で逆に心配になるし、北欧はなんか勝手にラグナロクが起こって自滅しそうだ。

インドは介入してくれればどうにかかなりそうだが、スケールが大き過ぎる攻撃を撃つてむしろリゼヴィムを倒す余波で人類が減びそうである。

勇真は多数の偏見を織り交ぜた思考で対策を考えた上で……

「……あ、良い方法があった」

一つの策を思いつく。

そして、勇真は、俺って天才かも、そう黒い笑みを浮かべて細心の注意を払い策の準備に取り掛かるのだった。

## 第26話

それは一枚の手紙だった。

書かれている内容な挑発一色、それは彼？ に対する挑戦状だった。

「……………」

彼？ は無言で手紙を出した者の名前を確認する。

宛名はリゼヴィム・リヴァン・ルシファア、今、世界でも最も注目されている大魔王を名乗る男の名だった。

しかし……

「……………違うによ」

何が違うのだろうか？

男？ 何かをしばし考えるところにおもむろに左拳を振るつた。

同時に表現不能の不思議な音がアパートに鳴り響き、男？ の正面の空間に旅人の扉的な穴が創り出された。

「これは、嘘だによ」

そう言うのと男？ は空間の穴に自ら身を踊らせる。

そして男？ はアパートから消え去った。

『嘘よ！ それは邪悪な者がついた嘘なのよッ!!』

付けっ放しのテレビからは魔法少女ミルキーオルタナティブ7の再放送が流れている。

それは主人公が悪の帝王の卑劣な策を見破るミルキー屈指の名場面であった。

「フッフッフッフ」

「……勇真さんどうしたんですか？ さっきから笑ってばかりですよ」

ルミネアがやけに上機嫌な勇真にそう尋ねた。

「フフ、実はリゼヴィム問題があっさり片付きそうだからね、それが嬉しくて」

よくぞ聞いてくれました！ そう言わんばかりの笑みで勇真は答えた。



たまに勇真はこういう状態になる。

で、こういう時に限って良くないことが起こるんですよ、とルミネアは若干警戒心を強めた。

「え、あのリゼヴィム達をですか？」

「そうだよ、あのリゼヴィム達をだ」

「でも、勇真さん彼らを見てもかなりヤバイって言ってますでしたか？」

「うん、言ってた。でも、そんなの比較にならないくらいヤバイ奴をリゼヴィム達にけしかけたから大丈夫」

「そ、それは違う意味でヤバイのではッ!？」

「大丈夫、大丈夫、この世界」ならアレが暴れても世界崩壊なんて事は起きない筈だから、きつとアレならリゼヴィムをそれこそ蟻を踏み潰すより容易く片ずけてくれるよ、ああ、しかし、なんで最初からアレを利用しようと考えなかったんだろう？ トラウマの所為かな？」

ルミネアは悟った。

あ、これダメな時の勇真さんだ、と。

こういう前段階の状態で自信がある時、勇真は大抵何かで失敗するのだ。

「ええと、そのアレって何ですか？」

「ミルたんさ」

「ミルたん、ですか？ それって人の名前なんですが？」

ルミネアは勇真が異世界で勇者をしていた事は聞いているが具体的にどんな敵から世界を守ったのかわからないのだ。

「うん、種族的には………認めがたいけど、人……らしい」

やけに葛藤した感じに勇真は言った。

「それって、どんな人なんですか？」

「二メートル以上の長身に異常に発達した筋肉……そうだなあ、簡単に言う तोトルが猫耳つき魔法少女のコスプレした様な感じかな」

その時、ルミネアは自分と勇真以外居ないはずの無人島で確かな人影を確認した。

で、その人影はゆっくりと此方に近づいて来る、特徴は魔法少女コスをしたマツチヨ………たった今、勇真が話していた人物に合致する。

しかし、害意を知らせる島の結界は作動していない。

勇真も警戒した様子はない。自分が気づいて勇真が気づかないはずないだろうとルミネアは判断。

そして、なるほど、勇真さんが呼んだんですね、と彼女は思った。

「それってあの人ですか？」

そうやってルミネアは、遠慮勝ちに此方に近づく勇真が呼んだと思われる魔法少女を指差した。

「そうそう、あんな感じの、あんな感じの、あんな………え？」  
ルミネアが指した対象を見て勇真の笑顔が凍りつく。

「お手紙、確かに受け取ったによ」

巨漢の魔法少女？　はそうやってヒラヒラと勇真が出した手紙を振った。

「うわあああああああああああああああああああああツツツ!!」  
「ゆ、勇真さんツ!!」

突然恐慌状態に陥った勇真にルミネアは慌ててしまう。

しかし、そんなルミネアの千倍勇真は慌てていた。そして焦っていた。

バカな、バカなバカなバカなバカなバカなツツツ!?

認識阻害の結界は？

敵対者

探知結界は？ 防御結界は？ え、無視？ 俺確かにこの島に張ったよねッ！

勇真は大いに混乱した。

ちなみに勇真の策はこうだった。

- ①リゼヴィムの居城を突き止める。
- ②リゼヴィムを騙ってミルトんに手紙を出す。
- ③ミルトんにリゼヴィムを倒してもらおう（完）

……穴だらけに感じるが魔法少女に憧れ正義感が強いと思われるミルトんには対しては割といい手ではある。

しかも、手紙を出す為に……

リゼヴィムの口調を真似て書いた手紙を最高位の逆探知不可能の探索魔術で見つけ出したミルトんの自宅（実家の近所と判明し、二度と家には戻らないと決意した）のポストにリゼヴィムの姿と魔力性質を模した魔導人形を使ってシュート！ 追跡不可能の多重転移を用いて地中海沿岸まで転移させ、そこで契約解除し、完全に手掛かりを無くした。

……ここまで面倒な事をしたのだ、普通はバレない。

……はずなのだが。

「バ、ババ、バカなっ!? な、な、何故ここにッ!? とうか、なんで俺がそれを出したとッ!?!」

「ただの勘だによ」

え、やっぱりこの人? 理不尽ッ!

勇真はそんな事を思いつつも神器を完全発動、身体能力最大強化に設定、更に『天閃』を全力発動、その三重強化で上げられる限界まで自身の身体能力を強化する。

そして、神話の英雄を上回るおおよそ人類最速のスピードを得た勇真はルミネアを連れて死ぬ気でこの場を離脱しようとする。

しかし……

「遅いよ」

そんな勇真の何千倍も速く、とうか最早速度という概念が狂ってるとしか思えない超々々々々々………高速で勇真に接近したミルたんが勇真の超々高密

度多重対物魔法障壁を紙のように破り捨て彼の頭を鷲掴みにした。

ちなみに移動の際の足音すら鳴らなかった。完全に物理法則も魔法法則を超越してしまっている。

ミルたんは鷲掴みにした勇真の頭をゆっくりと捻り、自分と目が合うように角度に合わせた。

「さて、話を聞かせてもらおうによ」

凄まじい殺意に満ちた、しかし、純粋な輝きを秘めた瞳が勇真を貫いた。

「……………はい」

勇真はなんで自分はこんなバケモノを思い通りに操れると思ったんだッ！ と深く深く後悔した。

「つまり、リゼヴィムを騙ってミルたん到手紙を出し、リゼヴィムをミルたん倒させようと思っただによね？」

「申し訳ございませんッ！ その通りでございますッ！」

人の尊厳？ 誇り？ なにそれ美味しいの？

勇真は元勇者として、というか人としてどうなの？ というレベルでプライドを投げ捨てる？と砂浜に頭を打ちつける、ザ・土下座と呼べる様な美しい土下座をかましていた。

そんな勇真を悲しそうな目でルミネアが見ているが、彼にそれを気にする余裕はないし、焦りすぎて見られているという自覚もなかった。

「なんでこんな回りくどいことをするによ？ どうして勇者さんが倒さないによ？」  
勇者さんなら簡単なはずだよ、と首を傾げるミルたん。

その仕草は絶望的に可愛くない。

「い、いえ、自分は力不足でして、はい」

砂浜に頭を擦り付けたまま、勇真は答えた。

決して不可能ではない、不意打ちが決まればなんとかなる可能性はある。だが、勇真は出来るだけリスクを負いたくなかったのだ。

……まあ、結局リスクを負わないための小細工が裏目に出でてこんな状況に陥ってし

まったのだが。

「そんな事はないと思うによ、勇者さんは強かったによ」

「そ、それは昔の話でして」

困った様に勇真は言う。

「……確かに、さっきの動きは悪過ぎたによ、昔の数十分の一の速度だったによ、魔法障壁も紙みたいに脆かったし、何かあつたによ？」

それに勇真は……

「貴方に聖剣を叩き折られて魔法行使能力が数百分の一になって、時間操作と運命操作と因果律操作の魔法が使用不可になったせいですよッ！ ！」

「ー」と言いたかったが、やっぱり怖いので言えなかった。

「はは、実は鈍ってしまいました、今の俺は一般人にも劣る貧弱なモヤシくんなんです  
よ」

代わりに出てきたのは不必要なレベルで自分を下卑する言葉、しかもわざわざ情けない声まで作る徹底振り……この男、自分の情けなさを強調して自分には本当に出来ない、そういう認識をミルたんにも刷り込もうとしているのだ。



これが、元勇者とは悲しい話である。

「それは仕方ないによね」

勇真の言い訳を受け入れたのか、ミルたんは目を瞑って頷いた。

あ、これ助かったんじゃない!? ミルたん出陣の流れじゃない!?

ちよつと勇真は期待した。

しかし……

「じゃあミルたんが勇者さんを鍛えるによ」

ミルたんの口から出た勇真の期待と予想の斜め上に行く言葉だった。

「……………え?」

思わず呆然とした声が勇真の口から漏れた。

「ミルたん、弟子を持つのは初めてだから少し嬉しいによ」

「……………」

勇真は顔を上げてミルたんを凝視する。

そして、トラウマから吐き気を催した。

「う、げっ……………あ、あの今なんと?」

「だからミルたんが勇者さんを鍛えるによ」

「……………いやいやいやいや、あのですねミルたん様ツ!? 貴方様がちよつと手紙に書かれた場所に行つて一発パンチを撃つてくれれば済むわけでして、私のような小僧が出る幕など欠片もなく、その役目は完全無欠に魔法少女様の役割と言いますか、つまり、修行とか全くもつて必要ないわけでして! え、で、なぜ修行などという話にいッ!?」

よほど混乱しているのか、勇真は支離滅裂な言い訳なんだかよく分からないことを口走った。

「実は今、ミルたんは害意を持って他者を傷つける事が出来ないによ」

「あれ? さつき俺、魔法障壁を砕かれた上で首を捻じ切られそうになりましたが」

「あれは逃げようとした勇者さんを止めようとしただけで害意はなかったによ」

「なるほど、では逃げようとするリゼヴィムを害意がない感じにぶつ殺して下さい、これで全て丸く収まります」

「何言ってるによ？ そんな事は出来るわけじゃないよ？ 頭大丈夫かによ？」

何言ってるんだコイツ、そんな感じの呆れた目でミルたんは言った。

「……………ッ!!」

それに勇真はキレかけた。

そんな言葉をそんな態度で、どこに行くにも魔法少女コスをする頭の大丈夫じゃない変態マツチヨに言われた日には勇真だつてキレそうになる。

だが、勇真は負ける戦いを挑まない主義だ。敗北の美学？ ハッ！ 負け犬が好きさうな言葉だなあ！ な思考の勇真は再び頭を砂浜に打ちつけると冷却魔法で物理的に頭を冷やしバカな行動を起こさぬ様に自分に拘束魔法を掛けた。

「……………それで、何故、害意を持って傷つけられないんですか？ 魔法少女になる為の儀式ですか？」

「実は2ヶ月前くらいにミルたんまた魔法少女になる為に異世界に出掛けたによ」

「そんなユ○キャンで資格を取ろうとする感覚で異世界に行かないで下さい！ 世界が滅びますッ！」

大袈裟ではなくマジの話だった。なんたつて勇真はその体験者である。ミルたんは存在の格が高過ぎて生まれた世界でしか生きていけないのだ（世界がミルたんの存在に耐えきれないので）

「勇者さん大袈裟によ、で、その世界からこの世界に帰る時に、ちよつとパンチに力を入れ過ぎて予定よりも三枚くらいに多く次元の壁砕いてしまったんだによ」

「……………」

パンチで、次元の壁を、砕く？ 意味不明な言葉に勇真はフリーズした。

「で、繋がった先が勇者組織？ 勇者組合？ みたいな感じの組織のロビーだったによ」  
人間とか、鬼とかドラゴンとか悪魔さんとか猫さんがいたによとミルたんは補足を入れた。

「……………」

勇真は無言を貫いた。

どこから突っ込みを入れたら良いのか分からなかったからだ。

「で、そのロビーでミルたんはいきなり襲われてしまったによ」

「いや、そりやそうでしょ……あ、いや、おかしいか普通逃げるよね」

勇真あるなあ、と勇真は内心でミルたんに襲い掛かった勇者を称賛した。愚か者

「確か、劍聖さんと呼ばれてたによ、とんでもなく強かったによ」

「うわあ、マジですかあ、ミルたん様の基準で強いですか、凄いですねその方、異世界の創造神か何かですか？」

勇真の中ではミルたんの強い。世界の創造神級以上という方程式が成り立っている。そしてそれは決して間違いないと言いたい切れない。

「でも、ミルたんは魔法少女を目指す者によ、簡単には負けられないと頑張つて劍聖さんを倒したによ、おかげでお気入りの服がボロボロになったによ……でも、それはほんの始まりだったによ、そこから大量の人達がミルたんを勝負を挑んで来たによ」

「……………」

「うわ、その人達絶対勇者だ、これに襲い掛かるとかもう、ガチで勇者だ。勇真は心の中で名も知らぬ勇者達を讃えた。」

「それで、これにはミルたんも堪らなかったによ、なんとか半分くらい倒したところでミルたんは呪いをら掛けられて強制的にこの世界の戻されてしまったによ、そのせいで少しでも害意ある攻撃が出来なくなってしまうんだによ」

「え、マジすかッ!?……………凄いな」

勇真は少し感動した、この理不尽の権化に対して呪いを掛けた上で強制的にこの世界に戻すとは凄まじいなどというレベルではない。

「(うあ、何者だよその集団……………あ、勇者集団か、でもスゲエ、もう人類史上類を見ない偉業だよ……………出来れば2年前にその呪いをかけて欲しかった)」

……………自分がコレと戦う前に掛けて欲しかった。とかタイミンが悪ッ! もしか

してまだリゼヴィムが生きてるのってその呪いの所為？　じゃなきゃとつくに対処してるか？

そんな間の悪自体に勇真は疲れた溜息を吐き出した。

「……だからミルたんはリゼヴィムを倒せないによ、勇者さん！　ミルたんの、ミルたんの代わりにリゼヴィムを倒して欲しいによ！」

「ああ、それ、俺のセリフなんですけど？　というか、実力的に厳しいモノがあります」「だからミルたんが鍛えて勇者さんを昔の強い勇者さんに戻してあげるによ！」

「これも魔法少女への第一歩によ！　と勇真にとって死ぬ程ありがたくない好意を、正にありがた迷惑をミルたんは言った。

「いや、自分はほら、才能ないですし、それに昔の実力に戻るとかは装備的に絶対不可能でして、だからミルたん様にはもつと才能があつて使命感に燃える素晴らしい方を見つけて指導していただきだと思います……あ、俺の知り合いに兵頭つて奴が居るんですけど、そいつなかなか熱血で良い装備持ってるんでそいつを指導してもらえますか？」

他力本願！　勇真はこの理不尽を押し付けるべく数少ない幼馴染を売ろうとした。

それを見てルミネアがうわーといった感じの冷たい目をする。少なくとも彼女は勇真以上の才能の持ち主を知らない……目の前のよく分からない人は除いてだが。

……ということ。

「良いんじゃないでしょうか」

ルミネアは勇真が訓練を受ける事を賛同した。

「ル、ルミネアッ!？」

勇真が未だ嘗てない程焦った顔で、信じがたい事を聞いた様な目でルミネアを見る。

「良い機会じゃないでしょうか？ 勇真さんを指導出来る格上の人なんてそれこそ世界でも殆どいませんし、せつかくの才能を眠らせて置くのはもつたいないですよ」

「ルミネア、前にも言ったけど才能に踊らされるのは愚かな事だよ、人間自分らしく生きるのが良いと俺は思うんだ！」

「それはただ勇者さんが努力したくないだけですよね？」

勇真のサボリ思考をあつさり読んだルミネアがそう言った。

「い、いや、そんな事は」

「……ミルたんさん、勇真さんの代わりに私を鍛えてもらえますか？」

踏ん切りがつかない勇真にルミネアは溜息を吐くと、強い決意を秘めた目でミルタンに自身を鍛えてくれるようお願いを出た。

それに勇真は更に焦った。

「ま、待つてッ！ ルミネア、それダメ！ マジで死んじゃうからッ！ 命を粗末にする

のは良くないからツ!! 俺がやる、俺がやるよツ! その方がマダマシだよツ!!」  
そんなルミネアの行動を止めさせる為に勇真がミルたんに修行を願ひ出た。

「だ、そうです。ミルたんさん勇真さんをお願いします」

「任せるによ、きつと立派な勇者に戻してみせるによ!」

「あ、あれ? なんでそんなにあつさりツ!? え、もしかして、ハメた? え、俺、嵌められたの!」

「さあ、さつそく始めるによ、でもここは訓練するには狭くて脆いによ、でもミルたん良い場所を知ってるによ」

そう言つてミルたんは腕を振るう、すると不思議な音と共に旅人の扉的に空間の穴と  
うか渦のようなモノが虚空に出現する。

そして、ミルたんは勇真の頭を驚掴みにして……

「ちよ。ま、ルミネアア! ルミネアアアア!!」

ーポイツと穴へと投げ入れた。

そして勇真の声は聞こえなくなった。

「じゃ、行つてくるによ」



そして、ミルたんも穴へと飛び込む。

数秒後、空間の穴は音もなく塞がった。

「……どうか、気をつけて下さい」

ルミネアの声が無人島に小さく響く、それも直ぐに波の音に消えていった。

## 第27話

その者は音もなく無人島へと帰って来た。

サラサラの黒髪に強い意志を秘めた黒曜石の如き瞳、その口元は優美な弧を描き、優しげな微笑を浮かべている。

身体つきも一回り大きく頼りある様になり、いつもはやる気なく曲げられている背筋も今は鉄心が入ったかの様に真つ直力強い。

そして、その青年に足を踏み入れかけた美少年は、頭に “絶世の” がついてもおかしくない、街で出会えばどんな女性も絶対放っておかないだろうイケメンが気配を感じ目の前までやって来たルミネア目掛けその口を開いた。

「やあ、ルミネア今戻ったよ」

「……………」

ルミネアはフリーズした。

「ん、どうしたんだい？ 私の顔を忘れてしまったかな？」

そう、若干悲しげに美少年は言った。

「……ええ、と、勇真、さん……ですよね？」

「良かった、忘れられてしまったかと思つたよ」

そう言つて嬉しそうに “推定” 勇真は笑顔を浮かべた。

その笑みは思わずルミネアが、いや、世の殆どの女性が、人型なら悪魔だろが天使だろうが、女神だろうが見惚れただろう素晴らしい笑みだった。

しかし、ちよつと、いや、かなり驚きが勝つて今、ルミネアはそこまで反応していないが。

「……か、変わり過ぎです！ 本当に勇真さんですかッ!? ……いや、確かに顔立ちは似ている？ でも、いや……あれ？」

ルミネアは混乱した。

「はは、三ヶ月も会つてなかったからね、見違えるのも仕方がないさ」

「……勇真さんがこの島から旅立つてまだ3日なんですが？」

「本当かい？ ……ああ、そうか、時間の感覚が狂っていたよ。いや、この世界とは時間の流れが違う異世界に居たからね、それを忘れていた」

うっかりしてたね、そう言つて微笑を浮かべる勇真、いちいちイケメンオーラが半端ではない。

そんな勇真にルミネアは冷や汗を流す。

「……………こゝ、これって、良いんでしょうか？」

ルミネアは小さく呟いた。

容姿だけ見れば、完全に以前の勇真よりルミネアの好みである。纏うオーラも優しげで温かみがあり力強く隙がない。

性格はこの短時間では判断できないがおそらく良いだろう。

しかし、決定的なコレジャナイ感が凄まじかった。

勇真はこんな完璧超人美少年勇者的な存在ではなく、一般人、どちらかと言うとダメ人間よりの感じの存在だったはずだ。

いや。それが改善されて真人間となったのは良い事なのだろう、しかし、違和感が拭えない。

「……………うゝん」

「どうしたんだい？」

「……………いえ、なんでもありません、そう言えばミルたんさんはどうしたんですか？」

「師匠なら私に修行をつけ終えると『魔法少女になれそんな心配がするによ!』と言つて異世界に旅立つたよ、確か空中庭園だったかな?」

「師匠?…空中庭園?」

ルミネアの混乱は深まった。

「さて、ルミネアへ挨拶も済ませたし私は行くよ」

「……行くつてどこにですか?」

「はは、決まつてるじゃないか、大魔王を名乗るリゼヴィムの下にさ」

「い、今からですか!?! 何か準備とかしないんですか!?!」

ルミネアの言葉に勇真は静かに首を振る。

「今も人々がリゼヴィムへの恐怖で震えている、私は勇者だ、一刻も早く人々の希望となり絶望を払わねばならない」

そう言つて頼りある美しい微笑を浮かべると勇真は転移魔法で消え去つた。

長距離瞬間転移魔法……明らかに以前より魔法技能のレベルが上がっている。

そして、そんな勇真を見送つて数秒。

ルミネアは……

「ぜ、絶対違う！ あの人勇真さんと別人ですッ！ きつと、きつと遠い遠い平行世界から連れてきた同姓同名同一人物だけど、明らかに違う歴史を辿った誰かですッ!!」  
という叫びを上げるのだった。

「まさに魔王の城って感じだな」

そう、*“推定”* 勇真は呟いた。

中世ヨーロッパの城、それを数十倍の大きさにした巨城、紫色の空を埋め尽くすのは数十万の邪龍モドキだ。

もう、まさに悪の親玉が居ますよ、と宣伝しているような場所だった。

そんなあまりにもあからさまな悪の巣窟を見て、勇真は苦笑する。

そして、彼の苦笑いに邪龍達が反応した。

勇真の存在に気づいた邪龍達は今にも襲い掛かって来そうな攻撃体制をとる。

だが、それを見ても勇真は余裕、彼は胸の前で両掌を鳴り合わせると、その音を媒体とし魔法を発動、そして、たったの数秒で巨城を覆う高度な転移障害結界が形成されてしまった。

「さてと……やりますか」

自分に襲い掛かって来た邪龍達を見ながら勇真は落ち着いて、むしろのんびりと丁寧に新たな術式を組んで行く。

その間、多数の邪龍が炎を吐き、体当たりをし、噛み砕こうとするなど、容赦ない攻撃を勇真に加えていく。

しかし、その攻撃は全て彼の多重魔法障壁に阻まれてしまい勇真には届かない。鉄壁どころの騒ぎではない防御力、その障壁の前では邪龍モドキの攻撃などないのと同じだった。

そして、邪龍達の無駄な努力が十数秒続いた後、一つの魔法が完成した。

同時に閃光が結界内を満たす。

その閃光に触れた邪龍が次々と吸血鬼に戻って行く。

それは超広範囲高位解呪魔法、その魔法により聖杯の力をレジストしたのだ。

「あ、あれ？ 私は確か……」

先頭の邪龍だった吸血鬼の少女が混乱したように呟いた。

「大丈夫かい？」

その少女に勇真は優しげな笑みを浮かべて問い掛けた。

その笑顔に吸血鬼の少女は魅了されてしまう。そして熱に浮かされた様にボーッと勇真を見上げる少女は自分が勇真に質問された事を思い出すと慌てて彼の問いに答えた。

「あ、は、はい！ 大丈夫です！」

そんな慌てる少女を微笑ましく思い、勇真は笑みを深める。

それにまた少女が……いや、勇真の近くにいた殆どの吸血鬼が魅了してしまった。

「そうか、では少し離れていてね、これからここは戦場になるから」

そう言つて勇真はゆっくりと、だが力強い足取りで巨城へと足を進める。

その歩みはモーゼの如く、吸血鬼達は恐れ多い者を見るように道を譲る、中には頭を垂れる者さえいた。とてもプライドが高い吸血鬼とは思えない行動だ。

しかし、無理もあるまい、今の勇真は正に救世主、吸血鬼にすら希望をもたらす、救世の勇者なのだから。

硬く閉ざされた城門を魔法で砕くと、勇真は威風堂々、力強い足取りで城の内部に侵入する。



城の中心に向う途中、伝説級の邪龍のコピー体が多数勇真に襲い掛かるも、それを彼は余裕で撃退、傷一つ負うことなく城の中程まで進んでしまった。

そこで……

『やるじゃねえか、劣化コピーとはいえ俺様をあもあつさり倒してくれるとはなあッ!!』

ドラゴンの特徴を色濃く持った巨人と。

『私はラードウンと申します、主に結界、障壁などを担当しておりますが、貴方が張った結界は見事なモノでした』

巨大な樹木で構成されたドラゴン。

ー二体の伝説の邪龍が現れた。

強大な龍のオーラがその場を満たす。神話、伝説に語られる強大で邪悪なドラゴン、その力は神話の英雄すら手こずらせ、凡百の勇者モドキを殺し喰らってきた。

それが二体……絶望的な状況だ。

しかし、それでも勇真は微笑を崩さなかった。

当たり前だ、彼は凡百の勇者モドキではない、真の英雄、真の勇者なのだから。

「こんにちは、いや、今はこんばんわかな、初めまして勇真です」

『俺様を見てその態度たあ、肝が据わってるじゃねえかッ!』

勇真の態度を気に入ったのか巨人型の邪龍は尻尾でバシバシと地面を叩いた。

逆にその態度を気に入らなかつたのか樹木型の邪龍ーラードウンがその瞳を怪しく光らせる。

『はは、勇敢なお方だ……しかし、随分と余裕そうですね、気づきませんか？ あなたは既に私の結界に囚われているという事が?』

そう、ラードウンが勝ち誇った様に言う。そしてラードウンの宣言通り勇真は何時の間か半透明な結界に囚われていた。

『おいおいおいおい、ラードウンッ！ コイツの相手は俺だッ!』

『そんな取り決めありましたか？ グレンデル、こういう場合早い者勝ちでしょう?』

そんな囚われた勇真をよそに二体の邪龍は口論を始め出した。

それは実に……

「実に愚かな行動だね」

次の瞬間、ラードウンの首が飛び、胴体は数十のパーツに分解された。

パーツは地に落ちると燃え盛り、一瞬にして灰へと変化して風に流され飛んで行く。



『仲間意識ッ?! ハッ、笑わせんなよッ! 俺様は、んあ?..』

言葉の途中でグレンデルは地に膝つく。

『ハアッ!? なんだコレ、身体に力が入んねえぞッ!..』

混乱するグレンデル、それを無視して勇真は力ある言葉を告げる。

『無窮の担い手』バランス・ブレイク 禁手化……『無窮の英雄』

勇真の腕にあつた黄金の腕輪が聖短剣と融合する。

……出来たのは一本の美しい聖剣だった。

その聖剣は無窮の担い手の禁手化『無窮の英雄』によって再現された聖剣エクスカリバーだった。

無窮の英雄、その能力は担い手が振るう武器の能力を極限まで強化する事、勇真はこの能力を応用した。

聖短剣に使われた真のエクスカリバーの破片、そこに僅かに残る『支配』『破壊』『擬態』『祝福』を最大強化し、聖短剣に付与、そして神器そのモノを刀身へと混ぜ長剣状態の七つに分かれる前に近いエクスカリバーを創り出したのだ。

それはアーサー王が使った折れる前のエクスカリバーに匹敵……いや、神器の能力も加味すれば、完全に上回る史上最強最高の聖剣だった。

そして、その聖剣を勇者は静かに構えた。

その構えには隙が全くない、ある程度の実力の剣士が見ればあまりに完成された美しい構えに剣を交える前に敗北を悟ってしまうことだろう。

それほど勇真の構えは完璧だった。

『ガアアアアアッ!? な、なんでだッ!? なんで動けねえッッ!!』

「言ったでしょ 〃待つてくれて〃 ありがとうつてね……それではさようなら」

勇真はまるでこちらの呪詛に気づかず、最初から対策もしていなかったグレンデルを会話に混ぜた呪詛で縛りつけていたのだ。

つまり、先ほどな 〃待つてくれてたんですね、ありがとうございます〃 とはラーダウンを始末する事に対して言ったのではなく、呪詛に掛かるのをわざわざ待つてくれてありがとうと言ったわけだ。

勇真は微笑を浮かべ、動けないグレンデルに聖剣を振るう。

そして、閃光の如き疾さで放たれた数千の斬撃が一瞬にしてグレンデルをラーダウン以上に細切れにした。

「ふう、幹部っぽいのも出てきたし、そろそろかな?」

勇真はまるで作業をする様にラーダウン、グレンデルを1分弱で焼滅させると、焦る

ことなくゆっくりと歩き出す。

その堂々たる態度はまさにラストダンジョンに挑む勇者だった。

……ただし、  
“レベルを上げ過ぎた”  
が勇者の前につくのだが。

## 第28話

カツカツカツと大理石の床に規則正しいリズムで歩調を刻み、勇真はゆつくりと城の中央へと向かっていた。

その歩みは力強さと同時に優美さすら備え、今、ここが戦場だということを見る者に忘れさせる。

「ふむ、流石に広いな、そろそろ時間も経ったし歩く必要もないかな？」

勇真がそんな独り言を呟いた。

そんな時、一体の邪龍が勇真に襲い掛かって来る。

それは伝説級邪龍のコピー、劣化グレンデルだった。

「また君か……いや、丁度良い」

勇真は超音速で振るわれるコピーの腕をあつさり躲すとその胸にエクスカリバーを突き刺した。

そして、勇真はコピーに『支配』の力を流し込む。

数秒後、そこには従順となった邪龍イヌが一体、勇真に対し膝をつき命令をただ待っている。

た。

「……よし、【私を運べ】」

そう、勇真が命じるとコピーは壊れ物を扱うように勇真を持ち上げ自分の頭に乗せると高速で走り出した。

コピーに乗っておよそ5分、コピーに走らせ自身は騎乗から適当に他のコピー邪龍達を蹴散らし、途中で現れた《グヘツ、グヘヘヘ！》とか言う伝説級小物邪龍も秒殺、勇真は異常に広い大広間に来ていた。

勇真はコピーに少し戻って待てと指示し騎乗から飛び降りると、大広間で待っていた一人の男と相對する。

金と黒が入り乱れた髪に同じく金と黒のオッドアイという極めて珍しい容姿を持った青年——人間体を取ったクロウ・クルワツハだ。

「失礼ですが、道を通していただけますか？ 私はこの先に用があるので」

優しげで余裕に満ちた微笑を浮かべ勇真は告げる。

勇真が見たところ彼は人間虐殺に関与していない。神話では神々を虐殺したがそれ



は遙か昔のこと、ゆえに勇真としては彼とは戦いたくなかった。

この勇真は無益な殺生をしない主義なのだ。

「悪いな、ここから先に行かすわけにはいかない」

しかし、クロウ・クルワツハにひく気はない。彼はその背から巨大な龍翼を生やすと拳を構え臨戦態勢に入る。

瞬間、迸る龍気が勇真の全身に叩きつけられた。

強いーそれも恐ろしいほどに。

それが臨戦態勢のクロウ・クルワツハを見た勇真の感想だった。

纏う龍気は先のグレンデルとラードウンを足してすら半分が届かない。内包された力の総量はもはや膨大とか絶大などという陳腐な言葉では言い表せず勇真もその全て把握する事は出来なかった。

間違いない、クロウ・クルワツハの戦闘力は勇真が戦って来た者達の中でも五指に入る。

それでも勇真は静かに笑った。

「……何故笑う？」

「いえ、ただ運が良かったなど」

「運が良かった？」

この俺と戦うことがか？ そうクロウ・クルワツハは疑問を述べる。

「はい、あなたは強い。それも私が戦って来た者達の中でも五指に入るでしょう、だからこそ、あなたが一人なのは好都合だ。あなたが誰か他の相手と組んでいたらあなたを殺さないで倒すなんて不可能でしょうからね」

「……舐めているのか？」

勇真の言葉にクロウ・クルワツハは殺気を高める。

何故なら勇真こう言ったのだ。

例えば自分を含めた多人数でも殺す気なら勝てる、一対一なら不殺で勝利が可能。

そう、言ったのだ。

ダーナ神族の王、ヌアザすら屠り、その後も千年を超える時を鍛錬に費やし更なる力を得た自身に自分の百分の一も生きていない餓鬼が堂々と何の気負いもなく言い切ったのだ。

これを許せる訳がない。

「いえ、舐めているつもりはありませんよ」

「……そうか、ならば見るがいい」

次の瞬間、龍気が爆発した。

それは物理的な攻撃力をもって勇真の魔法障壁を揺らす。

そして、刹那と言える短時間でクロウ・クルワツハは人形から本来の黒龍としての姿を現した。

「……なるほど」

黒龍と化したクロウ・クルワツハを見て勇真は今日初めて顔を引き締めた。

「既に臨戦態勢と思っていきましたが、あれはお遊びという事ですか、あなたから先の数倍の力を感じます。それがあなたの真の実力……これは前言を撤回せねばなりませんね、残念ながら殺さず倒すのは難しそうです。殺してしまつたら申し訳ありません」

『不要な謝罪だ。死ぬのはお前だからな』

戦闘開始。

クロウ・クルワツハがこの豪腕を振るう。

高位人外が知覚する事すら難しい超々高速で振るう。

だが、勇真はその速度にもしつかり反応、尋常ならざる体捌きで腕を回避、カウンター

で閃光の如き剣閃をクロウ・クルワツハに走らせた。

強烈な斬撃がクロウ・クルワツハの脇腹を直撃、その鱗を抜き彼の身体を傷つける。しかし、その傷は予想以上に小さい。

「硬いですね」

『俺の鱗を一撃で抜くか』

勇真とクロウ・クルワツハはこの攻防で互いの実力を上方修正、警戒心を高めると超々高速の剣打混合の接近戦を演じ始めた。

聖剣と豪腕がぶつかり天地を揺らす。

今の勇真の運動速度は修行前の倍以上、それもほぼ時間制限なしで魔法、神器、聖剣による三重強化が可能というもはや反則と言っていい最速具合だ、今の彼には英雄最速のアキレウスすら及ぶまい。

しかし、その最速も『人類の中では』という但し書きがつく。

そう、クロウ・クルワツハはその勇真よりも速いのだ。

一瞬千撃、速度重視で振るわれたクロウ・クルワツハの両腕が連続で止め処なく勇真に襲い掛かる。その攻撃を悉く勇真は受け流すがあまりの速度に反撃の隙がなく、その

超威力に彼の腕が悲鳴をあげる。

「……………ッ！」

速度重視とはいえクロウ・クルワツハの拳はその一発一発が数百メートルのクレーターを作り出す超威力、いかに勇真でもクロウ・クルワツハと真正面からの接近戦は無謀だった。

ならば、と勇真は戦術を変える。

いくつかの攻防の後、隙が出来た勇真にクロウ・クルワツハの爪が迫る。

その爪は勇真の防御を巧みにすり抜け、回避不可能というレベルまで彼の身体に接近した。

当たる。そうクロウ・クルワツハが確信した豪腕が何故か空を切る。それと同時にクロウ・クルワツハの背筋に盛大な寒気が走った。彼は本能が教えるままに自分の危機に咄嗟に身体を傾ける、その次の瞬間、今まで自身の首があった位置を鋭い斬撃が斬り裂いた。

『瞬間空間転移か？』

「御名答」

振り払う様に放たれたクロウ・クルワツハの尻尾を躲しながら勇真は答える。

「すみません、あなた相手に普通の接近戦は厳しそうですねので小細工させてもらいます」

他にもね、そうつけ加えた勇真の姿が一瞬にして分裂する。そして五人に分かれた勇真が一斉にクロウ・クルワツハに襲い掛かった。

『実体を持った分身……聖剣の力の混合か?』

「「「その通り、博識ですね」」」

クロウ・クルワツハの身体に次々と傷が生まれていく。いかに彼でもこの数の勇真を相手にするのは難しい。とは言え与える傷はどれも軽傷、まさにかすり傷といった有様だ。

『ずいぶん攻撃力が落ちたものだな』

「ええ、でも確実にダメージは溜まるでしょう?」

『フツ、確かにな、だが小賢しいツ!』

瞬間、クロウ・クルワツハを中心に猛烈な爆発が巻き起こる。この爆発で大広間が消し飛び、城の半分を崩壊した。

クロウ・クルワツハの近くに居た勇真の分身は抵抗すら出来ずに全滅、残ったのは魔法障壁で耐えた本物だけだ。

『終わりだ!』

その勇真にクロウ・クルワツハは瞬時に接近、爆発の余波で回避行動を取れない彼に渾身の拳を叩き込んだ。

攻撃力すら伴った轟音が結界内に鳴り響く、次の瞬間生まれたのは結界全土を丸々陥没させた超巨大クレーターだ。

いかに勇真の魔法障壁が強固といえどこの攻撃は耐えきれない。

そう、この瞬間、勝負は決したので。

ーークロウ・クルワツハの敗北という形で。

「……………ツ?」

痛みを感じ、クロウ・クルワツハが無言で自身の拳を見定める。

そこにあつた光景は拳に刺さる。勇真の聖剣。

つまり勇真は…………

『避けたというのかツ!』

次の瞬間、拳に刺さった聖剣から強力な呪詛が流れ込みクロウ・クルワツハの動きを

鈍らせる。同時に呪いで動きが落ちた彼に幾重もの拘束魔法が掛けられた。

『この程度ッ!』

クロウ・クルワツハは全身に力を漲らせ拘束魔法を砕いていく。その力は常軌を逸していた。勇真のとっておき、龍王だろうと完璧に縛っておける超強度の拘束魔法が行動阻害の呪詛を受けた身体で砕かれようとしているのだから。

だが、それでも、既にチエツクメイトなのだ。

縛られたクロウ・クルワツハに凶悪な魔弾が突き刺さる。

『グオッ!』

長い龍生のなかでも数えるほどしか感じたことがない猛烈な激痛、それに思わずクロウ・クルワツハは声を上げた。

痛くて当然、魔弾の名は魔帝剣グラム、並の龍なら掠っただけで消滅する龍滅の魔剣なのだから。

そして、痛みだけで済まないのがこの魔弾だ。

この一撃でクロウ・クルワツハの右腕が大きく抉られる。魔法で加速投擲されたグラムは勇真の剣速の10倍という驚異的な速度、いかに彼が圧倒的な防御力を持つともグラムの斬れ味とこの速度の前には意味をなさない。



だが、それでもクロウ・クルワツハは倒れない。彼は超々高位のドラゴンだ。世界でも五指に入る強大な龍はこの程度では死なないし、まだまだ、戦闘力は保たれている。そしてこの怪我さえも数分もすれば完治させる事が可能なのだ。

しかし、クロウ・クルワツハにとって不幸な事にこの魔弾は単発ではないのだ。

勇真は遠隔瞬間転移で放ったグラムを回収すると再びそれを全力投擲！ 5枚の加速魔法陣を通過したグラムは雷速にすら迫る驚異的な速度でクロウ・クルワツハに直撃、今度は彼の右足を吹き飛ばした。

そして、三撃目、今度はクロウ・クルワツハの左腕が千切れ飛ぶ。  
更に四撃目、今度は脇腹が抉られる。

ここに至りクロウ・クルワツハは悟った。

……もはや逆転の目はないと。

『……見事だ、勇者よ』

己の敗北を認めたクロウ・クルワツハは勝者である勇真を讃え目を閉じた。そして彼は魔弾の雨に撃たれ、その長い長い生涯に幕を閉じるのだった。

「……………」

勇真は大地に降り立つと、目を閉じ亡骸すらないクロウ・クルワツハに黙祷を捧げた。  
「……………さて、行くか」

そう小さく呟くと勇真はクロウ・クルワツハが死した場所に背を向けて半壊した城へと戻るのだった。

「うへえ、なにあれ、ほんとに人間？」

遠見の魔法で勇真を見ていたリゼヴィムが呆れたように呟いた。

「……………おそらくは」

ユーグリットはそんなリゼヴィムの呟きに曖昧な答えを返した……まあ、無理もあるまい。

「ユীগリットくん、あれに勝てる？」

「クロウ・クルワツハが敗北した以上、私一人では難しいかと……いえ、聖杯さえあれば可能でした」

その言葉にリゼヴィムは舌打ちする。

「……クソ邪龍くんめッ！」

リゼヴィムの手に今、聖杯はないのだ。

間の悪いことに僅か半日前、自らが蘇らせ使役していた伝説級邪龍のアジ・ダハーカとアポプス、伝説級邪龍の中でもクロウ・クルワツハと並び別格とされる二体がリゼヴィムに反逆し持ち去ってしまったのだ。

「……………ヴァーリくんは？」

「強者漁りに出かけております。通信も張られた結界で出来ません」

「やだ、俺の孫、肝心な時に使えな過ぎッ！……………まあ、いいか♪ なんとかなるんじゃないかね？ 俺とユীগリットくんて掛ければ、さすがにあれもかなり消耗してるだろうし」  
そう、リゼヴィムは樂觀的に言う。

だが、確かに彼の言うことにも一理ある。勇真は連戦に次ぐ連戦でかなり消耗している。肉体面は回復魔法で癒しているがその魔法力は既に4割を切りかなり心許なくなっていた。

「はい、無傷で勝利は難しくとも勝利自体は可能と思われま……それに、あれが神器に頼るならばリゼヴィムさまは無傷で済むかもしれません」

「よしよし、んじゃ、もうちよつと削ろつか？ ヴァレリーちゃん出番だよ〜♪」

そのリゼヴィムの言葉に一匹の邪龍が二人の前に姿を現す。

「おうおう、なかなか良いオーラ放ってるじゃん♪」

他の量産型とは明らかに違うその強力なオーラは平均的な伝説級邪龍に匹敵していた。

「はい、元々神滅具所持者ということでスペックが高かったようです。聖杯の強化とも相性が良くグレンデル程度の実力はあるかと思われます」

ユーグリットの言葉にリゼヴィムは微妙な顔をする。

「グレンデルかあ、確かに強いんだけどさあ、あれに瞬殺されたよねえ？」

「はい、しかし、あれば油断があった為でしょう、油断さえなければもう少し善戦したはずです。これに伝説級のコピー体を複数つければかなり彼を削れると思われます」

「そっか、まあ、多少でも削ってくれればいつか♪ あ、確かこの子 嫌がらせ機能」

がついてたのよねえ？」

「はい、つけてあります、ついでに死亡した際は人型に戻る様に設定してあります。もつともこれは彼相手ではあまり効力が見込めませんが」

「うひゃひゃ、いいよ、いいよ別に嫌がらせ機能だけでじゅうぶんじゅうぶん♪ もしかしたら優しい勇者さんはこの子を殺せなくなっちゃうかもね〜そうすりや楽でいいんだけど♪」

そう言ってリゼヴィムはワインを煽ると邪悪な笑みを浮かべるのだった。



## 第29話

「ふう、さすがに少し疲れたな」

勇真は小さく溜息を吹くとたった今、助けた少女を優しく床に寝かせた。

クロウ・クルワツハに勝利してから直ぐにグレンデルとラードウンのコピーと共に襲い掛かって来たのは元吸血鬼と思わる邪龍だった。

その邪龍はしきりに助けを求めながら攻撃を仕掛けて来るといふ困った個体でその実力の高さも相まって勇真を大いに苦しめた。

邪龍からの助命願いはおそらく邪龍にされた少女が言っているのではなく、そう命じられて機械的に言っているだけだ。それは分かる。だが勇真はそうと知りながらも見捨てる事が出来ず、多大な魔法力を消費し彼女を拘束、そして他の邪龍モドキと同じく魔法で聖杯の力をレジストし彼女を吸血鬼に戻した。

しかし、戻したは良いが、今度は何故かどんどん衰弱する。理由を調べると身体に在るべきものが、無いことよって起こる現象だった。

魂の一部、つまり神器の消失だ。

産まれながらに神器を持つものは多かれ少なかれ神器を抜かれると体調を崩し能力が落ちる。神器と魂の繋がりが強い場合、神器を抜かれただけで死んでしまう事もあるのだ。

そして、少女はその死んでしまうくらい繋がりが強いタイプ。つまり、ほつとくと死んでしまうのだ。

その為、勇真はかつてジークフリートが回収した戦車の駒を神器の代わりを果たす様にその場で改造、そして少女に使用し彼女を転生悪魔としたのだ。

信じがたい魔法技術である。

悪魔の駒作成者アジュカ・ベルゼブブがこれを見れば彼を自分の組織にスカウトしたかもしれない程の技術力だ。

……とは言え今の問題はそこではない。

そう、問題は勇真に残された魔法力の少なさだ。

勇真は地に寝かせた少女に強力な結界魔法を使う。この魔法でついに勇真の魔法力は二割を切った。



はつきり言つて絶望的、今の勇真の状態でこの城をこれ以上進むのはあまりに無謀だ。

それでも彼は止まらない。

全てを終わらせる為、人々の平和の為、彼は立ち上がると城の最深部へと足を進めるのだった。

それから数分、ついに勇真は城の最深部——謁見の間の前までやつて来た。

謁見の間の扉は素晴らしくも禍々しい装飾がなされた静かに閉じている。それはまさに冥府への扉だった。

そんな扉を前にしても勇真は怯まない。彼は扉の前で数秒立ち止まると畏がないか確認しその扉を開けた。

「ようこそ勇者よ、しかし、ノックくらいしてはどうかかな？」

謁見の間に入った勇真に一人の男が問い掛けた。

長い銀髪に整った顔立ち、外見年齢は40代後半から50代前半と言ったところか？

強大な魔力を纏うその男——大魔王（自称）リゼヴィムは居城の最深部へ侵入されたにも関わらず王座に腰掛け余裕の態度で勇真を出迎える。

リゼヴィムの左隣には銀髪の悪魔の青年ユークリッド、彼は左腕に赤い籠手を装備し油断なく勇真を観察していた。

「君の事はここから観察させてもらっていたよ。見事な戦いぶりだった」

そう、リゼヴィムはどこか作つたような口調で勇真に笑いかける。

「ありがとうございます。しかし。あなたに褒められても嬉しくありませんね」

それに勇真は形式的な礼を述べると、リゼヴィムを強く睨みつけた。

そんな勇真の態度をリゼヴィムは気にしない、何故なら彼は勇真がかなり消耗しているのが分かっているのだから。

リゼヴィムもこれから死ぬ人間の悪態の一つくらい許してやる度量はある。いや、と言ふよりリゼヴィムは強がっている勇真を嘲るのを楽しみにしているのだ。

「ふふ、しかし、そろそろ限界なのではないかな？ 肉体面はとにかく魔法力は直ぐには

回復しまい？」

「さあ、どうでしょう？ 実は回復用の魔法薬を隠し持っているかも知れませんよ？」

「それはないだろう、あるならばここに来る前にとづくに使っている筈だ」

「……………」

リゼヴィムの指摘に勇真は無言になる。

そんな勇真をニヤニヤと観察すると、リゼヴィムは楽しげに口を開いた。

「しかし、君は立派だった一人でここまで来たのだからな。はつきり言っており得ないレベルの活躍だったよ。もしかしたら万全で一對一なら私を倒せたかも知れないくらいに……………ふふ、ふは、はひやひやひやひやひや！ 真面目な口調やーめた♪ 馬鹿だろお前、普通戻らない？ ラスポス前に体力がヤバくなったら最寄りの街で休んできら来るだろ！ RPGの鉄則でしょ」

「……………」の機を逃せばあなたは行方を暗まし、また多くの人間を殺すでしょう？ 私はそれを見過ごす訳にはいかないッ！」

勇真の心からの言葉にリゼヴィムは吹き出した。

「ふは！ うわ、出たよ、良い子ちゃん発言！ 勇者らしいねえ♪ ユーグリットくんも何か言つてよ！」

「犠牲を恐れ先にある勝機を逃すとは、愚かとしか言いようがありませんね」

「……………」

「てか、なんで一人で来たの？ もしかして友達いない？ 愛と勇気だけが友達な可哀想な子だったたり？ ああ、ありそうだなあ、それだけ強けりや周りも引くもんねえ♪」

「……………」

「え、もしかして凶星!? うわー可哀想な勇者さん♪ ひゃひゃ! 勇者さん、何しに来たんだっけ? みんなを守る為?」

「……………だとしたらなんです?」

そう、苦々しい表情で勇真は告げる。

それにリゼヴィムは嘲笑を浮かべ……

「ほんと良い子ちゃん♪ 君が馬鹿で助かったよ」

ーと言った。これが戦闘開始の合図となった。

「あの方は大丈夫でしょうか?」

そう吸血鬼の少女が呟いた。

彼女は勇真によって結界外に送られな元邪龍の少女である。彼女は不安そうに今は

見えない巨城の方を眺めていた。

「彼なら大丈夫さ、見たらどう？　彼の勇姿を！　あの余裕に満ちた凛々し姿を！　彼が負けると思うか？」

そんな彼女に同じく元邪龍の男の吸血鬼が答える。

その男は少女の父親で、彼は娘の不安を打ち消すように力強く断言すると彼女の頭を優しく撫でた。

それに少し不安を薄めたのか少女は小さく笑う。

「そう、ですね、大丈夫ですよ、あの方が負けるはずありませんよね！」

「そうだ、不安がるのはむしろあの方に失礼だ。我々はその方の勝利を確信していればいい。ふふ、まさかこの私がよりもよって人間をあの方のなどと呼ぶ日が来ようとはな」

「私も思ってもみませんでした」

「そうか……そうだな、彼が帰ってきたらお前の婿になってもらうよう頼んでみるかな」

「ちよ、お父様!!」

「はは、満更でもあるまい？」

そんな話しを吸血鬼の父娘は続けていった。

ちなみ、人はこういう会話を死亡フラグと言う。

「ふはははははははははははッ！ どうした勇者くん？ スピードが落ちて来てるぞお？」

笑いながらリゼヴィムが多数の魔力弾を勇真に放っていく。

流石は超越者と言ったところか？ 一撃一撃に桁外れの魔力が込められた魔力弾は一発でも勇真の障壁数枚を砕く程の威力がある。

その攻撃を勇真は左手に持った魔帝剣を乱舞させ纏めて全て斬り払う。

しかし……。

「背中がお留守ですよ」

その言葉と共に勇真の背に激震が走る。

「ぐはっ!」

偽赤龍帝の鎧を纏ったユーグリットの一撃だ。

背後から放たれたそれは一撃で勇真の全ての魔法障壁を貫通すると、勇真の背に直撃、彼を地面に猛スピードで叩きつけた。

「ぐうーッ!?」

勇真は直ぐに立ち上がろうとするがダメージで立ち上がれない。立ち上がる為に必死に回復魔法を掛けるが傷の回復速度が遅い。

「そろそろ限界かなあ?」

「そのようですね」

そんな地に跨る勇真を余裕の態度で空から見下ろすリゼヴィムとユーグリット。彼らが言うように勇真の限界は直ぐそこまで迫っていた。

「いやーよく頑張った♪　ほんと頑張ったよ?　花マルをあげてもいいくらいだ」

そう、バカにしているとしか思えない口調と表情でリゼヴィムは言う。

「くそッ」

勇真は回復魔法でどうにか動けるまで復帰した身体に鞭を打ち、即座にリゼヴィムに斬りかかった。

「おっと、危ない」

しかし、その動きに戦闘開始時のキレはない、見る影もなくなった動きはリゼヴィムからすれば目を瞑つても避けられるレベル。

当然リゼヴィムはその攻撃をひよいと躲しカウンターで痛烈な回し蹴りを勇真の腹

に叩き込んだ。

「ーッー！」

バキメキという骨が何本も折れた音が勇真の腹から響いてくる。彼は吐血しながら吹き飛ぶと地面を何度もバウンド、そして数百メートル転がり、ようやく止まる。

しかし、止まつてからも勇真に動きはない。そう、彼は身体を起こす事もままならぬのだ。

「ゴフツ…かふ、はあ、があ、げほ」

勇真は倒れた地面で苦しそうに吐血を繰り返す。

回復魔法を掛ける様子はない。この一撃で彼の魔法力は完全に底をついた。

つまり、完全に終わりだった。

倒れる勇真に心底愉快げにリゼヴェイムは近づくと彼の腹を弱めに踏みつける。

「ごおげッー！」

途端に勇真の口から大量の血が溢れ出す。それをリゼヴェイムは楽しげに見つめた後、急に白けた様な表情をした。

「うわ、服に血がついた、最悪この服お気に入りだったのに…もう、死ねば？」

リゼヴェイムは勇真の腕を踏み砕くと彼の手から離れたグラムを拾いその腹に突き立てた。



鮮血が周囲に飛び散る。

「グハア……無、念だ、悪を」

そして勇真は何かを言い掛けた後……完全に沈黙した。

「はい、お終い……ああ、つつかれた、ユーグリットくん？　甘いジュースが飲みたいな、城の冷蔵庫つて生きてる？」

「少々お待ちを、ただいま確認いたします」

ユーグリットは偽赤龍帝の鎧を解除するとゆつくりと地に降り立ち膝をついた。

「がくりと」　膝をついた。

「おや？」

急に力が抜けた足に疑問を持ちながらユーグリットは立ち上がろうとする。

しかし、立ち上がれない。

「……なにやってんの？」

何してんだコイツ、そんな顔でリゼヴィムはユーグリットを見ると、彼の方に行こうとて一歩踏み出し、地面に膝をついた。

「あ、あれ？　どうなってるの？」

リゼヴィムが自分の膝を見て疑問の声を上げる。  
それと、同時に、ゴトリと重くて硬いものが地面に落ちる音がした。

ーそれに続いて何かの液体が勢いよく流れる音も。

「……………おいおい、マジかよ」

そう呻くりゼヴィムが見た光景は倒れたユーグリットの身体と転がる彼の頭。  
そして……

「いやー強かったですね、流石は大魔王とその側近」

そう言ってユーグリットの死体のそばで笑う勇真の姿だった。

彼は右手に聖短剣を左手には高そうな魔法薬の空ビンが握られている。

この状況にリゼヴィムの顔から冷や汗が垂れた。

「あく勇者くん？ 君、死んだんじゃないの？ てか、そこに君の死体があるんだけど？」

そう言って勇真の死体を見るリゼヴィム。そんな彼に多数の魔法の鎖が掛けられた。

「ちよ、ぐえ」

リゼヴィムが苦しげな息を漏らす、鎖は彼を絞め殺す勢いで狭まると彼の両手足胸回

りを完全拘束し棒立ちの状態で固定した。

そんなリゼヴィムの様子を満足げに見つめ勇真は楽しげに口を開いた。

「俺の理想、それは自分は一切傷つかず、憎い敵を一方的にいたぶれて、なおかつ絶望の淵へと叩き込める戦術、それがこれだ。どうだ？ 確かに勝つたと思っただろう？ 油断しただろ？ ふふ、よ〜〜く見させてもらったよ、大魔王を名乗るとは思えぬ実に小物の様な馬鹿面をね」

縛りつけられたリゼヴィムに清々しい、だが沸き立つ様な悪意と殺意がたつぷりと籠った笑みで勇真は告げた。

「ど、どういことだよ、え？ 別人？ 双子!？」

「フッフ、ネタばらししたい所だが、そんな事して逆転されては目も当てられん。ゆえにお前は疑問を抱いたまま死ぬ……行くぞッ！ 自称大魔王リゼヴィムウツッ!」

勇真は笑顔から急変、憤怒の形相になると全力で駆け出し、棒立ちにさせられたリゼヴィムの顔面に渾身の右ストレートを叩き込んだ。

「これは俺がミルさんに異世界に連れ去られた時の恨みッ!」

「ぐはっ!？」

続き勇真は渾身の前蹴りを鳩尾に打ちつける。

「これは俺がミルさんの扱きで死に掛けた時の恨み!」



「ぐえ、ずり、おま、やめッ」

リゼヴィムが何かを訴えるがそれが意味を持つ前に勇真の拳に黙らせられる。

そしてたつぷり一分間、軽く数万発の拳を叩き込んだ勇真はバックステップで距離を置き、助走からの渾身の一撃を放った。

「これで終わりだッ！ この世界から消えてなくなれええッツ!!」

全力全壊、あらん限りの力を込めた右ストレートがリゼヴィムの顔面に直撃、同時に勇真は拘束魔法を解除、リゼヴィムは「うげっぐあく」とさけびながらパンチの威力で極音速で殴り飛ばされ加速魔法陣に突入、加速に次ぐ加速を経て一気に亜光速まで到達すると結界を突き抜け宇宙の彼方へ消えていった。

それを見送ると勇真は歓喜の笑みを浮かべて両手を広げる。

「フハハハハハッ！ 悪は滅びた！ 正義は必ず勝つのだッ！ たとえ、どんな手を使ってもツ!!」

テンションがおかしい勇真は高々と勝利の哄笑をあげる。

その姿はどう鼻眞目で見ても正義には見えなかった。

## 第30話

「さてと、リゼヴィムは始末出来たし、帰るか」

そう満足気に眩き、勇真は転移魔法を発動しようとする。

その時。

『本当さあ、マジあり得ないんだけど』

結界内にリゼヴィムの声が響いた。勇真は転移魔法を取り止めると魔法障壁を強化、警戒心を高めた。

『でもさあ、こいつが発動したってことは、俺はもうやられたんだろうな……はあ、もう少し待とうぜえまだ準備中だった訳よ』

どこか疲れたような残念なようなりゼヴィムの声が響く。この音声と言うにはリゼヴィムは死んだらしい。

しかし、逆に嘘くさい。

勇真は怒りに任せずもつと念入りに滅殺すれば良かったと後悔した。

『まださあ、トライヘキサも見つけてないのよ、異世界に行く為の準備段階だった訳よ、あ、俺の目的が異世界で大魔王しちゃう、てのは知ってるよね?』

「……そんな、馬鹿なこと考えてたのか?」

現地の勇者に殺されるぞ? と勇真は呆れたように呟いた。

そんな勇真に気にせず声は話を続ける。

『はあ、死んだ憂さ晴らしいにトライヘキサの封印を解いて暴れさせようと思ったのに最悪だよ、マジ最悪だよ』

『最悪だから、取り敢えず人間は滅んでおこうか?』

「うわーマジ最悪だあ、さすが自称大魔王」

勇真は自分がいきなり掛かった呪いを解呪しながらそう呟いた。

『聖杯に溜め込んだ100万の人間の魂を触媒にアジ・ダハーカに全人類と人間からの転生悪魔と人間のハーフに呪いを掛けさせたぜえ、俺が死んだら発動するようにしたいよお、まあ、高位の魔法使いか上位エクソシスト辺りなら生き残れるだろうけど、何



人残るかなあ？ 人間は数百万人残れば上出来かなあ♪』

本当はこんな使い方じゃなかったんだけとなあ、と楽しげに言うリゼヴィムに勇真は頭を抱えた。

今、解呪した呪いの強さから考えて、これが全人類に降りかかったらもしかしくなくてもヤバイ状況だからだ。

「発想が酷い、あのクソ野郎めッ！ 『あ、あ、あくルミネア、聞こえる！ 生きてる！』  
勇真は通信魔法で直ぐにルミネアの安否を確認した。

『……勇真さんですか?! はい、いきなり強い呪いが飛んできましたがなんとかレジスト出来ました！ この呪いって何か分かりますか?』

『自称大魔王の負の遺産だよ』

『という事はリゼヴィムを倒せたんですね!』

『ちなみに、もういくつか置き土産があるから人外くんたちも安心してね』

『もちろん……とりたいけど怪しくなってきた。で、それよりもかなり良くない事が起こってるから、まだ、続きがあるみたいだから！ ルミネアは防御を固めていつでも逃げられる様にしておいてねッ!』

『あ、そう言えば俺を倒したのはサーゼクスくんかな？ アジユカくんか？ まあ、誰でもいいっか♪ もう俺は死んじやっかしい』

『はい！ 分かりました』

『OK、じゃあ切るよ』

『まずは強化ヴァーリキゆんを暴走させて覇龍状態で暴れさせます！ ヴァーリキゆんが誰か分からない？ 俺の可愛い孫でえす♪ あ、ちなみに暴れさせる日時、場所はヒ

ミツ♪ ヴァーリキゆんは聖杯のおかげでエンドレス覇龍状態だからガン・バ・レ！』

「……………」

『次に量産型偽赤龍帝と偽白龍皇の連合軍を解放しまーす♪ 何体いてどこで解放するか？ はは、教える訳ねえだろ！』

「……………」

『で、最後に制御出来なかったスーパーハイブリット邪龍キメラのヴァルブルガちゃんを解放しまーす♪ 本物のヤマタノオロチをベースにグレンデルコピー、リードウンコピー、そして神滅具所持者のヴァルブルガちゃんに偽赤龍帝の鎧をミックスしたスペシャルキメラでーす、ヴァーリキゆん並にマジで超強いから頑張つて！ あ、そうだ悪魔の皆様は気をつけて、紫炎が熱いよッ！』

「……………」

『以上！ リゼヴィムの遺産でした♪』



「……………生存人数460万飛んで12人?…………451万68…………428万…………390万5000……………256万…………」

次々と減っていく人間の数に流石の勇真も青ざめる。

自分はどうやらとんでもない引き金を引いてしまったらしい。

この日、人類は致命的なダメージを受けた。

とりあえず勇真は吸血鬼を洗脳して責任を英雄派に押しつけた。

緊急で開かれた三大勢力会議は重苦しい沈黙に包まれていた。

「……………」  
アザゼルは無言で頭を押さえ。

「……………」  
ミカエルは神に祈り。

「……………」

セラフオールは机に突っ伏している。

「……………あくそろそろ、会議を始めようぜ」

アザゼルが常の彼からは考えられないほど暗い声で独り言の様に呟いた。

「そう、ですね」

「……………」

ミカエルが鎮痛な面持ちでそれに答え、セラフオールが無言で机から顔を上げる。

「もう、前振りとかいらねえよな、天界は今どんな状況だ？」

「……………数十億を犠牲者の魂がこった返しになっていきますよ。よほど強い呪いを受けたのですね、ほとんど全ての魂が暗く濁っていました、そして信者の方は高位の戦士を含めた極々少数の方以外は……………亡くなりました」

現在、私を除いた殆ど天使が総動員で浄化作業に取り掛かっています。そう沈んだ声でミカエルは説明した。

「そっか、セラフオール、悪魔はどうだ？」

「悪魔は人間からの転生悪魔の三割が死亡、人間との契約がほぼ消失しました」

恐ろしほどの無表情で機械的にセラフオールが言う。それにアザゼルとミカエルは

痛ましそうな目を向けた。

「……大丈夫ですかセラフオルーさん」

「何がでしょうか？」

「何がってお前……いや、なんでもない。最後は墮天使だな、墮天使に協力的なエクソシストの九割以上が死亡、再編には時間が掛かるな、あとこれは調査中だが人間が異常な数一気に死んだもんだから行き場を失った神器が生き残ったエクソシスト達に宿る現象が起きてる。中には複数宿った奴もいた」

「それは天界も起きましたね……その方の多くが神器の能力に耐えられず」

「……やっぱりか？ 調整もしてない神器をいきなり打ち込まれるわけだからな、そういう奴は無理やり神器を摘出してなんとかしたが、それでも俺たちもかなりの犠牲者が出た」

で、その犠牲者から出た神器がまた……そう、神器大好の墮天使総督とは思えない程忌々しようにアザゼルは神器の話が続けた。

「アザゼル総督、神器が人間に宿る事を止める事は出来ないのですか？」

「初めての現象だからな、今、全力で解析してるが、その前に人類が滅びそうだな、いや、すでにほぼ滅びてたな、天界の方ではなんとかならねえか？」

「神が残したシステムには不明な点が多々ありますので……こちらも専門の天使全員が

精一杯解析してはいますが」

アザゼルの問いにミカエルは芳しくない答えを返す。

「そうだよなあ……ああ、そうだけれも一応報告しとく。神器が宿る流れはある程度確認出来るようになったんだ、で、その流れから英雄派のアジトと思われる場所を発見した」

それにミカエルは更に顔を顰める。

「……急いで対処したい所ですが、今天界から出せる戦力はありません」

「悪魔陣営も同じくです。リゼヴィムから送られた音声は嘘でなければこれから更なる被害が出ると予想されます。その為、自衛の為に戦力は裂けません」

「だよなく、墮天使もそれは同じだ。だが、詳細送つとく、あとこの情報は他の神話勢力にも送つといたが期待はできねえな北欧とは何故か連絡も繋がらねえし……はあ、奴らに時間はやりたくねえんだけどな」

時間を与えると数千と得た神器で奴らは大幅強化されてる。そうアザゼルは付け加え溜息を漏らした。

「北欧でしたら現在白龍皇ヴァーリが暴れているようです」

セラフオールの言葉にアザゼルは顔を顰めた。

「まさか、リゼヴィムが言ってた時間無制限の覇龍状態ですか？」

「はい、現在フェンリルと大戦中（誤字に非ず）北歐領地の二割が壊滅、神族にも多数の被害が出た模様です」

「あく裏切ったとはいえ、ヴァーリが悪いな、オーデインの爺さんに謝らねえと」

俺の首一つで済むかなあ、済まないよなあ、と現実逃避した様にアザゼルは呟いた。

「ちなみにその主神オーディンとは現在連絡がつかなくなっています。もしかしたら既にラグナロクが起こっているかも知れません」

「……………マジか」

「マジです」

「……………」

「……………悲しいことです。しかし、申し訳ありませんが、北歐は今置いておきましよう。それよりも聞きたい事があります……………リゼヴィムを倒したのは英雄派なのですかな」

ミカエルが淀んだ空気を変えるために話題を転換する。

「ああ、曹操が倒した。まあ、あくまで邪龍から吸血鬼に戻された奴が言うにはだけだな」

ミカエルの問いにアザゼルは即座に返答。しかし、彼は何故か納得いかない様な顔である。



「……それはおかしいですね」

アザゼルに続きミカエルも訝しげな顔をする。

「……ああ、おかしいんだよな」

「はい、おかしいですね」

セラフオールも変わらざるの無表情だが、その情報を疑っているようだ。

「リゼヴィムに神器の力は通用しなかつたはずだ。だか神器の力なしに奴らがリゼヴィムを倒せるはずがねえ」

魔王以上の実力者、超越者リゼヴィムと強化復活した伝説級の邪龍、それに協力者の魔王に近いレベルの悪魔ユーグリット、このメンバーを神器なしの英雄派が倒すのはまず不可能だ。

「それに彼等の目的は人外の排除のはず、吸血鬼を助ける理由がありません。そもそも彼等の戦力は随分と減っていたはず」

更にミカエルが英雄派の目的と今回の行動が矛盾する事を指摘する。

その通り、ジークフリートから告げられた彼等の目的に反する行動、それは明らかにおかしいのだ。

「つまり、何者かが吸血鬼達を騙して英雄派にリゼヴィム討伐の功績を、人類壊滅の責任を押しつけた」

最後にセラフオールが結論を述べる。

この会議で着々と勇真包囲網が形成されていく。ほんの少しだけジークフリートの遺産が関係しているのは勇真の自業自得であった。

勇真はこれをまだ知らない。

そして、セラフオールは内心で笑う。どうかにかこの場は責任を悪魔から別の相手に受け流せたと。

魔王レヴィアタン、彼女は外交担当、ここぞという時はちゃんと働くのだ。

## 第31話

「さて、ルミネア、出掛けようか」

勇真は優しげな天上の神々さえも惚れてしまいそうな美少年スマイルでルミネアの手を引いた。

「え、どこにでしようか？」

そんな勇真に一瞬ドキリとしたルミネアだが、すぐに彼女は困惑した様な顔をする。

当然だ、どこに出掛けようと言うのか？ 人類は既に殆ど絶滅している。その情報は彼女も知っていた。

そして、その責任の一旦が自分にあるとも。

「もちろん、ネット環境が…つまり娯楽が生きてる異世界にさー！」

そう言つて勇真は異世界転移魔法陣を発動する。

「こんなこともあろうかと、ミルたんとの修行の旅の間に密かにマーカーを設置していたんだ。そしてその中の一つにネット環境が整った地球の並行世界がある。そこに行けばこの世界にいるよりはマシな環境なはずだ。残念ながら読みたい漫画や小説の続きは読めないけどね」

そう言う勇真は相変わらざるの美少年スマイルだが、その目はどこか淀んでいた。

「勇真さん、育った世界を簡単に捨てたらいけませんよ」

「……そうは言ってもね、もう、人類ほぼ壊滅だよ？ 今残ってる人間はたったの十数万人、しかも大半が男だ。多分繁殖管理とかしなければ確実にこのまま滅ぶね」

地球最後の2人、とかになつたら笑えない。そう勇真は呟いてルミネアを転移魔法陣に連れ込もうとする。

「ちよ、ちよつと待っててください！ 今回の責任は私が勇真さんに修行しろなんて言つたから起こつた事ですょ!? その私が責任も取らずにこの世界を離れるのはいけないと思いますッ！」

ルミネアのそんな責任感溢れる言葉に勇真は首を振る。

「ルミネア、初心を思い出そう。作戦〔命を大事にだ〕というか今回の責任はルミネアに一欠片もないからね、全部悪魔が、リゼヴィムが悪いッ！ つまり俺も悪くない! ……でもこの惨状を見たら異世界から帰ってきたミルトんに俺は殺されてしまふんだ! だから逃げようッ!!」

もう、とつくにミルトんの呪いは解呪されてしまつてるんだッ! と勇真が必死の形相で訴える。

ちなみにこの男はこれでも勇者だ。

「その場合異世界に逃げてでも殺されてしまいませんか!？」

「……………まあ、そうなんだけどね、でも少しは長生き出来る。その間に俺はルミネアの安住の地を探すから安心してくれ」

希望の異世界はある？ 超科学文明？ ファンタジー世界？ それともやつぱり地球の並行世界？ 暗い顔をした勇真はルミネアにそんな質問を投げ掛けた。

「勇真さんと一緒にこの世界で暮らしたい、それが私の希望です」

「とても嬉しいよ、でもね、もう人間は終わりだよ……………ああ、悪魔になって生きるって方法もあるか、確か冥界はネット環境もあるし。でもなあ、主要な娯楽ドラマ？ が『魔法少女レヴィアたん』だからなあ、そんなハイセンスな連中に俺は合わないと思うんだ」

マジつまらん。勇真は真顔でレヴィアたんを批判した。

内容が内容だから仕方あるまい、なんとたつて水戸黄門魔法少女バージヨンだ。ちなみにキャストは悪党とレヴィアたん（レヴィアたんとは黄門様とスケさんとカクさんとその他お助けキャラとお色気キャラを合体させた様な存在）で戦いは常に元氣100倍のアンパ○マンvsバイキ○マン様な状態だ。

どっちがアンパ○マン？ そんなの決まってるでしょう？

勇真はこのドラマ？ を見た時ありきたりすぎて逆に笑が込み上げてきた程だ。

「……………本当に人類はお終いなんですか？」

勇真がレヴィアたんのつまらなさを思い出していると、ルミネアが真剣な顔で勇真に問いかけて来た。

それに対し、勇真も顔を引き締める。

「うん、さつきも言ったけど誰かが繁殖管理しないと無理なレベル。俺ヤダよ、悪魔か何かに繁殖管理された世界で暮らすなんて」

「それは、私も嫌ですが、でも、例えばあり得ない事でしょうが、死んだ人間を生き返らせるとか出来ないんですか？」

「いやいや、そんな都合の良いドラゴ○ボールみたいな展開」

「……あるじゃん、なんで忘れてた？」

「え……本当ですか!？」

ルミネアは取り敢えず言ってみました！ な意見が肯定されて驚いた。

「聖杯だよ聖杯、リゼヴィムが使ってた幽世の聖杯！ アレを使えば人間を生き返らせる事も可能はずだ。魂は天界が管理してるはずだからいけるッ！……あ、でも、無神

論者の日本人は復活出来ない……いや、他にも……うくん、多分半分くらいは生き返れないけど半分生き返らせれたら上出来かな？」

さよなら田中くん、さよなら加藤くん。勇真は遠い目で呟いた。

「上出来ですよ！ それなら人は滅びませんよね！」

「もちろん、ついでに聖杯で人類を強化すれば寿命も大幅に伸びるだろうし、これは案外いけるかも……でも、俺の主要な娯楽は殆ど全部日本人が提供してくれてたんだよなあ、ああ、マジでリゼヴィム殺してえ、もう一度徹底的に戮り殺しにしてえ」

深い深い猛毒の沼の様なドス黒い憎悪を秘めた瞳で勇真は語る。

そして勇者の底知れぬ殺意は一瞬にして呪詛と化し、ルミネアを除く周囲の全てを呪い始めた。

「ちよ、勇真さん呪ってます！ 周囲を呪ってますよ!？」

「あ、ごめん、リゼヴィムへの殺意でうつかり。しかし、そうだね、異世界に行くにしてもその前に人類を復活させてから行こうか？ じゃなきやミルさんに殺されるし」

だが、例え人類を復活させても日本人作者のミルキースパイラルは……もう、復活しない。

もしかしたら無駄な足掻きかも知れない。そう思いつつも勇真は未来への希望を信じた。

「……ミルたんさんてそんなにすぐ人を殺す方なんですか？」

「いや、そんな事はないよ。でもね、ルミネア、アリを潰さずに踏むのは難しいんだよ？  
ミルたんのちよつとした怒りは世界の破滅を誘発するんだ、ミルキースパイラルが復活しないと知ったらミルたんはそこそこ強く俺を殴るかも知れない。そうなたらお終いだ、もう、100%俺は死ぬ。だから出来る限りミルたんを怒らせたくないんだ」  
「そこまで言いますか、すみません、そこまで恐ろし方とは知らず、修行しろなんて言ってますって」

ちよつとルミネアが申し訳なさそうに言う。そんな彼女を勇真は笑って許した。

「いや、良いんだ。他の奴だったら鬨り殺しにしてたけどルミネアは良いんだ。まあ、俺の恐れ方もちよつと大袈裟かも知れないね、でも仕方ないんだよ。元々、トラウマだったのに修行を受けて更にトラウマになった。ああ今思い出しても本当あの修行はあり得なかった。特に最初の一月のミルたん無限組手は一万回は死に掛けたから、もう、辛くて辛くて、一週間はリゼヴィムへの憎悪でなんとか保たせたけどそれ以降はもう全力で逃げたからね」

「……私は勇真さんに三カ月修行したと聞いたんですが？」

「ああ、そうだよ。俺の“身体”は三カ月ちゃんと修行したよ」



「身体は？」

「うん、最初にルミネアに会った勇真はね、俺が修行から逃れる為に魔導人形の技術を応用して作り出した第二人格だったんだ」

「え、どういう事ですか？」

「つまり、ルミネアが最初に会ったのは鍛練大好きで正義感が強い超真面目くんに作った俺の第二人格だ。まあ、その人格はもう魔導人形にしてリゼヴィムを倒す布石になつてもらったんだけどね」

「え………な、なんて事をしてるんですか!? 身体を乗っ取られたらどうする気だったんですかッ!？」

ルミネアが怒って叫ぶ。勇真はそれをまあまあと宥めた。

「大丈夫大丈夫、そこら辺はランスロットくんで懲りた。でも主導権はあげてたよ? じゃなきや楽できないし、それにね、もう、乗っ取られても良いかな? つてくらい俺は追い詰められていてね、ほんとミルさんの修行は常軌を逸した辛さだったんだ。今でも俺がした判断は間違つて無かったと確信しているよ、じゃなきや今頃…俺は精神崩壊を起こしていたはずだ、確実に」

勇真はげつそりとした顔で言った。

彼にここまで言わせるとは、ミルさんの修行はそれほどヤバかったのだろう。

「そ、そんなに、ですか?」

「そう、詳しくは思い出したくないから聞かないで。ただ、魔法少女コスさせられるのが癒しの時間だった。それくらいヤバイ環境だったとだけ覚えておいてね」

「は、はあ」

「いまいちピンとこないルミネアは困惑した様な微妙な返事を返した。

「まあ、修行の話はもう良いんだ。まず、人々を生き返らせる作戦を練らないと」

それは置いておいて作戦作戦、そう言つて紙とペンを取り出した勇真はサラサラと何かを書き始める。

紙には人の名前と “死” の文字が多数書かれていてまるでデスオートの様な惨状だ。

「さ、作戦も何も、幽世の聖杯を探して使うだけなのでは?」

「無理無理、数十億人を生き返らせるんだよ? 力が足りなすぎる。俺の力でもそこらの神の力でも無理だ。こんな事するには……無限の龍神の力が要る」

勇真の言葉にルミネアは心底驚いた。

何故なら彼はこの世界最強のドラゴンを利用すると宣言したのだから。

「む、無限の龍神つて、本気ですか?」

「もちろんだ。龍神を捕まえて電池にして人類を復活、強化させようか」

龍神を電池代わりにするという正に神をも恐れぬ事を言う勇真にルミネアは戦慄した。

「か、勝てるんですか、無限の龍神にッ!？」

「普通にやったら無理だね、でもね弱点がない存在はいないし、本当に無限の存在なんて存在しないんだよ」

ミルたん以外はね、と勇真は付け加える。

「え、無限の龍神なのですか？」

名前に無限ってついているのに？ ルミネアは問う。

それに勇真は当然とばかりに頷いた。

「もちろんだよ。もしオーフィスが本当に無限なら禍の団なんて作らずに赤龍神帝をさっさと排除している筈なんだ。オーフィスは別に本当に無限の力を持つている訳じゃない。アレは超々々強過ぎるだけのドラゴンに過ぎない」

「じゃあ、なんで無限なんて呼ばれてるんですか？」

「次元の狭間、無の世界から生まれた存在だからと言われているけど実際は違う。誰もオーフィスの力の全容が分からなかったからそう呼ばれてるんだよ」

「分からなかった、つまりは無限ではないんですか？」

「違うよ、1の力しか持たない者は億の力を持つ者の全容を把握出来ない。この1が神

で億がオーフィス、そう、ただこの世界の存在では彼の力の全容を把握出来なかつた。だから無限なんて呼ばれてるんだよ」

そう、自信を持って断言すると勇真は紙とペンを置き大きく伸びをした。

早くも作戦が出来たらしい。

「勇真さんはオーフィスの力の全容を把握したんですか？」

「もちろん無理だ。でもオーフィスが有限だという事だけは分かる。なら勝ち目はあるんだ例え俺の一億倍力が強くても限界があるならば……でもねそれはオーフィスが一人で居る場合に限る」

「つまり、禍の団が邪魔だ。ふふ、これも人類の為、彼等には早急に退場してもらおうか」  
テロリストなんて居ない方が世界の為でしょ？　そう言つて勇真は透き通つた優しい笑みを浮かべる。

その笑みは言つてる内容と全くマッチしない、まさに完璧な善人が浮かべる笑顔で、敵意も悪意も欠片も抱いていない。様に見えた。

そんな勇真を見てルミネアは外面つて怖い、相手が笑顔だからって油断しない様にし

よう。と心に決めた。

「あ、でも冷静に考えたら危険だから、やっぱり止めていい？」  
そう、眩く勇真にルミネアは両手でバツテンを作って抗議した。

## 第32話

「ふふ、やはり頭を失った勢力は潰すのが楽で助かる」

禍の因、旧魔王派の本拠地で仮面を被った男が呟いた。

「お、お前は何なんだッ!？」

拘束された上級悪魔が怒りと恐れが混じった声で仮面の男に怒鳴り散らす。そして、彼の背後には同じく拘束、気絶させられた数百の上級悪魔と中級悪魔が倒れていた。

「通りすがりの一般人です」

「一般人なわけあるかッ!？ 目的は何なんだッ!？」

「俺より強い奴に会いに来た」

「お前は、たった今ッ、頭を失った勢力はとか言っただろッ!？ お前は一体誰なんだッ!？」

「細かいなあ、ちよつと言ってみただけだよ……俺は英雄派の曹操だ」

「……俺の知ってる曹操と違う」

「これが曹操の素顔だ。下つ端の君は知らなかったただだよ」

大仰に手を広げ仮面の男は告げる。その動作はどこか見る者に不安を与えるような

不気味さを持つていた。

「仮面が素顔なわけねえだろツ！ それで、それで…曹操は何をしにここに？」

自分で否定しておきながら何故か仮面の男を曹操と呼ぶ上級悪魔。

いつの間にか上級悪魔の目は虚ろに、半分開けられた口からは今にも涎が垂れそうな状態になっていた。

それを満足気に見つめ仮面の男は上級悪魔と会話を続ける。

「実は情けない事に英雄派のアジトの位置を忘れてしまつてね、ゲオルクが頑張り過ぎてるせいで位置が分からないんだ。君は何か知ってるかな？」

「……いや、何も知らないな」

「では魔獣派のアジトについては？」

「すまない、そちらも私は知らない」

「オフィスの居場所は？」

「知らない」

「……そうか、ありがとう」

そう仮面の男は残念そうに礼を言う。

「……もハズレかあ、英雄派と魔獣派はどんだけコミュ症なんだよ、あとオフィスのどこ行った！」  
魔女の夜、ニルレム、墮天使の派閥、そしてここも何一つ情報を知らないと

か……はあ、まあ良いや、取り敢えずやれる事はやっておこう」

仮面の男は強大な魔法力を右手に集中、そしてパチンと指を鳴らした。

次の瞬間、悪魔達の拘束が解かれ、意識がなかった者も虚ろな目でフラフラと立ち上がる、それはまるで亡者の軍団の様に不気味だった。

だが、そんな事は気にせず仮面の男は明るい声で悪魔達に “命令” を告げる。

「はい、じゃあ君達には今からこの契約書を書いてもらいます。やる事は実に簡単、この契約書に自分の名前……あ、偽名はなしね、それと血印を押して貰うだけです。出来た契約書は俺に持ってきてね」

契約書には異界の文字でこう書かれていた。

【私は宮藤勇真に魔力及び全ての超常の力を永続的に貸し与えます】と。

「うっぶ、うえ」

そう、仮面の男——勇真は吐き気を抑える様に右手で口元を覆った。



「……はあ、流星にこの数は多過ぎたか？ まあ、多い分には良いから少しくらい我慢するか」

勇真は軽く気合を入れると久しぶりに『名剣創造』を発動し二つの鎧甲冑を創り出す。そして次々と魔法を発動、その鎧甲冑の強度を最大強化……それから僅か数分で鎧を魔導人形へと生まれ生まれ変わらせた。

「ふう、良かった収まった」

魔導人形に奪った悪魔達の力を全て与えると、勇真は一息つく。

「やっぱり無理なパワーアップは身体に良くないね、いっぱい注ぐなら無機物に限る……あと、君達は拾い食いしちやダメだよ、当然反逆も」

『『了承致しました』』

「よろしい」

勇真は了承と答えて以降ただ無言で跪く二体の魔導人形に更に幾つか命令を下した後、視線を超常の力の全てを勇真と魔導人形に奪われた悪魔達に向けた。

「さて、力を失った残りの君達は、そうだなあ」

あ、良い事思いついた！ そんな顔を仮面の内に秘め、勇真は断れないお願いを悪魔達に言う。

「日本のサブカルチャー復興の為に日本の漫画とライトノベルを読み漁って作家と漫画家を目指してもらおうかな？」

死ぬ気でね、そう勇真は付け加え仮面の下で邪悪に笑うのだった。

「父さん、母さん」

『……相棒』

イツセーは一人静かに泣いていた。

そんな宿主にドライヴはなんと励まして良いか分からなかった。

リゼヴィムの呪い、それが世界に襲い掛かったのは数日前の日曜日の事だった。

小猫の居場所はまだ分からないが、どんな相手からも彼女を救い出せる様に必死で訓練していたリアス眷属、その内の主人のリアスを除いた訓練場にいた全員、イツセー、木場、朱乃、アーシア、ギヤスパ……つまり人間か人間とのハーフからの転生悪魔がいきなり凶悪な呪いに襲われたのだ。

その呪いはかなり凶悪でジークフリートの修行がなければイツセー達の内、何人かは

死んでいたかもしれないかった。

それでも、彼らは見事に全員生き残ったのだ。

しかし……

イツセーの両親は耐えきれなかった。

イツセーが急ぎ駆けつけた時には二人床に倒れ　　“緩く”　　なっていたのだ。

「なあ、ドライブ、またなんだ。また俺は救えなかったんだ」

『…相棒、気を落とすな今回の事は突然で誰も対処など出来なかったはずだ』

「本当にそうか？　俺が自分の呪いを速攻で解いて、転移で駆けつけて解呪魔法を強化して譲渡すれば助かったんじゃないのか？」

『……………』

「ー俺はいつもそうだ。肝心なところで大事な人を救えない」

『そんな事はない、相棒は良くやっている』

「良くなんて、出来てねえよッ！　アーシアは一度死んだ。部長の結婚が掛かったレーディング・ゲームで負けた、ジークフリートは殺されて仇には傷一つつけられなかつ

たッ！ 小猫ちゃんは攫われたッ！ みんなをヴァーリから守れなかったッ！ そして父さん、母さんを……救えなかったッ!!」

涙を流し吼えるイツセー、悲痛な叫びは墓地全体に響き渡った。

「なあ、ドライブグ、俺はどうしたら良いんだ？ 頑張ってるんだよ、これでも俺なりに一杯頑張ってるんだッ！ でもダメなんだ結果が出せねえッ！」

『落ち着け、相棒はこの短期間で確実に強くなっている』

「それでも遅いんだッ！ 遅過ぎるんだよッ！ 敵のランクアップに対して俺の成長スピードは遅過ぎる、いや、そもそもあのレベルまで到達出来るのか？ ゲオルクには全然本気じゃないのに圧倒された、ヴァーリには一瞬で全滅させられた。俺はあいつらに追いつけるのかッ!? なあ、教えてくれドライブグ、俺は俺はッ！」

「次に奴らと戦ってみんなを守るのか？」

血を吐くようなイツセーの叫びにドライブグは居た堪れない気持ちとなる。歴代で初めてなのだ。これほど自分の力のなさを嘆く赤龍帝は。

だから、なんと言えば良いか分からない。そもそも赤龍帝が力のなさをこれ程嘆くなんて事自体が異例なのだから。

『……………相棒次第だ、そうとしか言えん』

「……………そうか、そうだよな、悪い取り乱した。地道に訓練を続けるわ」  
ドライグの有り触れたセリフにイツセーは静かに落ち込んだ。  
そんなイツセーに……

「お困りかな?」

背後から声が掛かった。

「ツ!?!」

その背後からの言葉にイツセーは即座に振り返り禁手化、龍帝の鎧を纏うと油断なく拳を構える。

振り返ったイツセーが見た者は、神父服を着た特徴の薄い白人だった。

「ほう、なかなかの反応だ。隙の少ない構えに即座に禁手化する技量と判断力、なんだ、力が無いと嘆いている割にはやるじゃないか」

これで歴代最弱とは酷い評価も有ったものだ。と男は笑う。

「……………誰だ?」

警戒した様にイツセーは言う。取り乱していたとはいえ、自分はおろかドライグにす

ら全く気づかれずに背後を取り、そして龍帝の鎧を纏った自分に対してこの余裕の態度。

プレッシャーはない。

だが相手の力量は高い、それもおそらく自分よりも。

それを悟りイツセーは警戒しているのだ。

「私はそうだな……【与える者】とでも名乗ろうか」

「……その与える者さんが何の用だ？」

「なに君が力を欲しているのを感知してね、ささやかながら君に力をプレゼントしに来たのさ」

「何の為に？」

イツセーは胡散臭い奴を見る目で自称与える者を見た。

「おや、信用されていないな悲しいねえ」

言葉とは裏腹に与える者はちっとも悲しくなさそうに笑う。

それにイツセーの警戒心が更に増した。

「まあ、そうだなあ、気づいていると思うが私は人外だ」

「ああ、分かる、それに日本に人間は数えるくらいしか残ってないからな」

で、人外だからどうした？ そうイツセーは言う。

それに与える者は苦笑した……自分が知るイツセーから随分と変わったものだ。

「ふふ、いやなに、最近禍の団の英雄派が煩いのだよ。あ、禍の団は知っているかな？」

「ああ、知ってる。よくな」

「……念の為に聞くが君は禍の団ではないな？」

「当たり前だッ！」

怒鳴るイツセーの態度に与える者は満足気に頷いた。

「よしよし、これで君を殺さずに済む、あ、もう一つ君は禍の団と戦っているか？」

「……積極的に戦っては居ない、だが目の前に現れたら倒すつもりだ」

「ふむ、少々戦闘意欲が薄いようだがまあ良いだろう、君は私と契約して英雄派を潰してくれないかな？ 私は静かに暮らしたいのに奴らがちよっかいを掛けてきてな面倒で困っているのだよ」

「……………」

「おや、返事がないな、もしかしてお断りかな？」

「……なんで俺なんだ？ あんた強いだろ自分でやれば良いじゃないか？」

「ああ、君の言う通り私は強い……だがなあ、英雄派の首領曹操との相性が悪いのだよ」

「相性が？」

「そう、相性がね、だから出来れば奴と直接戦いたくない。それでね、代わりに私の力を

君に上乘せして曹操を倒して貰おうと思つてな、日頃から倍化能力で力を上乗せは慣れつこだろう？ だから君ならば私の力を貸しても破裂しないと思うのだよ」

「破裂……とか、随分と物騒な単語が出るな」

「身に余る力を受け取るとそうなつてしまうものだよ？ ペットボトルに湖の水を全部入れる事は出来ないだろう？ だが君は別だ。日頃の倍化で元の力の脆弱さの割に容量が桁外れに大きい君ならばね」

脆弱さ、その言葉にイツセーは苦虫を噛み潰した様な表情を取る。

だが、それも一瞬の事、イツセーはしばし思索するとおもむろに口を開いた。

「……………報酬が欲しいな」

『あ、相棒!? 受ける気かッ!?!』

イツセーの言葉にドライグが驚愕する。

そして、その言葉に与える者はニヤリと口元を歪めた。

「おお、流石は悪魔、力を与えると言うのに更に報酬を強請るか?」

「あんたの力はいずれあんたに返さなきゃならないんだらう? 俺は手元に残る力が欲

しい」

「ふふ、良からう。最初からタダで受けて貰おうなどと思つてはおらんよ、それに私は与える者だからな」



そう言つて与える者は虚空から一つの盾を取り出した。

「…………それは？」

迸る光力にイツセーの背筋が震える。美しい装飾がなされたその盾はまるで何百柱もの天使が墮天使が光力を収束させたかのような強大な光力を耐えず纏っていた。

「私が作つた盾だ。名前はないがその強度と能力は保証しよう。その籠手の内から聖なる波動を感じる…………それは聖剣だな？　ならばこの盾はそれと最高に相性が良いはずだ互いの能力を高め合う程にな」

「……………あんた本当に何者だ？」

「ふふ、言つただろう、与える者だと」

『相棒、やめろ、そいつはなにか決定的にヤバイぞツ！』

「おや？　天龍と称されたドライグ殿とは思えぬ弱気なセリフですなあ」

『………！　貴様』

「ドライグ、落ち着いてくれ」

『相棒、落ち着くのはお前だ、本当にこんな怪しい契約を受ける気か!?!』

イツセーの態度にドライグは怒鳴る。しかし、イツセーは油断なく与える者を睨みながら迷いなく頷いた。

「ああ、受ける、次にいつヴァーリが襲つて来るか分からない。俺は一刻も早く強くなら

なきやならない」

その言葉にドライグはショックを受けた。

こんな怪しい奴の手を借りる、それはつまり赤龍帝の倍化能力が頼りないと言ってるのと同じ事だったからだ。

『……………勝手にしろ……………』

ドライグは拗ねた様に呟くと、それっきり何も言わなくなった。

「ごめんなドライグ……………待たせたな」

「いやいや構わんよ、それに面白いモノを見させてもらった。天龍も拗ねるのだな」

『……………』

「そんな事はどうでもいいだろ……………それで英雄派を倒せと言うがいつまで倒せばいい？」

「期間はない。奴らのアジトは私も知らないしな。しかし、赤龍帝なら必ず奴らと出会うだろう。その時、お前の力が足りると判断したら倒してくれ、足りないと思ったら逃げてもいい」

「……………曖昧な上に随分と甘いんだな」

「はは、優しいと言って欲しいなあ、それでは力を渡す、私の右手を握ってくれ」

そう言って与える者は右手をイツセーに差し出した。

「……………」

しかし、イツセーはその手を取らない。

「どうした？ やめるかね、私はそれでも構わないぞ、力を渡す候補は君以外にも居る」  
「…………いや、やるよ」

そう言つて罨がないか変な呪いが掛かつてないか最終確認を終えたイツセーが与える者の手を取つた。

同時にイツセーの中に膨大な魔法力が、高位魔法使い数百人分の魔法力が入つて行く。

そしてそれは一瞬でイツセーの身体に定着した。

それを見届けると与える者は楽しげな笑みを浮かべ右手を離した。

「なっ!?!」

同時にイツセーが驚愕の声を上げる。

何故なら与える者が砕け散り砂と化したからだ。

そしてその砂は風で舞い……

【はははははははッ！ さくらばだ兵頭一誠、健闘を祈るぞ！】

ーという声を残してどこか遠くへ飛び去った。

「それで、どんな呪いを掛けたんですか?」

勇真がルミネアに魔導人形でイツセーに接触したと言う話をした所、彼女が最初に発したのがコレである。

「え、幼馴染に会っただけなのに呪いを掛ける前程ツ!」

「え、じゃあ何も掛けてないんですか?」

「いや、掛けたけど」

「……………で、どんな呪いを掛けたんですか?」

結局掛けたんじゃないですか、そんな呆れた表情でルミネアは再び同じ質問をした。

「まあ、呪いと言うか加護かな? ヘクセンナハト 魔女の夜の構成員から奪った魔法力の半分をあげて、

墮天使の派閥から奪った光力の三割を付与させた盾を渡しただけ」

そんな思いの外、というか本当はただの異常に高い加護を与えただけの内容にルミネアは面食らった。

故に……

「本当にそれだけですか？ 特定の相手に出会ったら特攻させる呪いとか、必要な時に言いなりなさせる呪いとかは掛けなかつたんですか？」

勇真の説明にルミネアは疑いの目を向けた。

「ル、ルミネアのイメージの中では俺ってそんなゲスなのツ!? さすがに幼馴染にそんな事はしないよ!?!」

「でも、この間、結構酷い事しました?」

勇真は抗議しているがイメージも何も普通にそんな事をしているからだ。可愛い彼女にそんな事を思われても仕方あるまい。

「い、いや、それはこの前も言ったけど出来る限り手加減したから」

「……………まあ、そうですね、あれは私のせいでしたね。すみません。でもなんでイツセーさんにそんな力をあげたんですか?」

武器とかに加工した方が良かったのでは? そうルミネアは述べる。

「……………」

その言葉にしばし勇真は無言となる。そして彼は深い溜息と共にルミネアに理由を話し出した。

「死んで欲しくないってのがああるかな、イツセーは俺が知らぬ間に二回も死んでたから

ね、まあ、アレでも幼馴染だから」

それを聞いて自分の勇真を見る目がいつの間にか曇っていたとルミネアは思い知った。

それを申し訳なく、そして恥ずかしく思った彼女は深く勇真に謝罪した。

「そう、でしたか。すみません、酷い勘繰りをしてしまいました」

「あ……いや、でも、赤龍帝の籠手と白龍皇の光翼所持者は出会いやすくなるみたいなの  
いが元々着いてたからそれを大幅強化したよ。なんか今白龍皇が聖杯持つてるみたい  
だし、イツセーを強くしたのは出来たら足止めしてもらって俺が後ろからザツクリとや  
ろうかなとかも考えててね」

「……………」

そんなやつぱりいつも通りの勇真にルミネアは小さく溜息を吐くのだった。



## 第33話

「……………はあ」

異空間に作られた英雄派のアジトで曹操は深い溜息と吐き出した。

「どうした曹操、溜息など吐いて」

そんな曹操を心配しゲオルクが話し掛ける。

それに曹操は苦笑いを浮かべると溜息の訳を話し出した。

「いや、ただ俺は何をしているのだろうかあと、思ったんだ」

「何をしてるか？」

「そうだ。俺は英雄になりたかった、だが英雄の定義が今は分からないんだ」

「……………」

「いや、そもそも俺にはこれと言った強い英雄像がなかったんだ。以前バルパーに言われて初めて気づいたよ」

「……………それで、どうする気なんだ？」

「はは、それが分からないんだ。人類もほぼ壊滅状態だからなあ」

「これでは人々を守る英雄も名乗れない。」



「あまり暗い雰囲気を作るな、お前は英雄派のトップなんだぞ？ お前がその調子では英雄派全体の士気に関わる」

「いや、士気なら大丈夫だろう？」

そう言つて曹操は執務室から見えるトレーニングルームを指差した。

そこには……

「私の後に続けええツツ！ 聖剣最高うううツツ!!」

「「「「「「「聖剣最高うううツツ!!」」」」」」」

「聖剣最強うううツツ!!」

「「「「「「「聖剣最強うううツツ!!」」」」」」」

「聖剣無敵イイイツツ!!」

「「「「「「「聖剣無敵イイイツツ!!」」」」」」」

……と、叫びながら聖剣を創り、聖剣を振るい、聖剣を飛ばす。そんな訓練？ をしているバルパー達の姿があった。

「……………」

それを見てゲオルクは無言で目元を押さえた。

「……………何時からああなつた？」

「ゲオルクは結界に集中してもらっていたから知らなかつただろう？ バルパーが来て直ぐに布教を始めた聖劍教がついこの間、実を結んだ……………というか、バルパー直属の聖劍使い部隊以外殆の下級構成員がリゼヴィムの呪いで死んでしまい、結果としてアレが残つたという訳だ」

「……………お前が育てていた複数の神器を使う幹部候補は？」

「あのバルパーの隣でやけに叫んでるのがソレだ、だがあの野郎、今は何故か聖劍系神器しか使わないんだ……………困つた事にな」

せつかくレア神器を複数持つているのに、と曹操は嘆いた。

「……………そうか、派閥の名前を英雄派から聖劍派に変えるか？」

「既にバルパーから打診があつた。現在検討中だ」

どこか暗い瞳で言う曹操に、ゲオルクは居た堪れない気持ちになつた。

それはともかく、彼はそろそろ曹操に話し掛けたもう一つの理由を切り出す事にした。

「……………それで曹操、お前に言われて調べていた勇真の……………一週間の行動を記録した

モノが在るんだが、見るか？」

ゲオルクの手元には幾つもの鏡の様なモノが浮いている。それはリゼヴィムの件により彼が新たに得た神器だった。

この神器の能力は訪れた場所の “過去” を写し記録する事。

その性質上この能力を知っていなければ防ぐことが難しい情報収集において非常に有用な神器だ。

この神器を用いて勇真の能力と目的を調べてくれ、それが曹操がゲオルクに言われた事だった。

「ありがとう、見させてもらうよ、でもなんか嫌な予感しかしないなあ」

その言葉にゲオルクは目を逸らす。

「……心して見るべきだ、かなりヤバイぞ」

「分かった覚悟しよう」

ゲオルクの様子に曹操は冷や汗を流すも、彼は迷いなくゲオルクの神器の端末を受け取った。

「なにあのチート」

映像を見終わった曹操は暗い顔で呟いた。

「リゼヴィム討伐から英雄派と魔獣派を除くすべての禍の団派閥を単独撃破？　はは、

これ本当に勇真か？」

顔立ちは似ているけどやけにイケメンになってるし、と曹操は付け加える。

「使う魔法から間違いない筈だ」

しかし、そんな曹操の疑問にゲオルクはそれが勇真だと断言した。

それを聞き曹操は痛そうに頭を押さえる。

「嘘だろ、信じられないな俺達と勇真が戦つてからまだ二ヶ月も経つてないんだぞ？

このパワーアップはいくら何でも狡いだろ……特に接近戦の技量がなんで化物級に

なっているツ！　あれ、確か最初に戦つた時は身体能力はともかく技量は素人に毛が

生えた程度だったよな？」

え、なに？　もしかして油断させて英雄派に潜入する為にわざと手を抜いてたの？

そんな呟きが曹操の口から漏れた。

「正直、私には勇真の技量がどれほど上がったかイマイチ分からないのだが……それほど上がったのか？」

ゴクリと生唾を飲み込みゲオルクが問う。

それに曹操は心底嫌そうな顔で答えた。

「……俺と勇真で接近戦をすれば例え同等の身体能力でも負けそうだ。で、実際の俺との身体能力の差は、最大速度は俺の十倍、筋力は千倍と言った所か？」

もちろん、この十倍と千倍は「俺」のね、ははは、参ったな、と曹操は遠い目をした。

「そうか……困った事に魔術方面でもかなり伸びている。魔法力は1.5倍程に属性にもよるが魔法技術もそれくらい上がったな、で、極めつけが前から使えたのか知らないがああ、見たよ。随分とエゲツない魔法だな、奪った力の総量は既に魔王数体分か？」

「ああ、見たよ。随分とエゲツない魔法だな、奪った力の総量は既に魔王数体分か？ 一体何千の人数が創れることやら」

「いや、アレだけ強力な魔法だおそろそろなんらかの制限がある筈だ。例えば最大10体しか創れないとか」

「それでもキツイがまだマシか……で、今のところこのアジトの位置は勇真にバレて居ないかな？」

「ああ、私も遊んでいた訳ではない。絶霧と新たに得た神器、それに多数の魔法をミックスして作られた空間だ。いかに勇真でも見つけるのは困難だろう」

そう、自信を持って断言するゲオルクの姿に曹操は安心した。

「さすがゲオルク頼りにしてるよ……さて、では俺も遊んでいられないか、おおよその勇真の力と出来る事が分かったからな対策を立てて修行しなければ」

そう言つて曹操は聖槍を出現させて立ち上がると、ゆつくりと槍を回し準備体操のような動きをする。

「映像では使っていないが我々同様勇真も新たに神器を手に入れている可能性が高い、その点は忘れるなよ？」

「もちろんだ」

曹操は今日初めて普通に笑う。

そして、彼は聖槍片手に聖剣バカ達に突撃して行った。

「さて、どうしようか」

勇真は思案する様に呟いた。

「どうしようかと……」

「いや、魔導人形の人格面だよ」

そう言つて勇真は家の隅で体育座りで待機する二体の鎧と一人の女の子に視線を送つた。

「必要なんですか？ 今のままでも良いんじゃないですか？」

ルミネアの疑問ももつともだ。命令を聞き実行に移せるなら下手な人格など必要はない。

しかし、それでは問題点がある。

「今のまま人格なんて持たせずに了承致しました、しか言わない完全な人形だと、いちいち命令しないと動かないから面倒だし、戦闘力もかなり落ちてしまうんだ」

「ああ、なるほどじゃあ “勇真くん” みたいな人格にしては？」

「それだと真正面からしか戦わないバカになっちゃう」

そのせいでリゼヴィムまでたどり着けるか実はハラハラしたと、勇真はあの時の本音を口にした。

「じゃあ、ランスロットくんみたいな人格ですか？」

「……それが効率的なんだけど、なんかまた裏切られそうだからね」

そんな警戒したように言う勇真にルミネアは疑問を投げ掛ける。

「え、でも、そもそもちゃんと条件を設定すれば裏切られる心配はないんじゃないですか

「？」

「ああ、うん、ただの気分的な問題だよ。反逆時の人格消滅と身体崩壊システムをつければ基本は大丈夫なはず。でもさ、完璧と思っても思わぬ見落としってあるものでしょ、前回ランスロットにはこのシステムをつけたけど転生悪魔になるな、という条件をつけなかったから転生時に上手い具合に人格をジークフリートの身体に移されて回避されたしね、あんまりエグイ性格にするとそこから辺が怖くてね」

「じゃあ、勇真さん大好きか、狂信者のな性格ならどうです？……何故か女の子も居ますし」

「……女の子は置いておいてね、それも無理だね。だって魔導人形の人格は創る者の性格をベースに作られるから、例えばランスロットくんは俺の悪い部分を集めて作られ勇真くんは良い部分を集めて作られた、だから俺が抱いていない想いは人形も抱けない」

俺は狂信もしてないし、俺大好き⇨勇真大好きではなく自分大好きになってしまうからね、と言いつつ勇真は苦笑した。

「色々条件があるんですね、私は人格なしの人形しか作ってなかったので知りませんでした」

「まあ、人格設定する時に初めて分かる事だからね、あ、いつその事、ルミネア大好きに設定してルミネアに命令してもらおうかな？ この性格の人形ならいけるかも」



「……ちよつと、恥ずかしいので出来れば止めてください」  
そう言つてルミネアは顔を赤くした。

しかし、その顔はどこか嬉しそうだった。

「どこかでリア充が楽しそうにしているッ!!」

冥界のグレモリー宅にバカな叫びが響き渡る。

「ちよつと、聞いているのイツセー!」

説教中に突然叫び出したイツセー、そんな彼の頬をリアスは思い切り抓つた。

イツセーの頬からミリミリという音が聞こえてくる。

実に痛そうだ。

「イデデッ! すいません部長、聞いておりますッ!」

「もう、本当に心配したのよ! この時期に怪しい男と契約して力を借り受けたなんて何かの罨じゃないかと気が気じゃなかったわ!」

「……すみません、部長」

そう言つてイツセーは深々と頭を下げた。

そんなイツセーに他のリアス眷属が次々と声を掛ける。

「僕たちにはなしかな？」

「赤龍帝、いくらなんでも軽率が過ぎると思うよ」

「私も心配しましたわ」

「イツセーさん」

「木場、ギヤスパー、朱乃さん、アーシア、ごめん、心配を掛けた」

「はあ、まあなんにしても精密検査で特に異常が出なくて良かったよ」

そう、ホツとしたように木場は言う。

イツセーは「与える者」を名乗る男から力を貸し与えられたその日に仲間たちにより無理やり精密検査を受けさせられた。

そして数日に渡る検査の結果、ようやく先程、特に問題なしという結果が出たのだつた。

『相棒、あんな怪しい奴との契約は俺も二度とゴメンだぞ』

「悪いドライグ、お前にも心配掛けたな」

『全くだ、次奴が現れて何を言つても絶対に耳を貸すなよ？ 俺の直感が言っている、奴

こそ真の邪悪だと』

「さすがに大袈裟じゃないか？ 事実検査で何もなかったじゃないか」

『いや、一つだけ変わった』

「……本当か？」

ドライグの言葉にイツセーの顔に真剣さが宿る。

『ああ、変わったのは相棒の気だ。やけに “俺” の気に近くなっている。俺の力を操るには適している状態だが、その気は他のドラゴンや力有るものを呼び寄せる効果がある、特に白龍皇なんかをな』

「マジかよ、あの野郎、何がいずれ出会えうだろうだ、俺と曹操、もしかしたらヴァーリを無理やり出会わせる気かよツ!？」

いかにも出会うのが運命だから、的な事を言っていたくせにその実その運命は操作されたものと知りイツセーは呻いた。

『まあ、実際のところ、これを奴が意図してやったかは分からん、あの短時間で意図して出来るかもな、しかし、これが奴の思惑通りの結果なら奴の力量はそこらの神を軽く上回る力を持つ筈だ。場合によっては主神級……あるいはそれ以上かもな』

ドライグの言葉にイツセーは嫌そうな顔をした。

「うげえ、なるほどあんなスゲエ盾をポンとくれる訳だよ、曹操と相性が悪いって言った

のもどつかの神だったからなのか？」

実はラスボスで戦います、とかいう展開は止めるよ、そうイツセーは恐々と呟いた。

「その話が本当だとすると、その与える者とはどこの神なのでしょうか？」

朱乃がそう疑問を口にする。

「バロール、あなたは何か心当たりはありませんか？ どうせイツセーくんが帰って来たときに彼の目から男の姿を確認してるのでしよう？」

「はあ、祐斗だから何度もギヤスパードと言っているだろ？ まあ、そうだな赤龍帝の瞳から男の姿を確認したが、僕も知らない奴だったな、実は知ってる奴で正体を隠している可能性も捨てきれないが」

「そうなんでもない事を言うように話すギヤスパード、しかし、その内容はなかなかエゲツない。」

「ちよ!? 覗いたの!? そういうのをするならせめて最初に一言言えよ!」

そんなプライバシーを考えないギヤスパードの行動にイツセーが抗議、しかし、ギヤスパードはどこ吹く風、軽く肩を竦めて新たな言葉を紡いだ。

「まあ、気にすることはないだろう？ 君が見ているのは9割は胸なんだから、そしてそんな事は言われるまでもなくこの場の全員が知っている」

「9割は言い過ぎだから!」

「はは。では8割という事にしておこう。さて」

そう呟き、ギヤスパーが視線を細める。

彼の視線の先には一人の女性が寝かされていた。

「僕はそれよりも彼女の……ヴァレリーの結果を聞きたいんだ。赤龍帝の結果なら診察前から僕はある程度分かっていたからね」

そう言っつてギヤスパーは鋭い視線をリアスに送った。

## 第34話

「おはようございませすルミネア様、早速ですが勇真は貴女に相応しくありません、直ぐに別れるか消す事を進言します」

「うあ、第一声がそれとか人格構成間違えたわ」

勇真は鎧くん1号（仮）を見て頭を押さえた。

「黙れマスター！ 私はルミネア様へ話し掛けている、邪魔をするなッ！」

で、そんな勇真に鎧くん1号（仮）は話し掛けんなどいうニュアンスの言葉を吐き、野良犬を追い払うようなジェスチャーをするとルミネアを口説き始めた……鎧の癖に。

その鎧くん1号（仮）の態度に勇真は静かに激怒、数秒の葛藤の後、たつた今、二十分ほど掛けて作った鎧くん1号（仮）の契約文を手に掛け……

「……………人格消去だ」

そう呟いて勇真は虚空に浮かぶ魔術文字を引き裂いた。

「え？……ちよ、ま、や、やめろよッ！ やめろおおおおお、お、お……お……………」  
そして、暫しの断末魔の後、鎧くん1号（仮）は再び了承いたしましたとしか言わない人形に戻った。

そんな人形を見て勇真は爽やかな笑顔で汗を拭う。

「さて、作り直すか」

そんな勇真を見てルミネアはドン引きした。

芳ばしい香りが立ち上る。

コーヒー好きには堪らないある種のリラックス効果すらあるこの香り。

しかし、そんな素晴らしい香りが漂うカップからレオナルドは顔を顰めて口を離した。

「うーん、やっぱりブラックコーヒーは不味いな、これが美味しいと言う人の気持ちから分らないよ」

それとも、僕が子供だからダメなのかな？　そう言ってレオナルドは小猫に笑い掛ける。

それに小猫は嫌そうな表情を作ってこう答えた。

「あなたは舌が子供だからです」

「はは、小猫は相変わらずの毒舌だなあ、でも本当に苦いんだよー飲んでみる？」

そう言つてカップを小猫に寄せるレオナルド。

小猫はそのカップを結構です、と言つてレオナルドに押し返した。

「……何が目的なんですか？」

「ん、目的つてなんの？」

「あなたの目的の話です。人類は滅亡し禍の団はココと英雄派を除いて全滅、にも関わらずあなたは動きを見せない」

「ああ、人の存亡も禍の団の壊滅も僕にとつては些細な事だからね、正直あまり興味がな  
いな……いや、禍の団の殆どを潰した宮藤勇真には少し興味があるけど」

レオナルドの話に小猫は眉を寄せる。

「宮藤勇真が潰した？ どういう事ですか？」

「ああ、小猫には他の派閥が潰されたとしか言つてなかつたね、全ては今言つた宮藤勇真  
個人によつてなされた事なんだ」

レオナルドは小猫の質問にミルクと砂糖をコーヒーに足しながら軽く答えた。

しかし、その内容は軽いレベルの話ではない。

事実、その話を聞いた小猫は一瞬呆然とした。

「……冗談ですよね」

「いや、本当だよ、見てごらん」



そう、レオナルドが言うといつの間にか彼の肩に留まっていた小さなコウモリの目が光る。

そしてコウモリの目から出た光は虚空に立体映像を描き出した。

そこに移るのは勇真がリゼヴィム一派及び他の派閥を潰した際の戦闘映像、もちろん勇真が知らぬ間に撮られたものである。

それを見て小猫は愕然とした――あまりにも、強過ぎると。

「なに、これ」

「どうだい、剣も魔法も凄いだらう？　これが現在人類最強の男だよ」

「凄いと言うか、凄すぎます。これは本当に人間なんですか？　この力はジークフリートさん以上です」

「ははは、それは当然さ何と言ってもジークフリートは彼の使い魔だ、宮藤勇真が自分の力を分け与え作り出した使い魔、それが英雄派のジークフリートに憑依したのが、君を鍛えていたジークフリートの正体さ」

レオナルドの想定外にも程がある話に小猫は痛そうに頭を押さえた。

「……あなたと話していると驚きばかりで疲れます。まさかとは思いますが、ジークフリートさんがゲオルクに殺されたというのは？」

「真つ赤な嘘だ。いや、残念だろうけどジークフリートはもう居ないよ。ジークフリート

トは勇真の命令を果たし終われば消される運命だった。だから彼は自分の命運を掛けて造物主である勇真に挑み、そして破れ散っていった。ゲオルクは勇真に罪を被せられたのさ、自分の存在を隠蔽する為、そして君達に英雄派を憎ませる為にね」

そう言ってレオナルドは勇真とジークフリートの戦闘映像を映す。そこに移るのはジークフリートの最期、そして勇真がゲオルクに化けた瞬間だった。

その映像を見て小猫の胸がチクリと痛む。

ジークフリートは決して好きな類の人間ではなかった。戦闘映像でも人質を取ろうとする下衆な部分も映されている。良い人間ではないのは確か。

だが、それでも彼は自分を鍛えてくれた人なのだ。

「……クズ」

小猫の口からそんな言葉が零れ落ちた。

それには小さくも確かな憎しみが籠っている。

そして、そんな小猫の姿にレオナルドは僅かに目を細めた。

「そうだね、でも下手に挑んじゃダメだよ。どうしても勇真を殺したければ僕に言っ  
ね」

「……あなたはアレを殺せるんですか？」

小猫の目は懐疑的だ。

全てを把握している訳ではないが、小猫はレオナルドの圧倒的な実力を知っている。

しかし、映像で見る勇真の実力はそのレオナルドすら上回っている様に感じるのだ。

「おや、疑うの？」

心外だなあ、とレオナルドは苦笑し、ミルクと砂糖をたつぷりと入れたコーヒーに口をつけた。

「あなたは彼を人類最強と言いました」

「そう、彼は人類最強だ。確かに正面からは僕でも分が悪い。でも、搦め手を使えば勝つ方法は何通りもある」

「映像から彼は搦め手も得意そうですが？」

「うん、得意だろうね、多分正面戦闘よりも」

「……ダメじゃないですか」

「いや、問題ないよ。だって彼よりも僕の方が搦め手は上手いからね」

静かに、だが確かな自信を持ってレオナルドはそう断言する。

もちろんそれは根拠のない自信ではない。

「僕らの居場所には彼にはバレていない。しかし、彼はこんな映像を僕に撮られている。この時点で優劣はハッキリしている、そうは思わない？」

「……確かに」

ここまで言われれば小猫にも分かった。

全くもってその通りであると。

情報とは相手を罠に嵌めるのに極めて重要な要素だ。そして現在、勇真はレオナルド及び魔獣派の情報を殆ど持っていない。

逆にレオナルドは勇真の最大魔法力量、体術レベル、戦い方の癖、使用魔法、そして彼のアジトにルミネア<sup>弱</sup>点<sup>点</sup>の存在、それら多くの有用な情報を持っていた。

これを勇真が知れば盛大に青ざめる事であろう。

「まあ、とはいえ危険な相手だ。出来れば僕も彼を敵に回すのは避けたい」

「そう、ですか」

「残念かい？」

「いえ、別に」

「ふふ、小猫は嘘が下手だなあ。でも安心して、彼はきっちり僕が殺すから」

「……今、敵に回したくないって言いませんでした？」

「言ったよ、でも残念な事に彼にとつては僕ら魔獣派も敵なんだ。彼は必ず僕らを狙う、だから情報アドバンテージがある内に消してしまおうと思うんだ……それに彼が英雄派を見つけてそこを壊滅させたら複数の神滅具が彼の元に行く事になる、そんな事に

なつたらもうどうしようもないからね、消すなら今しかないんだ」  
「なるほど」

その説明に小猫は納得した。

確かに、ただでさえ強敵なのにこれ以上強くなつたら目も当てられない。

「ふふ、それに彼の役割は終わったからね、危険な駒は消すに限る」

「……役割？　駒？」

「そう、彼は僕の計画の駒の一人だ。そして彼には大事な大事な役割があつたんだよ。リゼヴィムを消すという役割がね」

「……ッ!？」

息を呑む小猫。

だが、それを気にせずレオナルドは話を続けた。

「なぜ僕がこんなに彼の情報を持っていたと思う？　それはね、最初から彼に目を着けていたからさ」

「さ、最初からとは？」

「彼が一時的に英雄派の仲間になった時からだよ。僕は以前からリゼヴィムを消してくれる人材を探していた。だから世界中に仲間を放ち情報を集めていたんだ。それに引つかかるつた内の一人が彼だったという訳だ」

上手くいってよかった。そう言つて楽しげに笑うレオナルド。

そんな彼に小猫は首筋に氷を押し当てられた様な寒気を覚えた。

「……ひっ」

小猫の口から小さな悲鳴が漏れる。

「怖がる事ないじゃないか、普通の事だよ天敵を排除したいと思うのは」

そんな小猫の様子にレオナルドが悲しげに、拗ねたように苦言を漏らす。

普通、こんな子供にそんな態度をさせれば多少は心が痛むもの。

だが、小猫はレオナルドのそんな態度を見ても全く罪悪感や浮かばない。

むしろ彼女の胸の内は恐怖心でいっぱいだった。

そんな小猫の内心にレオナルドは苦笑すると軽く肩を竦める。

「仕方ないじゃないか、リゼヴィムと僕は相性最悪、絶対に勝てない相手だったからね、誰かの助けが必要だったんだよ」

「……じ、じゃあ、彼がリゼヴィムを殺したのは」

恐る恐るといった様子で小猫が問う。

あなたが全て仕組んだのかと。

それにちよつとだけ得意げな笑顔でレオナルドは答えた。

「はは、僕がした事なんて微々たるものだよ。彼は都合がいい事に元々リゼヴィムを消すつもりだったからね、だからリゼヴィムの居場所を探知しやすいように少しだけリゼヴィムのアジトに手を加えた。たったそれだけさ」

「……………結局全て掌の上、ということですか」

「そんな事はないよ、僕の想定外が幾つもの起こっている。それにね、僕がした事なんて本当に普通の事だよ。魔獣創造を持っていれば誰でも出来る実に簡単なお仕事さ」

子供でも出来るね、そう付け加え楽しみに笑うレオナルド。

ここまで会話してついに小猫は限界に達してしまった。

「……………ッ、失礼します」

そう言つて彼女は席を立つと、広い広い食堂から出て行つた。

「ああ、行つちやつたか」

そう呟き、レオナルドは腕時計を確認する。

「約10分、新記録だ。小猫も日々成長してるね。いい事いい事、やつぱり君の教え方が

上手いからかな？」

「……あんまり白音を虐めるないでくれる」

そう言つて、レオナルドと小猫以外は誰も居ないと思われた食堂に黒髪金眼の美女——黒歌が姿を現わす。

その目に若干剣呑さを宿らせて。

「虐めたつもりなんてないけど？」

「レオと話すだけで白音には虐めにゃん」

「えー酷い」

「そう思うならまずそのプレッシャーを抑えるにゃん」

「これも訓練の内だよ、強大な敵のプレッシャーに動けなくなつたら大変だから」

そう言つてレオナルドは自然に纏つていた巨大な魔獣の如きプレッシャーを抑え込んだ。

「しかし、黒歌はなんでもっと小猫と話さないの？ せっかく再開出来て一緒に暮らしてるのに仙術の訓練の時くらいしか顔を合わせてないじゃないか」

「……………」

「それに会話も素直じゃない。今みたいストレートに話さずどこか茶化すように話してるよね、それって嫌われると思うんだ」



「……余計なお世話にやん」

「はは、ごめんごめん、それで準備は整った？」

「……宮藤勇真のアジトの孤島近海に仙術で気配を消した大量の魔獣を設置したにやん、元々気配が薄いタイプの魔獣だから気付かれる事もないと思うわ」

「さすがは黒歌、仕事が早いね、じゃあ、今日の深夜に夜襲を掛けようか」

「……今日？ いきなりなの？」

「うん、準備万端なら直ぐに攻めよう。彼は理不尽なくらいの才能の持ち主だからね、下手に長引かせるのは危険だ」

「理不尽な才能ってのはレオの方な気がするにやん」

「はは、僕は普通だよ。じゃ、僕は仮眠を取るから夜の12時になったら起こしてね」

そう言つてレオナルドは自室へと去つていく。それを見送り黒歌は溜息を吐いた。

「……」愁傷様にやん

それが誰に当てた言葉かは彼女だけしか知らない。

だが、彼女の視線は今も映されている映像、魔導人形の人格作成に四苦八苦する勇真の方を向けられていた。

## 第35話

戦いが始まった時点で勝敗が決している。

余程戦力に差がない限りは綿密に計画を練り、準備に時間を掛けた方が勝つ。  
勇真もレオナルドもそう思っていた。

そして……

今回より綿密に計画を練ったのはレオナルドの方である。

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost!!?』

魔獣派のアジトで力を倍化する音が鳴り響く。

これは赤龍帝特有のもの。

しかし、今回に限って、否、今の世界に限ってはこの倍化音は赤龍帝だけが放つものではない。

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost !!?』

『トランスファー!!?』

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost !!?』

『トランスファー!!?』

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost !!?』

『トランスファー!!?』

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost !!?』

『トランスファー!!?』

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost !!?』

『トランスファー!!?』

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost !!?』

『トランスファー!!?』

「そこまでいい、それ以上の譲渡は必要ない」

「私の方も大丈夫にゃん」

「了解、もういいよロート、ルブルム、パルガン、ヴェルメモリオ」

そうレオナルドが声を掛けると、黒歌とゲオルクの周囲に居た四体の赤い毛並みの龍と犬が混じった様な魔獣が嬉しげに尻尾を振ってレオナルドに駆け寄って来た。

その龍犬を一体一体優しげにレオナルドは撫でる。

そして、龍犬を撫で終わるとレオナルドは視線を彼等から力を譲渡された黒歌とゲオルクに向けた。

「よしよし、さて、いけそうかな？ 黒歌、ゲオルク」

問い掛けるレオナルドに二人は頷く。

「どうやら力の問題は大丈夫な様だ。」

「そうか、じゃあ早速やつてもらおうかな」

「分かったにゃん」

「了解した」

同時にゲオルクと黒歌から黒い霧と膨大な魔法力、妖力が迸る、更に二人の周囲には多数の魔法陣が現れた。

「行くわよ」

「分かっている」

黒歌とゲオルクは息を合わせると、自身が作り出した魔法陣をゆつくりと重なり合わせる。

そして、完全に重なり合った多重合一魔法陣に二人から発生した黒い霧が吸い込まれていく。

出来上がったのは一本の黒い剣——『絶霧』の禁手化『霧の中の理想郷』ディメンション・クリエイトによる結果装置だ。

「ふう、完成だ。奴の居る孤島近海の魔獣を起点に転移障害、魔法妨害の結果を張った、魔獣は起点ではあるが倒されて問題はない、要はココにあるその剣だからな」

額の汗を拭いながらゲオルクがそう言った。

倍化譲渡は初体験のゲオルク。

自身の全魔法力を遥かに上回る力を初めて使用した為、若干いつもより消耗が激しい様だ。

「勇真が脱出に要する時間は？ あと魔法妨害はどれくらい効くと思う？」

ゲオルクと黒歌の結果作成を静かに見守っていたレオナルドが口を開く。

そのレオナルドはゲオルクは既に計算していた予想を口にした。

「……あくまで予想だが、全力で脱出に取り組んでも半日は掛かるな、魔法妨害については全ての魔法に強い妨害効果を發揮する。勇真なら使おうとして使えない事はないが通常時に使うより遥かに威力が落ち、また魔法力の消費量も膨大となるはずだ」

「分かった。協力感謝するよ。それで黒歌の方は？」

「結界内に人間にだけ効く仙術によつて作った毒の霧を散布したわ、倍化で効力を高めてるから常人なら1秒でお陀仏にやん♪……でも、あのクラスの魔法使いなら回復魔法で保たせるでしょうね、多少時間を掛ければ根刮ぎ解呪される恐れもあるにやん」

「それで充分だよ。エキドナ」

「はい！」

レオナルドの声に元気よく、彼の 影 から金髪金眼の可愛らしい少女が飛び出してきた。

「エキドナは今から結界内に入つて勇真と戦闘開始、勇真との戦闘時は創る魔獣は実力重視、数は1000体も居ればいいよ別に無理に倒す必要はないから。ただ絶対に勇真を結界内から脱出させせない事、黒歌の呪いを解呪させせない事、良いね？」

「分かりました！ あれ？ でもたった1000で良いの？ マスターなら100万くらいで攻めろつて言うかと思つたんだけど？」

「超威力の範囲攻撃が出来る相手に弱いのを多数の用意しても意味ないからね、創る魔獣は最低でも最上級悪魔レベルの力は欲しい。もちろん必要と判断したら創つても構わない、そこは実際戦つてみて決めてね」

「そつか、了解♪ じゃあ、いつてきまーす！」

「うん、頑張ってる」

「はい、頑張ります！」

そう言つて、エキドナは笑うと再びレオナルドの影に潜つてこの場から消えた。

「さて、じゃあ、黒歌は引き続きみんなに力を譲渡してもらつて仙術で毒霧の生成を頼むね、ゲオルクはその毒を結界内に転移よろしく」

「分かつたにやん」

「了解。それにしても倍化した魔法阻害に毒か……エゲツないな」

「そう？ この程度で勝てるなら楽なくらいだと思ふけど」

「まだ、何かする気だったのか？」

ゲオルクが呆れたように言う。それにレオナルドはさも心外だと言う不満顔をした。

「何かする気か？ 当然するよ。君達だつて勇真の情報はある程度持つてるだろ？」

なら分かるはずだ、この程度なら彼は普通に破ってくるよ」

「魔法を阻害された中、倍化譲渡で大幅に強度を増した絶霧の結界をか？」

「もちろん。きつとエキドナも撃破される」

「……自分の半身を撃破されると知りながら送り出したのか？」

「エキドナは僕が死なない限り消滅しないからね。例え倒されても復活出来る。だからもつとも勇真に余裕があり、味方の死亡率が高い戦闘開始に彼女を送つたんだよ。もち

ろん、それはエキドナも知つての事だ、なんたつて僕の半身だからね」

だから、毒霧転移の次はこの準備をよろしく。

そう言つてレオナルドは虚空にある映像を映すとゲオルクに次の作戦を説明し始めた。

それを聞いてゲオルクの顔が青ざめる。

「しよ、正気かつ!？」

「当然、正気だよ」

「下手をしなくても死ぬぞツ!？」

「大丈夫、長い間、身体を調整してきたからね、短時間で多少なら問題ない」

「だ、だがいくら何でとこれは不味いぞツ! それに今から取り掛かつては間に合わないッ!」

「時間なら問題ない。こちらで殆ど終わらせているから、ゲオルクには最後の一押しと最高の境界装置を作つて欲しいんだ。力なら幾らでも譲渡するから」

レオナルドがそう言うのと四体の龍犬がゲオルクに近づきおすわりし、譲渡しますか？

といった感じに首を傾げた。

「……………はあ、曹操に謝らねばならなくなるな、いや、失敗しても良いか。もう人類はほぼ滅亡してるのだ構うまい」



そして、ゲオルクは深い溜息を吐くと、龍犬から大量の力を譲渡され、過去最高の結界装置を創り出すのだった。

「釣れたね」

「釣れましたね」

凶悪な結界に包まれた島の中心で勇真とルミネアが落ち着いて呟いた。

そんな状況下で何故二人が落ち着いているかという点、この襲撃が予定調和だったからだ。

勇真は自分が監視されている事に気が付いていた。だが、感知魔法を使ってもその監視者が何者かは分からず、また、どうやって監視しているのかも不明だった。

しかし、監視者が誰なのかは、ある程度予想出来る。

三大勢力もその他の神話体系も死ぬほど忙しい現状、普通に考えてこうも長時間、高度な技術で自分を監視するのはある程度自分の事を知っている禍の団しか居ない。

そう予測を立てた勇真はあえて監視に気付いていないように見せかけ自分の情報を監視の目がある場所で披露した。

自分がどの程度の戦力を持っているのかを。

自分はどの時間帯に隙が出来るかを。

そして、自分の弱点はなんなのかを。

全ては自分を襲撃してもらう為、敵の居場所を見つける為に。

そして今、その思惑通りに大きな魚が餌に食いついた、あとはリールを上手に巻くだけなのである。

「絶霧の結界、つまり、ゲオルクーー英雄派か？ 丁度いい、絶霧は是非とも欲しかったんだよね」

「勇真さん、悪い顔してますよ」

「おっと、ごめんごめん、外面意識つと」

そう言つて勇真は悪党全開の黒い笑みから優しげな美少年スマイルに笑顔の種類を切り替えた。

「さて、ルミネアこの家が毒と魔法阻害に侵食される予想時間は出た？」

「はい、残り1分20秒です」

「よし、普通にしたらこの結界解呪は間に合わないね、なんか強い力を持った奴がこっちに向かつてるし……と、言うことで」

勇真の左腕に赤い籠手が現れる。

それに元々着けていた黄金の腕輪——『無窮の担い手』が溶けるよう混じり合う。

そして、勇真の口から力ある言葉が紡がれた。

『バランス・ブレイク禁手化』

その言葉と共に勇真から閃光が走る。

次の瞬間、勇真は赤と金を基調とした美しい騎士甲冑に包まれていた。

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost!!?……』

勇真の全身から超越的な、完全に常軌を逸している魔法力が迸る。

通常の勇真の30倍以上、主神級すら勝ち目が薄い、人外から見ても尋常ならざる魔法力。

今の勇真は小細工抜きで世界で五指に入る実力を持つていた。

「5回が限界かあ、もうちょい頑張ろうよ……まあ、充分か」

ちよつと残念そうに勇真は呟くが、気を取り直し彼は瞬時に最高位の結界粉碎魔法を形成、そこに……

『Transfere!!?』

倍化した魔法力を譲渡する。

「ルミネア、貴重品や大事な物は圧縮空間に仕舞つてあるよね?」

「はい、大丈夫です」

「よろしい、じゃあ、ちよつとズルいけど無理矢理出させてもらおうかな?」

そう言つて勇真は結界粉碎魔法を発動。

光の速さで駆け巡つた粉碎魔法が絶霧の結界を空気を入れすぎた風船の様に破壊。

ついでに巻き起こつた物理破壊が島と近海……そしてエキドナ、ありとあらゆるものを原子単位の塵へと還した。

戦いは綿密に計画を練り、準備に時間を掛けた方が勝つ。

ただし……余程戦力に差がない限りは。

魔獣派の主城で突き立っていた黒い剣——結界の要が音を立てて砕け散った。

「ツ!!? ……結界を崩壊を確認、本当にアレを破るとはしかもこんな短時間で」

当たって欲しくない予想が当たってしまった。

そんな心底嫌そうな顔でゲオルクは呻いた。

「あく、予想より遥かに早いね、これは監視の目に気づいてたね。で、あえて情報を与えて襲撃を待ってたかな？」

レオナルドが困ったように言う。

……実際は困ったなんて生易しいレベルではないのだが。

「レ、レオツ！ どうするの!?! 多分、逆探知でこっちの居場所に気付かれたにやん」

「そっか、それで彼はどれくらいで来ると思う?」

「……………三分くらい」

「フフフ、それは随分と自分に甘い予想ですね」

次の瞬間、レオナルド達は強固な結界に包まれていた。

「――勇真ッ!? バカな早過ぎるッ!」

「いや、お待たせするのも悪いですから」

ゲオルクの叫びにのほほんとした顔で勇真は答える。

その言葉に倍化された行動阻害呪詛を織り交ぜて。

「ぐおっ!」

「ッ!」

たった一言言葉を交わしただけで地に膝を着いたゲオルクと会話を聞いていた事に  
より立ってるのがやつとの状態になった黒歌。

それを満足気に見てから、勇真は唯一普通に立っているレオナルドに視線を向けた。

「それにしてもゲオルクは久しぶりですが、他の方は初めましてだね。知ってるかも知  
れないけど俺は宮藤勇真って言うんだよろしくね」

倍化呪詛をたっぷりと込めて自己紹介。

これにゲオルクは意識を失いかけ、黒歌は地に座り込む。

「ええ、よろしく勇真、僕はレオナルドと言います」

しかし、そんな凶悪な呪詛を受けてもレオナルドは自然体だ。

それを見て勇真は目を細める。

コイツは強い……と言うより得体が知れない。それが勇真のレオナルドに対する感想だった。

故に……

「そうか君がレオナルドくんか小さいのに魔獣派のリーダーなんだってね。本当に凄い。これからよろしくね」

『Boost Boost Boost Boost Boost!!?』

勇真の右手に倍化した魔法力が収束する。

「まあ、短い間の事だけど」

危険な敵は即滅殺。

勇真の右手から神すら滅ぼす神滅の雷撃が放たれる。

この一撃で、魔獣派の巨城は防御結界諸共跡形もなく消し飛んだ。

## 第36話

「……流石に防ぎ切れなかったか」

両手を突き出し、衣服をボロボロにしたレオナルドがそう洩らす。

そんな彼を見て勇真は眉をひそめた。

「……全力で撃ったつもりだったんだけど？」

「いや、今ので手加減したとか言われたら僕もお手上げだよ」

そう苦笑するレオナルド。

そんなレオナルドに勇真は警戒心を強めた。

今勇真が撃った魔法は生半可な威力ではなかった。それこそ高位の神を防御の上から消し飛ばす、超絶の威力があつたはずなのだ。

にも関わらずレオナルドは両手が焼け爛れる以外は目立った外傷はない。

それどころが後ろのゲオルクと黒髪の猫娘――黒歌すら完璧に守り切っていた。

「……………」

そんなレオナルドのあり得ない実力に若干の危機感を覚えた勇真はそのカラクリを見抜く為に探索魔法を発動する。



結果、ある程度だがレオナルドが攻撃を防げた理由を理解出来た。

「……なるほど、そちらも倍化能力を使った訳か」

「ふふ、(ゞ)名答」

探索魔法の結果、レオナルドの “影” の中から大量の力が彼に流れ込んでいるのが分かった。

これは赤龍帝の倍化能力と譲渡。

リゼヴィムの遺産の偽赤龍帝軍団、何処にも現れていないと思ったら魔獣派が密かに確保していたらしい。

「これは面倒になったなあ、それにしても影の中から譲渡なんて真似も出来ただね、知らなかった……もしかしてそれは『影の大盾』？」

「秘密だよ」

「だよね」

世間話をする様に勇真とレオナルドは楽しそうに話し続ける。

勇真は倍化呪詛をレオナルドに流し込む為と、彼のそばに倒れているゲオルクと黒歌

が人質として有効か探る為。

そして、レオナルドは勇真の次の狙いを “読む” 為に。

でなければ戦闘中に楽しくお喋りなどする筈がない。この二人は戦闘狂でもなければ戦闘中に無駄話をする様なタイプでもないのだ。

で、それ故にレオナルドは数秒会話をしただけで即座に戦闘に入ろうと考えた。

何故ならレオナルドは勇真の心を読めなかったから。

同格以上というのもあるが、洗脳魔法等を警戒した勇真の精神防衛魔法が硬すぎて心を覗けなかったのだ。

逆にレオナルドは勇真の呪詛を完璧に防いでいるようで実はそうではない。

凶悪な呪詛はごく僅かだが今も確実に彼を蝕んでいる。

故にレオナルドは一方的に不利になる会話を切り上げ、影に避難させていた信頼する家族をその場に出現させる。

現れたのは金色の少女と赤が4体、白も4体、計8体の龍犬だった。

龍犬は白と赤でタグを組むと、超強固な防御結界を形成する。

しかし、何故か金色の少女だけは防御結界に入らず勇真を睨みつけた。

「さつきはよくもやったな！」

そう言いたらビシッ!、という音が鳴りそうな勢いで金色の少女——エキドナが勇真を指差す。

それに勇真は困惑した。

「え、君と俺って初対面だよな?」

「顔を合わせる前にやられちゃったんだよッ!」

「ん……ああ、あの島に向かつてた強い気配の奴が君か、おのれ、俺は女性には手を上げない主義だったのに君のせいでそう名乗れなくなってしまったじゃないかッ!」

「逆ギレッ!」

勇真の言葉にブンブンと両手を振り回して抗議するエキドナ。

超隙だらけである。

「はあ」

勇真は小さく溜息を吐くと、おもむろにエキドナを指差した。

「な、なによ」

そう、警戒したように言うエキドナ。

そんな彼女を無視して勇真は指の差す場所をエキドナから彼女の斜め後ろに移動さ

せる。

で、その指の先を追ったエキドナが勇真から目を離れた瞬間、勇真の右手によって放たれた収束魔法力弾が彼女の頭を木っ端微塵に吹き飛ばした。

女性に手を上げない主義とはなんだったのか？ 舌の根も乾かぬ内の凶行である。

「な、なにすんのよッ!!」

この凶行にエキドナは激怒。

瞬時に頭を再生させ勇真を怒鳴り散らす。

しかし、そんなエキドナを勇真は無視、彼は怒る彼女を尻目に再び溜息を吐き出した。「はあ、やっぱりダメだよな、結界破壊用とは言え倍化魔法を受けて死んでないんだから当然持つてるよね再生能力……いや、魔獣創造の独立亜種禁手って言ったからもしかして神器所持者を殺さないで消えないタイプか？ 良い禁手をお持ちで」

「ふふ、自慢の僕の半身だからね……まあ、おバカなのが玉に瑕だけど」

「マ、マスター!?!」

「はいはい、エキドナ前を向いて、また攻撃を受けるよ」

「……むう、分かりました」

エキドナはバックステップで龍犬が張っている障壁の内側まで下がると勇真に向かつてあつかんべえをした。

「うーん」

このエキドナとレオナルドの様子を見ながら勇真はどうするか考える。

敵は12、内の2は戦闘不能中、人質の価値があるかは不明。

10の敵の内の2は魔王級以上の実力者、残りの8は平常時は下位最上級悪魔レベル、しかし瞬間最大攻防力は魔王級の倍以上の難敵だ。

「……………」

勝てないことはない。

いや、今の勇真ならむしろ勝率は高いだろう。

しかし、相手は確実に何か隠し球を持っている。偽赤龍帝の鎧も使用時間と最大倍化出来る回数が決まっておりあまり余裕がある訳ではない。

そして、鎧なしでは勝率は一気に激減する。

ならば…………

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost!!?』

速攻でカタをつける。

「そう言えば聞きたいことがあるんだけど？」

そう話す、*“幻術”* を元の位置に残し、勇真は倍化により効力を増した瞬間転移で

8体の龍犬が作る強固な防御結界を素通りしレオナルドの背後に移動。

レオナルドが振り返る前にその首を斬り落とし心臓を抜手で貫いた。

だが、レオナルドはエキドナ同様瞬時に頭を再生させる。

再生の際に火の粉が舞った。

フェニックスの不死性！

本体まで不死とか面倒い事やめろよ。そう思いつつ勇真はレオナルドの胸を貫いて

いる左手で神器抜き取りの術式を発動、彼から魔獣創造を奪い取ろうとした。

しかし、術式は不発。

やはり独立亜種禁手と言うだけあり、エキドナ自体が魔獣創造の核なのだろう。

ことごとく狙いを外された勇真は舌打ちし、左手から爆裂魔法を放つとレオナルドを

身体の内側から粉微塵とした。

「お前えええツツ!!」

ここでレオナルドを木つ端微塵にされてキレたエキドナが勇真に特攻する。

しかし、その速度は遅い。

いや、世界的に見ても速い方なのだが、勇真から見れば遅い。

勇真はエキドナが拳を引きパンチを繰り出そうとする間に彼女の首を斬り落とし胴体を両断、首から離れた頭を胴体ごと縦に真二つに斬り分けた。

「ううえ？」

二つに割れて宙を舞うエキドナの頭から変な声が漏れる。

そんな頭を勇真は殴り飛ばし、胴体を蹴り飛ばす。

そして、エキドナのパーツが飛ばされた先には何時の間にか張られた多重加速魔法陣が……。

次の瞬間、エキドナのパーツが超々高速弾と化し左に固まっていた4体の龍犬に激突する。

最大倍化時が魔王級以上とはいえ平常時は所詮下位の最上級悪魔レベル、前にしか障壁を張っていない龍犬はエキドナもろともバラバラに吹き飛んだ。

しかし、その龍犬すらもレオナルド達と同様に瞬時に再生してしまう。

赤龍帝の次はフェニックスのバーゲンセールか。勇真は内心で溜息を吐くと今回レオナルドを倒す事を断念、倒れて気絶しているゲオルクの首根っこを掴むと氷結魔法で氷の彫像とし圧縮空間に放り投げた。

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost!!?』

「今回は引かせてもらおう」

そう言つて勇真は両手に強大な炎熱球を作り出し。

『Transfers<sup>トランス</sup>!!?』

そこに力を譲渡。

転移で逃げる間に炎熱魔法を炸裂させ、せつかく再生したレオナルド達を一瞬にして灰にしたのだった。

「ただいま」

「お帰りなさい、怪我とかしてませんか?」

勇真は追跡阻害の魔法を掛けながら複数回転移して、ルミネアに指示して新たに太平



洋の深海に作ってもらっていたアジトに足を運んだ。

「はあ、怪我はしてないよ」

そう、溜息と共に言う勇真。その顔には『疲れた寝たい』と書いてあった。

「大丈夫ですか、なんか凄い疲れてませんか？」

「うん、慣れない倍化のせいですんごい疲れた……しかも、こんな労力を掛けたのに敵の首領を打ち取れなくてね」

「逃げられたんですか？」

「いや、俺の方から撤退した」

「そ、そんなに相手は強かったですかッ!？」

それを聞いてルミネアは驚愕する。

当たり前だ、偽物とはいえ赤龍帝の鎧を纏った勇真が撤退するとは只事ではない。

それこそ主神级かあるいは……

「オーフィスが出たんですか？」

無限の龍神が出なければあり得ない。そうルミネアは思っていたのだ。

しかし、勇真はルミネアの言葉に首を振る。

「いや、オーフィスは出てない。ただ敵が強かった、それ以上に不死性がヤバかった。もうね、倍化能力でフェニックスの不死性を高めてくるもんだから神クラスの一撃でも全

然死んでくれないんだよ。で、あんまり時間を掛けると鎧が解除されちゃうから危険と判断して逃げてきたって訳」

「そうだったんですか……倍化能力ってまさか赤龍帝のですか？」

「そう、リゼヴィムが言っていた量産型赤龍帝と白龍皇、それを魔獣派が確保して研究したんだらうね、魔獣創造で倍化能力と半減能力持ちの魔獣を創ってたよ。ほんとそんなのありかよって感じ、幽世の聖杯もそうだけど魔獣創造のスペックってどうなってるんだらう？ チートにも程があつたよ」

あのチート少年め、そう毒づく勇真。

この言葉を聞いたらレオナルドは笑顔で鏡見たらと言う事だろう。

そしてそれは勇真の才能と実力を知るルミネアも同様だ。

「……勇真さんはあんまり人のことは言えませんかね」

どこか呆れたように言うルミネア。

その言葉に勇真は肩を竦めた。

「自覚はあるよ。でもそれはそれ、隣の芝は青く見えるっていうでしょ？」

「確かに、言いますけど……いえ、それで今後はどうしましょうか？」

どこか釈然としない思いを抱きつつルミネアが今後の方針について勇真に聞く。

「魔獣派はしばらく放って置く。残念だけだ今の俺だと殺しきれない。だから先には英

雄派を墮として奴等のどうか曹操の『黄昏の聖槍』を奪おうと思う。あれを倍化能力と『無窮の英雄』で強化すれば流石にレオナルドにも通じると思う」

てか、それで通じなかつたらなお手上げ、そう付け足す勇真。

「でも、英雄派のアジトは分かるんですか？」

「分からない。だからこれから聞く」

「はい？」

勇真の言葉に首を傾げるルミネア。

それを尻目に勇真は圧縮空間から氷塊を――氷結封印したゲオルクを取り出した。

「こ、これゲオルクさんですか!？」

「そう、お土産のゲオルクです。今から彼に英雄派のアジトを聞いて聴き終わったら神滅具と魔法力を奪ってポイしようか、ふふふ、例えば情報を喋らなくても守りの要のゲオルクが居ない英雄派を見つけるなんて楽……………あれ？」

言葉の途中で疑問を口にする勇真。

その表情からは驚きが見て取れる、一体何があつたのか？

「……………どうしたんですか？」

「いや、ちよつと待ってね」

そう言つて勇真は氷結封印を解除。

すると……

ゲオルクの輪郭が崩れドロドロの液状になってしまった。

「……やられた、魔導人形だ」

そう勇真は苦々しい表情で呻いた。

「ま、魔導人形って勇真さん英雄派にいた時に教えたんですか!？」

「そんな訳ないよ、セラビニアの魔法は基礎の基礎、簡単な攻撃魔法しか話してない。多分、今回、監視されてる時に魔導人形の作り方を理解して盗まれたんだろうね」

顔に焦りを滲ませてガリガリと頭を搔く勇真。

その表情から不味い状況になったのがルミネアからも一目で分かった。

「……もしかして以前英雄派に置いて来たエレインちゃんが原因では?」

それにそんなはずはないと横に首を振る勇真。

「いや、英雄派に置いてきたエレインちゃんは自爆させたから術式解析なんて出来ないはずだ」

「では本当に見ただけで模倣を? あれって知識があっても創るのが難しいですよね?」

そんな事が可能なんですか!？」

驚くルミネア、しかし、驚いてるのは勇真も一緒だった。

「俺は無理だと思ってた。実際、俺も同じ状況でコレを盗めと言われたら出来ないと思う……そう言えばゲオルクは多数の神話体系の魔法をミックスして使ってたなあ、迂闊だった。多分、技術を盗むことに掛けて天才的な能力を持ってたんだ」

それにしたって異常だ、なにアイツ複〇眼でも持ってたの？ うわあ、超面倒くさい事になった。そう言っただけ勇真は頭を抱える。

「……、これってもしかして、契約魔術も盗まれていますか？」

恐る恐るといった風にルミネアが勇真に聞く。

もしそうだったらヤバイなんてレベルの状況ではない。で、ルミネアはその質問の答えが勇真の顔から垂れた冷や汗で簡単に分かった。

「……多分ね、これは何としても早急に英雄派を潰さないととんでもない事になる」

勇真は疲れたように天を仰ぐと。

圧縮空間から魔法薬を取り出し一気飲み、嫌々ながら徹夜の覚悟を決め探索魔法で英雄派のアジトを探し始めた。

## 第37話

「……見つからねえ」

疲れた呻きと共に勇真はベットに倒れ込んだ。

魔獣派の居城から撤退してから20時間。

アジトを飛び出し数百回の転移魔法と数千回の探索魔法で地球中を探し回った勇真だが、結局、英雄派のアジトを見つける事が出来なかった。

その為、彼は仕方なく疲れた身体を引きずり新アジトに戻って来たのだ。

「お疲れ様です」

そう言つてルミネアが魔法薬が入ったコップを差し出す、勇真はベットから身体を起こしコップを受け取ると一気に飲み干した。

「……ふはあ、ありがとう。少し疲れが取れた」

「どういたしまして、しかし、その様子では英雄派は見つからなかったよんですね」

「……うん、世界中探したけど影も形もなかったよ、これはもう地上じゃなく、冥界か他

の神話体系の世界で更に異界を形成して隠れている可能性があるね」

「もし、そうだったらどうしますか？」

「今はお手上げ、もう異世界に逃げようか？」

「……冗談ですよね？」

そう言つて白い目で見てくるルミネアに勇真は肩を竦めた。

「半分は本気、でも、まあ、まだ何とかなる。魔導人形作成と契約魔法が使えるのがゲオルク一人だけならまだ大した問題じゃない」

「そうですね、魔導人形は基本術者の力を分けて作る人形、ゲオルクさんのキャパシティではそこまで強大な人形はつくれません」

魔導人形は特殊な方法を用いないかぎりには基本的に作り手よりスペックが落ちる。

それ故に技巧派のゲオルクが作った場合の単純スペックは勇真が作るそれより遥かに劣る事になるのだ。

「その通り、魔導人形を一度に使役出来る数は決まってるし、魔導人形を作る際は例え他人から魔法力を奪う契約魔法を併用しても一度奪った力を自分が保持しないといけないから、出来ても下位の最上級悪魔レベルが数体、いや、ゲオルクの場合はリスクを嫌つてむしろ力を奪つて作る人形はあんまり作らないと思う」

「リスク、そんなのあるんですか？」

勇真の言葉に疑問を述べるルミネア。

彼女自身も魔導人形の知識を持ち実際に作成出来るのだが、力を奪ってからの人形作成で特にリスクがあるとは知らなかったのだ。

「リスクっていうか当たり前の事なんだけど、例えばゲオルクが他人から力を奪って人形を創ったとする、これが一回なら問題ない。ちゃんと自分が保持できる力の量で創られた人形だからね、でも、同じ事を数回して複数の人形を創ったする……この人形が同時に倒されたとしたらどうなる？」

「ゲオルクさんに力が……あ、そういう事ですか」

「分かったかな？　そう、ゲオルクに力が戻る。で、戻って来た力を保持しきれなかったら内側からドカン、汚い花火となる訳だ」

「……………あれ、それだと勇真さんも危ない状況なんじゃ」

そう言ってルミネアは壁際に座る三体の魔王級の人形を見つめる。

「そうだね、でも俺の場合は死なない様に計算された量だから大丈夫、偽赤龍帝の鎧という優秀な補助器具があれば俺の身体は5回までの倍化に耐えられたしね」

「へえ、赤龍帝の鎧って倍化のアシストもしてくるんですね」

「当然だよ、じゃなきゃ元の自分の数倍、それどころか数百倍とか数千倍の力に身体が耐え切れるはずないでしょ？」



「それもそうですね」

「で、話は戻るけどゲオルク1人がこの魔法を使うのなら良いんだけど、もし、多人数に教えていたら……ヤバいんだよなあ」

勇真は疲れた様に頭を押さえる。

「でも、今はリゼヴィムのせいで英雄派の魔法を使える構成員も減っているのです。そこまですぐにしないで済むのでは？」

「まあ、そうだけども。でも、英雄派から他の種族、最悪は神族とかにこの魔法を知られて使われる様になるとねとんでもない事になるんだよね……最悪、数十体の高位神級の魔導人形が創られる可能性があるし……まあ、神族は元々桁外れな力を持つてる種族だから、今更得た新しい力に酔って変な行動を起こしたりはしないとと思うんだけど」

「……なんにしても早めの対処が必要という事ですね」

「そうなるね、はあ、ここからは先は戦闘ばっかになるなあ、ルミネアも覚悟しておいてね、多分君も戦う事になる。情けない話だけどルミネアを守りながら戦う余裕がなくなりそうだし……それが嫌なら今から適当な異世界に送るよ？」

出来ればルミネアには戦って欲しくない。俺としてはそっちの方が安心と勇真は付け足したい。

それにルミネアは首を横に振り、強い決意を秘めた目で勇真の目を正面から見る。

「いえ、私も残って戦います。私なんかでも多少は戦力の足しになる筈です」

「……うん、その通りだ。確かに足しになる。今の君はキャパシティ限界まで魔法力を高めている。その魔法力は魔力換算なら間違いなく最上級悪魔に匹敵する。新たに得た神器も含めれば魔王とだって互角に渡り合えるだろう」

契約魔法で『魔女の夜』の構成員から奪った魔法力。

リゼヴィムの負の遺産による人類滅亡、それにより得た複数の神器。

そして、元々のエクソシストとしての経験と勇真によつて与えられた多数の魔導知識と能力、これらを十全に使えば間違いなくルミネアは魔王級の実力を発揮出来る。

実際、戦闘訓練では偽赤龍帝の籠手なしとはいえ、勇真が秒殺出来ないレベルまでルミネアの実力は向上していた。

しかし、それでも勇真は不安だった。なぜならここから先は魔王レベル以上の敵が普通に出てくる事になるからだ。

「……本当に残るの？ 確かに戦力の足しにはなるけど死ぬ可能性も高いよ？ 俺的には逃げて欲しいんだけど」

「はい、残って一緒に戦います」

死にたくありませんが覚悟はあります。そう付け加え、ルミネアは強い決意を秘めた瞳で勇真を見る。

それに勇真は嬉しい様な困った様な微妙な笑みを浮かべた。

「……………はあ、分かったよ。でも命は大事にしてね」

「はい、もちろん勇真さんに助けていただいたこの命、大事に使わせてもらいます」

「バトル漫画とかでよくあるけど、そういう言い方は俺は好きじゃないな。聞いてて恥ずかしくなるし、俺が同じ立場だったら感謝はすれど逃げろと言われれば素直に逃げろと思うよ」

「勇真さんは恩知らずなんですネ」

「うあ、酷い……………うゝん、じゃあ、フィ、アルマ、ハルナス、お前達はルミネアの危険がないように彼女を守れ、俺の事は気にするな、最優先でルミネアを守るんだ」

「…はい、了解しました」

そう言つて壁際に座つていた魔導人形達が立ち上がりルミネアの側に侍る。

「ゆ、勇真さん？ 幾ら何でも三人も私に着けるのは大袈裟じゃありませんか？」

それに勇真は首を振る。

「いや、正直これでも足りない位だよ。しばらく俺はルミネアの様子を見れなくなるからね」

「え？ それって一体、ど」

「どういうことですか？　そうルミネアが言い終わる前に彼女の足元に巨大な魔法陣が現れる。」

そして驚くルミネアを他所に魔法が発動、彼女と三体の魔導人形を勇真が修行中に見つけた安全な異世界へと転移させた。

「…………ごめんね、本当に悪いんだけど、元々ルミネアには避難してもらおう予定だったんだ。俺はね、たとえ強くても君には戦って欲しくないんだよ」

勇真は聞こえるはずない謝罪をルミネアにすると、虚空に魔法で映し出した立体映像を浮かべる。

そこには小型の白き龍皇と紫炎を纏った巨大邪龍キメラ、そして神滅狼フェンリルが冥界の各地で街を破壊する姿が映っていた。

「……………」

その映像を勇真は真剣な表情で見る。

そして、この三大脅威と戦う悪魔達の戦力を比較し勇真は参戦する予定時刻を決めた。

「……あと、10時間くらいは保つかかな？」

そう呟いて勇真はベッドにダイブ、目覚ましをセットして目を閉じた。

「うおおおおおおおおおおおッ!!」

裂帛の気合を込めて黄金の甲冑を纏った男——サイラオーグが、覇龍と化したヴァーりに拳を叩き込んだ。

響き渡る轟音、そのあまりの威力に覇龍の兜にヒビが入る。

しかし。

「ぐふっ」

お返しにそれ以上の威力の拳がサイラオーグに打ち当たり、彼は凄まじい勢いで殴り飛ばされてしまう。

超速で殴り飛ばされたサイラオーグはなんとか体制を立て直して足から着地、直後サイラオーグの着地地点の地面が吹き飛び巨大なクレーターが出来上がる。

それほどの威力で殴り飛ばされたのだ。

「はあ、はあ、はあ……フツ、パワー、スピード、魔力、何もかも上とは恐れ入る」

たったの一撃で膝をつく羽目となった自分に苦笑を浮かべるサイラオグ。彼の鎧は今の一撃で半壊している。

特に直接ヴァーリの拳が当たった箇所は酷い。そこは鎧部分が完全に砕け散り、砕けた破片が深々とサイラオグの胸と腹に埋もれ、今も大量の血が流れていた。

『サ、サイラオグ様、早く傷の手当をッ!』

サイラオグの眷属悪魔にして彼の鎧たる神滅具のレグルスが焦った声でサイラオグに告げる。

「問題ない、まだやれる」

だが、レグルスの忠告をサイラオグは拒否、彼はふらりと立ち上がると、今も街で暴れるヴァーリを睨みつけた。

『し、しかし』

「狼狽えるなレグルス、獅子王の名が廃るぞ? そして見る、あの戦場を」

そう言つてサイラオグはヴァーリの近くを指でさす。そこには今も必死に戦っている赤い龍帝の姿が。

「人間からの転生悪魔を戦わせて純血の上級悪魔が傷の手当で戦線を離脱するのか? このバアル領の上級悪魔たるサイラオグ・バアルが?」

『……………』

「レグルス、忠告感謝する。お前の言っている事は戦略的に正しい……しかしな、意地があるんだ」

そう言つてサイラオグは鎧を再生させると、全力で地を蹴り激戦地へと再び舞い戻つていった。

最初にヴァーリが暴れた北欧は最悪の結末を迎えていた。

白龍皇ヴァーリによりヴィーガルが殺害され、ラグナロクに死する運命だったフェンリルの予言が外れたのだ。

これによりヴァーリと共にフェンリルがアースガルズで暴走、ロキの陽動も相まつてたつた数日でアースガルズは滅ぶ事になる。

そして、ロキは数多の神々を喰い殺し更に力を増したフェンリルに、暴走し何もかも殺し尽くそうとするヴァーリを抑え込ませると。史上最悪のイタズラとしてフェンリルとヴァーリを冥界の別々の都市に転移させてしまったのだ。

で、そこに遅れて発動したりゼヴィムの忘れ形見の一つ、伝説級邪龍とキメラにされた神滅具使いのヴァルブルガが追加、更にこの機に乗じて目障りな三大勢力を潰してし

まおうと三大勢力に恨みを持つ他の神話体系の神々が大量に攻め込んで来て、冥界文字通りの地獄と化してしまったのだ。

「悪いな兵藤一誠、少し外した」

「サイラオーグさん!? 大丈夫ですか!?!」

「問題ない、まだまだやれる……奴は、封殺中か」

サイラオーグの視線の先には黒炎に包まれ、多数のラインで雁字搦めにされている白龍皇の姿があった。

『大丈夫かい? バアル大王』

「ギヤスパー・ヴラディカ、お前が白龍皇を止めているのか?」

『まあ、僕一人じゃなく匙とのコンボだけだね。この感じだと後1分は止められるからの今の内に回復させるよ』

その言葉と共にサイラオーグとイツセーは優しい光に包まれる。

ギヤスパーの回復魔法だ。

ただし、普通の回復魔法ではなく遠距離からのモノである。



「……流石は魔神バロールの生まれ変わりと言ったところか？ 視線を送るだけでも回復も攻撃も思いの儘とは」

リアスは本当に良い眷属を持つてるな少し妬んでしまいそうだ。そう言つてサイラオーグは笑う。

「なあ、匙、ギヤスパ、今の内に攻撃しちゃまずいのか？」

『今はやめてくれ、吸収力重視のラインと黒炎でパワーを吸つてるから、これで拘束出来てんのはギヤスパの時間停止のおかげなんだ、だからイツセークラスの攻撃なら余波で弾け飛ぶくらい脆い拘束なんだよ』

イツセーの問いに少し離れた位置にいる漆黒の鎧を纏つた匙が答えた。

黒炎とラインを操る匙の周囲には凄まじい濃度の呪詛が渦向いている。まだ彼は禁手に慣れてない故に呪う対象を限定できていないのだ。

『僕もしない事をオススメする。停止が即解除される上、外から強力な障壁と時間停止、あとラインと黒炎で動きを止めてる訳だから攻撃してもあんまりダメージを与えられない、今はむしろ白龍皇から力を吸収して体力、魔力の回復を図つた方が断然良いよ……と、そんなこと言つてる間にそろそろ時間だ。アレ相手に時間停止をするには少し力を溜めないといけな。次、時間停止を使えるのは3分後になるからそれまで頑張つてね』

ギヤスパアの言葉が終わると同時に黒炎とラインが内側から弾け飛び、ヴァーリが自由となる。

匙が大量の力を吸収した筈なのだが未だヴァーリのオーラは絶大、イツセーとサイラオーグを足した軽く十倍のオーラを纏わせゆつくりとした動きでイツセー、サイラオーグに振り返る。

次の瞬間、死角から迫ったラインがヴァーリの四肢に絡みつき、彼の胸の中央に剛力と加速魔法陣で超々高速となったアスカロンが突き立った。

「ハッ！」

そして四肢拘束と魔弾の直撃で大きく体制を崩したヴァーリにイツセーとサイラオーグが同時に襲い掛かった。

止め処なく降り注ぐ拳打の嵐、匙が強固なラインでヴァーリの行動阻害とパワー吸収、更に凶悪な呪いの流し込み、サイラオーグが超威力かつ熟練の体技でヴァーリの体制を崩し続け、イツセーがラインの強度を『譲渡』で向上させながら、攻撃に転じようとするヴァーリの動きを潰していく。

拘束してボコる。

シンプルだが効果的な強者潰しの戦術だった。

これにヴァーリは何も出来ずにタコ殴りにされてしまう。だが、それでも最初のアスカロン以外でヴァーリに目立ったダメージは見られない。

せいぜい、鎧にヒビが入っているくらい、だが、それも一瞬で修復される始末だ。

まるで疲弊していない。

それがサイラオグ、イツセー、匙、そしてギヤスパアの感想だった。

幽世の聖杯でコストを支払いその上でフェニックス並の回復力を得た時間無制限の覇龍、これほど理不尽な存在は世界中を見渡しても両手の指で余る。

こんなものに立ち向かへとか完全に罰ゲーム、勘弁してくれと匙は内心で愚痴った。

「おい、ヴァーリッ！ お前がしたかった戦いつてこんなものになのかよ！ 所構わず適当に暴れるのがお前のしたかったことなのかッ!」

「……………」

『……………』

イツセーがヴァーリに攻撃を加えながら話し掛ける。それにヴァーリもアルビオンも答えない。いや、そもそも二人は今、意識がないのだ。

アルビオンはヴァーリが生き返った時から、そしてヴァーリはリゼヴィムが死んだ時

からない。

だから、リゼヴィムに命じられたままに全てを破壊しようとして動いているのだ。

だが、それはある意味幸運なことでもある。

彼等に意識がないからこそ、この戦いが成り立っているのだ。ヴァーリの意識がある状態で彼がやる気なら、勝負は一瞬で着いていた。

残念だが、それほどまでに今のヴァーリと四人のスペックには大きな隔たりがある。

それを理解しつつもイツセーは強い憤りを感じていた。

「くそッ！ 簡単に操られやがってッ！ お前、それでも最強の白龍皇なのかよ!? それで俺のライバルのつもりなのかよ!? 悔しかったらいつもみたいに挑発でもなんでも返してみやがれッ!!」

「……………」

「……………本当に意識ないのかよ」

何も答えないヴァーリにイツセーはどこか寂しげに呟いた。

『時間停止の準備が出来た。10秒後に停止するからそれ以降は攻撃しないでくれ』

「……………分かった」

そして、10秒後、再びヴァーリの時間が停止する。それと同時に匙が黒炎をヴァー

りに纏わせ、ラインの様式を拘束力重視から吸収力重視に変更、ラインをイツセー、サイラオーグ、ギヤスパーにも繋げるとヴァーリがら吸い出した大量の力を譲渡し始めた。

『攻撃してみてどうだ？ 言っちゃなんだが全然効いてないように見えるんだが』

匙がどこか不安そうにイツセーに話し掛けた。

「正直、効いてない」

イツセーは匙の問いに疲れた声でぶつきら棒に答える。

だが、それにサイラオーグが異を唱えた。

「いや、多少は効いている、だが、回復力が高過ぎてダメージとして残っていないだけだ。……ギヤスパー、お前は能力の『停止』も出来ると聞いたのだが、あの回復力をなんとか出来ないか？」

『残念だけど無理だね。使い手がちよつと強い程度の相手なら停止する事も可能だけど、あのレベルの相手の能力を封じるのは不可能だ。むしろ、時間停止もあと何回出来るか分からない。慣れたのか知らないけどどんどん停止するのが難しくなってきた』

「神器取り出しは使えないか？ 匙はアザゼル先生に聞いてやり方を知ってるんだよね？」

『出来るぞ、俺抜きでアレを三時間、身動き出来ない状態にしてくれればな』

「はは、出来れば3分に短縮してくれ、それなら死ぬ気で羽交い締めにするから」

『……ごめん嘘、俺じゃあ神器取り出しは無理。多分アザゼル先生でも10分は掛かる』  
「そのアザゼル総督は今どこに？」

『総督はシトリー領で、三人の魔王と共に悪神ロキ、神滅狼フェンリル、龍王ミドガルズオルム、死の女神ヘル、その他多数の高位魔獣と戦闘中だね。かなり押されてる様だから救援は難しそうだよ』

うわあ、寝坊助ドラゴンが本気出してるよ。そうギヤスパーは付け加えた。

「……詰んでるな、こっちも『霸龍』に掛けて短時間で決めるしかないか？」

「ならば俺も『霸獣』をしよう、二人ならばまだ倒せる可能性がある」

『おいおい、落ち着いてくれ、それはもう少し考えてからでも良いだろう。体力、魔力は今の所はヴァーリから吸収して回復出来るんだ、まだ焦る時間じゃない』

『匙の言うとおりだね、君達に今リタイアされると困る。それに敵は白龍皇だけじゃないんだよ？ フェンリル組にヴァルブルガはもちろん、今冥界は聖書勢力が気に食わ

なかった多数の神に襲われてる。特についていきつき参戦したゼウスとハーデスがヤバいねアレは完全に聖書勢力を潰す気だ』

そちらは魔王サーゼクスとその眷属が抑えているが、主神级二柱相手にいつまで持つか。そう、ギヤスパーは言う。

「ゼウスって、前会った時は気の良いおっさんみたいだったぞ!」

『はは、そんなの外面だけさ、ギリシャ神話を知らないのかい? あそこの神々は下衆の巣窟だよ……と、そろそろ停止が解ける。再開の準備をツ!』

ギヤスパーが驚きの声を上げる。

それと同時に虚空から巨大な鎖が出現し、ヴァーリを雁字搦めにして宙に張り付けた。

そしてヴァーリの背に一人の男が現れる。

「やあ、兵藤一誠、調子はどうかな?」

「あ、あんたは『与える者』ツ!」

イツセーが驚きを露わにする。

こんな所で会うとは思わなかったのだ。

「そう、与える者だ、覚えていてくれて嬉しいよ」

相変わらず特徴が薄い与える者、しかし、纏うオーラは以前よりも遥かに強い。はっきり言ってヴァーリに近いレベルである。

「……何しに来た? まさか、お前も冥界を襲いにツ!」

イツセーが警戒した様に構える。

それに与える者は違う違うと、手首をひよいひよい動かして否定する。

「はは、まさか、私は平和主義者だ。そんな事はしないさ。私がここに居るのは契約者の君の危機を感じ取ったから加勢に来たんだよ」

そう言つて胡散臭い笑みを浮かべると与える者はヴァーリの胸からアスカロンを引き抜いた。

そして、彼はその傷口がふさがる前に自分の右手をヴァーリの胸の中に突っ込んで神器取り出しの術式を発動する。

その行動にヴァーリが激しく抵抗、暴れるヴァーリによつて頑強な鎖が大きく揺れた。

しかし。

「騒がしい」

その言葉と共に与える者は引き抜いたアスカロンを今度はヴァーリの顔面に突き刺さすと行動阻害の呪詛をたつぷりと流し込み、ヴァーリの動きを強制停止。

そこで匙とギヤスパ、そしてイツセーが疑問を覚える。

与える者が使つた行動阻害の魔法に見覚えがあつたのだ。

だが、三人の疑問を他所に与える者は右手を起点に神器を抜き取ろうとする。



それにより凄まじい拒絶反応が巻き起こり、衝撃波が与える者に叩きつけられた。だが、与える者はこの衝撃波を涼しい顔で耐えきり、更なる魔法力を術式に込めると、拒絶反応が消えヴァーリの胸から黄金の光が漏れ出した。

そして、与える者の右手をヴァーリの胸から引き抜く。そこには黄金の杯——『幽世の聖杯』が握られていた。

ほんの1分足らずの早業である。

『なっ!? そんなあっさりッ!?』

簡単に引き抜かれた神滅具に匙が思わず声を上げた。

「ん? そんな驚く事でもない。この聖杯は元から彼が持っていたモノではない。故に魂との結び付きが弱いんだ。だから簡単に引き抜ける……問題はここからさ」

そう言つて与える者は圧縮空間倉庫に聖杯を入れると、もう一度神器抜き取りの術式を発動する。

今度は白龍皇の光翼を奪い取るつもりなのだ。

「ふふ、有用な神器だからなこれも『D・i・v・i・d・t・t!』む?」

与える者の言葉の途中に白銀の鎧が怪しく輝き言葉を発した。

それは半減能力の発動音、それに危険を察知した与える者が即座にヴァーリの近くか



が、まだ僅かだが聖杯の加護が残っていたのだ。

「いやいや、北欧最高の拘束具だよ？ 全然釣り合わないさ、それに洗脳から解放してあげたんだから少しくらいサービス出来ないの？」

「恩着せがましいな。洗脳が解けたのは意図的ではないだろう？……とはいえその点は感謝している。だがやれないものはやれないな、どうしても言うのなら相手になるか？」

そう、好戦的な笑みを浮かべるヴァーリ。

それを見て与える者は呆れたような目をした。

「洗脳されて戦わされて、解放されても戦いを求めると、生粋の戦闘狂だね……おーい、兵藤一誠！ 一緒にコイツをボコらない？ 報酬は弾むよ？」

そう言つて与える者は少し離れたイツセーに提案する。

それにイツセーはしばし無言で考えてから、ヴァーリをまっすぐ見て彼に質問を投げかけた。

「……………ヴァーリ、お前はまだ冥界を襲う気はあるのか？」

その言葉にヴァーリは与える者を警戒しながらイツセーに視線を向けた。

「今はないな、むしろ俺は冥界を襲っている奴ら、特にフェンリルと戦いたい」

「その言葉、嘘じゃないな」

「ああ、嘘じゃない」

「……………分かった信じる。与える者、俺は今、ヴァーリとは戦わない。どうしても戦いた  
いなら一人で戦うんだな」

イツセーの言葉に与える者は眉をひそめた。

「敵の言葉を簡単に信じ過ぎじゃあないかな? ……まあ、良いか、ではそちらの三人は  
どうだい?」

「俺は止めておく、それよりも他の襲撃者の対処がしたいからな」

『サイラオーグさんに賛成だ。白龍皇に戦意がないなら俺も早く会長達と合流したい』  
『僕も手伝う気はないね……。そもそも幻術で姿を偽っている奴なんて信用出来ない』

「……とく協力を拒否される与える者。」

この状況に与える者は苦笑いで肩を竦めた。

「ふむ、嫌われたな。仕方あるまい、どうしても欲しいモノでもないからな今回は退くと  
しよう。では兵藤一誠、英雄派についてはくれぐれもよろしく頼むよ」

それだけ言うると与える者はイツセーの答えも聞かずこの場から転移で消え去った。

## 第38話

盛者必衰。

「どんなに勢いがある者も、どうなに強大な力を持つ勢力も。遅かれ早かれいずれは朽ちて滅びゆく。」

つまり、これはごく自然な事だったのだ。

《ファファファ、大したバケモノぶりじゃったが、流石にそろそろ終わりかのお？》  
「ガハハハハ、我ら相手に良くやったよ！」

そう啜う二柱の神——ゼウスとハーデス、彼らは周囲に大量の死神と下級神を従えながら敗北者へと視線を送る。

敗北者は紅い髪をしていた。

敗北者は魔王の鎧を纏っていた。

そして、敗北者は滅びのオーラを纏っていた。

そう、敗北者とは最強の魔王、サーゼクス・ルシファー。彼と彼の眷属はこの二神と多数の軍勢の前に敗北してしまったのだ。

「ゼウス、殿。何故、冥界を襲ったッ！」

満身創痍、息も絶え絶え、地に膝をつきながらサーゼクスが苛烈な瞳でゼウスを睨みつける。そう、この冥界侵略はハーデスが主導で行った事ではなく三大勢力の和平に賛成を表明していたゼウスが起こした事だったのだ。

「ほう、まだそんな元気があったか、流石は超越者と呼ばれるだけの事はある」

口ではそう褒めつつも、ゼウスの表情は完全にサーゼクスを見下していた。

それに日頃の優しげな口調を投げ捨ててサーゼクスが叫ぶようにゼウスに問い詰める。

「答えろッ！ なぜだゼウスッ！」

「ふん、悪魔風情がこのゼウスを呼び捨てとは不敬極まる……だが、まあ、答えてやるか。何故襲ったかだったな？ そんなもの三大勢力を滅ぼすチャンスだったからに決まっておろう」

両手を広げ、心底サーゼクスを馬鹿にし態度を取るゼウス、それにサーゼクスは拳を

硬く握り、血を吐く思いで質問を投げかけた。

「貴方自身の口から言ったはずだツ！　これから協力体制で行こうと、そう約束したはずだ……自分の、自身の言った事も忘れたのかツ！」

「ふん、魔術的拘束力のない約束など守るに値しないわ、そもそも儂が本気で三大勢力の和平に賛同していたと思っっているのか？　そう思っていたならば愚かとしか言いようがあるまい」

「……ツ！」

「儂はギリシヤの主神だぞ？　悪魔の味方ではないのだ。当然悪魔ではなく自分の勢力の利益を追求する、それがトップのやる事だろ？　ほれ、儂の行動に何か間違いがあったかな？」

そう言つてサーゼクスを嘲るゼウス。

彼の性格の良さが滲み出ていた。

《ファアファア、サーゼクスよ、お主やアザゼルは私がゼウスに逆らい三大勢力の和平を壊そうとしている、そう考えていたようだが、実際は全く違う。この兄使いの荒い弟が自身の冥界侵略の戦力集めの隠れ蓑にする為に私に頼んできたのじゃよ、目立った行動でお主らの意識を集中させてくれとな》

ここでハーデスがネタバラシをする。

今までハーデスが『禍の団』の英雄派と繋がっている、という情報がゼウスからもたらされていた。

そして、ハーデスを裁くために戦力を集めているとも言っていた。

それらは全てゼウスの罠だったのだ。

戦力を集めていたのは冥界を落とす為、そして、禍の団と繋がっているのは何もハーデスだけではなくゼウスも繋がっていたのだ。

「いやすまないな兄上、儂としては天使どもを煽って再び大戦に持つて行こうと考えていたのだが、こやつらの結束が思った以上に硬くての、全くの嘆かわしい話じゃよ特に天使など神に創造された分際で無き神の意志に背くとは、異教の神ながら儂も聖書の神が哀れでならん」

そう言つて楽しげに談笑する二神、あまりの怒りにサーゼクスの目の視界が赤くなつた。

「貴様らは、貴様らはッ！」

《ファアファア、もう喚くなコウモリよ》

「その通り、目障り故、即消えよ」

そう言つてゼウスとハーデスが両手に凄まじい力を収束する。ゼウスは眩いばかり神雷をハーデスは闇色の死呪を。



共に威力、効力は絶大、たとえ万全サーゼクスだろうと直撃すれば大ダメージは否めない超絶威力の攻撃である。

当然満身創痍で本来の姿すら保てない今のサーゼクスでは絶対に耐えられない攻撃である。

だが、避けるだけなら辛うじて可能だった。

後ろに魔王領がなければだが。

サーゼクスは最後の力を振り絞り、強固な魔力障壁を幾重にも作り出した。

そんなサーゼクスを見て嗜虐的にゼウスとハーデスは嗤うと、収束された力の一部を解き放ち、魔力障壁に打ち当てた。

この攻撃をサーゼクスは歯を食いしばって耐える。

それが面白いのかゼウスとハーデスは大笑いしながら少しずつ攻撃に力を込めていった。

《ファファファ、避けなくて良いのかな？ 今ならまだ間に合うぞ？》

「ガハハハハ、健気じやのう、健気じやのう、命を賭して民を守るか」

「……………」

その二神の嘲りに必死のサーゼクスは言葉を返せない。

それが、つまらなかつたのか、二神は出力を一気に上げてサーゼクスを一瞬で消し炭へと変えた。

超越者とは思えぬ呆気ない最期である。

《ほう、魔王領は守つたか、感心感心》

ハーデスがそう呟く。

彼の言う通り攻撃の射線上にあつた魔王領に被害はなかつた。

これがサーゼクス最後の意地の結果である。

「ガハハハハ、実に健気、そして実に愚かじや、ではのサーゼクス、お主が守つた民は農らが奴隷として扱つてやろう、ちようど頑丈で寿命が長い奴隷が欲しかつたのじやよ」

そう言つてゼウスは周囲に侍る、下級神達に指示を出す。

「奴隷とする故、魔王領の民を捕まえよ」

《ファファファ、お前達も行け》

ゼウスに続きハーデスも死神達に同じ指示を出した。

「さて、兄上、取り分は儂が6で兄上が4で良いかな?」

《いやいや、何を言う弟よ、ここは苦勞を掛けられた儂が6でお主が4じゃろ》

「えー儂が主神じゃし、ここは儂が6でよいじゃろ?」

《いやいや、ここは兄の顔を立てようと思わんか?》

「……むう、では儂が4で良い、ただし美女は全て儂のものだぞ」

《ファファファ、ならば7・3でなければ釣り合うまい……これを飲むならヘラには内緒にしてやろう》

「むむむむ、足下見るのお、いや、しかし」

一二神のじゃれ合いは続く。

……これがサーゼクス最後の意地の結末だった。

「はあ、どこで狂っちゃったのかねえ」

アザゼルが、疲れたように呟いた。

自慢の人口神器の黄金鎧は全壊し、その右腕は肩口から消滅、脇腹には拳大の大穴が穿たれている。

そう、正にアザゼルは満身創痍だった。

満身創痍で撤退しているのだ。

「聞こえるかシエムハザ？」

アザゼルは撤退しながら信頼する親友に通信を入れる。

答えは即座に返ってきた。

『無事ですかアザゼル?! すぐ連絡を入れろとあれほど言っただでしょう!』

焦った声でシエムハザが怒鳴る。

よほど心配したのだろう。彼の声は掠れ若干何時もより高かった。

「ああ、悪い立て込んでな。俺はなんとか無事だよ。で、それよりグリゴリの様子はとうだ? どっかから攻められてたりしないか?」

アザゼルは地上に降り立ち、怪我を人口神器で癒しながらシエムハザに問い掛ける。

『今の所は大丈夫です。どうやら襲撃は悪魔のみにされているようです……アザゼルはどの程度状況を把握していますか?』

その言葉にアザゼルは目を細め、安心した。　「様」　に息を吐き出した。

「あんまり把握は出来てないな、俺の無事が確認出来てなかったって事はソツチも状況把握は出来てなんだろう？」

『ええ、ただ、知っているかも知れませんがギリシャ神話勢力が参戦しました。そして、魔王サーゼクスは……討ち死にです』

衝撃の事実にあザゼルが絶句した。

「……………マジかよ、じゃあ、四大魔王は全滅か？　俺の方も一緒に戦ってた魔王三人が戦死した。神滅狼フェンリル、龍王ミドガルズオルム、死の女神ヘルを道連れにな」

『ロキはどうなりました？』

「奴は生きてるよ、後フェンリルの子供二体もな」

で、俺は残ったロキ達から逃亡中。そうアザゼルは付け足した。

『それにしても四大魔王が全滅ですか……………最悪の事態になりましたね、いや、でも貴方だけでも無事で良かった。貴方にまで死なれては困りますからね』

貴方が死んでは墮天使は終わりです。そう言っつてシエムハザは笑う。

それにアザゼルは一瞬悲しげな表情をした。

「……………はは、死なねえよ、サーゼクス達には悪いが、それでも俺は墮天使のトップだからな、いくら協力体制とは言え悪魔の為に命までは掛けられねえ、俺が命を賭けるのは墮

天使がヤバくなった時だけだ」

『それで良いんですよ、トップとしては当然の考えです。では、転移の準備をします、貴方の座標を教えてくださいませんか?』

「ああ、分かった……所でさあ」

「お前は誰だ」

アザゼルは静かに、だが強い怒気を込めて通信先に言い放った。

『はあ? こんな時にいきなり何を言ってるんですか?』

「シラ切ってんじゃねえよツ! 何がグリゴリは大丈夫だ、舐めてんじゃねえぞツ! 知ってんだよ既にグリゴリが襲われてたなんてなあツ!!」

誤魔化そうとする通信先の相手にアザゼルは怒りを露わに怒鳴り散らした。

それに通信先の雰囲気が変わる。

『……………ふ、ふふ、ふは、ははははははははッ! 失敬、失敬、ちよつと甘く見過ぎたな』

その声はシエムハザのものは違う若い男の声だった。

「誰だテメエは?」

再び問うアザゼル。

それに通信先の男？ は不思議そうな声を上げた。

『ふむ、分からないか？ お前は私をよく知る筈なのだが……いや、この場合分からぬのも無理はないのか？ 以前よりかなり変わっているからな』

「知っている？ 変わった？ グダグダ言わず簡潔に言いやがれッ！」

曖昧な男の言葉にアザゼルがキレた。

『まあ、分からなければそれで良い。私は自ら名乗るつもりはないのでな、己が頭で考えよ』

「ふざけんなよッ！」

『ふざけてなどいないさ。何でもかんでも教えてもらえらと思つたら大間違いだ』

そう言つて男は笑う。

そこで若干冷静さを取り戻したアザゼルが煮え滾る怒りを押さえ込み、努めて静かな声で問い掛けた。

「……じゃあ、一つだけ聞かせろ」

『ふむ、それくらいなら構わない。ただし、私が誰かは教えないぞ？』

「テメエは俺が死んだら墮天使は終わりだつて言つたな……あれは事実か？」

外れても良い、むしろ外れる！ そう願いながらアザゼルは男の答え待つ。

しかし、現実是非情だった。

『おっと、気付いたか冴えてるな。その通り』

さつきは無事と言ったがあれは嘘だ。グリゴリならば滅ぼした。現在生粋の墮天使の生き残り君だけだ』

男はなんでもない風に言う。それにアザゼルは目の前が真っ暗になった。

『ああ、あと、一つ。グリゴリにあつた人口神器なる不出来なゴミはこちらで処分しておいた故安心せよ、それではなアザゼル、今度は通信でなく直接会うとしようか』

そう言つて通信は切れた。

「……………」

アザゼルは無言で地を叩く。

虚しい轟音が周囲に響き渡った。

「ふふ、鬼の居ぬ間になんとやら、白龍皇の光翼は勿体無いなかったけど、第一目標を忘



れてちゃあダメだよ、そう思わないですか？ プルート」

《仰る通りです　「ハーデスさま」》

冥界より更に下層、冥府に存在する荘厳かつ暗い雰囲気的神殿――ハーデス神殿。

その神殿の最深部の封印の間、そこに最上級死神プルトの案内でハーデスと呼ばれた少年がやって来ていた。

もちろん、この少年は本物ハーデスではない。本物のハーデスは今、冥界に居るのだから。

「さて、プルト。この封印魔法の解呪方法、貴方は知っていますか？　知っていたら教えて下さい」

声に呪詛を潜ませて少年はプルトに問う。

《申し訳ありません、この封印はハーデスさまが掛けたもの故にハーデスさましか解呪方法知らず、私ではハーデスさまにお教えする事が……はて？　何かおかしいような？》

首を傾げるプルト、それに少年――勇真は微笑んだ。

「ふふ、何もおかしくはないよ。知らないなら良いんだ。ではプルト、君は少し眠れ」その言葉と共に勇真は人差し指でプルトの額を突く。

次の瞬間、氷結封印が発動プルトは氷塊と化し意識を失った。

「やっ」と

勇真は左手に装備していた偽赤龍帝の籠手を外すと氷結封印したプルートと共に圧縮空間に放り込んだ。

そして、勇真は偽赤龍帝の籠手を使用した際に溜まった体内の龍気を魔法で完全に消し去る。

これで準備は完了だ。

「初めまして、君を解放しに来たよ」

そう言って勇真は十字架に張り付けら、多数の拘束具で縛られたとある存在に声を掛ける。

最強最悪の龍殺しが、最強最悪の人間の手に渡った瞬間だった。

## 第39話

「まさに波乱の時代だな」

曹操は冥界の映像を見ながら呟いた。

ゲオルクの魔法によって映されているのは悪魔、墮天使の存亡の危機である。

まさか、こうもあっさり滅亡寸前まで行くとは、そんな思いが曹操の胸の内に渦巻いた。

「ふふ、良かったではないか英雄が必要な時代だぞ」

そんな曹操をからかう様にバルパーが言う。曹操と同じ映像を見ているのに随分とアツサリした反応である。

それもそのはず、バルパーにとっては悪魔や墮天使の存亡など興味がないのだ。

彼に有るのはただ異常な聖剣への執着心。彼は自分が創り出した聖剣の力さえ証明出来ればどんな状況でもノープロブレムなのである。

そんなだいたいイカれた頭のバルパーに曹操は苦笑を浮かべ頭を搔いた。

「……はは、まあ、その通りではあるんだが、俺が想定していたより波乱の規模がでかくてね」

「英雄冥利に尽きるではないか」

「まあね」

「ふん、それで、行動目的は決まったのか？」

そう問うバルパーの視線は鋭い。

彼は戦闘訓練だけの日々に苛立ちを募らせていた。

どれくらい募らせていたかと言うと、口癖が「聖剣で斬らせろ！」になるくらい募らせていた。

そんなバルパーに対し、曹操は一度目を瞑ると、静かにだかはつきりとした言葉で英雄派の目的を告げた。

「俺、いや、俺たち目的は人類の救済、そう、今から俺たちは人類を復活させる事を目的とする」

「……………」

ちよつとドヤ顔で言う曹操。

そんな曹操をバルパーは胡乱な、ダメ人間を見るような瞳で見詰めた。

「……………あゝ、バルパー？ 泣きたくなるから『えゝ、今まで考えてようやく出した結論がそれ？』みたいな目を止めてくれないか？」



「……勇真の目的も人類復活だったよな？」

「協力を求める気なら止めておけ、アレは敵を味方に付けるとか考えない奴だ。しかも、相当根に持つタイプ、一度殺すと決めたらあらゆる手を使って殺しに来る相手だ、その上、直接戦闘も異常に強いから最悪だ」

「ふむ、私は直接面識はないが、こいつの行動を見る限り、おそらく一時的に協力して用済みになったら背後から刺すタイプだな、絶対に手を組みたくない」

「良くない提案をしそうな曹操をすかさず止めるゲオルクとバルパー。  
息ピツタリの否定。」

「彼らの中の勇真像は極悪非道の下衆野郎らしい。」

「……まあ、概ね正解である。」

二人の強い拒否に「あくやっぱりか」と意気消沈する曹操。

「どうやら未だに曹操は勇真を仲間に引き込みたかつたらしい。」

「二人がそこまで言うなら仕方ないか、バルパーが言うと言説力があるしな……では勇真とは関わらない方向で行く。それでは二時間後、準備をしてゲート前に来てくれ」

「そう言つて曹操は会議室の椅子から立ち上がる。」

「そして、彼は不敵な笑みを浮かべ攻め入る場所を二人に告げた。」

「ああ、そうそう、目的地は天界、先ずは救うべき人類の魂を準備しようじゃないか」

「気分はどうかかな？」

勇真は自身のアジトで一人と男に話し掛けた。

「……悪くない」

男は身体の調子を確かめながらそう答えた。

長い黒髪に切れ長の赤い瞳を持ち、その背に6対の翼を背負う優男。

彼の名はサマエル、全ドラゴン最悪にして最強の天敵 “だった” 者である。

「それは良かった。呪い<sup>コレ</sup>を貰ったかいがあったよ」

そう言つて勇真は魔帝剣グラムを見せる。

それを見てサマエルは顔を顰めた。

「そんなモノを欲しがるお前の気がしれんな」

「貴方にとつてはそうでしょう、しかし、今の俺にはコレが何より必要だった」

そう言つて勇真はグラムを優しく撫でる。

グラムの刀身は幾重にも巻かれたベルト状の拘束具で見えない。しかし、拘束具の僅かな隙間から漏れる黒いオーラはかつてのグラムが纏っていた龍殺しのオーラとは比較にならない程強大だ。

それもそのはず、グラムから放たれるのはサマエルに掛けられた聖書の神の呪い。究極の龍殺しの呪詛なのだから。

「……………絶対にここで解放するなよ」

サマエルが警戒したように言う。

彼はこの呪いに耐性がある唯一の龍属性の持ち主である。

しかし、だからと言つて受けたい呪いではない。第一、耐性と言つても死なないだけで食らうと死ぬ程の激痛を齎す呪詛なのだから。

「分かっていますよ、早々このグラムを使う気はありません、もつとも呪いの方は薄めて普通に使いますが」

そう言つて勇真は虚空に溶かすようにグラムを消し去る。



圧縮空間にしまったのだ。

「その程度ならば問題ない。それで、お前の目的は何なのだ？」

「ああ、言っていますませんでしたね。人類の救済ですよ」

それを聞きサマエルは怪訝な顔をした。

「……………世界征服ではないのか？」

「いやいや、なんでそうなるんですか？」

心外ですね、と言う勇真。

それに続き、勇真の背後には居た二体のドラゴンもサマエルに抗議を入れた。

『サマエル様、勇真様は本気で人類救済を目指す素晴らしい方なのですよ』

『その通り、勇真様は素晴らしきお方です』

そう口にしたのは伝説級邪龍の二体、グレンデルとラードウンだ。

……………口調や性格に全く面影がない上、その身体がやけに赤いが確かにグレンデルとラードウンだった。

「ほら、グレンデルもラードウンもこう言っていますよ」

「……………言わせているの間違いだと思いが？」

「違いますよ、二体とも心から言っていますよ、だよな、グレンデル？ ラードウン？」

『その通りでございます』

「……………」

この三者を前にサマエルは無言。

彼は哀れな者を見る目で変わり果てた二体のドラゴンを見つめ無意識の内に十字を切った。

嫌いな神の教えだが、サマエルはこれしか彼等に贈れるものがなかったのである。

そして、サマエルはつい先程、まだ、この身体から呪いを取り切る前に勇真が言っていた事を思い出した。

『逆らうの？ お前達は所詮、代わりの居る駒に過ぎないんだよ？』

『反抗的な駒には記憶も感情も必要なし戦闘経験以外は削除削除つと♪』

『この呪いは素晴らしい、薄めて使えば強固邪龍の精神・記憶な汚れも一発で良い具合に綺麗にできますね、しかも『支配』の力と相性抜群！』

『疲れた、使い過ぎは禁物か？　しかし、幽世の聖杯、予想以上の性能だ。これを上手く使えば英雄派も魔獣派も容易く始末出来る……俺が手を下すまでもなくッ！　ふふ、ふは、ふはははははははッ!!』

「やはり世界征服が目的だろ？」

確信を持って言うサマエルに勇真は苦笑した。

「もう、だからなんでそうなるんですか、人類の救済って言うてるじゃないですか」

「……………」

サマエルはそんな勇真を胡散臭そうに見た後、ため息を漏らした。

「はあ……まあ、良い。それで人類救済の為に前は何をするつもりなのだ？」

「天界に行って人間の魂を確保したら龍神を燃料に聖杯で人類を生き返らせるつもりです」

「またさらつと神をも恐れぬ所業を口にするな、それで俺の呪いを欲したか」

「はい、そうです。たまたま究極の龍殺しの噂を耳に挟みましてね、ふふ、まあ、龍神確

保は念の為なんですが」

「念の為？」

「ええ、正直聖杯の性能を舐めてました。これなら複数の偽赤龍帝の籠手と併用すれば今からでも人類救済が出来そうです。なので取り敢えず試しに天界に行こうかなと思います」

そう言つて転移魔法の準備をする勇真。

気付けばグレンデル、ロードウン、サマエルの足元にも魔法陣が展開されていた。

「今からか？ 随分と急だな」

「はい、出来る出来ないは置いておいて魂の確保だけはしておきたいんで、他勢力に天界を墮とされたら人間の魂がどうなるか分かりませんから、強い魂なら聖杯で簡単に探せますけど弱い魂は聖杯の探知能力に引っかけられないですよ」

「……そうか、しかし、良いのか？ 聖杯は使い過ぎると使用者の精神と魂を蝕むのだけ？ 人類救済などすれば確実にお前の精神が保たないと思うのだが？」

「もちろん、その点は大丈夫です。俺が直接使うつもりはさらさらありません、ハーデス神殿で多数の死神を捕らえているので、彼等にやって貰います」

「……お前に捕まった者達は皆、哀れな事になるな」

「いえいえ、人類救済なんて素晴らしい偉業じゃないですか、そんな手柄を他人にあげる

「んですからむしろ感謝して欲しいですよ、あ、もちろんその死神の精神が壊れたら俺が聖杯で治すのでご心配なく」

「でえじょうぶだ、聖杯があればなんともなる。」

「そう言つて笑う勇真をサマエルは白い目で見た。」

「……………お前を見ていると聖書の神を思い出すよ」

「それはサマエル最大級の称賛であり侮蔑だった。」

「そんなサマエルの視線に勇真は肩を竦めて笑う。」

「ははは、神に似ているなんて光栄ですね、まあ、それはさて置き行きましょう」

「その言葉と共に魔法陣が輝きを増す。」

「そして数秒後、勇真達は天界を守る大結界を無視して天界内部へと進入したのだつた。」

「俺は行くぜ……………例え一人でもな」

「静かに、だが強い決意を持ってイツセーが言った。」

「今回の複数勢力の同時襲撃で四大魔王全員が死に、レーティングゲーム上位陣の多く」

もヴァルブルガとの戦闘で亡くなった。

更に、襲撃して来た一つであるギリシヤ勢力に魔王領及び殆ど全ての主要都市を強奪されてしまい、多くの悪魔達がギリシヤ勢力の奴隷と化してしまう。

そして、その奴隷の中にはイツセーの大事な主人と仲間も含まれている。

それ故、イツセーは彼等の救出に向かう事を決意したので。

「俺も行くぜ」

そう言ったのは匙だ。彼も仲間と主人をギリシヤ勢力に囚われている。

匙はイツセー同様仲間意識が強い。故に彼も高い危険が伴う救出を決意したので。

「本気？ まさか二人だけで何とかかなると思ってる？ 十中八九死ぬよ」

ギヤスパーがそう警告する。彼が言うようにまず二人で何とかかなるとレベルではない。  
い。

だが、そんな事はイツセーも匙も分かっていた。

それでも二人は行く事を決意しているのだ。

「……ギヤスパー、止めたって無駄だぞ？」

そう言って匙が神器を発動する。

最悪、ギヤスパーを無力化してでも救出に向かうつもりなのだ。

しかし、そんな匙の前にイツセーが立った。

「兵藤？」

「ああ、匙、大丈夫だ、この感じはギヤスパーも来てくれるらしい」

イツセーの言葉に匙は「え？」と驚いた顔でギヤスパーを見る。

見られたギヤスパーは途端に顔を綻ばせた。

「ふふ、バレたか、君達二人じゃ、仲間が何処に囚われてるかも分からないだろう？ 僕も行くよ」

「助かる……でも、わざと勘違いする様に言うなよ」

イツセーがそうジト目で言う。

それにギヤスパーは悪戯が成功した子供の様な笑みを浮かべた。

「良いじゃないか、君達の顔がまるでバンザイアタックを命じられた特攻部隊の様に強張ってたからさ、ちよつとその緊張を解いてあげただけだよ」

「……ありがとな、ギヤスパー」

「そう、だな、確かに少し緊張が解けたありがと」

緊張し過ぎの自覚があった二人は軽くギヤスパーに礼を言った。

「ふふ、どういたしまして。じゃあ、早速行こうか」

「お、珍しいな、割と慎重派なギヤスパーが用意もせずに行こうだなんて」

「今がチャンスだからね」

「チャンス？」

ギヤスパーの言葉にイツセーと匙は首を傾げた。

「ああ、丁度今、ヴァーリがギリシヤ勢力に攻め込んでいる。向こうは良い具合に混乱してるよ、それに何故かハーデスが居ない。さすがにここから冥府の様子は見えないが、どうやら不測の事態で自身の神殿に戻っているらしい」

ギヤスパーがそう言うといツセーと匙の視界が切り替わる。

二人の目に映ったのはギリシヤ勢力と戦うヴァーリだ。

ヴァーリは下級神相手に無双の戦いを見せている。そして、そのヴァーリをゼウスが苦々しい表情で睨みつけていた。

「……………確かにハーデスが居ないな」

イツセーがそう呟いた。

彼の言う通り、ハーデスがこの場に居ない。

「しかも死神の姿も全然無い」

「よほどハーデスにとつて良くないことが起こったって事か？」

遠からず激突するだろうゼウスとヴァーリ。

オーラで判断する限り二人の力量はゼウスが若干ヴァーリより上に見える。



だが、ヴァーリはまだ覇龍ではない。

つまり、どちらが勝つてもおかしくはない、この状況に置いてハーデスが居ないのはおかしかった。

「ふふ、そういう事。さあ、急ごうじゃないか、ギリシャが慌てている内にね」

「ああ、で、みんなの居場所は分かっているのか？」

「舐めてもらっては困る。残りカスとは言え、これでもの魔眼のバロールの転生体だよ？ ももちろん、把握済みだ。幻術で隠してるけど、僕はどんな幻術だろうと見破れるからね」

次の瞬間、再びイツセーと匙の視界が切り替わる。

見えたのはリアスとソーナが囚われた牢獄。更に視点が変わり今度はソーナ眷属がまとめて囚われた牢獄、その次が木場とアーシア。次の次がヴァレリーが囚われた牢獄だった。

ギヤスパーにより何度も切り替えられた視界には全ての仲間たちの居場所が鮮明に映し出されている。

そして、そこまで辿り着く最短ルートさへも。

「うわあ、千里眼に時間停止に能力停止、その上幻術看破とかその神器チート過ぎだろ！」

ギリシヤの神々が張った結界をあつさり突破したギヤスパアの魔眼に匙は戦慄する。

だが、日頃の訓練でギヤスパアのチート能力には慣れつこのイツセーはただ笑みを浮かべギヤスパアの行動を称賛した。

「さすがギヤスパア、頼りになるぜ！」

「ふふ、褒めても何も出ないよ」

そう言いつつギヤスパアは転移魔法陣を作り出した。

「さあ、行くうか……あ、そうだ赤龍帝、君に一つ聞きたいんだけど」

ギヤスパアがイツセーの顔を真剣な顔で見る。

そんなギヤスパアにイツセーは何故か嫌な予感がした。

「……なんだ？ てかい加減赤龍帝って呼ぶの止めろ」

「分かったじゃあ、イツセーと呼ぼう。それでイツセー……」

「宮藤勇真って知ってる？」

そう質問し、ギヤスパアはイツセーの目を視るのだった。

## 第40話

「……ひどいと思いませんか？」

地面にのの字を書きながらルミネアは愚痴を口にした。

ここは地球とは違う世界。ぶっちゃけ異世界のとある天空島である。

空飛ぶ島に寂れた古城。まるでどこぞの天空の城の如く無人のこの場所にルミネアは強制的に転移させられてしまったのだ。

「そう仰らないで下さい。勇真様はルミネア様が心配なのです」

そう言ったのは金髪碧眼の少女――魔導人形のフィだ。

彼女は勇真が『魔女の夜』を潰した際に見つけた大量のフェニックスクローン、その一体に残りのクローン全ての魔力と『魔女の夜』構成員達の魔法能力を注ぎ込まれて創られた生体ベースの魔導人形である。

その実力は非常に高く、三体の魔導人形の中では最強であり、ルミネアもまだ彼女には勝ったことはない。

「それは、分かっています。でもフィちゃん、本人が残りたいてって言うてるのに問答無用で異世界に送るのはちよつとひどいですよね？」

「ふふ、それだけルミネア様が大切なのですよ」

「……嬉しいんですが、私は残りましたです」

ルミネアだつて勇真が自分を大切にしているからこそ、異世界に自分を送った事くらい分かつてはいる。

それでも彼女は人類救済を勇真一人に押し付けるのは嫌だったのだ。

「ええ、分かります。しかし、例えばルミネア様が残っても……いえ、私達全員が残っても大した助けにはならないと思いますよ」

フィは悲し気に自虐を含んだ言葉を口にした。

フィ達魔導人形は強い、ルミネアだつて弱くない。彼等は誰もが上位の最上級悪魔から魔王級の力を有しているのだ。

これで、弱いと言われるのはあまりにも理不尽な話である。

しかし、残念ながら勇真はその理不尽の塊だ。

彼は聖短剣と神器があれば魔王級と互角以上に戦える。魔法も有りなら無傷で圧勝出来る。そして、偽赤龍帝の鎧を纏えば主神級の相手だろうと余裕を持って勝利出来る。

そう、今の勇真はあまりにも強過ぎるのだ……他人の助けなど要らないほどに。

「そうですか？ 悔しいですけど、私はともかくフィちゃんは残れば助けになったと思いますよ？……フィちゃんは強いですから」

フィの自虐にルミネアがフォローを入れる。ただ、ルミネアの表情はどこか拗ねた子供のように見える。

そんな彼女にフィは思わず笑みを浮かべた。

「ふふ、ありがとうございます。私も自分が世界的に見ても強い方だとは思っています。しかし、真のトップクラスの方々には遠く及びません」

「それでも、食らいつく事は出来るでしょう？」

「まあ、それでもフェニックスクロンをベースに創られていますからね、不死性だけなら勇真様以上だと自負しています」

薄い胸を張り、ちよつと誇らし気に言うフィ。

ルミネアはそんなフィを微笑ましく思うと同時にちよこつと嫉妬した。

「やっぱり、悔しいです……フィちゃんに勝てないのも」

「そうですか？ でも正直。私とルミネア様の力量はそれほど変わりませんよ？ いえ、攻撃の多彩さ、それに最大攻撃力もルミネア様の方が上の筈です」

「……その割には、私は一度も模擬戦でフィちゃんに勝ってませんが？」

「そこは耐久力の問題ですね、フェニックスと半仙人とは言え人間ではあまりにも大きな差がありますから」

「むう」

良いなあ、といった目でファイを見るルミネア。

そんなルミネアにファイは困ったような頬を掻いた。

「そう焦らなくてもルミネア様なら訓練していけばきっと私に勝てる様になりますよ」

「……私は強くなりたいんじゃないで、勇真さんの助けになりたいんですよ」

「では、今回は諦めましょう。きっと頑張っても間に合いません」

「ええ〜」

「ふふ、良いじゃないですか、時間ならまだまだありますよ？ 人類救済の助けにはならなくてもその後の私生活で助けになれば良いじゃないですか」

「……………はあ、そうですね、今回は諦めます」

そう言うのとルミネアはのの字を書くのを止め、スツと地面から立ち上がる。

そして、彼女は真剣な表情でファイに向き合おうと彼女の手を優しく掴んだ。

急に手を取られたファイの頬が僅かに蒸気する。

「では、次回の為に準備をしましょう！ ファイちゃん、ちよつと訓練に付き合ってくださいませんか？」

「ふふ、次回が有るかは分かりませんが、それでしたらお安い御用です」

フィの答えにルミネアは満面の笑み浮かべる。

そして、二人は訓練の為に天空城の近くに浮かぶ浮遊島へと向かうのだった。

「……………」

「……………」

ちなみにそんな二人を寂しげに見ながら、アルマとハルナスの鎧コンビは警備の為に天空城でお留守番するのであった。

「うわあ、これ俺の出番ないじゃん」

戦闘中にも関わらずイツセーはそんな事を口にした。

イツセーの目の前で展開されるのはもはや戦闘ではない。こんなものは単なる蹂躪だ。

そう、あんまりにも相性が良い匙とギヤスパアのコンビネーションにギリシヤの兵士達はただただ手も足も出ずに呪殺されて続けているのだ。

ギヤスパーがその瞳を怪しく光らせた。

するとギリシヤの兵達の動きが停まる。そこにすかさず匙のラインが伸びて兵士達に絡みつく。

そして、匙はヴリトラの呪詛で抵抗力を奪うとラインから魔力、生命力、血液を一気に吸収、3秒後には骨と皮だけになった死体の山の出来上がり。

で、匙は吸収した魔力と血液をラインからギヤスパーに送る。そして、その魔力と血液を得てパワーアップしたギヤスパーが更に強く能力を発動、今度の敵は睨まれただけで即死する。

で、ギヤスパーが呪殺した死体に匙がラインを絡ませると、霧散する途中の魔力を根刮ぎ強奪。それを再びギヤスパーに送り、更にギヤスパーがパワーアップ。今度は透視と千里眼を用いて遙か遠くのギリシヤ兵を呪殺した。

近場の敵を停めて力を奪いパワーアップ、そしてちよつと遠くの敵を呪殺してまた更にパワーアップ、最後はまだこちらに気付いていない遙か遠くの相手を一方的に呪殺してフィニッシュ。

もう、なんとと言うか、RPGで雑魚敵相手にAボタンを連打するだけの完全に作業と



化した戦闘だった。

あんまりにも2人が無双し過ぎるのでイツセーは少しギリシャ兵が可哀想になる。もう、そんなレベルの蹂躪だった。

「ははは、いい感じだ。思った以上に敵が弱い！」

「どうやら冥府の次はオリュンポスで問題が発生したらしいよ。高位神の多くが本拠地に戻って行ってる。ふふふ、これは案外悪魔全てを救出なんて事も可能かもね」

そう言って黒い笑みを浮かべる匙とギヤスパー。呪いの連打でどうやら性格まで少し悪くなっているらしい。

「お前ら怖えよ！」

黒い二人にイツセーが涙目で喚いた。

しかし、イツセーの喚きに匙とギヤスパーは何騒いでるんだコイツ？ といった目を向ける。

「いや、何処がだよ、いつもしてる事だろ？」

ヴァーリ戦も同じ事したし。そうなんでもない風に述べる匙。

「うん、いつも通りの事だね、何をそんなに怖がつてるんだい？」

匙に続きギヤスパーもそう言って笑う。そんな二人の態度にイツセーは、あれ？ も

しかしていつも通り! と自分の認識が正しいのか自信がなくなってしまった。

「……え、いや、なんか黒いし」

自信なさ気に言うイツセー。そんな彼を匙とギヤスパーは冷めた目で見つめると、あからさまな溜息を吐き出した。

「はあ、赤龍帝ともあろう者がなにを言ってるんだい、仲間を、それもヴァレリーを攫った相手だよ?……手心なんて必要なのかな?」

「そうだぞイツセー、こんな事に怖がってないで……ギリシャ共をさつさと殺して会長達を救い出すぞ」

そう言つて尋常じゃない殺意を滾らせる匙とギヤスパー。

「……でようやくイツセーは気付いた。」

「(こ、この二人、冷静に見えてプチギレてるツ!?)」

この二人がマジギレしている事に。

どうやらこの二人、想像以上に、そしてイツセー以上に仲間を攫われた事に苛立っているらしい。

「どうしたんだイツセー?」

「何を黙ってるんだいイツセー?」

「い、いや、なんでもない。さつさとみんなを助けようか!」

「な、仲間思いは良い事、だよな？」  
イツセーは内心で戦慄した。

そして何気に冷静な自分に、もしかして、俺って冷めた奴なんじゃ？ と一人で勝手に落ち込むのだった。

『ウオオオオオオオオツツ!!』

雄叫びと共に50の顔と100の腕を持つ異形の巨神がヴァーリ目掛けて拳打の嵐を繰り出した。

それは正に拳の豪雨。

数えるのも馬鹿らしくなる拳撃は一撃一撃が大地に大穴を穿つ超威力である。

「フツ」

だが、ヴァーリはそんな攻撃を前に好戦的な笑みを浮かべると臆する事なく、真つ向から突っ込んだ。

彼は次々と迫る拳を紙一重で躲しながら直進する、途中、避けきれなかつた拳に幾度か鎧を削られるもヴァーリは見事に拳打の豪雨を潜り抜け、巨神の胴体へと右ストレ―



リゼヴィムに聖杯を埋め込まれてからヴァーリは一度も疲労を感じた事がなかった。神滅具の名は伊達ではない。最強の回復系神器たる聖杯はヴァーリに無制限の体力と限りなく不死に近い再生能力を与えていたのだ。

しかし、それも今は昔、勇真に聖杯を抜き取られたヴァーリは当然、疲労するし、頭か心臓を抉られれば絶命する。

そう、ヴァーリはそんな普通の生命体に戻ったのだ。

『疲れるのが嬉しいのか?』

「ああ、疲れないというのはどうも性に合わないようだ。あの頃はイマイチ戦っているという実感が持てなかったからな」

『明確に弱体化したのだぞ?』

「それでもだよ」

『……そうか、なら良い。だが、無茶はするなよ? 拳打の雨に突っ込んだ時は肝を冷やした』

「分かっている、さっきのは俺も少し無謀だったと反省していた所だ。まだ、少し不死性があった頃の癖が抜け切って居ないようだ。次からは気をつける」

『……本当だろうか?』

「どこか疑うように言うアルビオン。それにヴァーリは苦笑いを浮かべ肩を竦めた。」

「信用がないな、まあ、今までの事を考えれば当たり前か……さて、『美猴、アーサー、そっちはどうだ?』」

アルビオンとの会話を終えるとヴァーリは離れて戦う仲間の元に通信を入れた。

『こちらは大丈夫です。大した相手ではありませんので』

『なんだとツ！ 貴様、このアレスに対し、ふべえら!?』

先にヴァーリの通信に出たのはつい最近ヴァーリの仲間になったアーサーだった。

どうやら彼は優勢に戦いを進めているらしい、通信越しに敵神の悲鳴が聞こえるのが良い証拠だろう。

『流石だなアーサー』

『たまたま敵が弱かった、ただそれだけの事ですよ』

アーサーはヴァーリが強者狩りの時に戦った人間で、最強の聖剣と称される聖王剣コールブランドの所持者である。

その実力は凄まじく、ヴァーリが出会った当初から人類最強レベルの力を有していた。

しかし、それでも聖杯で強化されたヴァーリには及ばず、彼に敗れたアーサーは彼の配下に収まったのだった。

ちなみに、ヴァーリとの戦いで致命傷を受けた彼は、一度は死んでいる。だが、その

実力を惜しいと思つたヴァーリが聖杯の力で復活させたのだ。

……もちろん、死亡前より強化した状態で。

『お、おう、アポロンと戦闘中だぜい、状況は、あぶねッ!? ……ちと旗色が悪い』  
アーサーから遅れること数十秒、次にヴァーリの通信に出たのは名も無き青年……ではなく、初代孫悟空の血を引く美猴だ。

彼はジークフリートの不意打ちで命を落とし、魂の状態で彷徨っている所をヴァーリに捕まえられ聖杯で復活した。

こちらも当然強化済み、だが、流石はオリュンポス十二神と言つたところか? 強化されてる美猴ではあるが、それでもアポロンに押されているらしい。

『分かつた直ぐに行くから後2分持たせてくれ』

『おう、助かるぜい、だが、良いのかヴァーリ? お前ゼウスと戦いたがつてただろう?』  
『ああ、今回は諦める。残念ながら体力的にキツイ……それにゼウスは現在先客と戦闘中だからな』

『先客う? 悪魔か堕天使にまだゼウスと戦える奴が残つてんのか?』

美猴が疑問の声を上げた。

彼の言う通り、悪魔にも堕天使にも、それどころか冥界全土を見渡しても既に大神ゼウスと戦える様な者は残って居ない。

だが、それは冥界に限った話である。

『戦ってるのは悪魔でも、堕天使でもない』

『へ、じゃあいったいどちら様よ？』

『ふふ、お間のよく知る初代殿だよ』

そう言ってヴァーリは激戦極まる二神の戦いを少しだけ見つめた後、急いで美猴の救援に向かうのだった。



## 第41話

至大の雷が冥界の空を染め上げた。

ゼウスの神雷。

宇宙をも粉碎するというギリシヤ最強神の一撃だ。

まあ、もちろんそれは誇張である。さすがのゼウスも宇宙を破壊するなどどうあがいても不可能だ。

だが、それでも個人で冥界を滅ぼす事は不可能ではない。

ゼウスとはそれ程の力の持ち主なのだ。

にも関わらず。

「さすがに老体には堪えるぜい」

その男は未だにゼウスの前に立ちはだかっていた。

齊天大聖・孫悟空。

西遊記で語られる世界的に有名な猿神である。

彼は天帝の命でゼウスの足止めを行っていた。その目的はゼウスをオリュンポスに

帰さない事である。

現在、釈迦天は世界の覇権を握る為、主神不在で大幅に防衛能力が落ちたオリュンポスを攻め行っているのだ。

欲深いと言うことなけれ、どの勢力も大なり小なり世界の覇権を握りたがっている。ただそれだけの事、それ故に釈迦天はオリュンポスを攻めるのだ。

「そこをどけッ！ クソ猿ッ!!」

「ふふふ、それは出来ぬわいのお」

「そうか……ならば死ねッ!」

怒りを露わにゼウスが叫んだ。

ゼウスは大量の神雷を作り出し、それを悟空に放つ。

放たれた数千の雷弾は水面を泳ぐ蛇の様に、生物的な動きで孫悟空に迫る、追尾式の雷撃だ。

雨あられと降り注ぐ雷撃の弾幕。そこに避ける場所などないし、例え避けれたとしても追尾する、オマケに威力は一つ一つが馬鹿げた威力。

そんな理不尽極まりない攻撃を前に悟空はふつと笑みを浮かべた。

「おいおい、追尾するのは扱いが難しいんだぜい、上手くやらんと力の無駄だ」

悟空がそう言うと、彼に迫っていた雷撃が彼を追う軌道から逸れていく、そして、雷弾が逸れた先にも「悟空」が居た。

それは悟空が予め作っていた分身の一体、彼は仙術で自身の存在感を薄める事により、雷弾に分身を悟空と認識させたのだ。

そして、数千の雷撃が分身に着弾、間抜けな轟音を冥界中に響かせた。

「チツ、小賢しいマネを」

「ハッ、そう言うお前さんは大雑把じゃの、頭が回るのは浮気の時だけじゃい」

「フン、ならばこれはどうだ」

ゼウスがクイツと人差し指と中指を揃えて天に向ける、次の瞬間、悟空を中心に直径数千メートル、F6を軽々と超えたトルネードが発生する。

更にゼウスが指を鳴らすと、トルネード内に凄まじい雷が発生、更に炎も巻き起こり、トルネードは雷走る火炎旋風へと姿を変えた。

魔王として灰塵と化す超範囲の殲滅攻撃だ。高位の神でも炎と相性が悪い者なら数秒で焼かれ死ぬだろう。しかし、悟空は八卦炉に49日間入れられて生き残った実績を持つ。

この攻撃では決定打にはならない。

故に駄目押しにもう一つ攻撃を準備する。

ゼウスの全身から凄まじい神力が迸り、それ全てが右手に収束、彼の右手に極大の雷槍が形成された。

それは先の追尾雷撃を全て足してなお上回る極大威力超攻撃。

ゼウスが誇る必殺の一撃だった。

「消し飛べッ！雷霆ケラウノスッ！！」

狙いを定め、解き放たれた神槍が大気を貫き雷速で走る。

風で動き縛り、炎で視界を塞がれ、飛び交う雷で軌道を悟れない、もちろん結界機能も備えてあり転移は不可能、そんな状態の悟空に迫る必殺の神滅の雷槍。

それは正に絶対絶命のピンチだった。

しかし、そこは孫悟空、天帝をして釈迦如来に泣きつくより他はなかった猿神はそんなじよそこらの高位神とは格が違う。

悟空は結界外の分身と視界を共有、ゼウスの動きを見切ると、永きに渡る戦闘経験により培われた慧眼で神槍の着弾点とタイムリングを完璧に予測した。

そして、悟空は全鬨気を集中させた如意棒の石突きで雷速の神槍を弾き逸らし、雷霆で空いた穴から飛び出した。

恐るべき技の冴え、それは正しく神技であった。

だが、神技を使えるのは何も悟空だけではない。

何せこれは神対神の戦いなのだから。

お返しだとばかりに今度はゼウスが悟空の動きを先読みする。彼はこの展開を予知していたのだ。

つまり先の雷霆は罠である。

ゼウスは大技を凌ぎ、僅かに緩んだ悟空の心の隙を見事に突き、分身の死角を通り神速で移動、彼の背後に回り込むとその手に持つアダマスの大鎌を全力で振り下ろした。

「ぬう!？」

その一撃を悟空は直感だけで反応し受け止める。しかし、不十分な体制とゼウスのあまりの剛力に苦悶の声がかから漏れた。

「ガハハハハッ! 防いだか、やりおるわ」

「おいおい、ここは挑発に乗って力技で行くところじやろ? 大神が小細工使うなよ」

「儂は戦術が得意な賢い主神じゃからな、当然、小細工も使うわい」

「ハッ、お前さんが得意なのは戦術じゃのうて、弱みに付け込む事じゃろうッ!」

罠迫り合いの状況から孫悟空が如意棒を傾けアダマスの鎌を受け流す、顔面スレスレ

を通った鎌に悟空の体毛が僅かに切られ宙を舞った。

「フッ！」

「セイツ！」

そこから二人は瞬時に体制を立て直すと同時に攻撃に移る。

魔王領の上空で二神の武具が交差した。

刹那の間に幾度も放たれる攻撃は一撃一撃が山河を砕く超威力。両者が避けた攻撃の余波で都市のビル群が崩壊し、大神を見守っていた下級神が次々と消滅していった。

「避けるな、味方に当たる！」

「ふん、それが嫌なら雑魚は下がらせな！」

軽口を交わしながらも目敏く互いの隙を探す悟空とゼウス。両者の実力は拮抗している様に見えた。

しかし。

「(不味いのう)」

この現状に悟空は僅かな焦りを感じ始めていた。

戦いは拮抗している。これは間違いない。だが、実力まで拮抗しているかと言うとそうではないのだ。

両者の戦闘力を比較するとゼウスの方が悟空より確実に上だった。

「流石はギリシヤの主神と言ったところか？ 技量と技の多彩さを除き、パワー、スピード、耐久力、その他全てでゼウスは悟空を上回る。」

今、戦いが拮抗しているのは悟空が持久力度外視で全力を尽くしているからに過ぎない。

それがゼウスにも分かったのだろう彼は神らしからぬ邪悪な笑みを浮かべ悟空への攻勢を強めた。

鋭い斬撃に加え高出力の神雷が悟空を襲う、悟空は斬撃を刺突で逸らし、雷撃を仙術で防ぐ、だが、自力の差か、少しづつ防ぎきれなくなっていく。

「そら、そら、そらッ！ どうした石猿ッ！ そんなものか？ その程度で天にも等しと名乗るのは少々驕りが過ぎるのではないか？」

「ふん、その石猿を押し切れぬ天空神に言われとうないわい！」

「そう言い返すも悟空が不利なのは事実である。拮抗していた戦いもゼウスの激しい攻勢にどんどん劣勢へと追いやられ、今では攻撃を防ぐ事で手一杯になりつつあった。」

このままでは不味い。

悟空は流れを変えるべく戦法を変えた。

悟空はゼウスの猛攻を冷静に観察すると、優勢になり僅かに乱れた斬撃を見切り、如意棒でアダマスの鎌を跳ね上げる。

そして、そのままゼウスに激しい炎を吹き掛けた。

「うおッ!？」

顔面に灼熱の炎を受けたゼウスが僅かに怯む。

それを機に悟空は攻勢に転じた。

一瞬千撃、仙術による身体強化を速度に極振りした悟空の超々高速のラッシュがゼウスの身体に突き刺さる。

だが、ゼウスが受けるダメージは軽微だった。

この連撃に重さはない、当然だ。これはあくまで速度重視、威力度外視の連撃である。腰が入りきらない突きの連打などゼウスからすれば小石がが当たる程度のダメージでしかない。

しかし、それで良いのだ。この連撃はゼウスを倒す為に放っている訳ではないのだから。

「ガハハハハ、無駄だ、この様な軽い攻撃、何億打とうが儂は倒れんぞッ!」

「ハッ、別に倒すつもりなんてないわい、儂が天帝に言われたのはお前さんの足止めじゃからな」

「ぬッ!？」



悟空の言う通り、この連撃は足止めが目的だ。

攻撃力が低い分、体力の消耗が抑えられる。そして、高い威力こそないが、絶妙なタイミングで放たれる如意棒がゼウスの攻撃に移る動きを尽く潰していく。

この展開は急いでオリュンポスに行きたいゼウスからすればかなり不味かった。

「こ、このクソ猿がッ！ 勝ちを諦め足止めに徹するつもりかッ!!」

「最初から言ってるんだろ、儂の目的はそれだよ」

ゼウスは体制を立て直す為に一旦悟空から離れようとする。

しかし、悟空はそれを許さない。彼は先ほどゼウスに斬り飛ばされた“毛”を用いて分身を作り出す。力は弱いが悟空の技量を完璧に反映した分身が巧みな棒術と仙術でゼウスの動きを阻害する。

そして、四方を悟空に囲まれたゼウスは、そのままは何も出来ない状態で全身を打たれ続けたのだった。

「会長、お怪我はありませんか?」

そう、匙がソーナ・シトリーに伺う。

最初の救出作戦は無事成功、イツセー達はリアスもソーナを無傷で奪い返した。

これはギリシヤが監視者の人数を減らす為に、出来るだけ一纏めにして監視していた故に割と短時間で救出が出来たのである。

リアスとソーナが別々の場所に入れば救出にはもつと時間が掛かっただろう。

「大丈夫です……ありがとう匙、本当に助かりました」

「ツ！・ 会長の眷属として当然の事をしたままですツ！」

無事ソーナを助け出せた喜びと、その彼女に礼を言われた事により、匙は感極まって涙ぐんだ。

そして、匙とソーナの隣ではイツセーとリアスが似た状況になっている、まあ、こちらには匙達より少しばかり情熱的だが。

「そろそろ良いかな？」

そんな四人に少し冷めた態度でギヤスパーが言う。彼もリアスを無事救出できた事を喜んでいる、だが、まだ仲間全員を助け出せた訳ではない。

何よりギヤスパーは早くヴァレリーを助けに行きたいのだ。

「ええ、そうね、ギヤスパー、あなたも」

しかし、何を勘違いしたのか、リアスはイツセーを離すと今度はギヤスパーに抱き着

いた。

どうも、リアスはギヤスパの言葉を「早く僕も抱きしめて」と認識したらしい。イツセーが羨ましそうにギヤスパを睨む、それにギヤスパは溜息を漏らした。

「はあ、まあ、少しくらいなら良いか……本当に無事で良かったですよ」

ギヤスパは渋々抱擁を受け入れると、小さく苦笑いを零すのだった。

「いい加減にしろツ!!」

長らく攻撃に晒され続けたゼウスが吼えた。

身体は傷つかずともプライドは傷がつく。

「又ウオオオツツ!!」

本気でキレたゼウスは悟空の攻撃を無視して神力を溜め込む、そんな防御を捨てたゼウスに悟空は攻撃力重視に切り替えて連撃を打ち当てた。

しかし、ゼウスはそれさえも無視、彼は臨界まで高めた神力を雷に変換、全方位に解き放つ。

「消えろクソ猿うウウツツ!!」

ゼウスから放たれた絶大威力の神雷に悟空が弾き飛ばされた、更にゼウスの攻撃はこれだけに留まらない。

蜘蛛の巣の様にゼウスから放出された雷が天を埋め尽くすと、そこに雷雲が形成される。

雷雲の中で一気に力を増す神雷。

そして、ゼウスは天に掲げた両の手を勢い良く振り下ろす。

瞬間、雷雲から放たれたのは大瀑布の如き神雷だった。

荒れ狂う神雷が全てのモノを焼き尽くす。

山河は元より強固に作られた冥界都市を、囚われた悪魔達を、そして味方の下級神達を一挙に消滅させた神雷はそのまま勢いを衰えさせることなく地面に激突、直径数十kmの冥府まで続く巨大な穴を作り出した。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

流石のゼウスもあの攻撃には多くの力を裂かれたのだろう、纏う力が大きく減じ、激しく息を乱している。

「はあ、はあ……あのクソ猿めッ」

ゼウスが血走った目で大穴を見下ろした。

なぜすぐにオリュンポスに行かないのか？ それはもちろん悟空にトドメを刺す為である、そう、悟空は生きている。ゼウスはそれを確信していた。

何故ならゼウスは見たのだ、神雷が当たる直前、悟空が強固な結界を張ったのを。

如何にゼウスの雷が強かろうと、先の攻撃は超々広範囲に放ったモノ、拡散する分威力は落ちる。つまりあの猿神を仕留めるにはいささかパワー不足だったのだ。

「……………」

無言で探索魔法を使うゼウス、その探索網に一つの反応が引つかかる。

大穴の底に生命反応あり、この特徴的な闘気は孫悟空のモノに相違なかった。

「……………ふん」

ゼウスは鼻を鳴らし、宙を踏みしめる。

彼は地を蹴る様に加速、数秒で穴底までの到達すると、音も立てずに地に降り立った。目の前には如意棒を支えに立つ悟空。その姿は完全に満身創痍である。

そんな悟空を見てゼウスに酷薄な笑みを浮かべた。

「クッククック、好い様だな、孫悟空」

「……………ふん、何が戦術が得意じゃ、こんな大味な攻撃なんぞしおって」

吐き捨てる様に言う悟空、ただし、その言葉に力はなかった。

「そいつは悪かったな、まあ、素直に褒めてやろう、お前は強かったよ、儂が今まで戦った中でも五指に入る」

「ふん、そいつはどうも」

「ガハハハハ、存分に誇るが良い……さて」

ゼウスは両手でアダマスの釜を持つと上段に構えた。

終わらせるつもりだ。

「儂を始末する気か？ はは、そいつは欲張りだなあ、儂を倒しただけで満足すれば良いものを、欲を張ると破滅するぜえ？」

弱々しい言葉を発する悟空、その姿はまるで死期を悟った老人の様である。

「ふん、それは体験談か？ だが、生憎と儂はお前と違う」

「そりやそうだ、儂とお前さんは違う、儂の場合は更生したが、お前さんは無理だろうか  
らな」

「……何を言っている？」

「つまり “次” が有るか無いかの話だ」

「H A H A H A！　　そういうことだ」

その声にゼウスは驚愕、声の元から横つ跳びに距離を取った。

「遅いわい、天帝」

「ハハハハハハハハッ！　　悪い悪い、まさか天下の孫悟空さまがそんななってるなんて知らなくてY O O！」

そう言いながら天帝——帝釈天が悟空にフェニックスの涙を放り投げた。

「助かった、圧縮空間ごと焼き払われてしまったの、危うく本当に死ぬところだったわ  
い」

悟空はそれを即座に受け取り自分に使う。

これで悟空の負傷が全快した。

「しかし、ソツチの命令で頑張った儂に嫌味とは、相変わらず性格悪いのお」

「そう言うなよ、助けてやったんだからさ、てか、その前にお前はお前が今までしてきた事を許した俺の懐の深さに感謝しろ……………さて、ゼウス、準備はO K？　お前も今の間  
にこっさり回復薬使たよなア？」

「……………オリュンポスはどうした？　まさか、もう墮としたのか？」

ゼウスは回復薬の空ピンを、捨てながら鋭い視線で帝釈天を睨む、それを見て帝釈天はニンマリと口の端を釣り上げた。

「いんや、安心しろまだ墜とせてねエよ。だが、先にタルタロスに行ってお前のお父さま達を解放してやったZE、この意味分かるよなア」

「……業突く張りのクソ仏が」

「ハツ、お前に言われたくねエな、欲張り大神、さあ、第二ラウンドと行こうか、まあ、今度は一対一じゃないけどYO！」

「フン、二対一でも儂は負けんぞ？」

「確かに負けちまうかもなア、お前が万全だったらよ」

「……………」

帝釈天の言葉にゼウスは無言となる、心なしかその顔は青い。

「その様子だと、体調悪りいんだろ？ 分かるぜ、悟空は割とえげつねエからな、コイツ、強い癖に小細工が好きでYO、お前、効かないからってコイツの攻撃しこたま食らってたよなア」

「見てたなら助ける」

悟空がチャチャを入れる。

「……仙術か」

「そういうこつた、傷は回復出来ても身体の気の流れは中々治らねエンだよ、仙術の強みだ……あとなかんちがいすんなよゼウス、だれが二対一って言った？」



その言葉と共に複数の神格がゼウスの周囲に現れる。

現れたのは持国天・広目天・多聞天・增長天の四天王、そして？太子いずれも劣らぬ高位の神達だった。

「さて、勝負と行こうか大神ゼウス、H A H A H A！ 悪りいがこっちは7人がかりだけどなア」

「……………」

これにて決着、この日、また一柱神がこの世界から神が消えた。  
誰が消えたかなど聞くまでもないだろう。

## 第42話

「……おかしいな」

そう、不審そうに与える者ーに扮した勇真が呟いた。

そんな勇真に十数体の天使が同時に襲い掛かる、そのいずれも10枚羽、つまり、セラフィムに近い力を持った天使なのだ。

まあ、だからどうしたという話だが。

「ーっふっ」

鋭い呼気と共に勇真の腕が消える、いや、消えた様な速度で動く……少なくとも天使達には見えない速度で。

そして、消えた手に持たれた聖短剣と魔帝剣が天使達の四肢をバラバラにし、その胸元に大きく切り裂いた。

殺さず、それでいて戦闘不能になるような絶妙な手加減（再起可能とは言っていない）である。

凄まじいが、当然の結果だ。この程度の相手、今の勇真からすれば雑魚に等しい。例え千体来ようと鎧袖一触、無傷で倒す事が可能だろう。

だが、それは良い、それは良いのだ。

勇真が不審に思ったのはそこではないのだから。

地に落ちた天使達が、手足の再生を始める。まるでトカゲの尻尾の再生映像を早送りにしたような回復力——これが明らかにおかしかった。

「……………」

無言で指を鳴らす勇真、それを合図に、勇者がつけた傷口から凍りつき氷像と化した天使達、勇真が良く使う氷結封印だ。

「……………ねえ、サマエルさん」

勇真は前を向きながら同行者の一人、サマエルに問い掛けた。

「……………なんだ」

「天使ってこんな再生能力持ってましたか？」

「持ってなかったな」

「……………そうですか、じゃあ、もう一つ、知ってたら教えて下さい」

「今の天界ってこんなに戦力豊富でしたか？」

勇真はそう言つて天使の軍勢を睨みつけた。

ここは天界の第一階層、俗に言う第一天。

第一天は七階層ある天界において前線基地の役割をしている。軍勢が居るのは至極当然の事であり、その数が10万を越えようと不思議はない。

問題はその『質』だ。

本来、軍勢の大半を占める筈の下級天使、それが何処にも居ないのだ。

天使達全員が例外なくが6枚羽以上、そして、中には12枚羽の天使もちらほら……どころか軽く数十は混じっている、それはもう、あり得ない戦力だった。

「最近の事は知らん、だが、戦争前の全盛期と呼ばれる頃でも、この数の高位級天使が第一天に居ることはなかった……しかし、それよりおかしいのはこいつらが生まれたての天使だという事だ」

「生まれたての？」

「ああ、間違いない、この意思が薄そうな瞳は創造されて直ぐの天使特有のものだ」  
なるほど確かに。勇真は天使達の目を見て納得した。ガラス玉のような、寝ぼけてい

るようなその瞳には強い意志があるようには見受けられない。

まるで、喜怒哀楽が薄い赤子の目だ。

「しかし、神が消滅して純粋な天使は生まれなくなっただけでは？」

「その通りだ。だが、例外は何時でも起こる。それに方法がないわけでもない。例えばお前が持つ『幽世の聖杯』などを使えば可能だろう、もしかしたら人類滅亡により新たな神滅具級の創造系神器が発見され、それを天使が使っているのかも知れんな」

『幽世の聖杯』しかり『魔獣創造』しかり、創造系の神滅具は笑えない戦力を創り出す、使い手次第では、それこそ、個人で一つの勢力を殲滅出来る軍勢を創り出す事さえ可能だった。

「なるほど、チート神器ですか、十分あり得る可能性ですね面倒くさいーしかし、まあ、ラッキーですね。超強い数体の天使を作るのではなく、雑魚を大量に創ってくれたのは有難い」

「……雑魚、か。高位の天使、それも熾天使級も混じっているのだが？」

「ええ、熾天使級が最高戦力で助かりましたよ」

「……………」

高位の天使が千体来ようと勇真の敵ではない。問題は千体分の力を持った一体が来ることなのだ。

もちろん12枚羽の熾天使級は魔王と同等、それなりに強いだろう。

だが、その熾天使すら今の勇真の敵ではない。

今の勇真の「敵」になるにはせめて熾天使級の数倍、神格級の実力が必要なのだ。

もつとも一体にそれ程の力を注ぐのは至難、それは勇真も良く知っている。いくらポリタンクに水が大量に入っても注ぐべきコップが小さければ意味はない。

おそらくこの天使の造物主は大きなコップを作るのが苦手なのだろう。

「さて、こんな無駄話をしているのに襲って来ないのは最初の十数体が瞬殺されたからですかねえ」

「それもあるだろう、だが、それよりも経験不足だからだな。でなければもつと早く遅い掛って来るはずだ」

そう勇真とサマエルが会話をしている間にもボトボトと堕ちていく天使達。これは勇真の言霊呪詛である。

生まれたて故に対応力が低いからか？ 半分近く墮とされてようやく勇真の呪詛に気付いた天使達。彼等はこのままでは不味いと呪詛で鈍った身体を動かす。

動ける全員が右手に光力を集中し、大きく振り被る。

そして、天使達は示し合わせたように、同じタイミング、同じ動作で光の槍を投擲した。

その人形染みた動きに勇真は失笑を漏らす。  
ああ、なんて捻りのない攻撃だと。

「ラードウン」

『ハッ』

呼び掛けに応え、ラードウンが勇真の前に出る。

そして、ラードウンは透明な障壁を張った。

同時に降り注ぐ光槍の雨、それが透明な障壁に激突し、アツサリと砕け散る。呪詛で弱った天使の攻撃など物の数ではないのだ。

そのままラードウンは結界を維持、それから数秒、放たれ続けた数十万の光槍は一発たりともラードウンの障壁を超えることが出来なかった。

『勇真様には指一本触れさせません』

そうどこか天使達と似通った虚ろな目で言うラードウン、勇真はその姿に満足そうに頷いた。

「ありがとう、ではラードウン、グレンデル、二人は力を倍化し俺に譲渡を」

『了解いたしました……Boost Boost Boost Boost Boost!!?』

声を揃えるラードウンとグレンデル、彼等は偽赤龍帝の籠手と魔獣派で見た獣達を参考に聖杯の力で倍化能力を付与されているのだ。

『Transfers<sup>トランスファーズ</sup>!!?』

二体による同時譲渡に勇真の力が何倍にも跳ね上がる。

その力を両手に圧縮、勇真は一つ魔法球を作り出した。

「ふふ、上出来だ。では天使諸君、しばらくお休みなさい」

笑顔で勇真は魔法球を放つ。

瞬間、多数の天使ごと第一天が丸々氷漬けとなったのだった。

「……凄まじい威力だな」

サマエルが氷漬けの天使達を見て呆れたように口を開いた。

彼が呆れるのも無理はない、なんせ、たったの一発で熾天使級を含めた天使の軍勢10万を凍結封印してしまったのだから。



しかし、勇真はそんなサマエルの言葉に誇るでもなくただ苦笑し肩を竦めた。

「いえ、別に大した事ではありません。倍化譲渡があつてこそその威力ですからね」

確かにその通りだろう、勇真の言う通りこの威力と規模は倍化無しでは出せないものだ。

だが、それを差し引いても恐ろしい。

譲渡有りとは言え、この空前絶後の大魔法を、主神级が力の大半を込めてようやく出来るレベルの封印魔法を楽々行使してしまう魔法技能と魔法力。

人類の範疇を軽く千歩は逸脱した力である。

「……………」

「どうしました?」

「…………いや、なんでも無い、それよりもなぜ天使達を殺さないのだ? てつきり殲滅する

とばかり思っていたのだが」

聖杯を使わせる為か? そう問うサマエルに勇真は首を振った。

「アジトでも言いました但が俺の目的は人類の救済ですよ? 世界滅亡とかを企んでる訳

じゃないんです、ならば殺しは避けるでしょう?」

もつともない分である……説得力はあまりないが。

「しかし、封印よりも殺した方が危険も減るし楽だろう?」

「まあ、そうではありますがあまり天使は殺したくないんですよ」

「それは何故だ？……まさか、キリスト教だからとかは言わんだろうな？」

「それこそまさかですよ、俺が宗教をやってる様に見えますか？」

さあ、想像して下さい、と不敵な表情で両手を広げる勇真。

自然と纏う強大な魔法力も相まって、その姿は信仰心がある者には見えず、むしろ何処その邪神か十二力にさえ見える始末だ。

「……あり得ないか、むしろ、お前が祈っている姿すら想像出来ん」

「でしょう？ 俺は無神論者ですからね、まあ、神が実在していると知ってはいますが」

「そうか、で、結局、なぜ殺さないのだ？」

「それはこれから俺が生き返らそうとしている人々が全員漏れなくキリスト教信者だからですよ」

「まあ、天界に居る魂を生き返らせるのだからそうだろうな」

「はい、で、彼等を生き返らせた後に導く者達が必要だとは思いませんか？」

「お前が導くのではないのか？」

「まさか、俺がそんな事するわけないでしょう、俺はリーダーシップとかないですよ」

「……………そうか？」

間が良いのか悪いのか、サマエルはまだ、勇真がサボっている姿を見た事がない。

それどころか積極的に聖杯と自身から抜き出した毒を使い、従順な邪龍を創り出す姿と、自ら前線に立ち天界に攻め入っているアグレッシブな姿しか知らないのだ。

故にサマエルの認識は何か良からぬ事を企む。圧倒的な力を持った人間である。

「そうです。で、せっかくキリスト教信者なんだから天使達に導いて貰いたいですよ、だって復活当初は色々大変でしょうし、しばらくは誰かに導いて貰わないと人間社会が回らないと思うんです……まあ、この生まれたての天使達を見ると導けるか不安になりますかね」

コンコンと、勇真は氷像と化した天使をノックした。

「……それならば、やはり、天使達を皆殺しにしてお前が人類を導けば良いと思うのだが？」

「絶対に嫌です。人類を導く？ ハッ、誰がそんな面倒な事をしますか、俺は毎日、家でゴロゴロしたいんですッ！ 働きたくないんですッ！ てか、正直、この頃働き過ぎだから、さっさと人類を復活させて休みたいんですッ!!」

「と、言う事で別に邪悪な事を考えている訳ではないのでそこを通していただけますか？」

そう、勇真は第二階層に続く扉から出て来た複数の天使達に言った。

「……………」

しかし、彼等は無言で光剣や光槍を作り構える。

侵入者と話す気がないのか、あるいは初めから話す機能がないのか、勇真はどちらかというと後者の様な気がした。

「はあ」

勇真は面倒くさそうに溜息を吐く。その溜息が呪詛と化し、天使達を一瞬で呪い動きを封じる、そして勇真は動けない天使達を遠距離から氷結封印。

僅か数秒の早業だった。

「会話すら出来ないんですかね？ それなら流石に欠陥品だと思いますが、天使って最初はみんなこうなんですか？」

勇真は呆れたように真偽を問う。

「いや、違うよ、彼等は練習作、天使を創るのは久しぶりだからね、出来が悪いのは見逃して欲しいな」

勇真に答えたのはサマエルでもラードウンでもグレンデルでもなかった。

「え？」

思考が停止し、口から間抜けな声が漏れる。

だが、思考は止まっても身体は止まらない。驚愕に支配された頭とは裏腹に培われた戦闘経験が自然と身体を前方に運んでいた。

そして、振り返る勇真。

彼の視界に入ったのは悠然と佇む一人の男だった。

「こんにちは、随分と暴れたみたいだね」

男は慈愛に満ちた声と笑みで勇真に語り掛ける。

そんな男に勇真は驚愕と共に身震いした。

何故なら男の周囲にはバラバラとなった、サマエル達が転がって居ただけだから。

「(バカな、たった数秒であるの三者を殺した、のか？ 俺に気付かれる事すらなくツ!)」  
戦慄を禁じ得ない。

まさか、この至近距離まで存在を悟らせないどころか、同行者全員を始末してしまうとは。

明らかな格上だ。

「……………」

「うん？ 聞こえなかったかな、こんにちは、宮藤勇真くん」

「……………こんにちは」

勇真は挨拶を返すと、刺激を与えないように男を観察する。

容姿は黒髪黒目、だが、それはどうでもいい。

重要なのは男の力量とそのタイプだ。

男から感じるのは龍気と神力、割合は龍気が1000に対し神力が1。だが、決してこの神力が弱いという訳ではない。

むしろ1の神力ですら強大過ぎる、その総量はおそらく倍化前の勇真の最大魔法力に匹敵する。龍気に至ってはあまりにも膨大過ぎて本当に1000程度で済んでいるのか判断出来ない。

張られた障壁の数は数千枚、一枚一枚は半透明で紙より薄く、傍目にはとても頼りなく見える。しかし、緻密に練られた術式は勇真ですら完全には理解出来ない程高度で、そこに込められた力はある得ないほど強大。

試すまでもなく分かる。最大倍化した勇真の魔法でも揺らぎもしないという事が。

「さて、挨拶もしたし、そろそろ始めようか？」

「……………」

タイプは後衛型魔法使い。

暫定戦闘力は主神級………の数百倍〜数千倍。

勝ち目はない。

勇真は目の前の脅威に、引き攣った顔で冷や汗を垂らすと、静かにグラムを構えるのだった。

## 第43話

「なんの真似だレオナルド」

曹操は鋭い瞳でレオナルドを睨んだ。

それは、ほんの数分前の事、いざ天界に行かんとした曹操達の前に突如レオナルドが現れ、せつかく作った転移魔法を完膚なきまでに打ち砕いてしまったのだ。

「そんなに睨まないで欲しいな、僕は別に敵対しに来た訳じゃないから」  
「では、なんの為に我々の邪魔をした？」

苛立ったように言うのはバルパーだ。

自身が聖剣と共に活躍する、彼に取ってそれを邪魔する者は万死に値する。

故に、理由次第では同じ『禍の団』のメンバーだろうと容赦しない。

そう、バルパーはレオナルドの答えが気に入らない場合、彼を殺すつもりである。それを知ってか知らずか、レオナルドは笑顔でバルパーの問いに答えた。

「それは、あなた達を天界に行かせない為だよ」



次の瞬間、レオナルドの首が飛んだ。

彼の答えが気に入らなかつたのだらう、バルパーは欠片も容赦せず、自身が創つた聖剣を振り抜いたのだ。

そんなバルパーの行動にレオナルド……の生首は苦笑する。

「もう、せつかちだなあ、理由くらい説明させてよ」

そうレオナルドの生首が言うと、彼の「影」からエキドナが飛び出す。

エキドナは宙を舞う生首をキャッチ、彼女はソレを優しく胴体の上に置き、バルパーにあっかんべをしてレオナルドの影に戻って行った。

「それで、あなた達を天界に行かせない理由なんだけど」

「なんでもない風に進めるのだな」

首を飛ばされながら、なに食わぬ顔で回復し、話を続けようとするレオナルド。そんな彼を見てゲオルクは呆れたように呟いた。

「はいはい、茶々入れないで、理由はね……今行くと全滅するからだよ」

再び抜き放たれたバルパーの聖剣、それをレオナルドは素手で鷲掴みにする。

「騒ぐなバルパー、話の邪魔だ」

「ーガキがッ！」

キレ掛かつたバルパーが禁手化しようとし、レオナルドは冷笑を浮か迎え撃つ姿勢に

入った。

一発触発。高まった二人のオーラに会議室が揺れる。

その二人の中間に聖なる槍が突き出されたのは次の瞬間だった。

「落ち着け、二人とも」

「……曹操、邪魔をするな」

誰であろうと斬り殺す、そんな鋭い殺気を込めて言うバルパー。

そんな彼の目を真正面から見て曹操は静かに告げる。

「俺は落ち着けと言ったぞ」

「……………」

「……………」

暫しの間、無言で睨み合う曹操とバルパー。

結局折れたのはバルパーだった。

「……よかろう、訳くらいは聞いてやる」

そう言つて着席したバルパーに曹操はホッと息を吐き出した。

「はあ、そうしてくれ……ではレオナルド続きを言え」

「ありがとう、助かったよ。無駄な戦闘をする所だった」

「勘違いしないでくれ。俺はお前の襲撃を許した訳ではない。心して答えろ、全滅する

とはどういう事だ？　バルパーではないが、もしも下らない理由だったら即戦闘に入るぞっ。」

そうって曹操はレオナルドに聖槍を突きつけた。

「それは困るね、僕はあなた達と協力する為にここに来たからね」

「簡潔に説明しろ」

「はあ……分かったじゃあ。超簡単に言うよ。天界の戦力が桁外れに増しました。彼等が世界征服をしようと企んでいます。個別に戦っても彼等に勝てません。だから協力しましょう、って訳だよ」

そう言っレオナルドは疲れたように肩を竦めた。

「天界の戦力が桁外れに増した、とはどういう事だ？」

すぐに上がるモノでもないだろう。そうゲオルクがレオナルドに問う。

「まあ、それは彼女を見て貰えば分かるよ」

「彼女？」

レオナルドの影が怪しく蠢く。

彼の第二の神器『影の大盾』だ。

レオナルドはそのまま、影を操作し、その中から天蓋つきの豪華なベッドを取り出した。

「「……………ッ!?!」」

そのベッド―正確にはそこに寝かされている者を見て英雄派三人は驚き、絶句する。

そして、一早く立ち直った曹操が掠れた声でその者の名を呼んだ。

「……………オーフェイス」

そう、ベッドに寝かされていたのは黒髪の幼い少女。

人間の姿を取った無限の龍神オーフェイスだったのだ。

「バカな、何故オーフェイスが!?!」

動揺を隠せない声でゲオルクが問う。

動揺するのも無理はない。傍目から見てもオーフェイスが弱ってるのが分かるからだ。

しかし、これは本来あり得ない事である。

何故ならオーフェイスは世界最強。並ぶ者なき絶対強者。

オーフェイスは主神級が100柱集まろうと勝ち目が無い究極のドラゴンであり、無限の体現者と呼ばれる程の他とは隔絶した力の持ち主なのだから。

「……………弱っている? いや、コレは力を奪われているのかッ!?!」

聖剣厨だがその他の知識や分析力に優れたバルパーがオーフェイスの状態を診断する。

「そう、彼女は力を奪われてしまったんだ」

バルパーの言葉を肯定し、レオナルドは悲しげな目でオーフィスの頭を撫でた。

「しかし、一体どうやって?」

バルパーがそう呟く。

その言葉に反応したのはゲオルクだ。

「……………そうか、サマエルか! サマエルならばオーフィスを倒す事も、その力を奪う事も可能な筈だッ!」

以前、英雄派もサマエルを使ってオーフィスの力を得ようという計画を練っていた事がある。それ故、その結論が出てくるのは当然の事だった。

しかし。

「違うよ」

レオナルドはその答えをあっさり否定する。

そんなバカな? という目をするゲオルク。だが、本当にオーフィスを倒すのにサマエルは使われていなかった。

「……………では、誰がどうやってオーフィスから力を奪ったんだ? 天界が力を増したという事はミカエル辺りか?」

「曹操はミカエルがオーフィスをどうにか出来ると思ってるの?」

「…………いや、思わない。そもそも、サマエル抜きでオフィスから力を奪うなんて出来るとは考えられない。まさか、勇真がやったのか？」

「もちろん違う」

「……………では誰が？」

「天界のトップだよ」

心底嫌そうに言うレオナルド、その顔はいつもの彼に似合わない疲れが見えた。

「本当の意味でのね」

「……………」

暫しの沈黙。

そして、英雄派はレオナルドの言葉の意味を悟り、再び絶句するのだった。

勇真が取れる手段は一つしかなかった。

「ふふ」

男が楽し気に笑いながら人差し指を勇真に向けた。

殺意や戦意は感じない。

だが、勇真には分かる。あの男は自分を殺そうとしていると。

認識の違いだ。

人が人を害そうとすれば少なからず殺意が生まれる。

だが、人が蟻を潰そうと思ったとき、殺意など抱くだろうか？

それと同じだ。男は勇真を敵と認識していない、ただの「蟻」と認識しているの

だ。

勇真は自身の直感を信じ全速力で身体を捻る。

同時に男の人差し指から放たれた閃光が魔法障壁をあっさり貫通、勇真の左腕を根元から消し飛ばした。

「……ッ!!」

激痛が勇真を襲う。しかし、それに構う余裕はない。

勇真は痛覚遮断で激痛をやり過ぐすと、魔帝剣グラムを完全開放した。

ここで二撃目の閃光、次は右足が消し飛んだ。

だが、これも勇真は無視。彼は完全開放したグラムを地に突き立てると、刹那の間に発動させた結界魔法で男の姿を覆い隠した。

「……………」

その実力、主神級の数百倍以上。

勇真であろうとも、こんな馬鹿げた力の持ち主に勝つなど不可能だ。

しかも、ただ力が強いだけでなく魔法使いとしての技量すら、おそらく上、そんなのどうしろという話である。

故に勇真が取る手段は逃亡一択。しかし、これもまた不可能だった。

何故なら勇真が知らぬ間に、第一天は彼以上の技術と力で張られた超々高度な転移阻害の結界で覆われていたからだ。

つまり、勇真はここで死ぬ。

それが確実に訪れる未来だった。



相手が龍気を纏っていないければ。

「……………おおおおおおおおおッ!!」

勇真は裂帛の気合いを込めて結界を維持する。

結界内を満たすのは陰惨で凶悪な龍滅の波動、それはただ深く龍の死を望む、禍々しい破龍の結界だった。

この結界は勇真のオリジナル魔法、来る龍神との戦いに備えた切り札中の切り札。

その名も龍滅結界。

魔帝剣グラムとサマエルの究極の龍殺しの力を合成、強化し、その力を持って編まれた対ドラゴン究極の滅殺魔法である。

「おおおおおおおおおッ!!」

この結界に囚われては龍属性の持ち主は死ぬ、例外なく死ぬ。

それこそ龍属性ならば、例えば龍神だろうと真龍だろうと致命傷は免れない、そんな勇真最高傑作の魔法だった。

しかし。

「おおおおおおおおおッ!!」

「……………うん、はいよ」

瞬間、男から爆発的に放出された神力により風船のように膨らむ結界。  
……………そして、数秒後、あまりにも簡単に龍滅結界が弾け飛んだ。

「……………」

龍属性が、アレを破った？

勇真は目の前の光景にただただ絶句する。

あらゆる龍を例外なく消滅させる筈の龍滅結界が龍属性に破られたのだ、意味が分からない。

そんな勇真を尻目に、男は埃を払うように自身に纏わりついた龍滅オーラの残滓を払い落とした。

「君は愚かだな」

先程の楽し気な様子から一転、白け切った表情で男は言う。

「……………」

「今の魔法、何故私に使った？ あんなものが私に効くと思っていたのか？」

「……………思っていた」

正確にはあれ以外効くはずがない、そう勇真は思っていた。  
しかし、勇真の言葉に男は首を振る。

「嘘だな」

鋭く言う男に勇真は怯む、それは事実だったからだ。

確かに、勇真はあの龍滅結界しかないと思っていた。

だが、その一方、心の奥底で龍滅結界も効かないだろうと半ば諦めていたのだ。

「君は私が誰か分かっていた筈だ、まさか分からぬほど愚かではあるまい？」

そう、男の言う通りだ。

男の正体など、簡単に分かった。

勇真は気づかぬフリをしていただけだ。

死んだはずだ、あり得ないと言いつき聞かせただけだ。

何故なら男の正体が勇真の想像通りだった場合、どう足掻いても勝ち目がなかったからだ。

そう、勇真は信じたくなかったのだ。

男の正体が 聖書の神だと。

「そう、私は神だ」

勇真の心を読んだのだろう、聖書の神が答えを言う。相手は神様、人の心を読む程度造作もない事なのだろう。

「だから愚かだと言ったのだ。私の正体を早々に悟りながら、私がサマエルに掛けた呪いを使って攻撃するなど無意味極まりない愚行」

「……………」

「私は楽しみにしていたのだよ、私の正体を悟りながら諦めずに何かをしようとする君を、だから、あえて心を読まずに攻撃の発動を許した。にも関わらず、君がしたのはあの下らぬ結界魔法だ」

「……………」

勇真は無言で聖杯の力と回復魔法を併用し一瞬で左手、右足を再生させると、グラムをしまい『無窮の英雄』を全力発動。

同時に強化された偽赤龍帝の鎧を纏い、同じく強化により長剣と化した聖短剣を正眼に構えた。

そんな勇真の行動を神は気にしない。神はただ興奮醒めたような表情で勇真を見る

だけ。

おそらく、無駄だと思っっているのだろう。

まあ、実際、その通り無駄な行動である。

「やはり愚かだ。勝機がないと知りながらなお足掻くか、君がすべきベストな行動は、ただ一心に頭を垂れる事だった。私が神と気づいた瞬間、その行動を取っていれば許してやったものを」

「……………勝機がない？ どうかな、やってみなければ分からないぞ」

「自分も騙せぬ嘘をつくか……………君は救えぬな」

それが再開の合図だった。

突如、勇真の前に数万の魔法陣が発生する。

勇真はただ黙って神の話を聞いていた訳ではない。

彼は必死に準備していた。この局面を乗り切る為に。

『Boost Boost Boost Boost ……Boost!!?』

限界を超えた五段階の倍化にレプリカの赤龍帝の鎧にヒビが入る。

だが、構わない。一撃だけ保てばいい。これがラストチャンスなのだから。

「うおおおおおおおッ!!」

発動されるのは最高位の結界粉碎魔法。

ただし、全魔法力の八割を込め、それを64倍に高めたソレは副次効果で天界そのものが粉碎される威力と範囲を持つ極大殲滅魔法だ。

しかし、そんな空前絶後の超魔法を前に神は心底つまらなそうに溜息を吐き出した。

そして、神は無言で指を鳴らす。

次の瞬間、発動されようとした勇真の魔法が跡形もなく消え去ったのだった。

「えっ?.....ふぁあ」

呆然と呟く勇真、そしてその直後、彼の口から鮮血が漏れた。

「無駄だと言ったはずだ」

聞こえてくる神の冷たい声。

神の左手にはいつの間にか赤い肉塊が握られている。

「.....」

神は無言で肉塊を地面に落とした。

落とされた肉塊は白い床を赤く濡らし、今もドクンドクンと蠢いている。

それは心臓だった。

「……………」

勇真は隙になると知りながら、左手を聖剣から離し自分の左胸に触れる。

そこには鎧の硬い感触も、肉の柔らかい感触も全く感じる事が出来なかった。そう、勇真の左胸にはただ、大きな空洞があるだけだった。

「……………ッ！」

思い出したかのように左胸から激痛が走る。

痛覚遮断が効いていない。

勇真は先ほどの手足と同様、魔法と聖杯で傷を塞ごうとした。

だが、傷は全く塞がらない。レジストされている訳ではない。しっかりと聖杯も魔法も発動しているのに塞がらないのだ……まるで、死ぬ事が決定づけられてしまったかのよう。

まさか、と勇真は戦慄する。

先の不可解な魔法消滅、そしていつの間にか抜き取られた心臓。こんな理不尽な現象を起こす攻撃に勇真は一つ思い当たるモノがあったのだ。

「運命、操作？」

口から血を零しながら言った勇真の言葉に神はどうでも良さそうに頷いた。

「ご名答、魔法は発動せず、心臓を抉られて死ぬ運命を作った」

その言葉を聞いた瞬間、勇真の意識が薄れていく。

決定された運命が強制的に勇真を消そうとしているのだ。

「……………ツ!!」

勇真は偽赤龍帝の鎧で魔法力を最大倍化、その強大極まる魔法力で運命操作を振り伏せんとする。

勇真から迸る魔法力に天地が揺れ、空間が軋み、風景が歪む。

主神级すら寄せ付けぬ空前絶後の魔法力。

だが、それでも運命には抗えなかった。

どんな力も一度決定された運命をひっくり返す事は出来ない。

そして。

「……………あ」

努力も虚しく、勇真の意識は水底に沈む石ころの様に急速に消える。



死の直前、勇真が最後に目にしたものは、つまらなそうに自分に近づく、神の冷たい顔だった。